

駒川の者として

マルチビタミン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「穂織ほおり」の街。イヌツキの土地と言われ、穂織の周辺に住む人々に忌み嫌われてきたこの街は、独自の文化を築き上げ、今では小京都と呼ばれるほどの知る人ぞ知る観光名所になっている。

この街に住む「駒川こまかわ 幸彦ゆきひこ」は診療所の長男として生まれた。幼い頃に起こった事件をきっかけに彼は誓う

先祖代々、崇り神に狙われる宿命と短命の呪いを受ける巫女姫「朝武ともたけ 芳乃よしの」

忍者として朝武家を護衛する使命と先祖の呪縛に囚われた「常陸ひたち 菜子まこ」
幸彦の幼馴染であり、仕える対象であり、仕事仲間である彼女たちを必ず守ると

これは、運命に必死で抗う少年少女の物語

千恋万花の主人公はあくまで将臣です。この物語はオリキャラとしてみづはさんの弟を追加しました。

基本は将臣×芳乃ルートを進みます。菜子・ムラサメ・レナルートの物語やオリジナル展開を混ぜながらエンディングに向かう予定です。作者の力不足で原作未プレイの方には優しくない作品になることが予想されます。頑張って表現力や語彙力を身につけたいと思いますが、何卒ご理解の程お願い申し上げます。

また、設定集を買っていないので独自解釈や原作の設定と違うところ

ろが出てきてしまうのでご了承ください。

千恋万花。面白いので是非プレイしてみてください。

※クロス先のRIDDLER JOKERのキャラが本格的に登場するのは2章以降になります。

目次

第1章

第一話	プロローグ	1
第二話	「歯車はずっと」	13
第三話	「失うわけにはいかない」	28
第四話	「叢雨丸に選ばれた男」	44
第五話	「男の譲れないもの」	55
第六話	「ライバル？」	71
第七話	「ライバル」	87
第八話	「ムラサメちゃんの憂鬱（なぜそこまで大きく育つのだ！）」	104
第九話	「素直になりたい」	119
第十話	「幸彦と茉莉」	135
第十一話	「告白」	152
第十二話	「レナさんの気になるあの子」	166
第十三話	「男の子だもん」	182
第十四話	「名探偵芳乃」	195
第十五話	「忘れられない過去」	209
第十六話	「レナさんの気になるあの子2」	224
第十七話	「不穏な気配」	238
第十八話	「仲良く喧嘩しな」	251
第十九話	「乙女な忍者」	267
第二十話	「対峙・祟り神」	283
第二十一話	「犬に噛まれ猫に救われ」	299
第二十二話	「頼りになる大人」	315

第二十三話 「病院は暇なんです」	330
第二十四話 「辛い時には漫画でも」	351
第二十五話 「加速する歯車」	366
第二十六話 「大切だからこそ」	390
第二十七話 「それぞれの戦い」	413
第二十八話 「決着」	434
第2章	
第二十九話 「始まり」	455

第1章

第一話 プロローグ

暗い森のなか、木陰に身を隠す俺がいた。

——怖い 震える手と足を止めることができない。

「おらっ！ さっさと歩きやがれ！」

——怖い 声を上げることさえできない。

「やめてください！ 芳乃様は病み上がりなんです！ もう少し休憩を……」

——怖い 大切な人がそこにいるのに。臆病な自分が嫌になる。

「うるせえ！ こっちは切羽詰まってるんだ！ ガキがどうなろうと知ったことか！ 別にすぐ死ぬわけでもねえ」

「瀕死だろうがなんだろうが、要はお前たちがここにいるだけで大金が手に入るんだ。ここで捕まるわけにはいかねえんだよ！」

——怖い 守るべき人がそこにいるのに。弱い自分が嫌になる。

「菜子……私は大丈夫、だから」

「いいえ。大丈夫ではありません。私が不甲斐ないばかりにこんなことになってしまったんです。これ以上、芳乃様に何かあつては、安春様にも秋穂様にも顔向できません！」

「菜子……」

「ぐちやぐちやうるせえガキが。おい。必要なのは銀髪のカキだけだ

ろ？こつちのガキは殺してもいいんじやねえか？」

——殺す？誰を？

「そんな！お願いやめて！」

「おうおう。さすがは巫女姫様だ。無駄な殺生は好まないかい？だがな、俺たちも余裕がないんだ。不確定要素は少ないほうがいい」

「ああ、そういうこつた！」

「お願い！銃を降ろして！茉莉を殺さないで！」

——だめだ。そんなの、だめだ！

「あばよ嬢ちゃん。あの世でたつぷり後悔しな
「くっ……」

——動け、動け動け動け！

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

——殺させない！絶対に！

「っ！なんだこのガキ。どっから出てきた!？」

——間に合え！

「うああああああああああああああああああああ！！！！」

——間に合え!!!

「茉莉と芳乃様に手を出すなあああああああああ！！」



「ツ！ハア、ハア……夢か。」

心臓が激しく胸を叩く。古傷の右肩がジンジン痛む。

懐かしい記憶だ。今でも忘れない、俺を作り上げる礎となった経
験。

己の不甲斐なさを実感した、幼い日の記憶。

ぼんやりしていた頭が時間とともに鮮明になり辺りを見回す。こ
こは俺の部屋だ。目の前には古い本やノートの山が広がっている。
どうやら調べ物をしていてそのまま寝てしまったらしい。

暑さのせいか、それとも夢のせいか、きているシャツが汗で体に張
り付いて少し気持ち悪い。夢見が悪かったせいで気分も最悪だ。椅
子から立ち上がりカーテンを開けると、外は薄らと明るくなってきて
いた。

「朝ごはん当番、今日は俺の番だったな。少し早いけど、行動を開始す
るか」

俺は大きく伸びをする。嫌な気持ちは汗と一緒に出してしまおう。
日課になっているトレーニングをするため、着替えて外に出る。春先
の朝の空気が、程よく体を冷やしてくれた。

この日、俺たちの、彼女たちの運命を変える男の子が来ることを

俺

はまだ知らない。

これは理不尽な運命と戦う彼女たちと、それを見守る俺
『駒川 幸彦』の物語である。

俺はこの街「穂織」で数少ない診療所の長男として生まれた。

駒川家。先祖代々医者を営んでいるこの家は、穂織を治める「朝武家」のお抱え医師として生計を立てていたらしい。当然俺も将来は医者として家を継ぐつもりだ。現在高校生である俺の代わりに、今は姉の「駒川 みづは」がこの街の多くの人を診ている。

日課のトレーニングを終えシャワーで汗を流した俺は、診療所と住宅を兼ねているこの家の台所に向かいながら、今朝の夢のことを考えていた。

忘れもしない、12年前、俺の幼馴染二人が誘拐された事件。

自分の無力さを知ったあの日。強くなつて二人を守ると誓ったあの日。

なぜ今になつて、あの日の夢を見たのか。

考えているだけなのに、右肩が痛んだ。

そうこうしているうちに台所にたどり着く。

過去のことを深く考えても仕方がないことだし、俺の中であの日の一件には答えを出している。気持ちを切り替えなきゃな。

今、家には俺と姉さんしかない。父さんと母さんは、姉さんが診療所を継いでから海外へと旅立っていった。今はいろんな国で活動する医者や団体に所属しているらしい。たまに送られてくる手紙には毎回違う国で撮った写真が入っている。そこに写る二人の姿は毎日が充実していると見ただけでわかる顔をしている。息子として誇らしいと思う一方、二人が無事に仕事を終わられるよう祈るばかりだ。

今日の献立はトーストに目玉焼き、少し厚めに切ったベーコン、あとは適当に野菜を盛り付けたサラダ。簡単だが朝食としては定番だろう。

盛り付けを終えるとちょうど姉さんが起きてきた。

「おはよう、幸彦」

「おはよう、姉さん。コーヒーでいいかな？」

「ああ、よろしく頼むよ」

姉さんはそう言うのと患者のカルテを片手に席に着く。

「仕事熱心なのはいいけど、食事の時ぐらいいは仕事するのやめなよ。」

休める時に休まなきや。姉さんが倒れでもしたら大変なんだから。はい、コーヒー」

「あら、私が倒れたら幸彦が頑張ってくれるんだろう?」

姉さんは悪戯っぽく笑った。

「だから大変だつて言ってるんじゃないか。俺が」

「ふふ、冗談さ。すまなかったね」

駒川みづは。俺の姉であり、ここ穂織にいる数少ない医者だ。身長はそれほど高くはないが、髪を後ろで束ね、黒い眼鏡をかけたその姿は十分魅力的な、大人の女性である。友人の廉太郎からファンクラブがあるなんて話を聞いたこともあるが、本当かどうか。

とにかく、姉さんは仕事人間だ。俺が口を酸っぱくして言わなきや休みやしない。体調管理には気をつけているだろうが、弟として心配なものは心配なのだ。

「でも、幸彦も人のことを言えないだろう。昨日も遅くまで呪詛の研究資料を読み耽っていたじゃないか」

「っ、なぜそのことを」

席に着き、食パンにかぶりつこうとしたところで姉さんから鋭い指摘が入る。

確かに昨日、過去の資料とにらめっこしつつ新しい仮説をまとめていた。結果、今朝はベッドではなく机で目を覚ますことになったわけだが。しかしに姉さんに見られた覚えはない。いったいいつの間に。「ちゃんと声をかけたんだよ?でも返事もしないほど集中していたから。邪魔をしたら申し訳ないからその場は立ち去ったけど、その様子じゃ本当に気づいてなかったのね」

「……面目ない」

「弟が寝る間も惜しんで頑張ってるんだ。姉である私が頑張るのも当然なのさ」

「はあ。わかりました。俺も無理しないように気をつけるから」

「うむ。よろしい」

姉さんは満足げに頷いた。なるほど、反面教師というやつか。確かに最近根を詰めることが多かった気がする。働きすぎてしまうのは

駒川の血に染み付いた病気なのかもしれないな。

「そうだ、幸彦。玄十郎さんから連絡があつてね。どうやら今日の春祭りでは武者役の人が一人来られなくなつたらしくて、幸彦にお願いできなかつて」

「武者役？ ああ、甲冑部隊の練り歩きか。別にいいけど、建実神社の手伝いは？」

毎年行われる春祭り。昔からあるお祭り、甲冑をまとつた男性が街を練り歩き、最後に建実神社で祈禱を行う。ご先祖様たちへの鎮魂の意味も込めたイベントで、外国人観光客からそこその人気を得ているようだ。

建実神社では巫女姫である芳乃様の舞の奉納や「伝説の勇者イベント」が行われる。伝説の勇者イベントとは、大昔、妖を退治するために使われたとされる「叢雨丸」の使い手を選定する行事だ。選ばれたものだけが岩に刺さつた叢雨丸を引き抜くことができる。ブリテンのアーサー王伝説と似ていることからいつの間にかそう呼ばれるようになった。

このイベントのために穂織を訪れる観光客がいるほどで、今や大事な観光資源の一つになっている。

「それなら玄十郎さんのお孫さんたちをお願いすると言つていたよ」

玄十郎さんの孫ということ、は廉太郎と小春ちゃんか。

「廉太郎はともかく、しっかり者の小春ちゃんもいるなら大丈夫さうだな」

「後で迎えをよこすとも言つていたから、それまでに準備しておきなさい」

練り歩きは13時からだから、8時半に神社にいれば問題ないだろう。

まだ二時間ほど時間がある。

「了解。じゃあお弁当作つておくから、昼食はそれ食べてくれ」

「ああ、ありがとう。そうするよ。」

朝食を食べ終え、姉さんの弁当も作り終えた俺は、十分に睡眠をとつていなかったことを思い出し一時間ほど仮眠をとることにした。

徹夜には慣れているとはいえ、甲冑を着ながら街を練り歩かなければならないとなると、三時間睡眠では不安が残る。玄十郎さんからの頼みでもあるし、手を抜くわけにもいかないのだ。ここから神社まで15分もかからないし、迎えの人が来るまでに起きれば問題ないはずだ。

目覚ましをセットし布団に入ると、すぐに睡魔が襲ってきた。どうやら自分が思っている以上に体が睡眠を欲しているようだ。俺はそのまま抵抗することなく、睡魔を受け入れ眠りに入るのだった。

「そうだ菓子君、いきなりで申し訳ないんだけど、今日の春祭りは練り歩きの方の手伝いをお願いしたいんだ」

芳乃様の家で朝ごはんを食べているとき、安春様が思い出したように言いだした。

「練り歩きですか？」

「うん。町内会の一人が出られなくなったらしくてね。急遽幸彦君に代理を頼んだらしいんだ。大丈夫だとは思うんだけど、念のため、練り歩きが終わるまで彼のサポートをして欲しくて」

「幸彦なら一人でも大丈夫だと思うのですが。それに……」

ワタシは芳乃様の方に目を向ける。毎年春祭りは神社の仕事や芳乃様の舞の準備の手伝いをしている。それに護衛役として芳乃様のそばを離れるのは少し気が引けた。

芳乃様はその視線に気づき、そっと微笑んだ。

「私なら大丈夫よ、菓子。それに、町内会の皆さんにはいつもお世話になってるんだもの。幸彦と一緒に力になってあげて」

「神社の仕事なら心配しなくていいよ。玄十郎さんのお孫さんたちが代わりに手伝いに来てくれるからね。なんなら、練り歩きが終わったら二人で出店を回るといいよ。いつも菓子君にはお世話になってる

んだから、たまにはゆつくり祭りを楽しんでおいで」

「むう。わかりました。今日は幸彦と町内会のお手伝いにまわります。ですが出店までは……」

ワタシの本来の使命は芳乃様を護衛しお守りすること。出店をまわるのは魅了的な話ではあるが、芳乃様と離れるのは護衛として領き難い話だった。

「茉莉。相手からの厚意は素直に受け取るべきだと思うの」

「……」

「どうしたの茉莉？私おかしなこと言ったかしら？」

「いえ、まさか芳乃様に諭される日が来ると思っていなくて……」

「茉莉く？それはどういう意味かしら？」

「芳乃様が立派に成長なされて、茉莉は嬉しゆうございます」

ワタシはハンカチを取り出しわかりやすい泣き真似をした。芳乃様の反応がおもしろ……じゃなかった、可愛らかったのでつついっオーバーなりアクションをとってしまう。

「娘の成長は嬉しいけど、父としては少し寂しさを感じるね」

安春様がしみじみと言う。

安春様のあれは素の反応のような気がします……。

「もう！お父さんまでからかわないで！」

「あは、冗談ですよ♪芳乃様は今も昔もご立派です！」

「むうう。もう知らないんだから！」

頬を膨らませた芳乃様。

今日も可愛らしいですね♪

芳乃様はとても優しいお方だ。その優しさに甘えてついついからかってしまう。

あまりからかいすぎるのも申し訳ないので、ここは素直に提案に乗ることにする。

「では、お言葉に甘えて少しだけ楽しませてもらいます。夜には一度戻りますので」

「ありがとうございます。それじゃあ後で幸彦君を迎えに行ってくれるかい？」

「わかりました」

「幸彦と町内会の皆さんによりしくお伝えくださいね」
「はい！芳乃様もお気をつけて」



駒川診療所。ワタシが小さい頃からお世話になっている。ここに住んでいるのはこの街の数少ない医者であり、朝武家のお抱え医師でもあるみづはさんと、幼馴染の幸彦。

ワタシは芳乃様の護衛を、幸彦は朝武家にかけられた呪いを解く研究を親から受け継いでいる。そのため自然と三人で行動することが多かった。中でも幸彦は同じ年で芳乃様に使える仕事仲間。親の次に気兼ねなく接することができる男性は彼だけだろう。

診療所の扉には準備中と書かれた立札が下げてある。

診療所が始まってしまつてしまつとみづはさんの邪魔になると思い、早めに幸彦を迎えに行くことにしたのだ。

「ごめんください」

診療所の扉を開け、声をかける。

「はい。おや、常陸さん。いらつしやい」

受付の奥からみづはさんが顔を出した。

「おはようございます、みづはさん。幸彦を迎えに上がりました」

「ああ、常陸さんがお迎えに来てくれたのか。こんな可愛い子が迎えに来てくれるなんて、うちの弟は幸せ者だね」

「あはあ、可愛いだなんて、お世辞でも照れちやいますよう」

ワタシが褒められ慣れてないのもあるが、みづはさんのような綺麗な人に褒められたら、誰だって照れてしまうと思う。

「ふふ、お世辞のつもりじゃないんだけどね。幸彦なら部屋にいると思うよ。家に上がっていいから、あとはお任せしてもいいかな？」

「あ、はい。お忙しいところ失礼しました」

「気にしなくて大丈夫だよ。常陸さんは家族みたいなものなんだから。それじゃあ、弟をよろしくね」

「はい！任せてくださいー！」

みづはさんはそう言うと言察室の方へ向かっていった。

(相変わらず、綺麗な人です。できる大人の女性を絵に描いたような人で幸彦にはもつたないお姉さんですよ)

さて、当の幸彦は部屋にいるとみづはさんは言っていた。

もはや通い慣れた足で幸彦の部屋まで歩いていく。

「幸彦く。迎えに来たよく？」

ドアをノックして語りかけるが、返答はない。

「幸彦く？入るよく？」

今までも、幸彦は集中すると周りの音が聞こえなくなることがあった。声をかけても気づかない時は頬をつねるぐらいししないと隣にいることさえ気づかない。

このままでは埒が明かないので、部屋に入ることにする。

「もう。相変わらず散らかして。片付けなきやダメだよってあれほど言ってるのに」

部屋に入って先ず目に入った光景に思わず小言が漏れる。床には本が山のように積まれ、いつの時代のものかもわからない土器や巻物も無造作に置かれている。これで部屋にあるものを全て把握しているというのだから呆れたものである。

いるであろうと考えていた勉強机に姿はなく、ベッドの中で眠っている幸彦を見つけた。勉強机には代わりに大量の呪詛に関する資料と穂織の歴史をまとめた本、そして幸彦が書いた文字でびっしりと埋まっているノートがあった。きつと、昨日も遅くまで呪詛の研究をしていたのだろう。一心不乱に資料とにらめっこする幸彦の姿が想像できた。

幸彦は私たちを過去の呪いから解き放とうと頑張っている。ワタシや芳乃様が休むように言っても「俺にはこれしかできないから」と寂しそうに笑うのだ。

小さくて弱虫だった幸彦は、今ではわたしより大きくなってしまった。

「ほんと、ひとりで頑張りすぎだぞ……」

小さくつぶやきながら、眠っている幸彦の頭を撫でる。

「ふふ、寝顔は昔とあんまり変わらないですね」

ふと、悪戯心が湧く。幸彦が目覚めた時にワタシが隣で寝てたらどんなリアクションをするだろうか。ワタシは幸彦を起こさないよう静かに布団に潜り込む。幼い頃は、芳乃様とワタシと幸彦で川の字になつてお昼寝をしたこともあつた。

「なんだか懐かしいな」

こうして幸彦の横で寝てみると、改めて、男の子の成長の早さを実感する。身長も肩幅も男の子というより男の人という感じだ。泣き虫で、いつもワタシと芳乃様の後をついてきた子とは思えない。

(……冷静になつて考えてみると、男の人と一緒に寝ている今の状況つて、とても恥ずかしいことでは!?)

急に恥ずかしくなつてきたワタシは急いで布団から出ようとする。しかしその時、幸彦が寝返りを打ち、自然と抱き寄せられる形になる。(なななななんぞ!今!このタイミングで寝返りをするんですか!どどどどうにかして起きる前に逃げ出さなくては、一生からかわれてしまいます!いったいどうすれば……あ、胸板結構がつしりしてる。じゃなくて!ああもう頭がおかしくなりそうです!)

自分でもわかるぐらい顔が熱い。幸彦の布団の中で幸彦に抱かれている。文字に落としたらいやらしいことこの上ない。ひとりで奮闘していると頭の上から声が出た。

「自分でやって混乱するぐらいなら最初からこんなことするなよ」

「へ?ッあ痛っ!」

額に痛みが。どうやらデコピンをされたらしい。

デコピンを、された……?」

……起きてる!?

「お、お……」

「おっ」

「おはようございませした!!」

ワタシは忍者の力を生かし、目にも留まらぬ早さで部屋から逃げ出しました。

第二話 「歯車はずつと」

「なあ菜子。さっきのことは謝るから、そろそろ機嫌直してくれないかな?」

「別に、怒ってませんけど?」

「怒っているじゃないか……」

玄十郎さんの依頼で、春祭りの練り歩きに参加することになった俺は、同じく俺のサポートをお願いされたいらしい幼馴染の常陸菜子とともに建実神社を目指していた。

「言っておくが、あれは菜子も悪いからな。年頃の娘が男の布団に潜り込むなんて」

「うっ……でも!抱き寄せる必要はなかったじゃないですか!うう、もうお嫁にいけない!」

「あ、あれは、からかわれる前からからかってしまおうという寝ぼけた頭で精一杯考えた末の行動で、いわば正当防衛的な……」

「幸彦に傷物にされました!」

「人聞きの悪いこと言うな!」

このこの発端は、数分前。仮眠を取っていた俺のベッドに菜子が悪戯で潜り込んできた。すぐに冷静になり、恥ずかしくなった菜子は布団から抜け出そうとするが、悪戯されると思った俺が事もあろうが菜子を抱き寄せて反撃に出してしまった。本当に、何を考えてるんだ、俺……。

「さっきの事は忘れよう。その方がお互いのためだ」

「うん。ワタシもそう思う」

お互い忘れる事にした。

「それで、今日の練り歩きの件だけど、芳乃様の護衛の方は大丈夫なのか?」

「お父さんをお願いしたから大丈夫。現役は引退してるけど、ワタシの師匠だもん」

常陸家は先祖代々朝武家ともたけに仕え、巫女姫を護衛する忍者の家系。菜

子は幼い頃から忍者として、厳しい訓練に耐えてきた。茉子に忍びとしてのいろはを教えた人物。それが先代の忍者で茉子の父親だ。

「そうか。安春様からはなんて言われたんだ？」

「幸彦のサポートをしてくれないかって。あと出店も楽しんでおいでって言われちゃった」

「なるほどな」

おそらく今回の依頼は、俺と茉子を休ませるために大人たちが考えたのだろう。発起人は芳乃様あたりかな。

町内会のサポートではなく俺のサポートと言ったのも、神社の手伝いに廉太郎たちが入ったのも、俺たちに出店を楽しんでもらう口実なのだろう。

俺は今朝も遠まわしだが根を詰め過ぎないように言われたし、茉子は毎日朝武家の家事をこなしている。玄十郎さんたちからの粋な計らいというやつだ。

だとしたらなおさら今日の練り歩きは頑張らないとな。

「これであの二人も、少しは羽をのばせるかしら」

舞の奉納の準備を進めながら、今ここにいない幼馴染の姿を思い浮かべる。

茉子も幸彦も、巫女姫としての仕事をサポートしてくれる。毎日休まず、私のために。

「芳乃、暗い顔をしておるぞ。大丈夫か？」

「ムラサメ様……」

気がつけばムラサメ様が心配そうに私の顔を覗き込んでいた。

ムラサメ様は穂織にある伝説の御神刀「叢雨丸」むらさめまるの管理者と呼ばれる存在。見た目は幼く可愛らしい姿だが、実際は数百年もの間、朝武家を見守ってくれたお方だ。普通の人には声も姿も感じ取ることが出来ない。ムラサメ様と会話ができる人間は叢雨丸に選ばれた人間

を除けば、私と茉莉、幸彦の三人しかいない。

「大丈夫です。少し、茉莉たちが心配で。ちゃんとリフレッシュできればいいのだけれど」

「あの二人なら大丈夫であろう。むしろ吾輩は芳乃の方が心配だぞ。少しは肩の力を抜いた方が、効率がいい事もある」

「ご心配ありがとうございます。ですが、これは私の仕事ですから。休んでる暇なんかありません」

二人がいつも頑張っているのに、私が休むなんてできない。

私が頑張らないといけないんだ。それが巫女姫として生を受けた宿命。

「はあ。昔から頑固なのは変わらん、芳乃は。いや、芳乃だけではな
いか。芳乃も茉莉も幸彦も、吾輩から言わせれば働きすぎだ。危うく
て見てられんぞ」

私たちはみんな不器用だから。きつと多くの人に心配をかけている
のかもしれない。

「吾輩も、芳乃たちの力になればいいのだがのう……」

ムラサメ様が呟いた小さな声には、悔しさと悲しさが混ざっている
ように感じた。

「常陸さん、駒川くん。二人とも手伝いに来てくれてありがとう」

建実神社に着いた俺たちを玄十郎さんが迎え入れてくれた。

鞍馬 くらま 玄十郎 げんじゅうろう。穂織にある旅館「志那都荘」しのつそうの旦那であり、朝武
にかけられた呪いや、ムラサメ様の存在を知る数少ない人物。大昔は
朝武に仕える武士であつたらしい。

「いつもお世話になつているんですから、これくらいは当然です」

「そうですよ。芳乃様も町内会の皆さんによりしくお伝えくださいと
おっしゃっていました」

「ほお、巫女様様が。それは皆も喜ぶでしょう。」

巫女姫である芳乃様は街の住人に愛されている。穂織で生まれた

人間は皆、親から巫女姫を大切にしようにと教えられて育つ。

もはやこの街の風習であるが、それでもこの街全ての人が芳乃様を慕い見守ってくれるのは、芳乃様の人柄あつてのものだろう。

「では駒川くん、早速で悪いが今日のスケジュールを確認した後、甲冑のサイズを合わせてくれないか」

「わかりました。よろしくお願いします」

「うむ。よろしく頼む。私は神社の準備の方に1日縛られることになると思う。何かわからないことがあつたときは、申し訳ないのだが魚屋の魚海か古本屋の榎本に聞いてくれ」

玄十郎さんは静かに神社の神殿の中に入っていった。

「本当、古希を迎えているとは思えない人だ。玄十郎さんは」

「今でも素振りを毎日欠かさずしているって、安春様が言つてたよ」

若い頃から剣道をしていて、その実力は警視庁の幹部がわざわざ穂織まで来て、稽古をつけてくれと頼みに来るほど。還暦を越えても衰えず、古希を過ぎた今でも背筋はピンと伸びている。呪いのことも知っているので、俺にとつても頼りにできる人だ。

「じゃあ、ワタシは一度戻るね。練り歩きに参加する皆さんのためにおにぎりを作っているって町内会の奥様方に聞いたの」

昔の合戦のときの兵糧としておにぎりが振る舞われたらしい。それにあやかつて手の空いている奥様方が朝武家の台所を借りておにぎりを作り参加者に配るのだそうだ。

「そうだな、スケジュールの確認も甲冑のサイズ合わせも俺一人で大丈夫そうだし、適材適所といこうか。美味しいおにぎりを期待してるよ」

「この常陸菜子にお任せくださいー!」

菜子のおにぎりか……考えてみれば何年ぶりだろう。

少しだけ、ほんの少しだけ楽しみだ。

「なーにぼうつとしてるんだよ幸彦!……うん?ありや菜子ちゃんじゃねえか!なんだよこの!隅に置けないやつだなくえ?おい!」
完全に背後をとられた。気配を消しておきながら、結局やかましいぐらいの大声を出して絡んでくる人間は穂織には一人しかいない。

「魚海のおやしさん。暑苦しいので離してくれませんか？」

「おいおい。せつかく師匠自らが出迎えてやったんだぜ？もうちよつとまじな反応見せろよ」

穂織の商店街で魚屋「魚政」を営んでいる魚海 政重。クマのように大柄でとにかく声が大きい。本人曰く職業病らしい。彼は俺の空手の師匠であり幼い頃からお世話になっている。

「離してあげなさいよ。幸彦が困ってます」

「おいおい聞いてくれよ古本屋！このやろう菜子ちゃんを見ながら顔赤らめてやがったんだぜ？」

「ちよつ赤くなかなかってないですよ！」

「魚屋さん。あなたはまず私の話を聞きなさい」

魚海のおやしさんの魔の手から救おうとしてくれているのが、同じく商店街で古本屋を経営している榎本 昭二。長身華奢な体格でメガネと蝶ネクタイがトレードマーク。穂織では珍しい英国紳士風の男性。彼は俺の合気道の師匠であり、魚海のおやしさん同様幼い頃からお世話になっている。

「昔から何も成長しないのは問題ですよ？」

「そうだぞ？幸彦。気を抜いてるから背後をとられんだ。もつと精進しろ」

「私はあなたに言っているのですよ、魚屋さん」

「俺は強くなってるぞ？」

「性格の話をしてるんですよ」

榎本さんは眉間に手を当てため息を吐いた。

この二人はいつもこの調子だ。元同級生らしく、昔からお互いをライバルとして認識していたらしい。こんな二人でも、武術家としては超一流だ。魚海家も榎本家も朝武家に仕えていた武士の家系。閉鎖的な環境で独自の文化を育んだこの街には、先祖から受け継がれる武道の流派を持つ人間が多い。親から子へ。そして孫へと、戦いの知恵や技術を残してきたのだ。

「あの、迎えに来たって言っていましたけど、それってつまりは」

「おう。お前は俺の部下。つまり家来として練り歩きに参加してもら

う」

「魚屋さんが侍大将として馬に乗りますので、私と幸彦はその横に控えて歩くことになっています」

「そうなんですか。お二人が一緒なら心強いですね」

「なんだ？緊張でもしてたのか？大丈夫だって、安心しろよ！」

「そうですよ幸彦。何せ、魚屋さんでもできるくらいなんですから」

「すごい。こんなに説得力のある言葉は初めてですよ」

「ダアツハツハツハ！照れるぜおい！」

「この通り魚海のおやしさんはバカだ。武術家としては尊敬できるすごい人ではあるのだ。あるのだが……バカなのだ。」

「では幸彦、諸々の説明と準備をするのでついてきなさい。バカ……魚屋さんも行きますよ」

「なあ幸彦。今バカって聞こえた気がしたんだが」

「……気のせいですよ」

俺は魚海のおやしさんから顔を背け、榎本さんについていった。



「町内会のみなさーん！おにぎりを持ってきましたー！」

甲冑の着付けが終わったところ、茱子や奥様方が大量のおにぎりを運んできてくれた。

「おおー！茱子ちゃんも作ってくれたのかい？」

「かー！茱子ちゃんのおにぎりが食べられるなんて嬉しいねえ〜！」

「ありがとう茱子ちゃん。今度野菜安くするよ！」

「じゃあ、うちはコロツケおまけしよう！」

「うまい！茱子ちゃんみたいなのが息子の嫁さんになってくれたらな〜」

「お前んとこの盆暗なんかにもったいねえよ」

「それにおめえ、茱子ちゃんには幸彦がいるからなあ！」

「あなたたち！何鼻の下伸ばしてるんだいみつともない！」

「あはは、みなさんありがとう〜ございます。ですが、幸彦とは何もあり

「ませんので」

みんなおにぎりを嬉しそうに手に取り、口々に好き勝手喋っている。

相変わらず菜子は人気者だ。

朝武家の台所を任されている菜子は、商店街に毎日買い物に行く。幼いころから通い続けているため、商店街や町内会のアイドルと化しているのだ。

しかし、菜子さん？やっぱりまだ怒ってないかい？そこまで何の部分も強調しなくてもいいじゃないか。いや、何もないのは事実だが。

「何もないそうですね」

「落ち込むなよ幸彦！」

この人たちは少し黙っていてほしい。

「菜子ちゃん！こつちにもおにぎり持ってきてくれるかい？」

「あ、はい！」

魚海のおやじさんに呼ばれ、菜子は小走りで向かってきた。

「魚屋さん、古本屋さん。いつも幸彦がお世話になっております」

「おう！お世話してるぜ！」

「お世話されてるの間違いじゃないですか？」

「おう！お世話して、お世話されてるぜ！」

「もう俺突っ込みませんよ？」

「あは、本当に仲がいいんですね」

俺たちの会話を聞いていた菜子はおかしそうに笑った。

「へへ、まあな！そんじやま、いただきますつと。あーむ！んー！うまいー！」

「本当ですね。美味しいですよ常陸さん」

「ありがとうございます♪そう言ってもらえると、作った甲斐がありました」

「幸彦も、食ってみろよー！うまいぞー！」

言われなくても食べるつもりだったが、急かされるとなんだか気恥ずかしくなってしまう。

「じゃあ、いただきます……ん！……うまい」

「当然でしょ。ワタシが握ったんだもん」

絶妙な塩加減で、優しく、しかし力強く握られたからだろうか、口に入れた瞬間、お米が解けるように広がる。文句のつけどころないうまさだ。

「おい。こっちにもくれるかなー？」

「今行きまーす！それじゃ幸彦、また後でね」

「ああ、また後で」

「あ、それと……」

歩きだそうとした足を止め、菜子はこちらを振り向くと、俺の耳元に顔を近づけた。

「甲冑姿、似合ってるよ」

そう微笑みながら言い終えると、何もなかったように去っていった。

「ははは、今のは反則だぞ」

おそらく、菜子には一生かなわないだろう。

おかげで顔が熱い。今朝の仕返しにまんまとはまってしまったようだ。

……後ろでニヤニヤしている大人たちは無視することにした。



昼過ぎから始まった練り歩きは、特筆することなく無事終了した。強いて書くなら、菜子のおにぎり効果なのか、いつも以上にみんな気合が入っていた、というぐらいか。まさしく歴戦の武将たちの凱旋だった。菜子のおにぎり恐るべし。

そして現在、頑張って菜子をエスコートしようと思っていたのだが、

「あわあわ……そわそわ……おろおろ……芳乃様は大丈夫でしょうか？」

どうやら、芳乃様が心配すぎて出店どころではなくなっていました

ようだ。

「し、心配しすぎだよ、茉莉。ま、まだ、あわ、あわわわわわわ」
かくいう俺も、茉莉と同じ気持ちだったりする。

一度咳払いをし、気持ちを落ち着かせるため息を吐く。

……よし。

「なあ茉莉。提案があるんだが……」

舞を奉納し終えた私をお父さんが出迎えてくれた。

「お疲れ様、芳乃。はいタオル」

「ありがとうお父さん」

舞を踊っている間は無心になれる。過去に起こった悲しいことも、これから起こるかもしれない辛いことも、何も考えず、舞に集中できる。

だから、これから先も、私は踊り続ける。

最後まで。お母さんがそうであつたように。

私の命が尽きるまで。

「芳乃？」

「っ！なに？お父さん」

「いや。昼頃からずっと顔色が悪かったからね。何かあつたのかい？」

「大丈夫。昨日ちよつと遅くまで本を読んだから、そのせいだと思う」

「……………」

「お父さん？」

「いや、芳乃が大丈夫ならそれで良いんだ。だけど、もし何かあるのなら相談してほしい。僕に話すのが嫌なら、茉莉君でも幸彦君でもいい。とにかく、一人で抱え込まないでくれないかな」

「本当に大丈夫だから。心配しないで」

私は自分にできる精一杯の笑顔を見せる。お父さんをこれ以上不

安にはさせたくないから。

「そうか。うん。なら、いいんだ。僕はまだ仕事があるから失礼するよ」

「あつ、それなら私も手伝う」

「いいからいいから。小春君もいるし、芳乃は休憩してて」

これ以上は逆効果だと思った私は、素直に従うことにする。

「はあ」

自室に戻った瞬間ため息が漏れる。

みんなを心配させたいわけじゃない。ただ頑張りたいだけなのだ。そうしないと、きつとお母さんは……。

「ため息は幸せを逃すと言うぞ?」

「きやつ!もう!驚かさないでくださいよ、ムラサメ様」

「驚かしたつもりはないぞ?それよりも、芳乃。ため息ばかりするでない。吾輩まで気が沈みそうだ」

ムラサメ様は肩を落として見せた後、クワツとこちらに顔を向けた。

「ほれ!息を大きく吸え!今逃した幸せを取り戻すのだ!」

「えっと、いったいどういう……」

「いいから吸ってみるのだ!」

「は、はい!……すうくくく」

言われた通り大きく息を吸って見る。

「どうだ?幸せが戻ってきたであろう?」

「あの……よくわからないのですが」

その時、私の部屋の襖が開けられ、私のよく知る二人が入ってきた。

「失礼します。芳乃様、ムラサメ様」

「菜子!?幸彦まで!今日は出店を楽しんできてねって言ったのに……」

「あは、もちろん楽しみますよ♪ね、幸彦」

「ええ、その前に忘れ物を取りに来たんです」

「忘れ物?」

「そうなんですよ。では、行きましようか、芳乃様」

茉莉が私の右手を握る。

「じゃあ、行きましよう、芳乃様」

幸彦が私の左手を握る。

「あの……これは一体どういうこと？」

「ははは、茉莉が、芳乃様が心配すぎて出店に集中できない！つて言うものですから」

「ちよつと！幸彦だつて心配しすぎて壊れたロボットみたいになつてたじゃない！」

「いや〜面目無い。それで二人で話した結果、芳乃様も一緒に連れて行こうということになりました」

「芳乃様をおいて楽しむなんてやっぱりできません。ですので！今日は昔みたいに三人で楽しみたいなくつと思つたんです」

「で、でも、私着替えてないし、それにお父さんの手伝いも」

「安春様にはもう俺と茉莉で許可を取つてあります。何も心配ありません」

「それに、巫女服のまま楽しんではいけません。むしろ巫女姫様の楽しんでいる姿を見せることで、周りに安心感を与える効果も期待できるのではないのでしょうか？」

この二人に死角はなかった。

昔みたいに三人で。とても魅力的な提案だ。

「断つたとしても、無理やり連れて行きますけど」

茉莉がいい笑顔でとんでもないことを言う。

「……わかりました。今日だけ、ですよ」

二人は顔を見合わせ、そして微笑む。

「うむ。やはり息抜きは必要だからな」

「ムラサメ様は二人が来ることを知つてたんですか？」

「そうだぞ。だから芳乃に教えようと部屋に入ったのだが、暗い顔のため息なぞ吐いていたからな。ちよつとしたサプライズを考えたわけだ」

「さすがムラサメ様。エンターテインメントのなんたるかを分かつていらつしやる」

「当たり前だ、幸彦。吾輩はえんたーていなーだからな！」

「ムラサメ様もご一緒はどうですか？」

「いや、今日は三人、水入らずで行くといい。吾輩はまた次の機会に期待しておるぞ」

さつきまで暗い空気が充満していた部屋が、明るい笑い声で溢れている。

使命を忘れることはできないが、少しだけ楽しみたい。

私はそう思った。



「わあ〜！すごいたくさんお店があるんですね！」

「昔はこんなに出店も屋台もありませんでしたよね」

「観光客が来るようになったからな。娯楽の少ない街だし、みんなも気合を入れてるんだろう」

三人でこうして出かけるのは随分久しぶりに感じる。私も茉子も幸彦も、自分の役目を理解し始めてからは、遊びに出かける行為は自然としなくなった。

「正直、幸彦が今回の提案をした時はびっくりしちゃいましたよ」

「え!? 幸彦からの提案だったの!?!」

幸彦は心配性で、私たちが関わることには、とても注意深くなる。

そんな彼が、大勢の人がいるところに遊びに行きましようなんて、普段なら決して言わないと思っただのに。

「実は今朝、姉さんに根を詰めすぎだと言われまして。それに、駒川の者として芳乃様のメンタルケアも仕事の一つですから。安全面も、俺と茉子が側にいて、茉子の父親も近くで控えています。師匠たちにも、怪しい人がいないか警戒してもらっているのです」

「心配性が治ったわけではなかったんだ」

「当たり前です。対策はいくらしたって困らないし、絶対に安全なんてないですから」

「この通り、いつもの幸彦ですよ」

「そうみたいね。でも、それが幸彦ですもんね」

「そういうことです。さあ、早く廻りましょう。どこがいいですかね？」

「食べ物関係はたくさんありますよ。あ、射的もありますよ——」

「たこ焼き、たい焼き、焼きそばなんかの定番も——」

二人が楽しそうにしているのを見て、私まで楽しくなってしまう。来て良かった。気がつけば私も笑顔になっていた。



「なんで屋台の焼きそばって美味しく感じるんでしょう？」

「それを言うなら、祭りで食べるものは大抵美味しく感じる気がするな」

「茱子も幸彦も買いすぎよ」

「そういう芳乃様も、たい焼き三つも食べてたじゃないですか」

「美味しそうに食べてましたよね。あの後行列ができてましたよ」

「だって！おまけって言うってくれるからつい……」

私たちはその後もたくさんものを食べ歩きしました。



「芳乃様、チョコバナナです」

「ありがとう、茱子」

「甘いものはいいです。脳に糖が染み渡る」

「ふふ、幸彦幸せそう」

私もチョコバナナを食べようとするが、なんだか周りからの視線がすごい気がする。

「……茱子。クナイを貸してくれないか？」

「はい」

幸彦は茱子からクナイを借りるとチョコバナナを上には振り投げた。

一閃。チョコバナナは見事に輪切りで三等分に分かれていた

「輪切りにする必要があったの?」

「いえ、ちよつとした見せしめですよ。『あんまりいやらしい目つきで見てるんじゃない。君たちのもこうしてやろうか』って」

「? 菓子、どういうことかしら?」

「芳乃様はお気になさらないでください。ささ食べましょう」

普段食べないものもたくさん食べれました。



「芳乃様。射的がありますよ」

「ほんとだ。私やったことないの」

「ふっふっふ。この常陸菓子に任せてください! 的を当てるのはは得意ですから♪」

「……クナイは使うなよ?」

「わかってるもん! 芳乃様、私が教えるので一緒にやってみましょう!」

初めての遊びもたくさん楽しめました。



ずっと遊んでいたい。そう思えるほどに、楽しい時間でした。幼い日のあの頃に、戻ったように。

でも、運命の歯車は、私たちがこうしている間も回り続けていて、「あー! こんなところにいた! 探したぜ幸彦! 巫女姫様と常陸さんもいるな。」

「どうしたんだ、廉太郎。そんなに慌てて」

「いやさ、じいちゃんに三人を呼んでくるように言われてさー」

「俺たちを?」

「何かあったんですか？」

「それがさ、俺の従兄弟が叢雨丸を折っちゃってさ」

「なんだって!?!」「なんですって!?!」

私はその運命から逃げることはできない

「とにかく行くこう!」

「ええ! 芳乃様、行きましょう」

覚悟を決めろと言われているような、そんな気がした。

第三話 「失うわけにはいかない」

『叢雨丸』

はるか昔、朝武の頭首が神から授かったとされる伝説の御神刀。そして数百年前、ムラサメ様が人柱となり神力を宿すことで、妖を祓い、戦を勝利へと導いた刀。

昨日、その使い手が現れた。

「……い、……きひひ、聞いて………」

春祭りの日に、それも、朝武の呪いを知る家系の者から使い手が現れた。

これは偶然か。それとも運命なのか。

「も……し、ゆき……、聞こえ……か？」

どちらにせよ、状況は良くも悪くも変わっていくことになるだろう。

考えることは山積みだが、しばらくは様子見だな。

彼の人間性を見極めなければ。朝武家の害となる人間でなければいいが。

「おー…、返事…ろー」

もし害ある人間であったのなら、その時は…

「ふんっ!!」

「あだっ!」

突然頭を殴られる。

「痛たた……。ちよつと魚海のおやじさん!いきなり何するんですか!?!」

「お!ようやく反応したな幸彦!たく、バイト中なのに電波障害起こしてんじゃねーぞ」

おやじさんに言われ、ハツとした。

俺は今、魚海のおやじさんが経営している魚屋「魚政」のアルバイトをしている途中だったのだ。

「……すみません、おやじさん。アルバイト中なのに考え込んでし

まっつて」

「随分と難しい顔してたじゃねえか。悩み事か？」

「ええ、まあ」

「ふーん。そうか」

魚海のおやじさんはそれ以上何も言わなかった。

この人はバカだが、察する力は高い。いつもは大きな声でやかましく絡んでくるのに、そっとしておいて欲しい時には必要以上に突っ込んでこない。

そして、本当に必要な時だけ背中を叩いてくれる。今までもそうやって、何度も俺を元気付けてくれた。

「幸彦。今日はもうあがっていいぞ。」

「え？ いやでも、まだ午後の仕事が残ってますし」

「昼のピークは過ぎたからな。お前のことだ。考え事するなって方が無理だろ？ 正直な話、午後のピークで同じことになったら仕事の邪魔だ。あとは俺一人でなんとかやつから、少し頭を冷やしてこい。ほら、駄賃だ」

そう言うのと俺の方へ小銭を投げる。

「今度みっちり働いてもらうからな。覚悟しとけよ？」

魚海のおやじさんはニヤリと笑った。

俺は一瞬呆気にとられるが、魚海のおやじさんの優しさを噛みしめるように、手の中にある小銭を握り直す。

「ありがとうございます、魚海のおやじさん」

「いいってことよ！ 人生に悩み考えるのは若者の特権だからな！ 少年よ！ 大地を砕け！ つてな」

それを言うなら『少年よ、大志を抱け』だと思う。

しかも微妙に使いどころがずれている気が……いや、はは、なるほど。

少年よ、大地を砕け。要は、考えすぎるな。当たって砕けるということか。おやじさんらしいアドバイスだな。

ありがたいことに、肩の力が抜けた気がした。



アルバイトを早めに終えた俺は、考えをまとめるためある場所を目指す。その間の道のりも有効に使うべく、昨日起こった出来事を思い返していた。



茉莉や芳乃様と久しぶりに祭りを楽しんでいた時だった。

玄十郎さんの孫であり、クラスメイトの廉太郎が俺たちを呼びにやってきた。その内容は、廉太郎の従兄弟が叢雨丸を折ってしまったというものだった。

廉太郎に礼を言うと、俺たちは急いで建実神社へと戻った。

朝武家の居間の近くまで行くと、安春様と玄十郎さんの声が聞こえてきた。

「……という方向で僕は考えています。どうでしょうか？」

「いや、この件でワシが口を挟むことはありません。将臣も覚悟を決めると言っておりましてので」

どうやら先に話を始めているらしい。

最初に芳乃様が襖を開け中に入る。俺と茉莉はそのあとに続いた。

芳乃様は自分を落ち着かせようと一度大きく息を吸い、努めて冷静な声で安春様たちに話しかける。

「ただいま戻りました。お父さん、玄十郎さん」

「おかえり、芳乃。茉莉君も幸彦君も、呼び戻してしまい申し訳無い」
娘が久しぶりに祭りを楽しんでいたので。安春様は少し残念そうな顔をしていた。

「お気になさらないください。俺たちにとつても一大事ですから」
「幸彦の言う通りです。それで、本当に叢雨丸の使い手が現れたんですか？」

芳乃様は早速話を切り出した。

「うん。僕も玄十郎さんも、この目で叢雨丸が折れるところを目撃し

たからね。間違いないよ」

「そもそも、叢雨丸が折れても平気なんですか？」

茉莉子が当たり前の疑問を問いかける。

「大丈夫。叢雨丸は神から授かった刀だ。神力を込めればその姿は元に戻るはず。それにあの刀は、普通の人間がどれだけ力を加えようが折れることは無い。その刀が折れたということはつまり、折った人間は叢雨丸に選ばれたということになるんだ」

「なるほど。幸彦が言うなら間違いないでしょうね」

茉莉子が納得するのを確認して、安春様は話を続ける。

「とりあえず、現状の確認とこれからのことについて、話をまとめようと思うんだ。まず、今回叢雨丸の使い手に選ばれた人物についてなんだけど」

「それについては、ワシがお話ししましょう」

今まで話の流れを静かに見守っていた玄十郎さんが話し出した。

「名前は有地ありち将臣まさおみ。ワシの孫になります。宿の手伝いで穂織に來まして叢雨丸の選定に挑戦させてみたところ、今回のようなことになりました」

有地将臣。

それが、俺たちの運命を左右するかもしれない者の名前だった。

「年齢は芳乃たちと同じ。人柄についても、玄十郎さんは大丈夫だろうと言ってくれている」

「長らく会ってはいませんでした、芯のある真面目なやつです。それはワシが保証します」

玄十郎さんは信頼できる人だ。人を見る目があることも知っている。身内贖身する人ではないこともわかっている。しかし、

「玄十郎さんには申し訳有りませんが、人柄については自分の目で判断したいと思います」

「ちよつと幸彦！」

「いや、いいんだ、常陸さん。駒川くんは巫女姫様を思ってそう言ってくれている。ワシも駒川くんと同じ立場ならそうするだろう」

「玄十郎さん、ご無礼をお許しください」

「君はそれでいいんだ。駒川くんたちが見限らないようにするのがワシの役目でもある」

ありがたいことに玄十郎さんは、気持ちをはわかると言ってくれた。その上で、間違いが起きないよう協力してくれるという。

「彼については、みんなで見守っていくということでもいいかな」

安春様の言葉に、その場にいる全員が頷いた。

「あとは、叢雨丸に選ばれた人間が崇り神に狙われる危険性について、幸彦くんの見解を聞かせてくれないかな」

場の空気が張り詰める。

崇り神は大昔にかけられた呪詛の一つと考えられている。何百年もの間、朝武の人間は崇り神と戦い、穢れを祓い続けてきた。

「前例がないことなので確証はありませんが、ほぼ間違いなく標的になると思われます」

「そう思う理由を聞かせてくれないかい？」

俺は自分の考えをまとめながら説明する。

「強い憎しみや殺意が形を持ったもの、それが今崇り神と呼ばれている存在です。奴らの目的は、巫女姫を亡き者にすること。問題なのは、その憎しみを呪詛として残した人間を退治したのが、叢雨丸であるという事実です」

「どういうこと？」

「奴らを作った存在が叢雨丸に退治されたということは、当然、叢雨丸の力も知っていることになります。目的を邪魔されるかもしれない相手が現れたのに、野放しにしておくとは思えない」

俺が話し終えると、安春様も玄十郎さんも考え込んでしまった。芳乃様も茉莉も、ことの重大さを理解しているらしく何も話さない。

そんな中最初に口を開いたのは安春様だった。

「やはり彼には、うちで生活してもらおうほうがいいと思う。穂織の外に出てしまったては何が起きるかわからないからね」

「俺もその方がいいと思います」

もし穂織の外で崇り神が暴れることになれば、收拾がつかないことになる。

「じゃあその方向でいこう。芳乃もそれでいいね?」

「わかった。朝武の呪いのせいで周りを危険にさらすわけにはいかな
いもの」

「菓子君も、家事の仕事が増えることになるけど……」

「一人ぐらい増えたってどうって事ありません。好きでやっているこ
となので」

「それでは、将臣の説得はワシにらせてください」

「おおよその話し合いは済んだ。あとは本人次第になるだろう。」

「将臣君の立場については僕に考えがある。幸彦君、菓子君、あとは僕
に任せてもらえるかな?」

「俺たちは朝武に仕える者。主君の決定に従いますよ」

「何があっても芳乃様はワタシたちがお守りします」

「俺も菓子も異論はなかった。」

「ありがとう。彼は神殿で待ってる。芳乃、ついてきてくれ。二人は
今日のところは解散にしよう。顔合わせしてもらいたいけど、きつと
彼もいっぱいいっぱいだろうからね、また後日ということだ」

「わかりました。それでは芳乃様、安春様、玄十郎さん。失礼いたしま
す」



昨日はそのまま菓子を家まで送り、俺自身も家路についた。

あとで姉さんに聞いた話だが、安春様が考えていると言った彼の立
場は、芳乃様の婚約者だという。とんでもない劇薬を投与したもの
だ。

昨日の出来事の復習が終わったところで目的地にたどり着く。

俺の憩いの場であり、美味しい甘味を提供してくれるお店。

その名も「田心屋^{たごりや}」

考える頭に、糖分は必需品である。

「いらっしやいませ! あ、駒川先輩、こんにちは!」

店に入り出迎えてくれたのは、玄十郎さんのお孫さんで廉太郎の妹

の小春ちゃんだった。

「こんにちは小春ちゃん、いつもの席空いてるかな？」

俺がいつも座るのは店の隅にあるテーブル席。こだわりがあるわけではないが、隅っこは嫌いじゃない。

「空いてますよ。すぐご案内しますね」

お店はピークが過ぎた後なのだろう。混んでいなくて助かった。これなら静かに甘味を食べながら考え事ができる。

「そうだ、昨日は俺たちの代わりに神社を手伝ってくれてありがとう。とても助かったよ」

「いえいえ、いいんですよ。巫女姫様のお手伝いなんてなかなかできませんし。貴重な体験ができました。こちら、メニューになります」
「そう言ってもらえると助かるよ」

廉太郎の妹とは思えないほどしっかり者だ。いや、廉太郎の妹だからか。

俺がメニューを受け取ると、奥から馬庭さんができた。

「いらつしやいませ、駒川くん。今日は材料があるから駒川スペシャル作れるよ？」

馬庭まにわ 芦花ろか。ここ田心屋の店主である。気立てが良く面倒見のいいお姉さんで、この店の看板娘と言っても過言ではない。

彼女が田心屋の店主になってから、和菓子だけでなく洋菓子も提供されるようになり、ますます俺のお気に入りのお店へと進化していった。

ちなみに駒川スペシャルとは、あまりにも通い詰める俺に対し、この店の元店主（馬庭さんのお父さん）が俺の好きなものを詰め込んでくれた、まさに夢のような甘味である。

「いや、今日はプリンとどら焼きをください。手持ちが少ないもので」
スペシャルと名前がつくだけあって、お値段もスペシャルになってしまったのが悔やまれる。

「今日は半額でいいよ？昨日まー坊が巫女姫様にご迷惑をかけちゃったから、そのお詫び」

「まー坊？」

「そっか、昨日お兄ちゃんが叢雨丸を折っちゃったから」

「お兄ちゃん？」

文脈から察するに、「まー坊」も「お兄ちゃん」も有地将臣の事を指した呼称だろう。

「お二人もあの場にいたんですか？」

「そうなの。だから巫女姫様の婚約者になった事も玄十郎さんから聞いてるよ。他言無用だって事もね」

馬庭さんは周りに聞こえないよう声を小さくして教えてくれた。

「小春ちゃんは従兄妹だからわかるけど、馬庭さんも有地様のお知り合いだったんですね」

「うん。まー坊のお母さんとうちの母親の仲が良くって。昔はまー坊と廉太郎と小春ちゃんと私の四人でよく遊んでたんだよ」

「お兄ちゃんと会うのは久しぶりだったけど、やっぱりお兄ちゃんはレン兄と違っていいひとだったな」

そうか、彼は何度か穂織に来ているんだな。これは彼の人柄を知れるいい機会かもしれない。

「お詫びの件ですが、半額にはしなくていいので、よかつたら彼の話をもっと聞かせてくれませんか？」

営業中なのでずっと話を聞くのは無理だったが、二人は彼の事を教えてくれた。普段は優しく、心配りができる人間であるが、昔は少しやんちゃで山の沢で溺れかけた事もあったらしい。

何かに秀でているわけではないが、一緒にいると落ち着く、そんな人物だ。そう彼女たちは言った。

あとは、実際にあつて話してみないとわからない。彼の負担を考えて、俺との顔合わせは今日の夜という事になっている。菜子も今日あっているはずだから、家に送る時に話を聞いてみよう。

注文したプリンとどら焼きを食べながら、これからするべき事の考えをまとめる。

しかし、本当に美味しいプリンだ。いつも食べているが飽きがこない。滑らかな舌触り。素材の味を最大限に生かし、上品な甘さが口いっぱい広がっていく。どら焼きの方も負けてはいない。少し厚

めに焼かれたふわふわの生地で粒餡を挟んだそれは、シンプルなのに奥が深い。餡子作りは和菓子屋の力の見せ所である。この店の餡子は甘すぎる事はなく、しつとりと食べ応えのある素晴らしい餡子だ。それをふわふわもちもちの生地で挟んだものが美味しくないわけがない。嗚呼、幸せとはこういう事なのだろうな……。

ゆっくり味わって甘味を食べていたため、店を出る頃には辺りは暗くなっていた。

「すみません。長居してしまつて」

「いいのよ。駒川くんは大事な常連さんだもの。それにお土産まで買つてもらつたんだから文句なしだよ。またのご来店お待ちしております！」

「はい、それではまた」

このあと朝武家に向かうことになっている。

有地様との顔合わせも兼ねて晩御飯をご馳走してくれるそうだ。

手ぶらで行くのも申し訳ないと思つた俺は、茉莉も芳乃様も、甘いものが好きである事を知っているので、茉莉にはティラミス、芳乃様にはプリン、安春様と有地様にはどら焼きを買つていくことにしたのだつた。



少し早いかもしれないが朝武の家に向かう。遅れるよりはいいだろうし、なんなら茉莉の手伝いをすればいい。

途中、青いTシャツを着た5歳ぐらいの子供が迷子になっていたので、一緒に親を探してまわったりもしたが、すぐに見つかったので問題は無い。

問題は、その後起きた

「幸彦ーいいところに！大変なのだ！ご主人が！ご主人が！！」

神社の境内に向かう途中でムラサメさまが慌てた様子で現れた。

「ムラサメ様！ちよつと落ち着いてください！」

ムラサメ様がご主人と呼ぶ人物なんて、一人しか思い浮かばない。

有地将臣。彼に何かあったことは明白だった。

「ムラサメ様。落ち着いて、何があったのか説明してください」

「う、うむ。ご主人が山の中で倒れているのだ！もしかしたら崇り神にやられたのかもしれない」

「なんだって!?!どうして山の中に!?!」

もう辺りは暗くなっている。崇り神は基本夜に活動を開始する。そのため日が暮れてから山に入ることは禁止されているはず。

彼はそれを知らなかったのか？

「いや、聞きたいことはたくさんありますが、今は彼を救出する方が先だ。案内することは可能ですか？」

「可能だ！可能だが、幸彦。おぬしが山に入ったら……」

「対策はちゃんとしていきます。崇り神と直接戦わなければ、あれは起こりません」

「しかし……」

「ここで彼を失うわけにはいかないんです！彼は、俺たちの希望かもしれないのだから……」

現状、呪詛を解く方法はわかっていない。

このままでは、芳乃様は自らに課せられた使命にとらわれ、菜子は自分の血に苦しめられ続ける。俺たちが変わるためにも、新しい風が必要なのだ。

言いながら俺は自分の携帯を操作する。

『はい、駒川診療所です』

「姉さん？幸彦だけど、至急朝武家に来てくれないか？医療道具一式持って」

『一体どうしたんだい？何があったのかちやんと言いなさい』

どうやら俺も相当焦っているようだ。

「……ごめん。有地様が山で倒れているのをムラサメ様が発見したんだ。今から俺が救出に向かう。姉さんはこのことを安春様と玄十郎さんに連絡してくれ」

『……どうやら本当に緊急らしいね。わかった。今すぐ向かおう』

「頼んだ。それじゃあ」

『幸彦、君も十分気をつけるように』

「ああ」

電話を切りムラサメ様に向き直る。

「それでは、案内お願いします」

「うむ。こつちだ！」



ムラサメ様に先導され全速力で走る。

山の手前に着くと一度止まり、準備を始めるためポケットから紙を二枚取り出す。一枚は獣の形。もう一枚は人の形。

俺は獣の形に切り取られた一枚に念を込め地面に置く。するとその紙は猫の姿に変身した。

式神。

遙か昔、陰陽師が使役していたという霊的存在。俺が使える数少ない力の一つだ。

そもそも何故、俺にムラサメ様が見えるのか。

理由は俺の家系にある。

今でこそ開業医として生計を立てている駒川家だが、朝武が呪いをかけられる前は陰陽師として活動していた。呪いのせいで病気や怪我が増えた朝武を支えるため、俺の一族は医者へと身分を変えたのだ。

俺の力は所謂「先祖返り」だと、ムラサメ様は言う。

人より霊力が高いためムラサメ様を認識することができるし、穢れを感じ取ることもできる。

「猫丸、葉子を俺のところまで案内してくれ」

猫丸と呼ばれた式神は建実神社へと消えていった。

もう一つの人型の方には、俺の髪の毛を挟み同じように念を込める。

すると目の前に俺と同じ姿をした式神が現れる。

「行け」

俺と同じ姿の式神は山の中に放つ。これでしばらくは式神が囷になつてくれる。

「お待たせしました。急ぎましょう」
「うむー」

この時間に山の中に入るのは12年前のあの日以来、久しぶりのことだ。

暗い山の中、ムラサメ様の後を追ひ、俺は駆ける。

山に入り5分ほどたった頃だった。

「この下だー」

ムラサメさまが指差す方、山道を外れた斜面の下に有地様の姿を発見した。

急いで斜面を下り、怪我の具合を確認する。

「呼吸は安定している。斜面を転がり落ちた時についてと思われる裂傷多数。気絶しているということは、少なからず頭を打つてることは確定だな。それに……」

有地様の右肩の傷。かすり傷だが、穢れがひどい。

「ご主人は大丈夫なのか!?どうなのだ幸彦?」

「大丈夫ですよ、ムラサメさま。安心してください」

ムラサメさまを落ち着かせるため、笑顔で対応する。

本来であれば、無理に動かすのは避けるべきだが、状況が状況だ。

急いで運び出さなければ、止めを刺されかねない。

そんな時だった。

「くそ、式神がやられた。予想より早いな」

感覚で式神の存在を感じ取ることができるが、その式神の気配がなくなった。つまりは崇り神がこちらに来る可能性が高くなったということだ。

急いでもう一体式神をつくり山に放つ。

これでダメなら、あとは時間との勝負になる。俺は気絶している有地様の体を起こし一気に背負い込む。師匠達に鍛え上げられていて良かったと思う。

あとは手首をしっかりと握って後ろに落ちないように固定して、揺ら

さないように、且つ迅速に山から出るだけだ。

人を背負いながら斜面を登るのは大変だった。まだまだ鍛錬が足りないな。

山道に戻ったところで式神の気配が消えた。同時に背後の方にゾワリとする気配を感じる。

「幸彦」

ムラサメさまが緊張した声で語りかける。

「わかってます。まだ距離はありますが、確実に近づいている。走りますよ！」

後ろを振り返らないように全速力で来た道を引き返す。

出口が近づいてきた頃、前方から猫丸と茉莉がやってきた。

「幸彦ごめん！遅くなった！」

「いいや、来てくれてありがとう。猫丸もありがとな」

猫丸はにやくと鳴くと獣型の紙に戻り俺の胸ポケットに入っていた。

「まずいぞ幸彦。祟り神がすぐそばまで来ておる」

「わかっています。茉莉、有地様を安春様のところへ」

「幸彦はどうするんですか？」

「このままだと神社まで追ってくるかもしれない。結界は張ってはいるが、山の外に出られると困るからな。俺の式神を使って山の中腹まで祟り神を戻す」

最悪の場合は避けなければならない。これが一番の方法だろう。

「またそうやって、自分が囧になるんですか……」

暗い声で茉莉は言った。その声は怒っているような、悲しんでるような、そんな声だった。

「俺が囧になるわけじゃない。あくまでも引っ掻き回すのは式神さ。式神を放つたらすぐ戻るから」

「本当ですね？」

「嘘ついたらあとが怖いからね」

「……わかった。待ってるから」

茉莉は有地様を抱えて走って行った。

茉莉が見えなくなるのを確認してから、行動を開始する。

「俺も急がないとな。式神！」

ポケットにしまつてあつた紙の依り代を全て出し四方へ放つ。

祟り神を錯乱させるため、式神たちには山を駆け回ってもらふ必要があつた。

式神を召喚すると同時に、膝の力が抜けて少しだけバランスを崩す。

「っ、さすがにこの量は疲れるな。引つかかってくれよ、祟り神さん」

これ以上の策は用意していない。これでダメなら茉莉には悪いが、俺が困る必要がでてくる。

数分待ち、祟り神の気配が遠くなるのを確認する。

「無事、任務完了かな」

力が抜けてその場にへたり込む。

しばらくは動けそうにない。もうへトへトだった。



体に怪我はないが、精神的に限界だった俺は少し休憩してから建実神社へと戻つて来た。

境内に入った瞬間、茉莉が抱きつてきた。顔を俺に押し付けているのでその表情をうかがうことはできない。

「えっと、茉莉さん？」

「心配したんだから！すぐ戻るなんて言つてたのに全然戻つてこないんだもん」

「いや、式神の使い過ぎで疲れたから少し休んでただけなんだ。それにちやんと戻つて来ただろう？」

「そうだけど！あんな別れ際に死亡フラグみたいなキザなこと言うんだもん。本当に一晩中山の中にいるつもりなんじゃないかって」

「それは漫画の読みすぎいたたたたたたたた！」

茉莉が抱きしめる力を強くする。

「本当に、心配したんだからね……」

茉莉は泣きそうな声になっていた。

俺は自然と茉莉の頭の上に手を乗せて撫でる

「ごめん……」

「許さない」

「え？」

「ハーゲンビッツのアイス買ってくれたら許してあげる」

「……何個だ？」

「ワタシに二個、芳乃様に二個」

「それで機嫌がなおるなら」

最後は二人とも顔を向けあい、自然と笑いがおきる。

「おやおや、私はお邪魔かな？」

ニヤニヤしながら姉さんが近づいてきた。

「大丈夫ですみづはさん。幸彦とは何もありませんから」

「だから、なんで何もの部分を強調するんだ」

昨日も同じことを思った気がする。

「姉さん、有地様は？」

「問題ないよ。傷は多いがどれも軽いものだった。一応目が覚めた

ら、もう一度詳しい検査をしたいところだね」

「そうか、よかった」

「玄十郎さんも感謝していたよ。孫を助けてくれてありがとうだって

さ」

「結果無事で本当によかったよ」

「しかし、女の子を泣かせるのはいただけくないな」

「勘弁してよ姉さん」

崇り神との駆け引きで疲れているのだから、少しは容赦してほしい。

い。

姉さんは茉莉に向き直る。

「それでは常陸さん、私は失礼します。幸彦も、力を使ったんだ。今日

はすぐ休みなさい」

「言われなくても、もう限界が近いから」

「わかりました。ワタシも今日は芳乃様の家に泊まろうと思います」

「その方がいいだろうね。芳乃様は今自分を責めているだろう。常陸さんがいれば芳乃様も少しは落ち着くだろうからね」

経緯はわからないが、有地様が山に入ったということは、誰も山に入るなど忠告しなかったということ。責任を感じるのも無理ないだろう。

「茉莉、あとは頼んだぞ」

「幸彦も、しっかり休んでね」

春祭りから始まった濃い日常。その二日目がやっと終わるのだった。

第四話 「叢雨丸に選ばれた男」

俺の名前は有地将臣。どこにでもいる普通の高校生だ。

春休みの間、じいちゃん経営している宿「志乃都荘」の手伝いをしに穂織を訪れた俺を待っていたのは、普通では想像のできない体験とたくさんの出会いだった。

「いろんなことが起きすぎてまだ混乱してるけど、あれから二日しか経ってないんだよな〜」

春祭りで叢雨丸の使い手として選ばれ、幽霊少女にご主人と呼ばれ、巫女姫と呼ばれている可愛い女の子の婚約者になった。学校は転校することになり、女の子が住んでいる家に住むよう言われ、忍者を自称する女の子と出会い、最終的には崇り神と呼ばれる存在に襲われた。

三日前の俺に話しても絶対に信じないだろう。ラノベの読みすぎだと笑われるレベルのことが起こっているのだ。

「はあく、本当に、これからどうすればいいんだ？」

考えをまとめるため、俺は安春さんに頼み神社の掃除をさせてもらっている。

叢雨丸の管理者であるムラサメちゃんも、気を利かせて俺を一人にしてくれた。

昨日、俺は崇り神に襲われ意識を失った。今朝目を覚ました時、みんなが俺を心配してくれた。そして、この街で何が起きているのかを知った。

朝武さんも常陸さんも、あんな化け物と戦ってきたなんて。

「夢じゃない……んだよな」

崇り神のことを思い出すだけで心臓が早く脈打つのがわかる。

包帯だらけのからだと右肩の痛みが、俺に現実であることを告げている。

「やっぱり、女の子だけにあんな危険な存在と戦わせるなんてできないよな」

俺が使い手に選ばれた「叢雨丸」には妖を祓う力がある。祟り神とも戦えるはずだ。俺にもできることがあるなら、朝武さんの力になりたいと思った。

「有地様？こんなところで何してるんですか？」

「あ、常陸さん」

家の家事を終えたらしい常陸さんに話しかけられる。彼女は俺が居候している朝武家の家事を全てこなしているらしい。同い年なのにすっかりしている彼女には頭が上がらない。

「あまり無理をしてはいけませんよ。今朝目が覚めたばかりなのでから」

「無理はしてません。ちよつとじつとしてられなくて」

「ああ、お気持ちはわかります。私も家事をしていると落ち着きますから」

常陸さんは腕を組み、こくこくと頷く。

「あのさ、常陸さんは……」

怖くないの？

ふと、今朝祟り神の話聞いてから胸に湧き上がっていた疑問が口から出そうになる。しかしその先の言葉は口に出さなかった。

「？なんでしよう？」

「いや、えつと……そうだ！その有地様っていうの、よかつたらやめてくれないかな？同い年の女の子に様付けされるのは、やっぱり恥ずかしいというか、こそばゆいというか」

「……そうですね。わかりました。では有地さんと呼ばせていただきます」

なんとか誤魔化せたかな？様付けをやめて欲しいのは本心だし。

「なんか、誤魔化せてよかつた〜って顔してますよ？」

「え?!いやあくそんなことないですよ〜」

漫画であれば大きなフォントでギクツと書かれたであろう。自分でも挙動不審になっているのがわかる。

「有地さん」

「は、はい」

「いま、崇り神と戦うのは怖くないのかって聞こうとしましたよね？」
「……………」

「やっぱりそうでしたか」

いきなり本心を言い当てられて言葉が出なかった。

「どうしてわかったんですか？」

「ワタシ、エスパーですから」

「そこは忍者じゃないんですね…」

常陸さんなら超高校級の忍者として、サイコポップなコロシアイ学園生活も生き残ることができただろうな。

「もちろん冗談ですよ。ワタシは忍者ですが、人の心を覗く術はありません」

「だったらどうして」

「昔、同じことを言われたんです。茉莉は怖くないのかって。その子も、今の有地さんのように思い詰めた表情をしていました」

その時のことを思い返しているのだろう。常陸さんはまるで誰かを慈しむような優しい顔になっていた。

「正直に言いますと怖い気持ちもあります。でも、芳乃様をお守りするのがワタシの使命ですし、ひとりで戦っているわけでもありませんので」

俺は素直に凄いと思った。俺はまだ怖くて尻込みをしていると自分であわわわっているから。

同時に男として、少し恥ずかしかった。

「ところで有地さん。この後時間ありますか？」

「ありますけど、どうしたんですか？」

「あはっ、ではワタシとお出かけしませんか」



「お！茉莉ちゃんじゃないか！夕飯の買い物かい？」

「はい、今日はトンカツにする予定です」

気がつけば常陸さんのおつかいに同行していた。お出かけなんて

いうから少し緊張してただけけど、なんか騙された気分だ。べ、別にいやらしいことは考えてないから！」

「トンカツから、じゃあこれなんてどうだい？安くするよう！」

そう言って肉屋のおじさんが出したのは遠目でもわかるいいお肉だった。

「いいんですか？」

「春祭りではうまいおにぎりをご馳走になったからね！巫女姫様の舞も素晴らしかったし、約束通りコロッケもおまけしてあげる」

「わあ、ありがとうございます」

「いいって、巫女姫様には元気でいて欲しいからな。いつもの量でいいかい？」

「あ、今日は一人分多くいただけますか？」

「ん？ああ幸彦も今日は一緒に食べるのかい？いいねえ、妬けちまうよ」

「違いますって。今日はお客さんがいるんです」

常陸さんも朝武さんも、街の人に好かれていることが会話から伺える。……幸彦って誰だろうか？常陸さんの知り合いかな？

お肉を買った常陸さんがこっちに戻ってくる。

「お待たせしました。次は八百屋さんです」

「あ、荷物持つよ」

「あは、お気持ちはありがたいですが、けが人に無理をさせるわけにはいきません。それにワタシ鍛えてますから。これくらい朝飯前です」

怪我の話を持ち出されると、それ以上持つとは言えなくなってしまう。

それでも、なんだかんだと外を歩いているだけで気分は軽くなる。きつと常陸さんはそれが目的で俺を連れ出したのだろう。

「有地さんは苦手な食べ物ありますか？」

「どうだろう。これといって苦手なものはないかな。常陸さんの作るご飯おいしかったし」

食事の空気はギスギスして最悪だったが、昨日食べた朝ごはんも昼ごはんも美味しかった。あれで朝武さんともつと会話が続けば百点

満点だったと思う。

「あは、そう言ってもらえると嬉しいですね。今日の晩御飯も楽しみにしててください」

女の子と一緒に歩いて買い物して、家に帰ったらご飯を作ってもらう。な、なんかこれ、世間一般でいうリア充ってやつじゃないか!? しかし俺には朝武さんという婚約者が……まずい! 何にもやましいことではないのに最低のことをしている気がしてきた!

「お! 菜子ちゃんじゃねえか!」

そんな馬鹿なことを考えていたら、商店街の魚屋の前でおおきな男の人に声をかけられた。

「魚屋さん。こんにちは」

「おう! 菜子ちゃんは今日もべつぴんさんだなあ。買い物ちゆうか、い……」

魚屋さんと呼ばれた大男は俺を見た瞬間固まってしまった。

「ま、ま、ま、菜子ちゃん? そそそそそのおおおと、とと、男はまさか!?!」

大の大人がここまで壊れたロボットみたいになる光景は新鮮だったが、なぜだろう。とんでもない誤解をしている気がする。

「ご紹介しますね、こちら……」

「いいや! 菜子ちゃん! みなまで言わなくていい。その男は菜子ちゃんのか、か、か、か、かれ…… ゆうう き ひ
こおおおおおおおおお! 大事だあああああ!!!」

大男はその巨体からは想像できないほどの速さで立ち去ったかと思うと四軒隣りの本屋さんから一人の男の子を連れてきた。

身長は175センチ以上あるように思える。髪は俺よりは短いが廉太郎よりは長め。雰囲気から俺より年上のようにも見える。Yシャツにチノパン、その上にエプロンを身につけた姿はこの穂織では珍しいものであった。

「魚海のおやじさん。今日は魚政のバイトじゃなくて本屋のバイトの日なんですが?」

「ばかやろう! おめえ、菜子ちゃんがこの男に取られたちまったかも

しれねえんだぞ！」

「この男って……」

本屋から連れてこられた男の子は俺の方に顔を向けると目を見開き、盛大にため息を吐いた。そして申し訳なきように体をこちらに向ける。

「……うちの師匠がご無礼をはたらき大変申し訳ありませんでした、有地様」

「ああ、いえ、お氣になさらず……て、あれ？」

なんで俺の名前知ってるんだ？

「おやじさん。この方は芳乃様の大切なお客様ですよ。茉莉子の恋人なんかじゃありません」

「へ？……そうなのか茉莉子ちゃん？」

「そうですよ。有地さんはお客様です。魚屋さんが想像している関係じゃないですよ」

「……」

大男（魚海さんというらしい）は少しの沈黙の後、バツと地面に額をつけて綺麗な土下座を披露した。

「すまなかつた！おれあてつきり茉莉子ちゃんに彼氏ができたのかと……無礼なことを言っちゃまった。本当にすまない!!!」

俺はすっかり面食らってしまった。大人に土下座されるなんて初めての経験である。

「有地様、俺からも謝ります。すいませんでした」

本屋からきた男の子も頭をさげる。

「あ、頭を上げてください！全然気にしてませんから！」

謝られているのにすごく居心地が悪い。俺も謝るから土下座はやめてほしい。いやホントマジで。

「ありがとうございます。ほらおやじさんも」

「ああ、ありがとうございます！せめてものお詫びだ。今度うまい鮎をご馳走する」

「よかったですね有地さん。魚政の仕入れる鮎は絶品ですよ」

なんだか常陸さんが楽しそうだ。この人悪戯好きだもんなー。

俺らが騒いでいると、本屋から今度は蝶ネクタイをした英国紳士風の男性がやってくる。

「まったく、いきなり幸彦を連れていったと思ったら、何をしてるんですか魚屋さん？」

「うう、悪かったよ古本屋」

「あなたはもっと人の話を聞く癖をつけなさい」

大男が英国紳士風の男性に叱られてる。はたから見れば滑稽な姿も、当事者となれば居た堪れなくなる。こんな時どんな表情をすればいいのさ。

「常陸さん、それにその君。魚さんが迷惑をかけたね」

古本屋さんは俺たちに頭を下げたあと、本屋からきた男の子の顔を向ける。

「幸彦、今日のバイトはここまでで大丈夫です。常陸さんの荷物持ちをしてあげなさい」

「え？俺がですか？」

「女性に荷物をもたせてはいけません。もちろんけが人にも。彼女たちを見てしまった以上放っておくわけにはいきません。だから君が荷物を持ってあげるんだ。今日の分の給料はちゃんと出すから安心してください」

英国紳士風の男性はやはり紳士だった。

ていうか、幸彦って、本屋からきた男の子がさつき話に出てきてた幸彦なのか!?

「って言われてるんだが、茉莉、それでいいかい？」

「うん。ワタシは大歓迎だよ」

「有地様もそれでいいでしょうか？」

「は、はい。大丈夫です……」

いろいろ聞きたいことがあるのだが、ここで断る理由はない。というか、話を終わらせて早くこの場から立ち去りたい。

俺の気持ちを察してかわからないが、幸彦と呼ばれた男の子は俺たちを連れて足早にその場を離れた。

魚屋さんの前では、さつきの魚海と呼ばれていた大男が古本屋さん

の男性に叱られていた。正直異様な光景だが、周りのお店の人たちが何の反応もしていないので、きつとよくあることなのだろう。

「面白かったね幸彦♪」

「笑い事じゃないぞ、ホント」

二人の反応を見て、よくあることなんだと確信した。きつと幸彦と呼ばれていた男の子は苦勞してきただろう。

「有地様、改めて師匠が迷惑をかけました」

「ああ、いや、大丈夫だって、それより……幸彦さん？」

「幸彦でいいですよ」

「……じゃあ、幸彦。なんで俺のこと知ってるんですか？」

常陸さんも幸彦もキョトンとしていた。

あれ？俺変なこと言ったかな？

「そういうえば、意識があるときに会うのは初めてでしたね。俺は駒川幸彦と言います。茉莉と同じく代々朝武家に仕えている医者の家系の者。本当は今日の夜に挨拶するつもりだったんですが……」

意識があるときに会うのは初めてってどういうことだ？

「昨日、山で意識を失っている有地さんを運んだのが幸彦ですよ」

「え!?! そうなの!?!」

てつきり大人が数人がかりで運んでくれたものだと思っていたが、幸彦一人であの山道を？しかも俺を担いで運んだのか!?!

「そうとは知らないで、お礼が遅くなりました！昨日はありがとうございました
ぎいます」

「気にしないでください。あれは芳乃様たちが悪いですから」

やっぱり大人な反応だな。同い年とは思えない。穂織に住んでるとみんな大人っぽくなるんだろうか?……いや、少なくとも廉太郎は俺と同種な気がする。

その後、幸彦は俺の体調の心配や、生活面で困っていることはないかいろいろ聞いてきた。なんだかお医者さんに問診されてる気分だ。常陸さんが八百屋で野菜を買っている間、幸彦と二人になってしまった。正直、さつき会ったばかりなので気まずい。

「あのさ、幸彦……さん」

「幸彦でいいと先ほど申し上げましたよね」

「ああ、うん。ゴメンなさい」

「やっぱり話しづらい。」

「幸彦、お願いがあるんだが」

「なんですか?」

「敬語も様付けもやめないか? 同い年なんだし、やっぱり男とは気楽に話したいというか、なんというか」

俺の言葉を聞いた幸彦は予想外の言葉に驚いたのか目を丸くした。

「……ははは、それもそうか。うん。これからは有地と呼ばせてもらおうよ」

笑われると、やっぱり恥ずかしいこと言った気がしてくる。

「う、笑わなくてもいいだろ」

「ごめんよ。やっぱり周りが女性だらけの生活は大変かい?」

「そりやもう、いろいろ気を使っちゃって」

「わかるよ、芳乃様も茉莉もムラサメさまも無防備な所があるからな」

「そうなんだよ。だからと言って居候の俺が注意するのもどうかと思ってる」

「その辺は任せてくれ。俺から気をつけるよう言っておく」

「本当か!? 助かる!」

この二日間、男との会話は安春さんぐらいだったのでなんだか落ち着く。決してそっち側の人間じゃないがな。

「随分と楽しそうにお話していますね。」

「男だから共感できることもあるってことだよ」

今の会話の間に常陸さんからさりげなく自然に荷物を受け取る幸彦。

お、大人だ! 大人の男だ! 俺も古本屋さんでバイトすれば紳士になれるだろうか?

「買い物はこれで終わりか?」

「うん。それじゃあ戻りましょうか。幸彦もこのまま来るでしょ?」

「もちろん。荷物持ちとして派遣されたわけだからな」

「このまま帰ってもいいのだけれど、俺には話を聞きたい人がいた。」

「あの、常陸さん。朝武さんがどこにいるか知らないかな？」

「芳乃様なら少し仮眠をとるといってましたので、今は神社にいるかと」

「そっか。常陸さんと幸彦は先に帰ってて」

俺は神社へ向かうことにした。

「それで、幸彦から見て有地さんはどうだったの？」

走って行く有地を見送りながら茉莉が聞いてきた。

「そうだな、いい意味で期待を裏切ってくれたかな」

「……………」

「なんだよ？鳩が豆鉄砲食らったような顔して」

「いえ、意外に好意的なんだなーて」

「別に、頭ごなしに彼を否定したいわけじゃないさ。知ってるだろ？俺が心配性だったこと」

ただただ俺がこの目で確認したかっただけ。叢雨丸に選ばれた人間がどのような人物なのか。

「友好的な関係を築けるならそれに越したことはない。そうだろう？」

「そりやそうだけど、幸彦って芳乃様のこととなると何するかわかんないんだもん」

「人のこと言えないだろ？」

「幸彦ほどじゃないですー」

そう言っ互いににらみ合う。

「……………つぷ、あははは」

なんだか、そうして睨み合っていることが可笑しく思えて二人とも笑いが溢れる。どれだけ成長しても、この関係は昔から変わらない。

「結局、お互い芳乃様が大好きなんだよね」

「違うない」

だからこそ、俺たちはこれまで頑張つてこれたのだろう。

「……今夜も、芳乃様をたのむ」

「うん。任せて」

昨日の晩に発生した祟り神。時間が経過することにその力はどんどん強くなってしまふ。有地が襲われたことで昨日は退治に行けなかった。

これ以上被害を出さないためにも、今夜、祟り神を祓わなければならぬ。

なんども経験していることだが、慣れることなんかない。

今夜も茉莉と芳乃様が無事戻ってくることを、俺はどこにいるのかもわからない神様に祈るのだった

第五話 「男の譲れないもの」



——大丈夫です。祟りは私が何とかします。

彼女は、大きな宿命を背負っている。そう思った。

常陸さんと幸彦と別れた後、俺は舞の練習をしていた朝武さんのところを訪れた。特に用事があつたわけではなかったのだけど、なんとなく話しておきたかった。

朝武さんの舞は綺麗で、とても練習とは思えないほど集中していた。

彼女は言っていた。

舞を奉納することは自分の大切なお役目。疎かにすることなどできない。

きつと彼女は、毎日努力を怠らず練習しているのだ。

今までの朝武さんとの会話の中で気づいたことがある。

それは彼女が本当に優しい心を持っているということ。

俺の看病で時間がなかつたはずなのに、俺の服を直して綺麗にしてくれた。

自分の方が呪詛で大変だというのに、俺の体を心配してくれた。

会話の端端でその優しさが顔を出す。

俺は、この優しくて素敵な女の子を守りたいと自然と思うようになった。

いつか彼女が、その小さな背中に背負っているものを俺にも背をわけてくれる日が来るだろうか。



ぼく、強くなるよ。強くなって二人を守るんだ。

12年前のあの日。俺は二人を守ると心に誓った。
弱い自分を変えたくて、がむしやらに自分を鍛えてきた。

呪詛の研究の合間を利用して、駒川家に眠っていた陰陽師の資料を
読み、その術を復活させた。

他にも、彼女たちの助けになれるようなものがあれば、勉強だろ
うが訓練だろうがなんだってしてきた。

それでも、肝心なところで俺は役に立たない。

祟り神という脅威に対して、俺が彼女たちにできること。

それは彼女たちを見送り、ただ無事を願うこと。

自分の無力さを感じるこの時間が、俺は大嫌いだ。



夕食を終え、茉莉たちは早速準備に取り掛かる。といっても特別何
かをするわけではない。

体を動かす前の準備体操。クナイなど、祟り神と戦う道具の確認。

普段と違うことを強いてあげるならば……。

「常陸さん、その格好はどうしたの？」

おそらく初めて目にしたのであろう茉莉の服装に有地が疑問の声を
あげる。

「？何かおかしなところがありますか？」

「おかしいというか、なんというか、目の遣り場に困るというか……」

「忍び装束。これが茉莉の正装なんだよ」

「忍ぶという言葉の意味を考えさせられるな……」

初見の人間にはやはり刺激が強いようだ。俺は何年もその姿を見
ているので慣れてしまった。

「でもこれ、先祖代々受け継がれてきた装束なんですよ？まあ、少し手
は加えていますよ」

「加えて説明すると、その服には少しだけだが神力が込められている。
祟り神と対峙する上で結構重宝するんだ」

わかりやすく説明するなら、装備品の防御力を上げるために霊的な

加工がしてあるということである。

「だから朝武さんも巫女服なんだ」

「そういうことです。それでは、行ってきます」

やはり芳乃様は有地に対しては少しドライな対応をしている。

彼女なりに、有地を危険に巻き込まないよう努力しているのだろう。不器用さは相変わらずのようだ。

「いつてらっしやい。気を付けて。茉子君、芳乃をよろしく願いますよ」

「任せてください。行って参ります」

「山まで送る」

「うん。ありがとう」

茉子たちが山に出かけ、安春様は家で、俺は山の前で彼女たちが帰ってくるのを待つ。いままで何度も続けてきたことだ。

安春様と怪我をしている有地を残して、俺たちは山に向かう。彼女たちはもはや日常の一コマのように特別気負う様子もない。俺も悔しさを胸に隠していつものように会話をつなぐ。

「ここまでで大丈夫だよ」

山道の入り口で茉子に言われる。

「二人とも、何度も言うけど」

「怪我だけはするな、でしょう?」

芳乃様は優しく微笑み、俺を安心させようとする。

「何回も言われてるから耳にタコができちゃいます」

「芳乃様、これは幸彦の口癖みたいなものですから諦めるしかないかと」

「茉子は怪我したら罰金な」

「ええ!それはひどいよ!」

「とにかく。耳にタコができようが、呆れられようが、俺は何度だって言いますよ。二人だって知ってるだろ?俺は」

『心配性だからな』『心配性だもんね』『心配性ですからね』

三人の声が重なる。

茉子も芳乃様もニヤニヤしながら俺を見ている。

少し恥ずかしい。俺は大げさに咳払いをしてごまかす。

「わかってるなら気をつけることー！いいかい？」

「ええ。気をつけて行ってきます」

「芳乃様のことは任せて」

二人は森の中に入っていく。

二人の姿が見えなくなるまで、俺は手を振っていた。

もう片方の手が強く強く握られていることを悟られないように。

朝武さんたちを見送ったあと、安春さんはその胸の内を俺に語ってくれた。

本当なら男である自分が、娘の代わりに崇り神を退治するべきではないのかと悩んだこと。力のない自分が崇り神と戦ったせいで怪我を負い、無駄な心配をかけてしまったこと。俺を婚約者にしたのは、崇り神と戦わせるためではなく、朝武さんの心を開かせるためであること。

安春さんが語る思いのすべてが、父親が娘を大切に想う気持ちを俺に教えてくれた。

「それでも、やっぱり婚約者はやりすぎだったかな……」

「やりすぎというか、現状、逆に朝武さんに避けられてますし」

俺としても彼女と仲良くなりたい気持ちはあるが、今の所一方通行な気がしてならない。

「あの、幸彦ではダメだったんですか？」

これは幸彦に会ってからずっと考えていたことだ。悔しいが、今の俺よりも幸彦の方が朝武さんを支えていける気がする。

「もちろん、幸彦君は昔からよくしてもらっているよ。でも、彼じゃおそらく駄目なんだ。それはきつと彼が一番理解してるんじゃないか

な」

「どういうことですか？」

「彼の中で芳乃は支える主君であり守るべき存在になっている。穂織に住んでいる人はみんな、芳乃のことを巫女姫様と言って特別大切にしてくれている。その中でも彼は、人一倍朝武の家を守ろうとしているんだ」

「それは、昔から朝武に仕えていたからですか？」

「いや、彼の場合は12年前の誘拐事件がきっかけだろう」

「誘拐事件!？」

12年前に誰かが誘拐されたのか？大事じゃないか！

驚いた俺の声を聞いて安春さんは、しまったと顔を歪めた。

「ここから先は僕が話していいことじゃないかな。ごめんよ、将臣君」
「いえ、事情があるのはなんとなくわかりましたから」

気にならないわけではないが、無理やり聞き出すのはいけないことだ。誰にだって人に知られたくないことがあるだろうし。

「芳乃と対等の関係になれるのは将臣君しかない。僕はそう思っているよ。幸彦君風に言うなら、将臣君には新しい風になってもらいたいんだ。我儘を押し付けて申し訳が、どうか娘をよろしくお願いします」

自室に戻ってきてても、心のモヤモヤは消えなかった。

安春さんは戦わなくていい、朝武さんと仲良くしてくれればそれだけでいいと言っていたが、心のどこかでは俺に期待しているのではないだろうか。

「ムラサメちゃんはさ、人柱になる時怖くなかったの？」

「怖くなかったと言えば嘘になる。だが、吾輩はそれしか選択がなかったからな」

「選択がないってどういうこと？」

「吾輩は流行り病にかかっておった。おそらく長くは生きられなかったであろう。だから吾輩は望んで自ら人柱になる道を選んだのだ。吾輩の命で皆が救われる道を……」

現代の日本では考えられないことだった。他の人の命をこの小さな背中に背負っていたなんて。本当に、この街の俺の周りにいる女の子たちはどうしてこうも強いのだろう。

「ねえムラサメちゃん。もう何年も竹刀なんか振ってないし、真剣なんか扱ったことのない俺だけど、二人のためにできることはないかな？」

「祟り神が危険なのはご主人も理解しておろう。祟り神の前で恐怖に尻込みするのなら、ただの足手まといで終わるだろうな」

ムラサメちゃんの顔は険しい。それもそうだ。相手は簡単に退治できるものじゃない。邪魔になるかもしれないし、朝武さんも山には行くなと言っていた。

「……………」

気がつけば、朝武さんが縫ってくれた服の傷口に触れていた。俺は知ってしまったのだ。朝武さんの優しさを。

いつそ嫌な子であれば、俺も嫌いになれたのにな。

「あーもう！考えたってダメだ！」

俺は勢い良く立ち上がる。

「行くのか」

「行く。怖くても、痛くても、女の子が頑張ってるのにじつとなんかしてられない！」

これ以上みっともない姿は見せたくなかった。古臭い考えかもしれないけど、これが俺の本心だ！

「つまりは見栄だな」

「ああ、見栄だ。くだらない動機だつてことはわかってる。だけど、ここで見栄を張らなきゃ、男としても人としてもダメな気がするから」

それに、女の子が頑張っているのに部屋でただただ待っていられるほど、俺の肝は太くない。きつと負い目やらストレスやらで胃に穴が空くだろう。

「男の動機としては十分だぞ。それでこそ吾輩のご主人だ」

ムラサメちゃんが満足そうに笑った。



覚悟を決めた俺がムラサメちゃんとともに山に向かうと、山道の入り口で佇んでいる幸彦の姿を発見した。

山を見つめるその顔はとても苦しそうで、悲しそうで、悔しそうで、手のひらは強く握られていた。

「ご主人、最終関門だ。一筋縄では幸彦は退いてくれないぞ」

ムラサメちゃんはそう警告する。俺もなんとなくそう思っていたが、今幸彦の姿を見て確信した。

幸彦はこちらに気づくと、山を見つめたまま抑揚のない声で語りかけてきた。

「何しに来たんだい？有地」

昼間とは全く違い、その声には敵意さえ感じてしまう。

「朝武さんたちのところに行く。そこを通してくれないか」

「芳乃様に言われなかったかい？山には入るなって」

「言われた。でも女の子が頑張っているのに、叢雨丸に選ばれた男の俺が部屋でじつとなんかしてられない」

手汗がひどい。話しているのは同年代の男の子なのに俺は緊張しっぱなしだった。

「男の見栄ってやつかな。その心意気は嫌いじゃないけど、崇り神はそんなに甘くない」

「ここでようやく、幸彦はこちらを向く。」

「有地、君の覚悟を見せてくれ」

瞬間、崇り神を前にした時とは比べ物にならないほど大きな殺気をぶつけられる。あまりにも突然発生したため、それが幸彦から発せられているものだと理解するのに時間がかかった。

初めて人に向けられる殺気。これほど恐ろしいものなのか!?

肌が粟立つ。

口が渴く。

体が震える。

足が動かない。

声も出ない。

無意識に、だが確実に、ここから逃げ出したいと後ろへと足が下が
りそうになる。

だけど俺は、その足を前に出した。

恐怖から、祟り神にやられた右肩を触ろうとしたことで、朝武さん
が直してくれた縫い目に手が触れた。そのおかげで自分の気持ちを
思い出すことができたのだ。

「ツー」

幸彦は俺が足を前に出したことに対して驚くと、ふうと息を吐く。

同時に幸彦から出ていた殺気が徐々に消えていく。

「よく耐えたぞ。さすがは吾輩のご主人だ」

ムラサメちゃんの言葉で自分の様子を冷静に感じ取れるよう
なつて気づく。

肩で息をして汗もひどい。よく引かなかったものだと褒めてやり
たいぐらいだ。

朝武さんに感謝だな。

「本当なら、医者の子息としても、芳乃様に仕える者としても、怪我人
を通すわけにはいかないんだけどな」

幸彦は自嘲した口調で語り出すと、山道への道を開ける。

「いいのか？」

「言っておくが、芳乃様たちの邪魔はするんじゃないぞ。それで芳乃
様や菜子が怪我でもしてみろ。俺は君を許さない」

幸彦の目は本気だった。だが、もとよりそんなつもりはない。

俺は一度だけ頷き山へと駆ける。

「怪我だけは、するなよ」

すれ違いざまに小さく声をかけられる。

幸彦がどんな気持ちでその言葉を言ったのかはわからない。だが
その言葉は俺の気持ちを一層引き締めてくれた。

有地は俺の殺気を受けて尚、その足を前に踏み出した。

正直、意外だった。

なんの取り柄もないような少年のはずなのに、山へと駆けるその姿が、俺には眩しかった。

「君の不器用さはやはり芳乃に似ているね」

安春様が母屋から顔を出す。どうやら有地との会話も聞いていたようだ。

「自覚してる分、芳乃様よりタチが悪いと思いますよ」

「ははは、幸彦君本人が言うならそうなんだろうね。しかし、将臣君はやはり行ってしまったか」

安春様は最初から有地を祟り神と戦わせようとは思っていなかった。危ないと思ったから居候させ、娘のことを本当に想い、悩んだ結果有地を婚約者にした。

「まさか君があそこまでするとは思わなかったよ。しかも芳乃の言いつけを破って山へ行かせるとはね」

「使える手札は使わないともったいいいですから。たとえ今回の件で有地に憎まれようが怖がられようが、芳乃様たちが無事ならそれで十分です」

「将臣君はそんな子じゃないと思うけどなあ」

安春様は少しだけ困ったように笑う。そうして芳乃様や茉莉、有地が入っていった山に体を向ける。

「無事に帰ってくるといいね」

たった一言だが、その言葉には安春様の気持ちが全部込められていた。

安春様が抱える悔しきや芳乃様を心配する気持ちは、きつとこの街にいる誰よりも大きいものだと思う。それでも安春様は自分を見失わず優しい心を持ち続けている。

俺は安春様や芳乃様に仕えることができて幸せだと、心から思う。

「ええ、そうですね」

俺も山へと体を向ける。

「きつと無事に帰ってきますよ」

そう自分に言い聞かせながら。

「どういうことか説明してもらおうか？」

有地将臣として生を受けて17年。俺は今、人生で一番の命の危機にさらされていた。

「なぜ、芳乃様の服があのようなことになっていたのかな？」

え？崇り神？そんなの、いま目の前にいる鬼に比べれば可愛いものだ。

鬼の名を駒川幸彦という。笑顔なのに圧が半端ない。

「その、なんと言いましようか。不慮の事故がありました……」

「すごいんですよ！有地さん、たった一太刀で崇り神を退治するだけでなく、芳乃様の肌を傷つけることなく布だけを一刀両断したんですから！まさに神業です！」

「ちよっ!!常陸さん！その言い方は色々と誤解を招く……」

「ほう……」

「ほら！幸彦の顔みて！ゴミを見るような目になっちゃってるから！」

「もう！二人とも、からかうのはそこまでにしてください！」

朝武さんか助け舟が出される。

「あはっ♪冗談ですよ、芳乃様」

心臓に悪い冗談はやめてほしい。

「俺はあながち冗談でもないですけどね」

なにそれ怖い。爽やかな笑顔で言わないでほしい。

なぜこんなことになったかという、数時間前に遡る。

山に入った俺は、なんとか朝武さんたちと合流することができた。すんなりとは言い難いが祟り神を祓うことにも成功した。

最後に俺ががむしやらに叢雨丸を振るい、祟り神を真つ二つにしたのだ。したのだが、流石は叢雨丸。その神力の力は強く、近くにいた朝武さんの霊的加護のある服も真つ二つに。不可抗力とはいえ、俺は朝武さんの白いきれいな肌と小柄なのに意外に谷間が深かった胸を見てしまったのだ。

山から出てきたところで幸彦に捕まり母屋へ連行。

そして現在、普段着に着替えた朝武さんと常陸さんも加わり反省会兼尋問会が開催されているのだ。

「下着の件は私にも落ち度がありましたから。私が聞きたいのは有地さんが何故山に入ったのかということですよ」

朝武さんは不機嫌そうに尋ねてきた。

「私は『来ないで』と言ったはずですよ。それなのにどうしてあんな無茶な真似をしたんですか?」

「……確かに悩んだよ。俺自身祟り神にはひどい目にあわされたし、怖い思いもした。部屋で待ってた方が安全だとも思った」

「だったら——」

「でも、できなかつた」

朝武さんは目を丸くして驚いていた。

「転校も居候も、最初はいきなりすぎて混乱もした。でも事情が事情だし、それは仕方がない。不満もあるけど、全部、俺のためだ。我慢するの仕方がないと思った」

「そうやって言われた通りに受け入れ続けるのが最善手だったかもしれない。」

「それでもさ、やっぱり恥知らずにはなりたくないんだ」

「恥知らず、ですか?」

安春さんは俺に言った。朝武さんと対等の友人になってほしいと。

俺だつてもつと朝武さんと仲良くしたい。

そのために、俺から少しでも歩み寄っていく。そう決めたんだ。

「女の子に危険なことを押し付けて、安全なところから祟り神が収まるのを待っているだけなんて、俺は嫌だ。これから一緒に生活していくのに、顔を会わせるたびに負い目を感じるなんて、そんなのはゴミなんだ」

「……………」

「わがままかもしれない。それでも手伝わせてほしいんだ」

朝武さんが背負っているものを、少しでも俺に……………」

「私の気持ちは変わりません。危険ですから有地さんは家で大人しくしているべきです」

「そうはいかない。女の子を危険にしたまま大人しくなんかしてられない」

朝武さんとにらみ合う。これは意地と意地のぶつかり合いだ。

「……………ここまで頑固な人だったとは思いませんでした」

「いいや、朝武さんの方が頑固だよ」

「むっ、どう考えても有地さんの方が頑固です！頭カチカチです」

「頭カチカチは朝武さんの方だよ。普通あそこで家にいてくださいなんて言わないでしょ」

話が平行線で先に進まない。

「むうううううううう！」

「ぐぬぬぬぬぬぬぬ！」

「やれやれ、どっちも子供だのう」

「実は仲いいんじゃないか？」

「そうかもね。とはいえ……………」

今度は常陸さんから黒いオーラが出てくる。

「祟り神を前にしてまでじゃれ合うのは止めていただきたいのですが」

「す……………すいませんでした」

不覚にも声が揃ってしまった。

「わかっていただけならいいんです。次やったら幸彦とワタシでお説教です」

絶対にしない。今だけは朝武さんと心が通じ合った。そんな気が

する。

「ふああ。久々に力を使ったからちよつと疲れた」

大きなあくびをしたムラサメちゃん。

「ムラサメちゃんでも疲れるんだ」

「体力的ではなく、この場合精神的な疲れというのかのう。神力はそれなりに氣力を使うのだ」

「何かしてあげることはあるかな？」

「この程度なら少し休めば問題ない。朝には元に戻っているだろう。悪いが先に休ませてもらうぞ」

ムラサメちゃんはそう言うと言と姿を消した。

「では、用事がなければ私たちも戻ろうと思います」

「ありがとう。もう大丈夫だから、おやすみなさい」

「おやすみ」

「芳乃様も有地もちゃんと休むように。特に有地は慣れないことをしたせいで自分が思っている以上に疲れが溜まっているはずだから」

流石は医者の子息といったところか。ちゃんと体を考えてくれている。

……山に入る前のあの殺気。あれだけの殺気を出せるとは思えなほほど、今の幸彦は穏やかだ。まあ、鬼にはなつてはいたが。

朝武にかけられた呪いについても12年前の誘拐事件についても、俺はまだまだ知らないことが多いな。もつと頑張つて、ちゃんと信頼関係を築いていこうと思った。

この後、朝武さんと好みの話で喧嘩する（のちの卵焼き事件）のはまた別の話……。

茉莉を家まで送るのは俺の日課のひとつである。その帰り道、俺はずっと先ほど有地が言っていた言葉を思い出していた。

『それでもさ、やっぱり恥知らずにはなりたくないんだ』

『女の子に危険なことを押し付けて、安全なところから祟り神が収まるのを待っているだけなんて、俺は嫌だ。これから一緒に生活していくのに、顔を会わせるたびに負い目を感じるなんて、そんなのはゴミだ』

『わがままかもしれない。それでも手伝わせてほしいんだ』

正直耳が痛い。有地にその気はないかもしれないが、彼の言っていた恥知らずの行動が全て俺に当てはまっているように感じた。

「恥知らずになりたくない……か」

「なーんか暗い顔してる」

隣を歩いていた茉莉が顔を覗き込んでくる。

「また一人で考え込んでるんでしょ」

「……何言ってるんだよ、そんなことないさ」

なんとなくだが、茉莉には知られたくないと思った。これは有地に対する一種の嫉妬。かつこ悪い姿は見られたくない。

「当ててあげようか？幸彦は今、有地さんが言った恥知らずになりたくないっていう発言に対して負い目を感じている。違いますか？」

茉莉はまっすぐ俺の目を見ている。あまりにもまっすぐで綺麗な目。

俺は思わず視線を逸らした。

だが茉莉はそう簡単に逃がしてくれない。彼女は両手を伸ばし俺の頬に触れる。瞬間、鈍い痛みが俺を襲う。頬っぺたをつままれたのだ。

「あの……まほひゃん？いひゃいんやが？」

「痛くしてるの」

茉莉は手を離すと、改めて体ごとこちらを向ける。自然と向かい合うかたちになってしまった。

「ねえ、ユキ」

「っ……その呼び方はやめろって」

女の子みたいなのその呼び名は、自分の弱さに気づいていなかったあの頃に二人から呼ばれていた名前。

「やめない。どんなに大きくなってユキはユキなんだよ?」

茉莉は微笑んだ。その微笑みはとても綺麗だった。

「ユキは恥知らずなんかじゃない。だってユキはいつもワタシたちを支えてくれてる、助けてくれてる」

「だけど俺は、崇り神から二人を守ることができない。呪詛の研究だって、なんの進歩もしていない」

「それでもいつも努力してる。立ち止まらずに、跪いて跪いて、前に進んでる。ユキが自分を否定しても、ワタシがユキを肯定する」

相も変わらず彼女の目はまっすぐだ。

「あの時ユキは、ワタシを助けてくれた。いつだってユキがいるから、ワタシも頑張れるの」

そんなの、俺も同じだ。

「そんな大したやつじゃないよ、俺は」
「ユキ……」

「でも……ありがとう。うじうじ悩んでたってしょうがないよな」
励ましてくれる同僚に対し、笑顔を向ける。

「茉莉に愛想つかれないようにまだまだ頑張らないと」

茉莉は満足そうに頷き後ろを向いた。気のせいだろうか。耳が赤くなっているか?」

「あは、なんだか柄でもないこと言っちゃったな。ねえ幸彦! 帰りにアイス奢ってよ!」

「ハーゲンビッツ今度奢るんだから我慢しろって」

「いいじゃん! アイスはいくらあったって困らないんだから♪」

「俺の財布が困るんだが?」

「ワタシの財布は困らないもん」

「その理屈はおかしいぞ?」

「慰めてあげたでしょ? ユ・キ!」

「あ! その呼び方はやめろって!」

夜。暗闇の中で、俺たちは仲良くじゃれ合う。

こんな素敵な同僚は俺には勿体ない。俺だって、茉莉が隣にいるだけで頑張れる。

さつきまでの暗い気持ちは、いつの間にか小さくなってた。

第六話 「ライバル？」

「ガハっ……た、助けてくれっ！頼む！俺が悪かった！」

耳障りな声で男が喚く。

その悲痛な叫びにも似た声を聞いても、俺の心がなびくことはなかった。

「助けて欲しいなら教えろ。何故芳乃様のことを嗅ぎ回っていたのか」

「……頼まれたんだ」

「頼まれた？」

「ああ。い、一ヶ月ぐらい前に突然メールが来たんだ……。穂織にいる巫女姫の情報を調べて欲しいって。報酬が高かったもんだから引き受けた、それだけなんだ！」

「依頼主はだれだ？だれがそのメールを送った？」

「知らねえ！指示は全部メールで送られてきた。だから顔は知らねえんだ！」

「それを俺が信じるとでも？」

男の髪を掴んで持ち上げ、目線の高さを合わせる。

男は苦痛にうめき声を出し、顔を歪めながらも俺と目を合わせる。

「本当だ！本当に依頼人についてちや何も知らねえんだ！」

「……………」

俺が手を離すと、男は地面に叩きつけられるように伏せた。

「二度と穂織に……いや、芳乃様に近づくな。もしこれ以上嗅ぎ回るのなら……お前を殺す」

悲鳴をあげながら男は一目散に逃げていった。

「猫丸。念のため、あいつが穂織を出るまで追いかけてくれ」

ポケットから出てきた猫丸はにやあと鳴き声をあげると、男が走り去っていった方に消えていった。

誰かが芳乃様の情報を嗅ぎ回っている……。

「一体だれが、なんのために？」

湧いた不安は消えることなく、疑念の声は夜の暗闇に吸い込まれていった。



有地がこの街を訪れ崇り神退治に参加したあの夜から、一週間以上が経過した。昨日も崇り神との戦いがあったが全員無事に帰ってきたらしい。というのも、俺は別の用事で昨日は顔を出せなかった。そして今日から学校生活がまた始まる。

有地からしてみれば転校初日ということだ。小さな学園だからクラスが離れる心配はない。

心配事があるとすれば、昨日処理した男が言っていたこと。

押収したパソコンを調べてみたが、メールの差出人の情報は皆無。念には念をいれて、始業式が始まる前に学校を調べようと思い、早めに出る準備に取り掛かる。

「おや、随分早いじゃないか。眠れなかったのかな？」

リビングには何かの書類を書いている姉さんがいた。

時刻は午前4時半。日はまだ出ていないため辺りは暗い。

「学校で調べ物があるんだ。姉さんも早いね。どうしたんだ？」

「いや、父さんから電話があつてね。必要な薬の手配をお願いされたんだよ。まったく、時差を考えずに連絡してくるなんて、人使いが荒いにもほどがある」

「あはは、父さんらしいな」

もつとも、姉さんを信頼しての行動だろうと思うが。

一体、今はどこでなにをしているのやら。

「コーヒー入れるよ」

「ありがとう」

ついでに朝食の準備も済ませてしまおう。エプロンを掛けて台所へと向かう。

姉さんは書類がひと段落ついたのか大きく伸びをしてこちらを向く。

「あれから有地君の様子はどうだい？」

「見た感じ問題はなさそうかな。芳乃様についてもそれは同じ。念のため姉さんにも見てもらいたかったけど、この一週間は、二人とも今の生活に慣れるのに必死だったからな」

茉莉子から聞いた話では毎日のように食べ物の好みで喧嘩しているそうさ。

あの二人はいつたいいくつなのだろうか……。

「そうか、なら今日直接話を聞いてみることにしよう」

「今日は学院に来るの？」

「ちよつと用事があつてね」

姉さんは開業医として診療所を経営する傍ら、学院の嘱託医もしている。

「忙しいなら手伝うけど？」

「気にしなくていい。幸彦はやることがあるんだろ？なら、そちらに力を入れるべきだよ」

パチンとウインクしながら俺からコーヒーを受け取った姉さん。

少しわざとらしいその仕草が様になるのは姉さんぐらいじゃないかな。

朝のこの時間は、変に気を使うことがない。俺にとつても心休まる数少ない時間だ。

「わかった。ありがとう、姉さん」

姉さんは何も言わず、いつものように満足そうに頷いた。



鶺茅学院うがやがくいんは穂織で唯一の学校であり、この街で生まれた子供は皆、ここで青春時代を過ごすことになる。全学年合わせても100人も満たない小さな学校だ。

もともと剣術道場として使っていた武道館を改装してできた校舎

は、暗い時間だと昼間とは違い少し不気味だ。

現在の時刻は午前5時。

部活動のないこの学院では、早く出勤してくる先生でも学院に来る時刻は午前6時半頃だ。

つまり今、学園には俺しかいない。誰もいないうちに学院に異常がないか確認しなければならぬ。

俺は例のごとく式神を呼び出す。

「手分けして怪しいものがないか調べるんだ。よろしく頼むよ。」

獣型の式神は人型と違って比較的精神の疲れがないので、諜報活動などに役立つ。加えて人が確認しづらい場所などの侵入が楽なもの利点の一つだ。

その代わり強度が低く戦闘には向いていない。一応戦闘に特化した獣型もあるが、扱いが難しいため現在改良中だ。

くまなく調べて回ったが怪しいものは見つからなかった。

とりあえずは一安心だな。念のため、今度玄十郎さんに頼んで学院の警備の強化を学長に打診してもらおう。

現在午前6時。意外に早く終わってしまった。

手持ち無沙汰になった俺は先生が来るまで掃除をすることにした。

「なかなか似合っておるぞ、ご主人」

今日から俺の新しい学園生活が幕を開ける。

いつも着ていた学ランとは違う制服に袖を通した俺を見て、ムラサメちゃんが言った。

「ありがとう、ムラサメちゃん」

褒められれば嬉しい。それが可愛らしい女の子であればなおさらだ。

「学校まではまだかかるのかな？」

「いえ、この坂道を登ればすぐですよ」

いま俺は朝武さんと常陸さんと登校している。

両手に花だ。しかも二人ともものすごく可愛いなんて。

勝ち組といっても過言ではないだろう！

……前の学校の奴らが知ったら血の涙を流しながら殴りに来るな。教えるつもりはさらさらないが。

俺が今日から通うのは鶉茅学院という学校だ。穂織に住んでいる子はみんな通うことになるらしい。安春さんも今朝俺の制服姿を見て懐かしいと言っていた。

「そういうえば、幸彦はどうしたんだ？昨日も来なかったけど」

「用事があると連絡がありました。今朝も早めに登校して調べたいものがあるとか」

「忙しくしてないと死んじゃう病ですからね、幸彦は」

二人の口調からしてよくあることなのだろう。

初めて崇り神退治に参加した日、あんなに苦しそうな顔して二人の帰りを待っていたから、いつも当然いるものだと思っていた。

まだ駒川幸彦という人物がどういう人間なのかわからない。

幸彦のことだけじゃない。朝武さんが隠している呪詛の詳しい内容も、今朝安春さんにはぐらかされてしまった。

いろんなことがありすぎて長いこと穂織にいるような気がするけど、まだ一週間ちよつとしか経ってないんだよな。

頑張つて信頼を勝ち得なければ。

そのためにはやっぱり、じいちゃんに鍛え直してもらう必要がある。

崇り神と戦う上でも、もつと強くなつて、朝武さんや常陸さんに守られない、いや、二人と肩を並べられるぐらいにならなくては。

「で、ぶっちゃけどこまでやったんだ？」

——なんて俺にしては珍しく真面目に考えていたのに、学院の前で

会った廉太郎によって下世話な話に差し替えられた。ちなみに朝武さんたちは小春と世間話をしている。

「お前が想像してるようなことは何も無い。ただの同居人だよ」

「だいたい、血縁者から下ネタ紛いのこと言われると対応に困る。」

「勿体無い！婚約者になれたってことはあの幸彦からも公認ってことだろ？」

「まあ、そうなのかな？」

幸彦自身から婚約者についての話はされたことがないからな。

「いままで何人の男が幸彦によって屠られてきたか……。巫女姫様や常陸さんに告白するには幸彦を倒さなければならぬ。学校の共通認識だぜ？」

「は、はははは」

倒れ伏せる男たちの上で爽やかな笑顔を浮かべる幸彦の姿が想像出来た。

「いまのところは朝武さん達とも幸彦とも良好な関係が築けてると……思う」

「そうか。なんか悩み事があればいつでもウチに来いよ？とっておき貸してやるから」

だから、血縁者のとっておきなんて借りたくないつつうの。

「廉兄ー。お兄ちゃん。早くしないと遅れるよー」

小春はしつかりしてるな。すっかり大きくなっちゃって。

少し寂しいなんてお兄ちゃん思っていないからな。

いつものごとく馬鹿なことを考えていると、校舎の中から女性が出てきて声をかけてきた。

「あなたが有地将臣君ですね」

「あ、はいそうです」

「初めまして！あなたの担任になる中条 ちゆうじょう ひなみ 比奈実です」

中条先生は穂織独自の服装ではなく、俺の見慣れた教師らしい服装だった。

まあ教師だし、それが当たり前なのかな？

「よろしくお願ひします」

「よかった。遅いから迷子にでもなってるのかと心配してたんだけど、朝武さん達と話してたのね」

中条先生はホツとした笑みを浮かべた。
「すみません、中条先生。いま有地さん連れて行くこうと思っただけなんです」

「気にしないでいいのよ、朝武さん。転校初日ですもの。友達作りは大切なことだから。それじゃあ有地君、職員室まで一緒に行きましょう」

どうやら先生もいい人そう。朝武さんのことを巫女姫様と呼ぶないことに驚いたが、先生だもんな。公私を分けてるんだろう。



始業式も転校の挨拶も滞りなく終えた。席は廉太郎の後ろ。知っている人がいるとホツとするのは、俺がそこそこ緊張していた証拠かな。

「そうだ、有地。少しだけ時間をくれないか？合わせたい人がいるんだ」

帰る準備をしていたところで幸彦に呼び止められる。

幸彦はちよつとだけ待つてくれと言つてどこかへと消えていった。

「俺なんかしましたかね……」

「そんなに怯えなくても平気だと思いますよ？」

常陸さんはそういうが、俺にとって幸彦はちよつとしたトラウマがある。

べ、別に怖くなんかないんだけどね！

「何かやましいことをした覚えがあるんですか？」

「してないし、覚えもないからね!？」

ジト目で見てくる朝武さん。

危うく朝武さんに要らぬ誤解を与えてしまうところだった。

「情けないぞ、ご主人。幸彦も昔は可愛かったのだぞ。吾輩のことを

お姉ちゃんと言つて、それはそれは可愛らしい子どもだったのだ」「え？なにそれ？もつと詳しく」

「ムラサメ様、それ以上は勘弁してください……」
気がつけば後ろに幸彦がいた。心臓が飛び出るかと思った。

「別に恥ずかしがることではなからう？」

ムラサメちゃんが面白そうににやにや笑っている。

「俺の中では黒歴史なんです……」

幸彦は顔をおさえてうな垂れている。すごいレアな光景だ。

こんな顔もするんだな。意外な発見だ。

「なんだい幸彦。ムラサメ様もそこにいるのかな」

幸彦の隣には白衣を着た女性が立っていた。

黒髪で整っている顔立ちがどこことなく幸彦に似ているような……。

「みづはさん、こんにちは！」

「紹介したかった人つて、みづはさんだったんですか」

「常陸さん、芳乃様、こんにちは」

「あの一幸彦、この人は？」

「紹介するよ、駒川みづは。俺の姉さんだ」

幸彦のお姉さん!?そりや似てるわけだ。

「崇り神に襲われた有地さんを診てくださったのもみづはさんなんですよ」

朝武さんが耳打ちで教えてくれる。

まさか駒川家の二人に助けられてたのか俺は!?

「そうとは知らず、申し訳ありません!その節は有難うございました!」

俺は急いで頭をさげる。

「うん。元気そうでよかったよ」

「みづはさんは挨拶のためにわざわざこちらに？」

「幸彦に言われて芳乃様の確認のためにもね。叢雨丸が抜かれて一週間以上経ちましたが、体調に変化はありませんか？」

みづはさんが問診を始めた。朝武さんもそれに応えていく。

「なあ、みづはさんつて」

「医者だよ。まえにも話したけど、駒川家は代々この街の開業医を営んでいるんだ。さらには芳乃様の主治医であり、この学校の嘱託医でもある」

「な、なんか大変そうだな」

「実際激務だよ。休めつて口を酸っぱくして言わないと休まない仕事人間でもあるからね。世話が焼けるよ」

「どの口が言うんでしょうね」

「ハハハ、ナニライツテルンデスカネ」

常陸さんがジト目で幸彦を見る。幸彦は顔をそらしている。

「ムラサメちゃん。幸彦って常陸さんに弱いのか?」

「見ての通りだ。あの二人の関係は昔から変わっておらん」

いつも丁寧な口調で話す常陸さんも、幸彦のまえでは砕けた口調に変わるし、幸彦も常陸さんのまえでは微妙に表情が柔らかくなってる気がする。

「もしかして付き合っているとか?」

「残念だがそう言った事実はない。いつかそうなれば良いのだがな……」

「? どういうこと?」

「ご主人にもそのうちわかる。今は微笑ましく見ておれば良い」

ムラサメちゃんが言っている意味はよくわからないが、幼馴染ともなると複雑な感情を抱くものなのかな?

「有地君」

「は、はい!」

いつの間にか朝武さんの問診を終えたみづはさんに呼ばれる。

「今度は君の怪我の状態を見せてもらうよ。一緒に保健室まで来てくれるかな」

「わかりました。朝武さんたちは先に帰ってて。少し寄るところがあるんだ」

じいちゃんに稽古をつけてくれるように頼みに行かなきゃなんだ。

思い立ったが吉日って言うしな。

「わかっていると思いますが、暗くなったら山には近づかないよう気

をつけてくださいいね」

「うん。心配してくれてありがとう」

「べ、別に心配なんかしてません！」

朝武さんは顔を赤くして教室を出て行った。

朝武さん。世間一般ではそれをツンデレと言うんですよ。

「照れてる芳乃様も可愛いですよね」

「ああ、そうだな」

なんだか二人の目が完璧にお父さんとお母さんが娘を慈しむ目なんだが……。

「ご主人には吾輩がついている。二人は芳乃についてやってくれ」

「そうですね。それではムラサメ様、有地さんをお願いしますね。有

地さん、お先失礼します」

「姉さんの言うことをちゃんと聞くんだぞ」

「わかっている。って子供じゃないんだから！」

二人は笑いながら朝武さんの後を追った。

「はあ」

有地と別れ外に出ると、芳乃様がため息をついていた。

「芳乃様。どうなされたんですか？」

茉莉子が優しく問いかける。

「こういう時は茉莉子の方が俺よりも適役だ。」

「なんでももないの。ただ自分が不甲斐なくって」

「素直じゃないですからねえ、芳乃様は」

「わかっている。でもどうやって接していいかわからなくて……」

今まで穂織の人間としか接してきていなかった芳乃様。そんな芳乃様が初めて外から来た人と深く関わることになったのだ。戸惑う

のも当然である。

穂織にいる人間は芳乃様を大切に思っている。だがその思いから、誰もが芳乃様を特別視してきた。一番親しい俺や茉莉が、一番芳乃様を特別視しているのかもしれない。

しかし有地は違う。

有地は芳乃様と対等になろうとしている。

巫女姫ではなく芳乃様の隣に立とうとしている。

芳乃様自身、変わり始めていると俺は思う。さっきみたいな顔をする芳乃様は久しぶりにみた。芳乃様自身気づいていないのかもしれない。

秋穂様の体調が悪くなられた頃から、芳乃様はずっと気を張り続けていた。

朝武の家に生まれた者の宿命、数百年にわたり続く呪詛、周りの者からの期待、その全てを芳乃様は背負って生きてきたんだ。

「思い悩んでいる芳乃様も可愛いです」

「ちよつと茉莉？ふざけないでください。私は真剣に悩んでるんです」

「そんなに難しく考えなくっていいんですよ。仲良くしたいなら仲良くすればいいんです。気に入らなければ気に入らないと言えればいいんです。心配なら心配だって言えばいいんです。ワタシたちがそうしてきたように」

茉莉の言う通りだ。

誰だって最初は他人同士。そこから人間関係を構築して行って、友達になったり恋人になったりしていく。俺たちだっていろんなことを経験して、同じ時間を過ごしてきたからこそ、今の関係があるんだ。「いろいろ考えちゃうのは疲れてるからですよ！甘い物でも食べてリフレッシュしましょう。というわけで幸彦、帰りに約束のハーゲンビッツ買って帰えろ♪」

「あいな……」

「ハーゲンビッツ!!いいんですか!？」

「……喜んで」

そんなキラキラした目で見られたら断れない。約束は約束だしな。

茉莉はいつも冗談や本音を混ぜて芳乃様の硬くなった意識を柔らかくしてくれる。俺よりもはるかに長い時間を芳乃様と共にしているからこそできることだ。

コンビニでどれを買うか迷っている芳乃様を見つめながら茉莉が隣に寄ってくる。

「ありがとな」

「いえいえ、悩んでいる芳乃様も可愛らしいですが、笑っている芳乃様の方が数倍可愛いですから」

「その意見には同意するよ」

「それで、昨日はどうしたの？今朝も朝早くから学校に居たって聞いたけど」

俺たちは一瞬で仕事モードに切り替わる。

「そのことなんだが、誰かが芳乃様のことを嗅ぎ回ってる」

「そんな……主犯の検討はついてるの？」

「わからない。回収したパソコンに依頼主のアドレスらしき物はあったんだが、調べても尻尾は掴めなかった。情報戦では向こうが上手かな」

「そっか。絶対、危ないことだけはしないでね」

「わかってるよ。茉莉も護衛はくれぐれも用心してくれ」

「決めた！これとこれにする！」

俺たちの会話は芳乃様の声で切り上げられる。

「その笑顔を有地に見せることができるようになればいいですね」

「むう。有地さんにはこんなみつももない顔見せられません……」

「何度か見せていると思うのですが？」

「うそ?!間抜けヅラだなと思われてないかしら」

まだまだ先は長いかもしれないが、結構有地と芳乃様はお似合いかもしれないな。

二人が明るい未来を歩けるようにしようと改めて決意を固めるのだった。

「弟が迷惑かけてないかな？」

朝武さんたちと別れあと、保健室へ移動した俺とムラサメちゃんとみづはさん。傷の具合を確かめながら、みづはさんは問いかけてきた。

「まさか。むしろ、俺の方が迷惑かけてるんじゃないかと心配するぐらいです」

「あの時は流石の吾輩も肝が冷えたぞ」

ムラサメちゃんが震えている。確かに怖かったな……鬼彦は。

しかし、殺気をあてられたり、こっぴどく叱られたりしたが、あれは全部俺に原因があるわけで、迷惑なんかかけられていない。

「そうか。気難しい子だけど、仲良くしてね」

「はい」

みづはさんは満足そうに頷いた。

そこで会話が途切れ、沈黙が保健室を包む。

綺麗な女性と保健室の組み合わせはいろいろと心臓に悪い。

いい機会なので少しだけ踏み込んだ質問を試してみる。

「あの、朝武さんたちっていつから一緒なんですか？」

「親同士が近い関係だったからね。物心つく前からいつも一緒だったよ」

「そんなに前からですか」

「昔はみんな無邪気に遊びまわっていたよ。幸彦だつて今でこそあんな毅然な態度だけど、幼い頃は臆病で弱虫でね。芳乃様や常陸さんの後ろにくっついて歩いてたんだよ？」

「想像できませんね……」

そういえばムラサメちゃんもそんなこと言ってたっけ。あの幸彦

が臆病で弱虫だったなんて、見てみたかったなあ。

「そうだ。みづはさんにはムラサメちゃんは見えないんですか？幸彦は見えているっぼいですけど」

「残念ながらね。幸彦の場合、特別霊力が強いみたいなんだ」

「幸彦の場合は先祖返りだろうな」

「先祖返り？」

「たしか先祖の力をもって生まれるとか、そんなことを漫画で読んだ気がする。」

「実際にあるんだな……って穂織にきてから何度となく思っている気がする。」

「ムラサメ様がそう言っているのかな？」

「あ、はい。それで先祖返りって言うのは……」

「有地君は、駒川家が先祖代々医者営んできたことは知っているかな？」

「はい、幸彦から聞きました」

「今みづはさんが朝武さんの主治医であることも、学校の嘱託医であることもさつき聞いたばかりだ。」

「駒川家は、医者になる前は陰陽師をやっていたんだよ」

「陰陽師って、あの陰陽師ですか!？」

「まさか巫女、忍者に続いて陰陽師の知り合いができるとは。」

「ほんと、人生何があるかわからないな。」

「駒川家は最初、呪詛や穢れの研究をおこなってきたんだよ。長い歴史の中で医者へと職を変えて、その力は弱まって行ったんだけどね」「だから先祖返りですか」

「昔は吾輩の姿が見えている駒川家の者もおったのだ。しかし、長らく朝武と常陸だけしか見えていなかったからな。幸彦が吾輩に反応した時は驚いたぞ」

「衝撃的すぎて頭が混乱してきた。」

「でも待てよ、霊力が高くて陰陽師ということは、祟り神とも戦えるんじゃないのか？」

「幸彦は、どうして祟り神を祓わないんですか？」

みづはさんは少しだけ困った顔をしたが答えてくれた。

「祓われないんじゃない。祓いたくても力を使えないんだ」

「力が使えない？」

「祓う力はもしかしたら芳乃様より強いかもしれない。だがなぜか祟り神は幸彦の霊力に反応し、数を増やしながら強くなる。力の性質の問題なのか、はつきり分かってはいないのだけどね」

「それって……」

「うん。祟り神と直接戦ったことのある有地君なら、その危険性が理解できるよね」

1体だけでも大変なのに、それが複数、しかも強くなるって。

考えただけでもぞつとする。

「吾輩には、幸彦の気持ち的理解できる。力があつて、守りたい者が近くににいるのに、何もできない。悔しくて悔しくて、自分が嫌になる」ふと、あの日の幸彦の姿を思い出した。

苦しそうで、悲しそうで、悔しそうで、手のひらを強く握りしめているあの姿を。あの時も悔しきでいっぱいだったのだろうか。

「二人の近くで守りたいけど、それは二人を危険にさらすのと同じことになる。だから幸彦は、二人のサポートに力を入れることにしたんだ」

言葉も出ない。知らなかったとはいえ、一瞬でもなぜ戦わないのかと思ってしまう自分が恥ずかしい。

「なんで俺なんかが叢雨丸に選ばれたんだろうな。幸彦の方が全然……」

「ご主人、その言葉は幸彦への侮辱だ。二度と口にしてはならん。それに、幸彦自身が言っておったのだぞ。ご主人は幸彦にとつての希望になるかもしれない。ここは男の意地の見せ所だと思わないか？」

ムラサメちゃんがニヤリと笑う。頼もしい笑みだ。

バカだな、俺。もつとちゃんとしないと。頑張つて信頼を勝ち取る。そう決めたばかりじゃないか。

正直希望なんて俺には荷が重いけど、男として負けるのは悔しい。

男の見栄。男の意地。上等じゃないか！

「有地君。私がこの話をしたのは、君の自身を挫く為でも弟自慢の為でもない。ただ知って欲しかったんだ。愚かな姉のお節介かもしれないが、これからも弟と仲良くしてやってくれ」

気合をいれる為頼っぺたを思い切り叩いてみる。

「……わかりました。俺頑張ります！」

幸彦に負けられない。燃えてきたぞ！

よし！今日から幸彦はライバルだ！

「うむーその意気だ、ご主人！」

「はは、頼もしいね」

俺だつて朝武さんを助けたい気持ちは負けない。

俺が叢雨丸に選ばれたことだつて、きつと意味があるはずだ。

今はまだ、ダメダメな俺だけど、いつか、きつと。

新たな決意を抱いた俺は、稽古をつけてもらおうべくじいちちゃんの元に行くのだった。

第七話 「ライバル」

「ごめんください」

夜。俺の日課になっていることがある。

それは、俺の幼馴染みである常陸菜子を家まで送ること。

「はい。あ、幸彦。ちよつと待ってて。もう帰るから」

「あー悪い、少し早かったな。なにか手伝うことあるかい？」

「ううん。大丈夫だよ」

菜子が座敷に向かうと、芳乃様と安春様が顔を出す。

「幸彦君。家のなかで待っていてもいいんだよ？」

「いえ、そこまでしてもらおうわけにはいきません。長居するわけでもないのよ」

「そんなこと気にしなくてもいいのに」

「そうですよ。遠慮しなくてもいいんです」

安春様も芳乃様もそう言ってくれる。

二人ともお優しいからな。いろいろな気を使ってしまおうのだろう。

「本当に平気ですから。そういうえば、有地の姿が見えませんが」

「有地君ならもう寝ているよ。疲れているみたいだったからね」

「最近の有地さんは気が緩みすぎです」

芳乃様が不満そうにしている。有地……少し教育が必要かもな。

なんてことを考えていると、菜子が帰り支度を終えてやってくる。

「お待たせしました〜……って幸彦？なんで笑ってるの？」

「いや、なんでもないよ。それよりもいいのか」

「うん。それでは芳乃様、安春様、今日はこれで失礼します」

「うん。気をつけて帰るんだよ」

「いつもありがと、菜子。また明日」

芳乃様たちに見送られ朝武家を去る。

菜子の家はこの街の西側の端。朝武家からは結構な距離がある。

午後十時を過ぎたこの街は人通りなんてほとんどない。

まあ、娯楽のない田舎なんてどこもこんな感じだろう。

街灯の少ない道を二人で並んで歩く。

雨の日も雪の日も、ケンカしてお互い口をきかなかったときも。

茉莉が朝武家から帰るときは必ず迎えに行った。

いつからだったかな。もう覚えてもいない。

たわいのない会話も、たまに訪れる沈黙も、どこか心地いい。

「――そしたら芳乃様嬉しそうに笑ってくれてね」

「はは、有地の赤くなった顔が想像できるよ」

「そうなんです！芳乃様の笑顔は可愛らしいから」

今日あつたことを楽しそうに話す茉莉。俺まで楽しい気持ちになるんだから不思議だ。

どうやら有地も少しずつ今の生活に慣れてきたようだな。

「そうだ、有地さんといえば、最近様子が変なんですよね」

「変？どういうことだ？」

「なんか、朝早く起きてるはずなのに朝食の時間にはギリギリに来るし、放課後も用事があるって言って先に帰っちゃうの。帰りも遅いし、疲れた顔してるし、なにかあつたのかな？」

そういえば、さつきも疲れてるから先に寝たと安春様が言っていた。慣れない生活や新しい学校で疲れが溜まっているのだと思っていたが、それでは説明できない不可解な行動もある。

「確かに少し気になるね。わかった。明日の放課後調べてみるよ」

「ありがと。何かあつたら連絡して」

例の犯人が絡んでいても限らない。何もなければいいが。

「ここまでで大丈夫。送ってくれてありがと」

あつという間に時間が過ぎ、気づけばいつも別れるポイントまでやってきていた。

「ここまでくれば茉莉の家も近い。普段なら俺も帰路につくのだが……。」

「いや、家の前まで送るよ」

「え？でも家まで来たら幸彦の帰りがもつと遅くなっちゃうよ？」

「そのぐらい平気だって。芳乃様を嗅ぎ回っている犯人がわかってな

いんだ。女の子をひとりで歩かせるのは愚行だよ。念には念を入れなきやね」

茉莉の強さはわかってているが、相手の力がわからない以上気をつけるにこしたことはない。それに、ここでひとりにして茉莉の身に何かあったら死んでも死にきれない。

「ワタシなんかを襲う人なんていないよ」

「君ってやつは……本気で言ってるのか？あんな、もう少し自覚しなきゃダメだぞ？茉莉は可愛いんだから」

「ふえっ!？」

茉莉が変な声を上げる。

「あ、あは。からかわないですよ。ワタシなんかより芳乃様の方が全然可愛いんだから」

「ん？なんで芳乃様と比べるんだ？まあ、芳乃様が可愛らしいのは同意するが」

「そうだよね!」

「だけど、茉莉だつて芳乃様に負けなぐらい可愛いぞ?」

「はうあっ!？」

茉莉の顔が茹でダコのように赤くなっている。

「お、おいどうした？具合でも悪いのか?」

「違う!幸彦がワタシのこと可愛いなんて言うから……」

「……………」

そういうえば、茉莉に面と向かって可愛いなんて言ったことなかったな……。いかん!変に意識したら俺まで恥ずかしくなる!

「い、言つとくけど、可愛いっていうのは、その……世間一般的……そう!日本の可愛い顔の平均から計算した結果であつて俺が茉莉を可愛いと思ってるかどうかは別問題として考えられるわけでだからその」

「あ、あは、そうだよね!幸彦がワタシのこと可愛いなんて思うわけないよね!」

「そんなこと……ない……こともない……」
「……………」

「……………」

気まずい沈黙が流れる。お、おかしい。いつもなら沈黙も心地いいはずなのに。

「と、とにかく！そんな女の子を危険にさらすようなことはできない。茉莉子も知ってるだろう？俺は心配性なんだ」

「ううう。わかった。お願いする」

「うむ。よろしい」

なかば強引に許可を得た俺は、茉莉子の護衛として家まで付いて行く。

さっきの会話のせいでなんだかぎこちない空気である。

先ほどまで黙っていた茉莉子は、家の前に着くとうつむきがちにこちらを向いた。

「その、ありがとね。心配してくれて。嬉しかった」

「あ、いや、当然のことをしたまだけだよ。じゃあ、また明日」

「うん、また明日」

お互い手を振って別れる。

茉莉子の顔は最後まで赤いままだった。

「卑怯だよ、幸彦……………」

男の人に真っ直ぐな目で可愛いと言われるなんて。

ちよつと少女漫画みたいだったな…

そのあとの幸彦の慌てた姿を思い出すと顔が緩んでしまう。

「ニヤニヤしちゃって、可愛いんだから」

「父さんは許しません」

「もう！そんなんじゃないから！」

「それでは今日はここまでになります。皆さん、気をつけて帰ってくださいね」

チャイムの音を聞き中条先生が終わりの挨拶を言うと、生徒はそれぞれ帰る準備を始める。そんな中……

「朝武さん、常陸さん。俺今日も用事があるんで先に失礼します！」

誰よりも早く、一目散に帰路につく有地。

「……あやしい……」

芳乃様が険しい顔で囁く。

「ね？」

「言われてみれば確かにあやしいな」

昨日の帰りに茉莉に教えてもらってはいたが、なにかを隠していることは間違いなさそうだ。

「早速調べてみるよ。茉莉は芳乃様と先に帰っててくれ」

「了解。芳乃様、ワタシたちも帰りましょう」

もう有地の姿は見えなくなっていたが、あらかじめ式神を有地の力バンに忍ばせてある。その気配をたどりながら、俺は尾行を開始する。

10分ほど歩くとだんだんと気配が強くなってくる。

目の前にあつたのは――

「武道館？なんでこんなところに有地が？」

疑問に思いながらも中へ侵入する。

目視できる範囲に見張りはいない。罠もなさそうだ。

警戒しながら先に進んでいくと、なにかを打ち合う音とともに有地の声が聞こえてきた。

「いやああつ!!」

この音は…戦闘音？まさか、誰かと戦ってるのか！？
まずいと思った俺は急いで有地の元へ向かう。

ドアを開けた先には有地と男が一人。

「有地!!大丈夫か!？」

「へ!?!幸彦!?!なんでここに……」

「隙あり!きいいいああああつ!!!」

パシン!と大きな音が武道館に響き渡る。

俺の目の前で、そのまま有地は床に倒れてしまった。

「いったた。……あれ?ここは……」

目の前には武道館の天井があつた。

頭には濡れタオルがのっている。こころなしか頭がズキズキする
ような。

たしか、じいちゃんとの稽古中にドアが開いて……それで、

「おつ。目がさめたか」

幸彦が顔を覗き込んでくる。

「幸彦?」

「うん。ほら、スポーツドリンク。飲めるかい?」

「あ、ありがとう」

幸彦からスポーツドリンクを受け取る。

……そうだ!幸彦がドアを開けてそれでじいちゃんに一本打たれたんだ!

さてよ。幸彦がここにいるということは…

「あの……もしかしてバレちゃった?」

「なんか、悪かったな。稽古の邪魔をしたみたいで」

「やっぱりバレちゃったかあ」

俺は顔に手を当てる。

別に隠したかったわけではないけど、少し恥ずかしい。

スポーツドリンクを渡し終え、幸彦は俺の隣に腰掛けた。

「じいちゃんは？」

「玄十郎さんなら、救急箱借りに行ってるよ。念のためって」

医者の子を残したのは俺の状態を観察するためだろうか。

できれば幸彦と二人にしないでもらいたかった。

なんか、こう……気まずい！

「幸彦は、どうしてここに？」

「茉莉に言われたんだよ。最近有地の様子がおかしいって」

「そっか、常陸さんが……」

あやしまれている気はしていたが、いらぬ気遣いをさせてしまった。

「まさか隠れて稽古してるなんてな」

「その、お恥ずかしい限りです」

「別に恥ずかしくないだろ。やましいことをしてるわけじゃないんだからさ」

「それはそうなんだけど、ひけらかすのもかっこ悪いじゃん。朝武さんだって努力してるんだから」

「ま、その気持ちは分からなくもないけどな……」

幸彦はそう言うとき目を細めながら天井に顔を向ける。

なんだか昔を懐かしんでるように見えた。

「要するに、男の意地ってやつだろ？」

「それもあるけど、稽古自体は俺のため。崇り神と対峙して改めて、今のままじゃいつか大きな怪我をすと思うたから」

「そうか」

「それに」

「それに？」

「その……なんというか……。負けたくないから」

「負けたくないって、誰に」

「……お前に……幸彦に、負けたくなかったから」

幸彦は面喰らってしまったのか目を丸くして固まってしまった。

「……つぶ、あははははははは！」

だがそれも一瞬で、堪え兼ねたかのように笑い出す。

「わ、笑うなよ！俺は本気なんだからな！」

「違うよ、バカにしてるんじゃない。少し予想外だっただけで、ふふ、

あはは

なおも笑い続ける幸彦。

「だーもう！だから幸彦にはバレたくなかったんだよ！」

「ごめんって。しかしそうか。君がそこまで俺を評価してくれてたなんてね。でも、俺は君が思っているほど大したやつじゃないよ」

「そんなことない！」

うつむく幸彦を見て、俺は思わず立ち上がった。

こいつはどうしてこんなに悲観的なんだと、苛立っていたのかも知れない。

「お前はずっと努力してきたんだろ！力が使えなくても、ずっと朝武さんたちを支えてきたんだろ！それってすごいことじゃないか！そんな幸彦だから、俺はお前をライバルだと思って……っ！」

しまった！熱くなりすぎて余計なことまで口走ってしまった。

恐る恐る幸彦へ目を向けると、さつきと同じように目を丸くしていた。

「……ライバルだと、思ってくれるのかい？」

「へ？」

俺はてつきり、幸彦の力のことについて何か言われると思っていたが、幸彦が反応したのは『ライバル』という単語だった。

「あ、ああ。ライバルだ！」

「そうか、ライバルか……」

まるでライバルという言葉をかみしめるように言うと、幸彦も立ち上がる。

「君が俺をライバルだと思ってくれるなら、俺も有地に負けないように頑張るよ。今まで以上にね」

「上等。いつか必ず追いついてみせるから！」

拳を前に突き出すと、幸彦も拳を前に出し、互いに付き合わせる。なんだか俄然やる気が出てきたような気がする。

「なるほどな。これがご主人の言っていた、びーえるというものなのだ。なかなか興味深い世界だ」

ムラサメちゃんがとんでもないことを言い出した。

その沼は、入ったら抜け出すのは困難だから気をつけような？

ていうかいつからそこにいたの!?

「安心してください、ムラサメ様。俺はいたってノーマルです。有地がどうかは知りませんが」

「いや、俺もノーマルだから! ていうかこのくだりは一度じいちゃんとやってるから!」

「わしがどうかしたか?」

気がつけばじいちゃんが救急箱を片手に持ち、武道館の入り口に立っていた。

「なんでもない! 気にしないで」

「ふむ、そうか? しかし、その様子ならもう大丈夫そうだな」

「あ、はい。もう平気です。心配かけてごめん。」

そういえば頭の痛みは消えている。コブは……まだあるけど。

「玄十郎さん、申し訳ありませんでした。稽古を中断させてしまって」

「なに、駒川君が気にすることはない。元はと言えば将臣が稽古を内緒にしていたことが原因だからな」

「うう、申し訳ない」

じいちゃんの言うことは正しいので、俺としては頭をさげるしかない。

「一応菜子には報告させてもらおうよ。依頼だからね」

「う、うん。わかった」

「大丈夫、芳乃様には言わないよ。俺と菜子もできるだけ協力する」

「本当か!？」

「ああ。その代わりに、稽古を頑張るんだぞ? 早く芳乃様の隣に立てるぐらいに」

「っ! ああ!」

持つべきものはライバルか。

「ここまで後押しされたら、頑張るしかない。」

「じいちゃん、もう一本お願いしますー!」

「うむ、よろしい」

竹刀を持ち直し、俺はじいちゃんとの稽古を再開するのだった。

「いやあああ!」

「きいいあああ!!!」

有地が稽古を再開させたのを見届けてから、俺は武道館を離れる。

「ライバルか……」

正直、俺にはもつたいないぐらいの称号だ。

俺みたいなやつが叢雨丸に選ばれた人間のライバルだなんて。

だけでも同時に、心から負けてられないとも思った。

俺は携帯を取り出し、魚海のおやじさんへ電話をかける。

おやじさんはすぐに電話に出てくれた。

『おう、どうした? 幸彦から連絡してくるなんて珍しいじゃねえか』

「……師匠。久しぶりに手合わせお願いできませんか?」

『……なにがあったか知らねえが、わかった。いつものところで待ってやるよ』

「ありがとうございます」

短い会話を終えて電話を切る。師匠との手合わせは二年ぶりだ。

気合を入れて俺は約束の場所へと足を運ぶのだった。



街の東側。その奥の森の中に広く開けた場所がある。

ここで俺は子供の頃から、魚海のおやじさんと榎本さんと修行を行ってきた。

「なんだか久しぶりだな。で、どうしたんだよ一体」

「いえ、少し負けられない相手ができました」

「ほう。そうか。それでか」

向かい合う俺とおやじさん。会話はしているが、お互い気を抜いたりはしない。常に相手の一挙手一投足の動きを観察し続ける。

これがこの人の手合わせのルール。開始の合図などない。

顔を合わせた時点で戦いは始まっているのだ。

「さすがに隙は作らねえか。そんなじゃ、俺からいくぜ」

おやじさんの姿がぶれたと思うと、次の瞬間には目の前に拳が迫って来ていた。

さすがに早い。目で追おうとすると反応なんかできないだろう。

俺はすかさずその拳をいなし、背負い投げの要領で思い切り後ろへ放り投げる。榎本流合気道の一つである。

『力は確かに必要ですが、それが全てではない。いいですか。今教えているのは型にすぎない。実戦で型にこだわっているのは命を落とします。幸彦はまず、力の向きや視点などを把握できるような冷静さを身につけなさい。目を逸らさず、力の流れを読み取るんです。あとは基本を体に叩き込んでいけば、自ずと体が動きます』

——榎本師匠は体を動かすだけでなく冷静な思考力が大切だと教えてくれた。何事も経験あるのみだと。そう言っただけで何度師匠に投げられたことだろう。

おやじさんが空中にいる間に、こちらも攻撃を仕掛ける。

蹴りの場合、威力は高いが防がれると態勢を崩されてしまう。おやじさん相手にそれは致命的な隙になる。

俺は迷いなく拳をおやじさんに向けた。狙うのは鳩尾。

『常に相手を行動不能にするように意識しろ。甘い考えは捨てろ。お

前は巫女姫様を付け狙うような悪党と戦うことになるかもしれない。だとしても正義のためなんてくだらない思いで拳はふるうんじやねえぞ。その拳が、たとえ誰かを守るために鍛えたものだとしても、結局は相手を傷つける暴力でしかねえ。相手が悪なら、お前はその上をいく悪になれ。でないとすぐへたつちまう』

——魚海師匠は手加減をしない人だ。一撃一撃が必殺。幼い頃は寸止めをしてくれたが、中学生になった頃からは毎日の訓練が命がけだった。

俺が放った拳は案の定おやじさんにやすやすと止められた。

「いい狙いだが、まだ甘い」

おやじさんは俺の拳を支点に体を回転させ素早く着地する。

いい歳して怪物じみた運動能力だ。

——魚海のおやじさんも榎本さんも、もともとは穂織を離れて東京のとある秘密組織で働いていたらしい。怪物的な運動能力と実戦経験はその時得たもの。

しかし、魚海家の当時のご主人が病床に倒れ、その後を継ぐために仕事を部下に任せて穂織へ戻ってきた。

榎本さんにいたっては、魚海がいなくともつまらないという理由で魚海のおやじさんを追って穂織で古本屋を経営することにしたという。

互いに打ち合うこと数十分、おやじさんの息が上がってきた。

決めるなら今だ。

おやじさんがふらついたのを見計らって顔面に左足で蹴りを放つ。当然のように両手でふさがれる。が、そこに隙は生まれた。

左足を掴まれたまま体を翻し右足でこめかみを狙う。

(よし、入った)

確かな手応え。これで少しの間平衡感覚が失われるはず……っ！

「詰めが甘いって言ってるだろ？相手がわざと疲れを演出してる可能性だってあるんだ。心配性を名乗るなら、最後の最後まで気をぬくんじゃねーぞ」

目の前には左腕で俺の蹴りを受け止めているおやじさんの姿が。そのまま右足もつかまれる。

(しまっ！)

両足を掴まれた俺に、反撃することは不可能だった。

そのまま一気に地面に叩きつけられる。

「少しは成長してるって認めてやるよ。でもまだまだ伸びるはずだ。手合わせならいつでも歓迎するからよ。また挑戦してこい」

おやじさんの言葉を聞いた俺の意識は、そのまま暗闇へと落ちていった。

「常陸さんが付いてきてくれて助かったよ。本当は朝武さんにも来てもらいたかったんだけどね」

「神社のお手伝いでは仕方ありませんよ」

今日は土曜日。俺はじいちゃんに、新しく志那都荘で働く従業員を案内するように頼まれていた。

なんでもその人は外国から来た女の子で俺たちと同じ年の高校生。

働きながら留学生として学校にも通う予定らしい。

穂織の観光も兼ねていろいろ見せてやってほしいと言われたのだが、俺がこの街に来てからまだ一ヶ月ぐらしか経っていない。案内しろと言われてもどこに何があるか把握している自信がない。

相手が女の子ということもあり、俺は朝武さんと常陸さんに一緒に案内できないか尋ねてみたのだが、朝武さんは神社のお手伝いを任されていたため来れなかった。

『お役に立てず、申し訳ありません』

本当に申し訳なさそうに謝る朝武さんを見て、俺の方が申し訳なく思ってしまった。

「どこを案内するかは決めているんですか？」

「実はまだなんだ。そういうことを含めて、常陸さんに意見をもらいたくって」

「そうですね……あ、そうだ。まだ少し時間もありますし、実際に行ってみませんか？」

常陸さんに案内されたところは、俺にとっても忘れることのできない場所だった。

「あいよ！魚政特製！鮎の塩焼きだ！」

「あは、ありがとうございます！」

「おおー本当に美味しそうだ……」

幸彦の師匠ごと、魚海さんが経営する魚政。

その店の裏にこんな飲食スペースがあるなんて。

「本当ならもつと美味しい鮎をご馳走したかったんだがな……あいにく今は禁漁の時期だな。養殖の魚で我慢してくれや」

「穂織では鮎が有名なの？」

「いえ、そういうわけではありません。観光地ですので、こういったものの方が人気を得やすいんですよ」

常陸さんはそう言うのと鮎を一口。

俺も背中の方からかぶりつく。

パリパリに香ばしく焼けた皮はほろ苦く、身はホロホロと崩れながら旨味を口いっぱいに広げてくれる。塩加減もちょうどよく、身と皮の美味しさを結びつけてくれる。

「どうよ？美味いだろう」

「……美味い！」

「へへーありがとよーそんなじゃ俺は店番に戻るからよ。ゆっくりしてけや」

店に戻っていく魚海さん。初めて会った頃の印象が強いので苦手意識があったが、今はなんだか気のいい近所のおじさんって感じがした。

「実はここ、ワタシの行き付けのお店なんですよ。あ、指に塩が付い

ちやつた」

白い指を舐める常陸さん。なんか……妙にエ『茱子を変な目で見るんじゃない。無事に子孫を残したいんならね……』アロビクスが踊りたい気分だなー！

……幻聴とともに寒気を感じた気がした。

「有地さん？どうされたんですか？顔が真っ青ですが」

「いや、なんでもないんです」

気を取り直してもう一口かぶりつく。

「本当に美味しいね。行き付けって言ってたけど、いつから来てるの？」

「中学生に上がった頃でしようか。幸彦に連れてきてもらったんです。それから芳乃様を連れてきたり、二人で鮎を食べたり、気づいたら常連さんになってました」

えへへ、とはにかむ常陸さん。

「ほんと、幸彦と常陸さんは仲良しだね」

「幼い頃からずっと一緒でしたから。それに、忍者としての訓練ばかりで他の方と関わることもありませんでしたし」

普段、飄々としているから忘れがちになるが、常陸さんも相当大変な苦労を経験している。

崇り神との戦いでみせる彼女の動きは、まさに忍者そのもので、どれだけきつい訓練を受けてきたのかがわかる。

「厳しい訓練で泣きそうな時も、幸彦が隣にいて、励ましてくれました。厳しいことも言いますが、芳乃様とは違った優しさを幸彦は持つてるんですよ？」

「それはなんとなく、わかるようになってきたかな」

「芳乃様と同じぐらい不器用ですから、幸彦は」

常陸さんは笑う。

その慈しむような笑みを、俺は前にも見たことがあった。

「もしかして、常陸さんに怖くないのか訊ねた男の子って……」

「はい。幸彦です。あの頃はまだワタシの方が大きかったなく。小学校の高学年ぐらいでした」

「みんなから聞く幸彦の幼少期って、今と全然違うよなあ」

「小学校に入る頃にはもうあんな感じでしたけどね。身長は中学で一気に伸びました。あは、抜かされた時はショックでしたよ」

幸彦の話をする常陸さんは本当に優しい笑顔をする。

「常陸さんは幸彦のことが好きなんだね」

「ええ、大好きですよ」

当たり前のように言う常陸さん。だけどすぐにさつきとは違う、少しだけ寂しそうな笑顔を浮かべる。

「ですが、幸彦は芳乃様に仕える仕事仲間ですから。それ以上でもそれ以下でもありません」

その言葉には有無を言わせない何かを感じた。

「有地さんは、芳乃様の呪いが解けたらどうするんですか？」

自然と話題が変わる。これ以上話すつもりはないのだろう。

「呪いが解けたらか……まだ考えられないかな。当面の目標は朝武さんに認めてもらうことだから」

正直な話、先のことを考えている余裕がないぐらい、やることがたくさんある。祟り神や稽古もそうだが、まだ知らないことも山積みだ。

「そういう常陸さんはどうなの？」

「ワタシですか？ワタシは……乙女の秘密です♪」

鮎を食べ終わった常陸さんは俺の前に立つ。

「さあ、そろそろ約束の時間ですよ。早く行きましょう」

乙女の秘密……。なんか、秘密って言われると気になるよなあ。

踏み込むつもりはないけど。なんてったって乙女の秘密だからな。

男の俺が聞いていることじゃないだろうし。

「そうだね。行こうか」

客人を待たせるわけにはいかない。

俺たちは、魚海さんに挨拶をして集合場所に向かった。

その道中のことだった。

「はわわわ………ど、どいてくださ………い!!」

俺が振り返った直後、坂道からものすごい勢いで突っ込んできたものが目の前にあつて：

「きやあああああ!!!」

「うわあああああ!!!」

暗転。

なんだか、穂織に来てから気絶ばっかしてるよな……俺……。

第八話 「ムラサメちゃんの憂鬱（なぜそこまで大きく育つのだ！）」

この街も随分と変わったものだ。

こんなにも人にあふれ、男も女も、異国の者さえ互いに笑い合いながら暮らしている。外から人が来ることなど、生きていくのが精一杯だったあの頃には考えられなかった。

「ねえねえ、お父さん！お母さん！これ、あげる！」

「うん？おお、綺麗な花だね。」

「うふふ、ありがとう」

仲睦まじい親子のやり取りが目に入る。

『父上！母上！畑の草刈が終わりました！』

『ありがとう。■■■■はいい子だな』

『当たり前じゃないですか。私とあなたの娘ですよ』

ふと、昔のことを思い出してしまう。自分がムラサメと名乗る前のことを。

「人に撫でられるのは、あの頃以来になるのか……」

くすぐったくて、暖かくて、気持ちよくて、なんだか恥ずかしい。

本当はもつと撫でてもらいたかったが、そこまでわがままを言うわけにはいかない。それでも…

自分の頭に手を伸ばす。

「吾輩は、浮かれていたのだな」

この体になって初めて触れられた男。

無礼者で、お調子者で、頑固で、一本芯が通っていて、努力家で、なんだか憎めない、そんな男。

「ご主人のせいだぞ。吾輩が今更、あの頃を思い出すなんて」

目の前の家族が遠くなるのを、吾輩はずっと見守っていた。

「幸彦、本の整理が終わったら店先を掃いてくださいね」

「わかりました」

今日は榎本さんが経営している古本屋のバイトの日。

「あ痛たた。本当におやじさんは加減を知らないんだから」

本を運ぼうと持ち上げた瞬間、体が悲鳴をあげる。

昨日の魚海のおやじさんとの手合わせのせいで、体のあちこちが痛んで仕方がない。ここの温泉がなかったらこんな無理はできないと思う。

「あのおバカさんに手加減なんてできませんよ。幸彦もそれを理解したうえで手合わせをお願いしたんですから、文句を言う資格はありません。ほら、てきぱき働きなさい」

女性に対してはものすごく紳士的で、普段も優しい人なのだが、結構人使いが荒い榎本さん。稽古でも笑いながら容赦なく放り投げられる。要はDSなのだ。

「榎本さん。この巻物って」

「ああ、それは奥の棚にお願いします。あと、その右に置いてあるツボや石碑はこちらに持ってきてください」

この古本屋、ただの古本屋ではない。古い巻物や書物、骨董品に至るまでいろいろ取り揃えている。そのためマニアックな客が多い。

まあ、俺もそのマニアックの一人で、図書館にない歴史書や古文書の類、巻物など、呪詛の研究に役立つものをここで仕入れている。

なぜこのような商品をわざわざ手に入れ販売しているのか。それは榎本さんの趣味だからとしか言いようがない。

店内の整理を終え店先を掃いていると、見知った、けれども珍しい顔を見かける。

「ムラサメ様？こんなところでどうなされたのですか？」

ぼんやりしていたのか、ムラサメ様は俺に話しかけられると、ハッ

とした様子でこちらを向く。

「ぬ？おお、幸彦か。なに、気分転換に街をぶらぶらしていたただけだ。気にするでない」

「そうでしたか。有地はどうしたんです？姿が見えませんが」

「ご主人なら、玄十郎に新しく入る従業員の案内を任されてな。一緒にいても話しかけれんから、気を利かせて別行動をしておるのだ」
「へえ、志那都荘に新しい従業員ですか。確かに、有地なら無意識にムラサメ様に語りかけちゃいそうですね」

ムラサメ様が見える人間は少なく、現状、芳乃様と茉莉と有地と俺の四人しかいない。ほとんどの人間がその存在を認識できないのだ。

もし従業員の案内中にムラサメ様に話しかけてしまえば、独り言を言う男に見えてしまうだろう。

「そうなのだ。ご主人は抜けたところがあるからな」

「それだけムラサメ様を大切に思っているんですよ」

有地はなぜかムラサメ様に触れることができる。今まで前例がないことなのでその理由はわかっていない。

叢雨丸に選ばれた人間だからなのか、それともっと別の原因があるのか、こつそり調べてはいるんだが、はつきりとした答えは出ていない。

ムラサメ様に触れることができる有地には、ムラサメ様の重さや温かさなども感じる事ができるらしい。

そのせいか、彼の中ではムラサメ様という存在が守護者という特別な存在ではなく、ただただ親しい普通の女の子に見えるのだろう。

「吾輩を、大切に……」

ムラサメ様はそう呟くと、意を決したようにこちらを向く。

「幸彦、少しだけ吾輩の話を聞いてくれないか？」

「話ですか？」

「聞くだけでいいのだ、頼む」

ムラサメ様からそんなことを言うのは初めてだったので驚いてしまった。だが、俺も今までいろんなことをムラサメ様に相談してきたので断る理由はない。

「わかりました。掃除が終われば昼休憩に入りますので、少し待っていてください。すぐに終わらせませす」



掃除を終え休憩をもらった俺は、少し場所を移動して、坂道の上にある広場のベンチに腰掛ける。

ムラサメ様も隣に腰掛ける。

土曜日ということ、広場には多くの家族連れの様子がみえた。

お父さんに肩車してもらっている女の子。その光景を見ながら、ムラサメ様はポツリポツリと語り出した。

「最近な、昔のことを思い出すのだ」

「昔のこと、ですか？」

「うむ。ずーと昔、吾輩がまだ生身の人間であった頃のことだ」

それはつまり、ムラサメ様が人柱になる前の話なのだろう。

「今までこんなことはなかったのだ。思い出さないようにしておった。それなのにご主人といると、ふとした瞬間に記憶が蘇ってくるのだ」

「それは、有地がムラサメ様に触れることができることと関係があるんでしようか？」

「かもしれない。この数百年間、吾輩の姿を見れるものでさえ限られておった。触れられる人間などご主人が初めて。人の温もりが感じられるだけで嬉しくなってしまう、その気持ちが……少しだけ怖いのだ。」

ムラサメ様は何百年もの長きにわたって、叢雨丸の管理者として見守ってくださった。その数百年間の間に多くの別れも経験している。

親しくなればなるほど、別れというのは辛くなる。

だからこそ、普段は達観して行動するようにしてきたのだろう。

ムラサメ様の苦しみを、俺は考えることしかできない。だけど――

「その気持ちは、怖がるものではありませんよ」

「だが、いつかは別れなければならぬのだぞ？その時を考えると吾

輩は……」

ムラサメ様はそのままうなだれてしまった。

「ムラサメ様は言っていましたよね。有地が叢雨丸に選ばれたのには理由があるはずだと」

「あ、ああ」

「なら、その有地と触れ合うことで得た気持ちだって、なにか意味があることだって考えることはできませんか？それに、過去を懐かしむ気持ちも、親しい人と過ごして嬉しい気持ちになるのも人間としてごく当たり前の感情です」

「だが吾輩は人間では——」

「有地はきつと人間としてムラサメ様を見ていますよ。もちろん俺も芳乃様も茉莉も。俺の計画では、ムラサメ様も守る対象なんですからね」

気休めに聞こえるかもしれないが、それが本心だ。呪詛を解くことができれば、叢雨丸の守護者であるムラサメ様を解放する手段だって見つかるはず。いや、見つけてみせる。

事実、一応の仮説は出ている。

有地がムラサメ様に触れ、温もりや重みを感じていると知ることができたからこそ、導き出された一つの考えが。

「……おぬしの性格を忘れておった。幸彦はそういう奴だったな」

半ば呆れ顔のムラサメ様は、立ち上がって俺の目の前にくる。

「感謝するぞ、幸彦。まだ切り替えることは難しいが、それでも幾分か楽になった」

「いえ、話を聞くぐらいしか俺にはできませんから」

「まったく、自分のことになるとどうしてそこまで悲観的になるのだ。吾輩が感謝の言葉を言っているのだから、そこは素直に喜ぶべきだと思うぞ」

「あはは……善処します」

いろんな人にそう言われて、反省はしているのだが、この性格はなかなか治らない。

「あの一、少しよろしいでありますか？」

いきなり話しかけられドキツとする。

大きな声ではないものの、はたから見れば独り言でしかない。

動揺を隠しながら声のした方へ顔を向けると、そこには女の子がいた。

髪は金髪で、大きなキャリーケースを引いている。

外国人観光客だろうか？その割には日本語がうまい。

「えーと……どうしましたか？」

「申し訳ありません。少し道を教えていただきたいのですが」

どうやら観光途中で道に迷ったらしい。

「むむむ。なんというでかさっ！異国のものはどうしてあそこまで胸が育つのだっ！」

後ろでムラサメ様が胸に手を当てながら、静かに、だが激しく憤っている。

確かに……大きい……。いや、いかん。女性にそんな視線を受けては失礼だ。

頭を振り、雑念を取り払う。

「？」

「よし。それで、どこに行きたいんですか？」

「ここなのですが、自分が今どこにいるのかも検討がつかない状況であります……」

「ああ、ここならその坂道を下ってすぐつきますよ」

「本当でありますか！ありがとうございます！勇気を出して話しかけて良かったです！穂織に住む人はやっぱり優しいですね」

お礼とともに頭を下げた彼女は、俺から視線を外すところりと微笑み、教えた道を駆けて行った。

気のせいだろうか。彼女の目線の先にいたのは――

「いま、ムラサメ様に笑いかけましたか？」

「いや、偶然であろう。少し驚きはしたが、我輩が見えるものはお前たちしかいないはずだ。ただ……」

「ただ？」

「あの者から妙な気配を感じた気がしたのだ。例えて言うなら、そう。」

「ご主人に似た気配と言うのかのう」

ムラサメ様に送ったように見える目線。有地と似た気配。もしかしたら、彼女は本当に見えていたのではないか…

俺が考えに集中しようとしたその時、

「きやあああああ!!!」

「うわあああああ!!!」

彼女が駆けて行った坂道の下から、彼女の声と聞き覚えのある声が聞こえてきた。

ムラサメ様と目が合う。お互いやれやれという顔をする。

「それでは、行ってきます」

「うむ。ご主人をよろしく頼むぞ」

簡単な言葉をかわして、俺は坂道を下るのだった。

柔らかい。

衝撃の後暗転したので、てつきり気絶のパターンだと思っていたが、どうやら俺の顔がなにか柔らかいものに包まれているだけらしい。

暖かくて、柔らかくて、ふにふにして気持ちよくて、いい匂いがして、心臓の鼓動のようなものが聞こえる。

ん？心臓の鼓動？

ハツとして顔を上げると、目の前には金髪の可愛らしい女の子がいた。俺はその女の子の上に押し倒すような形で倒れているようだ。

暖かくて、柔らかくて、気持ちよくて、いい匂いがして、俺を衝撃から守ってくれたものは、なんと、おっぱいだった。

おっ！おっ！おっ！おっ！おっ！おっ！

俺は慌てて立ち上がる。

「ご、ごめん!!!大丈夫!」

「あいたたた、はい。なんとか」

差し伸べた俺の手を掴み女の子は立ち上がる。

……やはりでかい。ワールドクラスと言っても過言ではないだろう。

「わたしの方こそすみません!怪我してませんか?」

「大丈夫、なんともないよ」

そう言っただけ彼女を安心させるため手首や体を動かしてみせる。

「むしろありがとうございました」

「?こんな時にもありがとうを使うのですか?日本語にっぽんごって難しいです」

「ああ、いや、今のは変則的な使い方だから」

怪我の功名。すごく柔らかかったです……。

「でも怪我がなくて本当によかった……」

女の子は心底案じた表情をした。

「お二人とも、大丈夫みたいですね。よかった」

常陸さんが駆け寄ってくる。どうやらぶつかったのは俺だけのようだ。

「それにしても、いったいどうしたの?ものすごい勢いだったけど」

「申し訳ありません。待ち合わせの時間に遅れてしまいそうだったので急いでいたのですが、坂道に入ったところで荷物の勢いが止まらなくなってしまう……」

よく見ると、大きなキャリアケースを引いていた。

「観光か何かですか?」

「いえ、住み込みで働きながら留学させていただくのですよ。待ち合わせも、これからお世話になる旅館の方に案内をしてもらうためだったのです」

金髪で、大きなキャリアケース、旅館に住み込みで働きながら留学、それって――

「もしかして、レナ・リヒテナウアーさん?」

「?なにゆえ、わたしの名前をご存知で?もしや……人さらい!?神隠

しですか!？」

神隠しは誘拐じゃないと思う。

「違うって。俺は有地將臣っていいいます。志那都莊までリヒテナウアーさんを案内するように頼まれて迎えに行くところだったんだ」

「ワタシは常陸菜子といいます。案内のお手伝いできました」

「そうなのですか? そうとは知らず、失礼なことを! は、ハラキリですか!？」

「いや、そんなことでハラキリはしないよ!？」

ハラキリって、いつの時代の話だよ?

「少々混乱してしまいました。改めまして、ありがとうございます。レナ・リヒテナウアーであります。以後お見知りおきを」

丁寧な頭をさげるリヒテナウアーさん。日本語もだいぶ流暢で外国人とは思えない。いや、体つきは外人のそれだが……。

「ヤラシイ顔してるぞ、有地」

「へっ! まじ!?! って幸彦!」

坂道の上から幸彦が降りてきた。ほんと、神出鬼没だな。

「上の広場にいたら、聞き覚えのある悲鳴を聞いたからな、それに――」

幸彦はリヒテナウアーさんの方を向く。

「彼女の悲鳴も聞こえたからな」

「oh! 先ほどの優しい方ではありませんか!」

どうやら、迷子のリヒテナウアーさんに道を教えてあげたらしい。

そのすぐ後に悲鳴が聞こえたため駆けつけたのだそうだ。

「ほほう。随分と手が早いですねえ?」

「俺を廉太郎と一緒にしないでくれないか?」

常陸さんが黒いオーラを出している。俺の周りって怒ると怖い人多いような……。というか、幸彦の中でも廉太郎って女たらしなんだな。

「とにかく無事みたいでよかったよ。俺は駒川幸彦。この二人の知り合いだ」

「レナ・リヒテナウアーです。先ほどはありがとうございます」

そうして二人が握手をしようとした瞬間だった。

「っー」

お互いに手を引っ込める。

「どうしたんだ？」

「いえ、少しだけビリつときてびっくりしてしまいました」

「……………」

えへへと笑うリヒテナウアーさんとは違い、じっと自分の手を見つめる幸彦。

「どうしたの？」

「いや、後で話す」

小声で常陸さんと短い言葉を交わす。だが次の瞬間にはいつもの幸彦に戻っていた。

「申し訳ない。静電気なんて久しぶりだったから驚いてしまった。リヒテナウアーさんの方こそ平気かい？」

「へーキでありますよ。あ、わたしのことは気軽にレナとお呼びください。では、改めて」

今度は普通に握手をすることができた。幸彦の反応が気になったが、その前にじいちゃんから頼まれてた仕事をやらないとな。

「自己紹介も済んだところで、街の案内に移りたいんだけど…………どこか行きたいところとかつてあるかな？」

「希望を言ってもよろしいのなら、実はわたし、ここに来るまで迷子で走り回っていて…昼食がまだであります…………大変お腹が空きましたあゝ」

レナさんがお腹を抱えると、キュ〜とかわいらしい音が鳴る。

「でしたら、食事に行きましようか。なにか食べたいものはありますか？」

「スシ！テンプラ！焼き鳥♪」

最後だけ妙にテンションがちがうな。

「幸彦、今言った料理が美味しいオススメのお店ってどこかな？」

「そうだな…いや待て、もしかして俺も付いて行くのか？」

「あはっ、だって幸彦、美味しいお店たくさん知ってるでしょ。レナさ

んがより穂織の良さを知ってもらうにはちょうどいいかな〜って」

「確かに、幸彦がいれば俺も心強いかも」

さつき食べた鮎も美味しかったし、きつといい店を教えてくださいませんか？と期待してしまふ。

「まあ、別にいいけどさ。レナさんもそれでいいかな？」

「もちろんですよ！ユキヒコがどんなお店を紹介してくれるのか楽しみですー！」

「ははは、期待に応えられるように頑張るよ」



幸彦に連れられて寿司屋に入る。

「ここならスシも天ぷらも安くて美味しい。好きなのを注文するといよいよ」

「にぎりのセット。ワサビアリアリでお願いします！」

「あいよ！」

「おつすし、おつすし〜♪」

レナさんのテンションが高い。それだけお寿司が食べたかったのだろう。

俺と常陸さんはお腹がいっぱいなので飲み物だけもらう。店に対して非常に申し訳ない気持ちになったが、観光地では無茶な注文店も多いそうなので、店主は気にするなと言ってくれた。

本当に穂織にはいい人がたくさんいるんだな。

「大将、同じのでワサビ抜きも一つ」

「まかせときな」

幸彦がレナさんに気付かれないように注文している。ワサビが苦手なことを知られたくなかったのだろうか？

「憧れの日本でお寿司が食べられるなんて……感謝感激雛霰です！」

「あはは、惜しい感じで間違えてるんだよなあ」

「レナさんは本当に日本がお好きなんですね」

「はい！わたしの家は一族郎党日本が好きなんですよ」

話を聞くに、レナさんの高祖父が穂織を訪れたことがあり、その話が息子へ、そのまた息子へと語り継がれてきたらしい。レナさんもその話を聞いていたから東京ではなく穂織に留学をすることにしたらしい。

「穂織には留学制度が整っておらず、旅館の見習いで頼み込んで、ようやく留学ができました」

「働きながら留学か……大変なんじゃない？」

「かもしれないませんが、わたしの家は裕福ではありませんので、むしろありがたい話であります」

「しつかり者だな」

「しつかり者ですね」

「二人して俺を見ないでくれないか!？」

レナさんには負けるかもしれないが、俺だつてしつかり者なんだぞ？洗濯だつて自分でしてるし、あとは……ほ、本当にしつかり者だぞ、俺は！

「と、とにかく！何かあつたらいつでも言つて。力を貸すから」

幸彦も常陸さんもレナさんを見ながら頷く。

「はい！ありがとうございます」

なんだかいいな。こういうの。俺もこの街にきたばかりの時は不安だらけだったけど、朝武さんも常陸さんも幸彦も安春さんも、みんな親切にしてくれた。今度は俺がレナさんにこの街の良さを伝えていきたい。そう思った。

「へい！にぎりお待ち！」

話がひと段落ついたところでお待ちかねの寿司が運ばれてくる。

「わお！おっすし、おっすし〜♪」

目がキラキラと輝くレナさん。なんだか見ている俺らまでウキウキしてしまう。きっとこれが彼女の良さなのだろうな。無意識に周りに幸福を撒き散らすような存在。出会ってまだ数時間しか経っていないがそう感じた。

お箸の持ち方も完璧なレナさん。彼女の実家でも日本食がたまに出てくるらしく、小さいときからお箸の扱いには慣れていたようだ。

そんな彼女が最初に口にしたのはたまごだった。

「ん〜！ほんのり甘くて美味しいです！」

「ほう。なかなか分かっていているじゃないか。たまごはシンプルに見えるのが難しく、たまごの味を見れば店の味がわかるとさえ言われている。それを最初に食べるとは……」

「へ、へエ〜……そうなのか。……幸彦なんかキャラおかしくなっていない？」

「いつものことです。お気になさらないでください」

につこり笑う常陸さん。

気にしないことにした。

しかし、レナさんは本当に美味しそうに食べるな。お腹いっぱいだけど俺も食べたくなってきた。そう思った時だった。

「——シンツ!!」

固まるレナさん。だんだんと顔が赤くなり、涙が溢れる。

「お、おいひいれす！」

『『ワサビだめだったんだ』』とこの場のみんなの心が一つになった。

「レナさん、大丈夫？」

「大丈夫れす。おいひいれす」

「日本人だってワサビが苦手な人がいるんだ。無理はしないでいいんだよ」

「でも、日本の情緒を理解するためにはこのぐらい」

「あのー……一応言っておきますけど、『侘び寂び』と『ワサビ』は全く別のものですよ？」

「なんですと!?!」

なんとという勘違い。なんとというか、レナさんらしい間違いだよな。

「な、なんと……そのような事実が……ワサビを抜いて良かったなんて……ファツキンワサビ」

声を震わせるほど悔しがるレナさん。

「ほら、こっちはワサビ抜きだから。交換しよう」

「うう。ありがとうございます」

涙を流しながら幸彦のサビ抜きのお寿司と交換する。

もしかして幸彦のやつ、こうなることを予想していたのか？

俺が目を向けると、幸彦もこちらに気づく。

「一応サビ抜きも頼んでおいたんだ。もしワサビがダメでもすぐにサビ抜きを食べられるようにね。ワサビが平気そうならそのまま食べてもらえばいい。そう考えたんだ」

小声で教えてくれる幸彦。いつもの心配性というやつだった。

「本当に食に対しては手を抜かないんだな」

「娯楽が少ないからね。バイト代なんか研究資料か食べ物でしか消費できないんだよ」

「ユキヒコはバイト戦士でありますか？」

「こんどは美味しそうにマグロを食べているレナさん。心の汗も引っ込んだみたいだ。よかったよかった。」

「戦士ではないけど、バイトはしてるよ」

「たしか、魚屋と古本屋だっけ？」

頭の中に魚海さんと榎本さんの姿を思い浮かべる。あの人たちと一緒に仕事するのって大変なんだろうなあ……。

「あとは、診療所の手伝いとか、神社の手伝いとか、商店街の店の手伝いもたまに」

「清掃業のアルバイトもしてたよね」

「あー、魚海のおやじさんに紹介してもらったやつだな」

「そんなにたくさん！ユキヒコは働き者ですね」

「幸彦は働いてないと死んじゃう病ですから」

「なんと?!死んでしまうでありますか？」

本当に働き者だなと思う。きつと体も鍛えてるし、呪詛の研究だっ
てしている。休んでいるのか心配になるぐらいだ。

本人は平気そうな顔をしているが、顔に出さないタイプだしな
……。
「そういうえば、今日って古本屋さんのバイトの日じゃなかった？」

「あ」

静寂がその場を支配する。

幸彦は真つ青になりながら、冷や汗をかいている。

顔に出さないタイプって言ったそばからガツツリ顔に焦りが見えちやつてるよ。ていうか、古本屋さんってそんなに怖いのか？

「菜子……」

「いいよ。「一緒に行こ」

「助かる！ごめんレナさん、有地。急用ができた。会計は済ませてあるから。それじゃー！」

あつという間に店を飛び出す幸彦。幸彦にも怖いものがあるんだなとしみじみ思う。

さりげなく会計まで済ませてあるのが幸彦らしい。

「うちの幸彦がご迷惑おかけしました。申し訳ありませんが失礼します。レナさん。また学校で会いましょう」

「お、オタツシヤデー！」

常陸さんも幸彦を追いかけて行ってしまった。

「お二人ともすごい速さでしたね。まるで忍者みたいでした！」

「あははは」

約1名本物の忍者なんだよな。

「ごめんねレナさん。二人きりになっちゃったけど」

「へーキでありますよマサオミ。マコもユキヒコもいい人でした。皆さんとこれから同じ学校に通うことになると思うと楽しみで仕方ありません！」

キラキラの笑顔でそう言ってくれるレナさん。

なんていい子なんだ。

「それじゃあ、そろそろ行こっか」

「はい！エスコートお願いしますね、マサオミ♪」

幸彦の無事を祈りながら、レナさんを連れて志那都荘へ向かう。

彼女の高祖父がそうだったように、彼女にとっても、この穂織が第二の故郷と思えるようになりますように。

そう思わずにはいられなかった。

第九話 「素直になりたい」

彼を認めるわけにはいかなかった。

お父さんが勝手に決めた婚約者。叢雨丸に選ばれた者。肩書きはどうあれ、初めて会った彼の印象は、どこにでもいる普通の男の子だった。

そんな彼を血なまぐさい朝武の宿命に関わらせたくなかった。

だから、冷たく接してきた。

なるべく突き放すように。なるべく嫌われるように。

それなのに彼は一歩踏み込んできた。

『わがままかもしれない。それでも手伝わせてほしいんだ』
わからない。

どうして彼は、こんな私のために頑張ってくれるのだろうか？

どうして彼は、こんな私に笑顔で語りかけてくれるのだろうか？

どうして彼は、こんな私と仲良くしようとするのだろうか？

気がつけば私は、いつも彼のことを考えるようになっていた。

彼の行動を目で追っていた。

自分の心に芽生えつつある感情に、私はまだ気付かない。

いつかこの感情が花開き、名前がつくことになるのだろうか。

私にはまだ、わからない。



「レナ・リヒテナウアーと申します。気軽にレナとお呼びください！」

休日明けの月曜日。私たちのクラスは留学生の挨拶から始まった。

レナ・リヒテナウアーさん。この前の土曜日に有地さんと茉莉子が穂織を案内したのが彼女。玄十郎さんが経営する志那都荘に住み込みで働きながら留学をするのらしい。

留学生が穂織に来ることなどなかったのでクラスの子達はリヒテナウアーさんに興味津々らしく、中条先生が止めるまで質問の波が止

まることはなかった。

「彼女が、この前有地さんが言っていた新しい志那都荘の従業員？」

「はい、そうですね。なんでも高祖父の影響で一族郎党日本が大好きなんだそうですね」

「わざわざ穂織に留学してきたのもレナさんのお祖父さんの影響が強いみたいでしたね」

リヒテナウアーさんと面識のある茉莉と幸彦が答える。

穂織を離れるわけにはいかない私にとって、外国から来たという彼女に興味があった。彼女と友達になれたら外国のいろんな話を聞けるのかな。

あ、いま有地さんとリヒテナウアーさんの目があった、お互いに手を小さくふりあっていた。ああいう関係も憧れるなあ……。

「芳乃様、そんなにレナさんと有地さんを交互に見つめてどうしたんですか？もしや嫉妬ですか？」

「そんなのじゃないから、茶化さないで」

「あは、心配しなくても、レナさんは明るくて親しみやすいお方です。きつといいお友達になりますよ」

茉莉が優しく笑いかけてくれる。

「お、どうやら質問攻めも終わったみたいですね」

幸彦が言う通り、皆さんの質問がひと段落ついたのでだろう。リヒテナウアーさんがこちらに駆け寄ってきた。

「マコ、ユキヒコ、同じクラスになれて嬉しいですよ！」

「ワタシもですよ。これからよろしくお願いします」

「といっても、一クラスしかないから、同じクラスになるのは当たり前前なんだけどね」

リヒテナウアーさんも、知っている人がいると落ち着くのだろう。真つ先に二人の元へ駆け寄り、話しかける姿は嬉しそうだった。

楽しそうに話す二人とリヒテナウアーさん。これなら彼女も早く穂織に慣れてくれるだろう。喜ばしく思う一方、微妙にのけ者にされてるようにも感じてしまう。

二人がそんな人ではないのは知っているし、リヒテナウアーさんも

明るくて優しい人らしいので、この感情は私の単なる被害妄想。それでも、少しだけ寂しいと思ってしまうのは私のわがままで。

そんな私の目線に気がついたのか、リヒテナウアーさんが私の方を向き、手を差し出してくれた。

「レナ・リヒテナウアーと申します。よろしくお願いします！」

「初めまして、朝武芳乃です。こちらこそよろしくお願いします」

握手をしようと手を近づけたその瞬間。

「ひゃっ!？」

「きやいっ!？」

ビリッと静電気のような刺激を受け思わず手を引っ込めてしまう。

「芳乃様!?!レナさんも、大丈夫ですか?」

「大丈夫。静電気で少し驚いちゃって」

「ビックリしました」

「静電気……ですか……」

幸彦と茉子が顔を見合わせる。

一瞬だけ仕事の時の顔になった気がしたけど気のせいだろうかだろうか。

「では改めて」

「……………」

痛かったわけではないが、かなり大きな刺激だったので、恐る恐る手を差し出す。しかし先ほどのようにビリットはしなかった。

ほっと息を吐くと、リヒテナウアーさんも同じように胸をなで下ろしていた。

「トモタケということは、あなたが穂織のお姫様ですね!どうぞこれからよろしくお願い申し上げちゆかまちゆりましゅ!」

「お姫様って、茉子が教えたの?」

「いいえ。ワタシもまだ芳乃様の話はしていません」

「右に同じ」

幸彦も茉子の隣で首を振っている。

「わたしのお祖父ちゃんに聞いたのですよ。お祖父ちゃんはお祖父ちゃんのお祖父ちゃんに聞いたらしいです」

「そういえば、レナさんの高祖父は穂織を訪れたことがあるんですね」

なるほど。それなら知っていることにもうなずける。

でも、私はお姫様なんて可愛いものではない。

「お姫様なんて言われていたのは昔の話です。同じ教室で勉強しますし、そんなに謙らないでください」

いままでも街の人たちは私を大切にしてくれたが、学校では普通に友達と学生として勉学に励んでいきたいと考えていた。

ここは少し勇気を出して、リヒテナウアーさんと友達になつてもらえるよう頑張ってみよう。

「そうでありますか」

「そ、それでなんですが、私のことは芳乃と——」

そこまで言った私の言葉は、始業のチャイムで遮られる。

「おお、申し訳ありませんヒメさま。授業なので席に戻りますね。ではまた！」

そのまま席に戻っていきリヒテナウアーさん。

茉莉と幸彦がその様子を見て私の肩に手を置いた。

「惜しかったですね。あとちよつとだったのに」

「あは、また勇気を出してみましよう！諦めちゃダメですよ」

うつ……うとううわああああああんっ!!!

私は心の中で叫んだ。



レナさんは真剣に、そして楽しそうに授業に取り組んでいた。

日本史の授業の時なんて、目をキラキラさせながら、中条先生の説明ひとつひとつに頷いていた。大好きな日本の歴史を知ることができて嬉しいのだろう。

それにひきかえ……。

「有地くん……有地将臣くん！」

「は、はいー」

「体調でも悪いんですか？」

「あ、いえ。大丈夫です」

「なら、授業はちゃんと聞くように。わかりましたね？」

「はい。すいませんでした……」

有地さんが授業中に居眠りをして、先生に怒られていた。

最近、有地さんのだらしない行動が増えてきている。先ほどのように居眠りとまではいかないが、授業中に船を漕いでいることがほとんどだ。

だらしない行動は授業だけではない。こここのところ毎日朝食に遅れてくる。今朝だってそうだった。

一言で言えば、だらけすぎ。この調子で祟り神との戦いは危険だと思う。

有地さんには怪我をして欲しくないのに。

そんな私の気持ちを、有地さんが知るわけもなく、結局授業の最後まで有地さんは眠たそうにしていた。

休み時間。このままではいけないと思い茉莉たちに相談する。

「やっぱり、危険だと思うの」

「危険？なにかあったんですか？」

「今日のお弁当は傷みにくいものを使用しましたから、お腹を壊す危険はないかと」

「そうじゃなくて、有地さんの話」

有地さんの名前を出した瞬間、二人は納得した顔になる。

「最近の有地さんはだらけすぎだと思うの。授業中に居眠り。放課後は遅くまで遊んでできて、朝は寝坊。このままじゃ、祟り神と対峙した時に怪我をする。そう思わない？」

「そうですね……そのことに関しては、なんとも言い難いですね」

幸彦が言い淀むとは思っていなかった。

言い淀む根拠もわからなかったので思わず聞き返す。

「どういふこと？」

「目に見えているもの、聞いているものだけが全てじゃないってことですよ。さすがに、授業中の居眠りに関しては擁護できませんが」

「有地さんは芳乃様と同じぐらい頑固ですからね」

「……幸彦はなにか知ってるの?」

「知っていると言えれば知っていますが……申し訳ありません。男同士の約束をしてしまったのでこれ以上は」

「……わかった。もういいです。有地さんが何かを隠していることはわかったから」

本当に、いつの間に幸彦は有地さんと仲良くなったのだろうか。

険悪な関係になる心配をしなくていいので嬉しいことではあるのだが。

結局、有地さんの秘密についてはわからないまま帰りのホームルームを終える。

何を隠しているのかわからないけど、ちゃんと有地さんと話しておくべきだろう。もし最近の有地さんの不調が穂織に来たことによるストレスにあるのなら、やはり無理をさせず、お祓いには来ないように伝えるしかない。

そう思った私は、いつものようにチャイムと同時に帰路につこうとする有地さん呼び止めた。

「有地さん。少しよろしいですか?」

「朝武さん。どうしたの、改まって」

「授業中、居眠りをしていましたよね」

有地さんの笑顔が明らかにぎこちなくなる。

そこまで露骨に嫌がられると、さすがに傷ついてしまう。私ってそんなに強いのかしら。

「最近、具合でも悪いんですか?朝も遅いですし、眠れない理由でもあるんですか?」

「それは……。いや、体は全然大丈夫、具合が悪いわけじゃないんだ。夜もぐっすり眠れてる」

有地さんが嘘を言っているようには見えなかった。だからこそ心配になる。

体は大丈夫なら、心は?精神的な疲労のせいだろうか?でも夜は眠

れていると言っているし。穂織に來たこと自体が、有地さんの負担になつてゐるのではないか。

「ごめん。これからは氣をつける。言葉だけじゃなくて、ちゃんと態度で示すから」

有地さんは真つ直ぐ私の目を見て、そう言った。

まただ。また、この目。

私のことを手伝いたいと言つた時この目をしていた。

「……体調が悪い時は無理をしないほうがいいと思います。お祓いがどれだけ危険なのかは、有地さんも十分わかつていると思うので」

「うん……ほんとゴメン」

有地さんが頭をさげて謝る。

なんで私はこんなことしか言えないのだろう。謝つて欲しいわけじゃないのに。私の言葉が、有地さんを追い込んでしまつてゐるのかもしれない。

「……こちらこそすみません。少しきつく言いすぎたかもしれない」

以前にも茉莉子に言われたこと。仲良くしたいなら仲良くすればいい。氣に入らないなら氣に入らないと言ひ、心配なら心配だと伝えればいい。

当たり前のことなのに、茉莉子や幸彦にはできるのに、なんでこんなにも素直な言葉が有地さんの前では出てこないのだろう。

そんな自分を恥じていた、その時――

「んんっ……んんあつ」

「と、朝武さん？」

急に体がムズムズしてきて、筆でくすぐられてゐるような、変な感覚が身体中に駆け巡る。

「いいっ、んんんっ……や、やだ。こんなところでえ……」

この感覚だけは慣れることはなく、声を我慢することができない。

「んんあつーあつ、んんんっ……んんん……ッ！」

一際強い感覚が襲いかかる。体がビクツツと震えると、私の頭に犬の耳がぴよこつと顔をだす。

これが、祟り神が発生した証。
有地さんが珍しいものを見たように、じつと私の頭の耳を見ている。

有地さんに、耳が発生するところを見られるのは初めてなので恥ずかしい。

「そんなマジマジと見ないで下さい」

「あ、ご、ゴメンー」

すぐさま顔をそらす有地さん。

「…大丈夫なの？」

「問題ありません。有地さんの体に触れて出てきたのがイレギュラーだっただけで、いつものことですから」

穢れに反応して出て来るこの耳。この耳が出たということは、今日の夜にまたお祓いに行かなければならない。今の有地さんをつれていくのは気が引けるが、それでも有地さんは一緒に行くと言って聞かなかった。

「はあ……わかりました」

「あ、でもその前に、ちよつと寄るところがあるんだ」

言ったそばから……本当に大丈夫なのだろうか？



「ムラサメちゃん、怖いなら叢雨丸に憑依しとく？」

「おおーその手があったな！」

夜になり、山の中に入って祟り神を探す。

適度な緊張も、有地さんとムラサメ様の会話のせいで少し緩んでしまっている。行動で示すと言っていたけど、大丈夫だろうか？

私の心配をよそに、近くの茂みでガサガサと音になる。この気配は間違いなく祟り神だ。

「お二人ともー気をつけてくださいー！」

菜子が声を上げると同時に、祟り神が私たちの目の前に現れる。

こちらの出方を見るように低い姿勢でじりじりと迫ってくる祟り

神。

「決して油断はしないように、お願いしますね」

「わかってる」

私の声掛けに答えた有地さんは大きく深呼吸をするとそのまま叢雨丸を構え、崇り神を睨みつける。

次の瞬間、崇り神が有地さんに飛びかかった。

「有地さん!!」

「――逃げて!」

予想もしない崇り神の動きに私と茉子が叫ぶ。

驚いた顔をしていた有地さんだが、何を思ったのか前へと踏み出している。

危ない!

そう声を出す余裕もないほどにあつという間の出来事だった。

うまいこと崇り神の攻撃を避けながら、すれ違いざまに崇り神の胴体に叢雨丸の一太刀を浴びせる有地さん。それは、今までのドタバタした素人の動きではない、見事な体の運びだった。

崇り神が消滅してからも構えを解かず、油断している様子もない。

「安心しろ。ちゃんと祓えているぞ」

ムラサメ様の言葉で、有地さんはようやくやく肩の力を抜いた。

と同時に地面に膝をついて何かを拾い上げ、ポケットにしまった。

「今の動きは抜き胴の動きのように見えましたか……」

「よく覚えてないんだけど、体が自然と動いてたよ」

「最初の頃に比べたらずいぶん動きが良くなっていたと思います。努力の成果ですかね♪」

「な、なんのことですか?」

茉子と有地さんが意味深な会話をしている。もしかしたら、茉子も幸彦と同じように何か知っているのかもしれない。

それよりも今は……。

「有地さん!大丈夫ですか?どこか怪我したりはしていませんか?痛むところは?」

「大丈夫だよ、朝武さん。ほら、この通り」

有地さんが手足を動かしてみせる。

それを見てようやく胸をなでおろすことができた。

「どうしてあんな無茶な動きをしたんですか！飛びかかってくる相手に向かっていくなんて！」

「予想外の動きで俺もびつくりしたけど、さつきも言った通り気づいたら体が動いてて……。そんなに危なっかしかった？」

「そういうわけではありませんが……」

むしろ、今までより格段にいい動きをしていて驚いてしまったほどだ。

「とにかく、あまり無茶はしないでください。有地さんが傷つくのは、いやなんです……」

「……わかった。今度はもつと気をつけるようにする。それから、ありがとう。心配してくれて」

「あは、いい雰囲気ですね。ワタシもしかしてお邪魔ですか？」

「菜子、からかわないで」

「申し訳ありません。芳乃様がようやく素直な気持ちを有地さんに伝えられたので、つい嬉しくなってしまうまして。その調子ですよ」

微笑みながらそう言った菜子は、今度は有地さんに向き直る。

「これはますます頑張らないとですね」

「うん。そうだね」

「何を頑張るんですか？」

「……さあ！そろそろ戻ろうよ！幸彦も待ってるだろうしき！」

露骨に話をそらされてしまった。菜子は有地さんの秘密を知っているのだろう。会話からそんな感じがした。



「先にお風呂いただくね。ふあゝあ」

「やれやれ、浴槽の中で眠らないよう、吾輩が監視しておこう」

「さすがに風呂の中じゃ寝ないって」

大きなあくびと共に浴室へ向かう有地さん。

その後をムラサメ様が追う。

有地さんがいなくなるのを確認してから、私は話を切り出した。

「何を隠してるの?」

「何のことですか?」

「有地さんのこと」

昼間同様、有地さんの名前を出すと二人揃って納得した顔をする。

「どうするの、幸彦」

「そうだな……さすがにこれ以上の隠し事は信頼関係にも影響しそう
だ」

「それじゃあ」

「ああ。有地には悪いが、芳乃様にも教えよう」

どうやら話がまとまったようだ。

「芳乃様、明日は少し早起きをしてみましょう」

「早起き?」

「ええ。言葉で説明するよりも実際に見た方がいいでしょうからね」



早朝。茉莉と幸彦に言われた通り早起きをした私は、息を潜めて玄関を見張っていた。

「こんな朝早く起きて、いったい何がわかるの?」

「お静かに。そろそろだと思えますから」

隣にいる茉莉が小声で答える。ちなみに今日は幸彦も朝から一緒だ。

しばらくすると、日が昇ったばかりなのに有地さんが家を出て行く。

いったいどこに向かうのか。こんなに早く起きているのに、なんで朝食には遅れてくるのだろうか。疑問は尽きない。

「追いかけましょう。俺についてきてください」

幸彦を先頭に尾行を始める。

途中いきなり有地さんが振り向いたりしたが、幸彦と茉莉は諜報活

動のプロである。バレることなく目的地にたどり着く。

そこで私が目にした光景は目を見張るものだった。

「将臣！ペースが落ちているぞ！しっかりせんか!!」

「はい！」

「あと50回だ！休むんじゃない！」

「はい！」

「将臣！」

「はい！」

走り込みやシャトルラン、筋トレに縄跳びなど、玄十郎さんにしごかれていた有地さんの姿があったのだ。

「これは……」

「これが、有地が隠していた秘密ですよ。玄十郎さんに頼み込んで稽古をつけてもらっていたんです」

これが秘密？

「どうして、いつからこんなことをしていたの？」

「おそらく、自分の力不足を感じた時からではないかと。あとは芳乃様の姿にも影響されたのではないですか」

「私に？」

「芳乃様の舞の奉納やその練習。たくさん努力している姿を見て、自分も頑張ろうと感化されたではありませんか？」

「……」

「男っていうのはバカな生き物です。大切な人の前では強がってしまふ生き物なんですよ」

「あは、それは経験談？」

「ご名答、その通りさ」

つまり有地さんのここ最近の不調に見えた行動は全部……。
「なによ、それ……そんなの……そんなの……」

「誠に申し訳ありませんでしたっ！」

朝の稽古を終えて帰ってきた俺を出迎えたのは、朝武さんの土下座だった。

……これはいったいどういうことなのだろうか？

てか、穂織に来てから何回目だ？人に土下座されるのって。

「あの一、状況がいまいちわからないんだけど……これはどういう状況？」

「すまん、有地。隠しきれなかった」

幸彦が謝ってきた。それはつまり……。

「もしかして、全部ばれてる？」

「はい。全部ばれちゃいました」

常陸さんが舌を出しながらコツンと頭に手をやる。所謂てへぺろってやつだ。

そうかそうか。全部ばれてるのか。

俺はゆっくり顔に手を当てる。

——恥ずかしい!!!

隠れて努力していたことがバレるとここまで恥ずかしくなるのかよ。

「知らなかったとはいえ、有地さんが努力していたのに、勝手にだらけていると決めつけて、大変失礼なことを言いました。本当に申し訳ありませんっ」

「と、とりあえず頭を上げてくれないかな」

「……………」

俺の言葉でも朝武さんが頭を上げてくれることはなかった。

女の子を土下座させるなんて、二股かけてた廉太郎より最低じゃないか。

「だらけていたのは本当なんだから。むしろ謝らなくちゃいけないのはこっちだと思っただけだ」

「本当に頭が硬いやつだな、芳乃は。もうちよつと融通をきかせても

よかろうに」

「それが芳乃様の長所でもあり、短所でもあるところでしょうか」

「こうなったらテコでも動かないぞ」

真面目すぎるのも考えものだな……。

「この償いはなんでもしますので。目玉焼きに醤油をかけろといえはば……醤油をかけます。涙を呑んで……ソースを……封印します！」

「芳乃様！そこまでの覚悟とは……」

いや、そんなにすごい覚悟には聞こえないのだが……。

「償いって言われてもな……」

「こうなったら、ご主人が命令を出したほうが早いのではないか？」

いつそエロい命令でも出しちゃおうか。

「あ、何かエロいことを考えている顔だ」

「ほう」「あは」

「考えてない！考えてないですからね!!」

どうやったらあんなに怖い笑顔ができるのだろうか。

一歩間違えれば本当に殺されかねない。

「じゃあ、気恥ずかしいんだけど、一つだけ……お願いがあります」

一見危機的状況だが、こんな時こそ有利にことを進められることもある。
ある。

ピンチはチャンス。これを機に、朝武さんとの関係をもっと近づけられるはずだ。

「その……俺を認めてくれないかな？」

「認める？それは……婚約者のことですか？」

「うん、それも含めてかな。前に言ったこと覚えてるかな？君のことを手伝わせて欲しいって。たしかに、最初は押し付けられただけの関係だったかもしれないけど、せめて普通の友達ぐらいにはなりたいんだ」

「今までひどく突き放しておったからな」

「あの態度はさすがにひどかったですね」

「ノーコメントで」

「仕方ないじゃない！有地さんを巻き込まないためにはそうするしか

思いつかなかったんだから！」

やっぱり、俺のことを気にかけてわざと冷たくしていたんだ。

そのことを朝武さんの口から直接聞けただけで嬉しかった。

「これからはそんな気遣いはいらぬ。友達なら助けるのは当たり前だからね」

「今は……普通じゃないですか？」

「普通の友達は、この程度で土下座なんかしないよ。土下座を求めたりもしない。だからさ、これからは畏ることも、変な遠慮も必要もない。一緒に呪詛を解いていこう」

俺は朝武さんに手を差し出す。

朝武さんはその手を見ながら、まだ迷っているように見えた。

踏み込み過ぎてしまったのかもしれないが、ここで手を引つ込めるわけにはいかない。ここを逃したら、このまま先に進むことができないと思ったから。

そんな時、朝武さんとはちがうところから三人分の手が伸びてきて、俺の手を握ってくれた。

「そうゆうことなら、俺たちも協力しないわけにはいかないな」

「はい！ 私たちもお友達ですからね♪」

「吾輩も力になるぞ！ 任せておけ」

幸彦が、常陸さんが、ムラサメちゃん、俺の手を取ってくれる。

こんなに嬉しいと思ったのは久しぶりだった。

それをみた朝武さんが恐る恐るゆっくりではあるが手を差ししてくる。

「ほら！ 芳乃様も！」

常陸さんがその手を掴み俺の手まで引つ張ってくる。

そしてゆっくりと、しかし確実に俺の手を握ってくれた。

「こ、これでいいのでしょうか？」

「バツチリですよ、芳乃様」

「あは、なんだかちよっぴり照れますね」

「吾輩は嫌いではないぞ、こうゆうの」

それぞれの顔を見ながら笑いあう。やっぱりいいな、こうゆうの。

ムラサメちゃん同様、俺も嫌いではない。むしろ好きぐらいだ。

俺は最後に朝武さんと目を合わせる。

「これからよろしく！朝武さん」

「……はい。よろしくお願いしますー！」

はにかんだ彼女の笑顔は、最高に可愛かった。

第十話 「幸彦と茉莉」

「ご主人ー！朝だぞー！」
「ぐえっ」

毎朝恒例になっているムラサメちゃんの伸し掛かり。初めの頃は朝から胃液が逆流しそうになったり、男の朝の生理現象に大打撃を受けたりと大変だったのに、最近では慣れてしまったのか何も感じない。

……慣れって恐ろしいな。

「おはよう。ムラサメちゃん」

「うむーおはようなのだ、ご主人」

朝の挨拶を終えると、ムラサメちゃんが何やら期待した目でこちらを見てくる。俺はすぐに、ムラサメちゃんの頭に手をやり、優しく撫でてあげる。

「えへへえ〜♪」

嬉しそうに目を細めるムラサメちゃん。なんだか甘えん坊な子犬みたいで可愛らしい。

いつの頃からか、ムラサメちゃんが頭を撫でることをお願いするようになり、今ではすっかり朝の習慣の一つになっている。ムラサメちゃん曰く、我慢するのをやめたらしい。何かきっかけがあったらしいが、何はともあれ、素直に甘えてくれるのは俺にとっても喜ばしいことだった。

「もうよいぞ、ご主人。ありがとう」

この笑顔を毎朝見れるんだ。もうずっと撫でてやりたい。

ムラサメちゃんに元気をもらった俺は一度大きく伸びをして布団から出るのだった。

「んん〜っよしー！今日も頑張るぞー！」

昨日、朝武さんと本当の意味で友達になれた。

今度こそ失望されないように気を引き締めてじいちゃんの稽古に挑むんだ。

着替えを済ませてリビングに顔を出すと、寝起きの朝武さんと遭遇する。

「おはよう、朝武さん」

「んにゅ……おはようございます……」

どうやらまだ完全に目が覚めているわけではないようだ。

俺を見つめること数秒。朝武さんは目をパチパチさせたあと、徐々に意識がはつきりしてきたのか、ようやく俺と目を合わせる。

「んうー……あ、有地さん……？」

「うん、そうだけど。眠気覚ましにお茶でもいれてこようか？」

「——ンッ！」

いきなり自分の頬を思い切り叩いた朝武さん。俺も驚いて思わずビクツとしてしまった。よく見ると頬には手のあとがくつきり赤く残っている。

かなり痛そうだったけど、大丈夫なのかな……。

「うう……痛いれす……」

若干の涙声。全然大丈夫じゃなかった。

朝武さんは頬に赤い手の跡を残したままキリツとした顔になる。

若干締まらないが、これが朝武さんの魅力でもある。

「おはようございます。有地さん」

「いや、固いつて。もつと普通に挨拶しようよ」

「安心してください。昨日遅くまで調べてたんです。普通の友達同士の挨拶を」

「は、はあ……そうなんだ？」

普通の挨拶を調べるってなんだ？おはようじゃない挨拶ってことなのかな？

俺の疑問をよそに、朝武さんは意を決したように小さく息を吐く。

「では、いきまますよ」

朝武さん……だから固いつて……。

「有地さん、ちやろー☆」

「……………」

「これは……どうすればいいんだ？」

「……………」

「ちや、ちやろー……」

ちやろーってなんだ？チャオとハローを組み合わせた何かか？

「どうですか？都会ではこの挨拶が流行っているとネットに書いてあったのですが……」

「え？そうなの？」

「え？」

「……………」

「……………」

「うっ……ううううわああああああんっ！見ないで！こんな私を見ないでください！」

朝武さんが頭を抱えて悶える。ここで笑ったら、まずいよなあ。

「もう嫌です！普通ってなんですか！友達ってなんですか！若さってなんですか！？」

朝武さんの叫び声が家中に響き渡る。

元気で何よりだが、真面目すぎるんだよな。

朝からなんだかほっこりした気持ちになった。

「幸彦、朝から呼び出してすみませんね」

「いえ、それは平気なんです……どうしたんですか？」

時刻は早朝。榎本さんから電話で呼び出された俺は、彼が経営している古本屋を訪れた。

「いやなに、興味深い資料を見つけましてね。幸彦の研究に役立つんじゃないかとおもったんですよ」

「興味深い資料？」

「ええ。これなんです」

榎本さんが見せてくれたのは、とても古い書物だった。

「これは、どこで見つけたんですか？」

「隣の骨董商が持っていたのをたまたま見つけましてね。彼もいつ手に入れたのか分からないようですが……こちらを見てください」

「っ、朝武の印章……ですか」

仕事柄、何度もその模様は見てきたのでわかる。大昔、穂織をおさめていた時代に使っていた印面と同じだ。

「はい。本物の可能性が高く、信ぴょう性もある資料ではないですか？」

俺はその書物を手に取ってページをめくる。保存状態はお世辞にもいいとは言えないが、読めないわけではない。内容は解読してみないと分からないが、ザツと目を通してみたところ、穂織の土地神について書かれているようだ。

「榎本さん、この資料ですけど——」

「お金は取りませんよ。なかなか話のわかる店主だったので、譲ってもらっただけですから。初めからそのつもりで幸彦を呼んだわけですし」

「ありがとうございます。助かります」

「しつかり研究なさい。彼女たちを救うためにも」

「はい」

穂織周辺の人たちからは、『イヌツキ』の地として忌み嫌われているが、どうやら榎本さんは独自の繋がりをもっているらしい。でないとな渉どころか、話すら聞いてくれない人間もいるのだ。

新しい資料が見つかるのはずいぶん久しぶりになる。正直行き詰っていたため、本当にありがたかった。

お誂え向きに今日はちようど開校記念日で休みだし、一日研究に費やせる。資料の読込みに過去の資料との比較、考察やまとめなど、やることはたくさんある。一応後で芳乃様や安春様に報告をしに行つて印面だけ確認してもらおう。

「また何か見つけたら教えてくれると助かります」

「わかっていますよ。幸彦も何かあったら相談しなさい。私も魚屋さ

んも、幸彦や巫女姫様、茉莉ちゃんのためならいつだって力を貸しますから」

心強い言葉をかけてくれる榎本さん。頼ってばかりはいられないが、本当に困った時には頼らせてもらおう。俺は榎本さんに感謝の言葉を言って足早に家へと戻るのだった。

じいちゃんとの稽古を終えて家に戻り朝食も済ませた俺は、特にすることがなくなってしまう。今日は開校記念日らしく、授業はない。

前の学校にいた時は、開校記念日には、ほとんどの生徒が千葉にある夢の国や近くの映画館などに行っていた。俺はそんな活発な方ではなかったが、友達とカラオケなんかに行った記憶がある。

「有地さん、洗濯物はこれだけで大丈夫ですか？」

「うん。大丈夫。あ、俺も手伝うよ」

まあ、そんな娯楽施設が穂織にあるわけもなく、常陸さんの手伝いでもしようかなと考えていたわけだ。俺の周りの人たちは休むという行為をしないからなあ。今度機会があれば一緒に遊びに行くのも楽しそうだな。

「では、神社の境内のお掃除をお願いしますか？」

「まかせて」

ちなみに朝武さんは今朝のこともあり、自分の心を落ち着かせたいというところで舞の練習に行っている。舞の練習で心が落ち着くとは、なんとも朝武さんらしい。

俺は常陸さんが洗面所の方へ向かうのを見届けてから神社に向かうことにする。

いつものように箒を持って境内に移動する。

なんだか境内での掃き掃除をしていると落ち着くんだよなあ。そういう性分なんだろうなあ。

「ご主人、向こうから来るのは幸彦じゃないか？」

「ん？お、本当だ。おーい。幸彦ー」

ムラサメちゃんが指差す方に目を向けると、確かに、幸彦が歩いてこちらに向かって来ていた。その手には風呂敷に包んだ何かと紙袋を抱えている。

「休日に掃き掃除なんて、感心じゃないか」

「他にやることなくってさ。幸彦は何しに来たんだ？」

「安春様か芳乃様に確認したいことがあってね。社務所にいるかな？」

幸彦は風呂敷を軽く掲げて言った。確認してもらいたいものは、風呂敷の中のものらしい。

「安春さんならいるんじゃないかな。朝武さんなら舞の練習をしているよ」

「そうか、舞の練習を邪魔しても悪いから社務所に寄ってみるか…。ありがとう。後で差し入れも持っていくから食べてくれ」

紙袋の中身は食べ物か。幸彦の差し入れなら期待できそうだ。

「だからしっかりと働いてくれよ」

「わかってるって」

幸彦は手をひらひらさせながら社務所へ向かっていった。

「さあ！差し入れのためにもさっさと掃除を終わらせちゃおうか！」

「手を抜いたら後で菓子と幸彦に叱られるぞ？」

「やだなあ、ムラサメちゃん。手を抜くなんて一言も言っていないじゃないか」

「本当か？目が泳いでいるぞ？」

ムラサメちゃんがジト目で見てくる。くっ！感のいい子は嫌いだよ！

仕方なく丁寧に掃除を始める。毎日常陸さんや安春さんが掃除しているし、穂織の人はポイ捨てもしないので綺麗になるまで時間はかからなかった。

「ほう、ちゃんと綺麗になってるね。感心感心」

「俺にかかればこんなもんだよ」

「手を抜こうとしてた者の発言には聞こえんな」

確認とやらが済んだ幸彦とともに家に戻る。お昼前で小腹が空いてしまったので、幸彦の手土産が楽しみだ。

「ただいまー!」

「ただいま戻ったぞ」

「お邪魔します」

「おかえりなさい。あら、幸彦も来たんだ」

朝武さんが出迎えてくれた。どうやら俺が掃除をしている間に舞の練習を終えていたらしい。すでに巫女服ではなく私服に着替えていた。

「芳乃様、お土産を持ってきましたよ」

「ほんとっ!?!」

朝武さんの目がキラキラと光る。

「芳乃は甘いものに目がないのだ」

「なるほど、それでか」

ムラサメちゃんが小声で教えてくれる。

朝武さんの反応からして、幸彦はいつもお土産として甘いものを買ってきてくれるのだろう。親戚のおじいちゃんみたいだな。

居間まで行くと常陸さんが昼食の準備に取り掛かろうとしているところだった。

「有地さん、おかえりなさい。おや、幸彦も一緒でしたか」

「うん。お土産を持ってきてくれたんだ」

「そうでしたか。では先にお茶でも淹れます……ね?」

幸彦は常陸さんが言い終わる前に、手に持っていた手土産を机に置き、彼女の目の前に歩み寄っていた。

「えつと……、幸彦?」

「失礼するよ」

幸彦はそう言うのと常陸さんの額に手を伸ばす。
常陸さんの額に手を当てること数秒、幸彦は大きなため息を吐いた。

「いつからだ？」

「えーと……今朝から？」

「はあ……全く、君ってやつは」

なんのことだかさっぱりわからない俺と朝武さんは顔を見合わせ、首を傾げる。そんな俺たちに向かって幸彦は言う。

「申し訳ありません、芳乃様、有地も。茉莉は早退させてもらいます」

「ちよつと幸彦！ワタシは平気——」

「平気なもんか。確実に38℃はこえてる熱さだ」

「ええ!?茉莉、体調悪かったの!?!」

「あ、あは。ばれちやいましたか……」

朝から一緒にいたのに全く気がつかなかった。言われてみれば少し顔が赤みを帯びているような。いや待て、38℃って普通に高熱じゃないか！

「大丈夫ですよこのくらい！すぐにご飯作りますから」

幸彦の制止を振り切っても台所へ向かおうとする常陸さん。しかし体がよろめき倒れそうになる。すかさず幸彦がその体を支える。

「あ、あれ？おかしいな」

「我慢がバレて張り詰めていた気が抜けたんだろう。無理するんじゃない」

「ど、どうしよう！救急車呼んだ方がいい？」

「落ち着いてください有地さん！まずは人工呼吸を……」

「人工呼吸をしてするというのだ……」

ムラサメちゃんの冷静なツツコミが入る。

「二人とも、落ち着いて。芳乃様、申し訳ありませんが姉さんに連絡を取ってもらえますか？後で茉莉の家に来てもらえるように」

「は、はい！」

「有地は水を一杯持ってきてくれ」

「わかった！」

幸彦からの指示に従ってそれぞれが行動を開始する。

常陸さんを一旦座らせる幸彦は、俺が持ってきた水を飲ませ彼女に語りかける。

「歩けそうか？」

「あ、あは。まだちよつと無理そう」

「そうか」

そう言うのと、幸彦は常陸さんに背中を向けしやがみこんだ。

「ほら」

「恥ずかしいからおんぶは……」

「自業自得だ、我慢しろ。それともお姫様抱つこのほうがいいのかい？」

「むう」

幸彦の言葉に若干不満そうにながらも、常陸さんは幸彦の背中に身を乗せる。

幸彦め……かつこいいじゃないか！頭の中で同じセリフを言ってみるが……だめだ！俺には到底真似できそうにない。

「みづはさんに連絡とりました！」

「ありがとうございます、芳乃様。申し訳ありませんが、あとの家事はお願いできますか？」

「任せて！幸彦は菜子をお願いします」

「うう。芳乃様…申し訳ありません」

「気にしないでいいから。菜子はゆっくり休んで」

「お大事にね、常陸さん」

「芳乃たちには吾輩がついておる。心配するな」

俺たちの言葉に、常陸さんは少しだけ照れたように笑うと、そのまま自宅へと帰って行った。

「うう。やっぱり恥ずかしい」

「これに懲りたら、ちゃんと休むことを覚えるんだな」

「くっ。幸彦に言われるのが一番悔しい」

茉莉をおんぶしながら常陸家へ向かう。当然、その姿はいろんな人に見られているわけで、商店街を通った時にはちよつとした騒ぎになってしまった。

多くの人がこれ食べて元気出せだの、風邪に効くからこれ持って帰れだの、茉莉のことが心配なのはわかるが、手がふさがっているのにいろいろ持たせようとしなくてほしい。

それだけ茉莉が商店街のみんなに好かれているという証拠なので、嬉しかったのはたしかだけど。

「今日、智代ともよさんはいるのか？」

「うん、いるはず」

「そうか、ならよかった」

常陸智代さん。茉莉のお母さんであり、おひとりしたやさしい女性。彼女も昔はくノ一として朝武に仕えていた過去を持っている。

俺は急ぎながらも、なるべく揺らさず、負担をかけないように気をつけながら茉莉の家を目指す。

体調が悪いのに我慢をしていた茉莉は、家に着く前に俺の背中で寝てしまった。相当無理をしてたんだな。

無事茉莉の家までたどり着きインターホンを押す。

茉莉が言っていた通り、家にいた智代さんが出迎えてくれる。

「あらあら。ごめんなさいね、幸彦くん。うちの子が迷惑をかけて」「気にしないでください。これくらい迷惑のうちには入りませんから。ほら茉莉。家に着いたぞ」

「んん……」

茉莉はかすかに反応して身じろぎしたものの、起きることはなかった。

「まったくこの子は。幸彦くん、申し訳ないんだけど、茉莉を部屋まで運んでくれるかしら」

「お安い御用ですよ」

智代さんに案内され家にながらせてもらい、そのまま茉子の部屋を目指す。昔は毎日のように茉子の部屋で遊んでたけど、あの誘拐事件を境に、家の前まで送るだけで、部屋に入ることはしなくなった。

「今お布団を敷いちやうから、少し待っててね」

茉子の部屋は相変わらず綺麗に整頓されていた。本棚には多くの漫画が置かれている。少女漫画から数は少ないがバトルものの少年漫画まで幅広く取り揃えてある。昔から茉子は漫画が好きだったよな、と自然と顔が緩んでしまう。

つといけない。女性の部屋をジロジロ観察するのは良くないな。

智代さんが敷いてくれた布団に茉子を横たわらせる。少し熱が上がってしまったのか息が乱れ汗もひどい。

茉子の症状を確認していると、智代さんは少し電話をしてくるとい部屋から出て行こうとする。

「何かあるんですか？」

「今日の町内会の会議には出られないって連絡を入れるだけよ。すぐ戻るから」

「それなら……俺が茉子の看病をしますんで、智代さんは会議に出てください」

なにか役に立ちたい一心で智代さんに提案する。

「でも……」

「これでも医者の子です。それにこのまま帰っても、茉子のことが心配で何も手につきそうにないので」

今朝方、榎本さんからもらった資料。今日はその研究をすることに専念しようと考えていたが、資料よりも茉子の方が大切だ。

「そうね……幸彦くんがそこまで言うならお願いしようかしら。私もなるべく早く帰ってくるから、それまでよろしくね」

どうやら俺たちは、智代さんが出かける直前に訪問してしまったようだ。俺の打診を受けた智代さんは急いで家をあとにした。

智代さんを茉子の部屋で見送った俺は、冷やしたタオルを用意するために一度立ち上がろうとする。その時、茉子が俺の服の袖をつかん

できた。

「行かないで、幸彦」

「……起きてたのか？」

「……………」

茉子は目を瞑ったまま頷く。

「わかった。ここににいるから、安心しろ」

改めて茉子の隣に腰掛けて、頭を優しく撫でる。茉子は少しくすぐったそうに笑うと、安心したのか数分後には規則正しい寝息をたてて眠ってしまった。

茉子が寝たのを確認してから水とタオルを用意し、彼女の額に乗せてあげる。

まだ顔は赤いが、先ほどのように苦しそうではない。この調子なら明日には良くなるだろう。

「働きすぎだからこんなことになるんだぞ。あんまり心配かけるなよ」

いたずら心で頬を突っついてみるが起きる気配はない。どうやら熟睡しているようだ。

頼り甲斐があつてしつかりした女性に成長したけど、寝顔は昔のまんまだな。

いつだったか、俺の布団に茉子もぐりこんできた時のことを思い出す。……だめだよめよう。恥ずか死ぬ。

そういえばお昼ご飯がまだだったことを思い出す。智代さんには後で報告するとして、台所を少しだけ借りることにする。

茉子並とは行かないが、俺も一応料理はできる。風邪をひいた時はやっぱりたまご粥が一番。ちょうど材料も揃ってるからな。

15分ほどで出来上がり、茉子の部屋まで持っていく。

「茉子、たまご粥作ったんだけど、食べれそうか？」

「んん……食べる……」

茉子の肩を優しく揺すって声をかける。目を覚ました茉子は手の上にあげる。

「ん」

「はいはい」

茉莉子の手を掴んで体を起こし支える。

「食べさせて」

「はあ。わかったよ。ほら、あーん」

「ふうふうして」

「子供か君は!？」

寝起きの茉莉子はものすごい甘えん坊になる。普段しつかりしている分、ほとんどの人がギャップに驚くだろうが、俺は茉莉子と古い付き合いなので慣れたものである。

仕方なくふうふうして余熱をとってから一口ずつ食べさせる。食欲はあるようで残すことなく食べてくれた。

「ごちそうさま。美味しかった」

「お粗末様でした。他になんかしてほしいことあるかい？」

「汗かいちやってちよつと気持ち悪いかな」

確かに、風邪の時は汗をなるべく拭き取った方が体も冷えないな。

「じゃあ、お湯とタオル用意するから、少し待っていてくれ」

「拭いてくれるの？」

「バカ言うなよ。さすがに自分で拭いてくれ」

「でも背中まで届かない」

「うまくやれ」

「ぶー」

「ぶーたれてもダメ」

「お願い」

「ダメだ」

「お願い」

「……………」

結局なかば押し切られるかたちで茉莉子の体を拭くことになった。もちろん背中だけという約束はしたが、俺も男である。緊張しないわけがない。

茉莉子はどういうつもりなのだろう。うら若き乙女が男に裸を見せるなんて、恥ずかしいに決まっているのに。

考えてもわからないことは仕方がない。俺は無心になることにした。

「じゃあ服脱ぐから、あっち向いてて」

「おう」

「見たら怒るからね」

「わかったから、早くしてくれ」

「じゃないと俺の心臓がもたない。」

「あは、幸彦ったら照れてるの〜？や〜らし〜」

「からかうな。茉莉がお願いしてきたんだろ」

「どうやらだいぶ調子がよくなってきたらしい。いつものからかうのが大好きな茉莉に戻ってきた。」

俺の後ろで茉莉が服を脱ぐ。衣擦れの音だけが聞こえてくる。

「もういいよ。お願い」

茉莉の声で振り返ると、絹のようになめらかで白く透き通った美しい茉莉の背中が目に入る。だが、俺の目に入ってきたのはそれだけではなくて……。

「右肩の傷、跡残ってたんだな」

「うん」

「……ごめん。俺のせいで」

「いいから、早く背中拭いて。体冷えちゃう」

言われた通り、茉莉の背中についた汗をタオルで拭き取っていく。

茉莉の右肩の傷は、あの日、あの誘拐事件の日にできたものだ。俺が弱かったから、茉莉は傷ついた。こんなにも綺麗な体に、傷をつけてしまったのだ。

俺の気持ちを感じ取ったのか、茉莉は前を見ながら俺に語りかける。

「ワタシにとってこの傷は、大切なものなんだ」

「大切？」

「うん。だってこの傷は、幸彦がワタシを助けてくれた証だから。あのとき幸彦が身を呈してワタシを守ってくれたから、この傷だけで済んだ」

俺はただ黙って茉子の言葉に耳をかたむける。

「幸彦が助けてくれて嬉しかったけど、同時に悲しかったんだ。ワタシのせいで幸彦が傷ついちゃったから。あのとき心に誓ったの。幸彦に守られるんじゃないやなくて、隣に並び立てる大人になるんだって。だから厳しい訓練にも耐えてこられた。だってワタシは、幸彦のことが――」

「茉子。その先は言わないでくれ」

「……あは。ごめんね幸彦。ワタシちよつと熱でおかしくなってるのかも」

茉子はそれ以上何も言うことはなかった。

茉子が抱いている気持ちに、俺は多分気付いている。

その気持ちはきつと、俺と同じだから。

でもその気持ちを受け入れてしまったら、もう後戻りはできないだろう。

俺たちにはまだ、やらなければいけないことがある。解かなければいけない問題を抱えている。

「いつか……」

俺は言葉を絞り出す。

「いつか必ず、全て解決してみせる。だからそれまで待っていてくれないか？」

これが今の精一杯の気持ちだ。

確かな目標と、それを実現させるための覚悟。有地が芳乃様に対して真摯に向き合ったように、俺も茉子と自分に向き合うべきだと考えるようになった。

だからこそ、自分の気持ちを、言葉を絞り出せた。

いつになるかはわからないけど、必ず、気持ちを伝えるのだと、その覚悟を茉子に伝えるために。

「うん。……待ってるから」

言葉もなく、俺たちは二人だけの時間を噛みしめる。茉子は俺に身を任せ、俺は茉子の汗を優しく拭う。いつものように心地よい沈黙が続いた。

「ただいま〜」

「お邪魔します」

玄関の方から智代さんと姉さんの声がする。

予想より二人とも早かったな……なんて呑気に考えてる場合ではなかった。

茉莉は上半身をあらわにして、その背中を男の俺が拭いているのだ。

成り行き上、仕方なかったとはいえ側から見ればどう思われるだろうか。

まずいと思ったが時すでに遅く、無情にも茉莉の部屋のドアが開けられる。

「お、おかえりなさい。早かったですね……」

「あら〜、お邪魔だったかしら？」

「幸彦、患者に手を出すとはいい度胸じゃないか……」

智代さんが面白そうなものを見るかのようにニコニコしているのに対し、姉さんの笑顔は冷え切っていた。

巷じゃ、幸彦は怒ると鬼になるなんて言われているが、鬼の姉もまた鬼である。正直、この鬼より怖いものないのではないだろうか……。

「ちがうんだ姉さん！これには事情が……！」

「そうなんです、みづはさん！汗を拭こうと思ったのですが背中まで届かなかったのでワタシがお願いしたんです！断じていいいいいいやらしいことをしていたわけではははは」

茉莉が顔を真っ赤にしながらも俺をかばってくれる。

姉さんは茉莉の言葉に耳を傾けると、俺の肩に手を置いた

「幸彦……」

「……はい」

「アウトだ！」

「理不尽っ!!」

姉さんからの重い一撃。あの駒川みづはから殴られるのなんて、家族である俺だけの特権じゃないだろうか？全然嬉しくない。

魚海のおやしさん並みのパンチをくらい意識が遠のく。

「あら残念。幸彦くんがお婿さんに来てくれたらおばさん嬉しいのに」

「もうーおかあさんー!」

智代さんがとんでもないことを言った気がしたが、それに反応する余裕はない。

今だけは、なんだか有地の気持ちかわかる気がする……。

俺の意識はここで途絶えた。

「よし！洗濯物取り込み完了!」

常陸さんがいない分、俺と朝武さんが分担しながら家事をこなす。

洗濯物は常陸さんが帰る前に終わらせていたので、俺は取り込むだけで済む。ふと、洗濯物が干してあった場所の地面に光る何かを発見する。

「これって、たしか崇り神を倒した時に俺が拾ったやつか。ポケットに入れてばなしだったんだな」

何故だかわからないが、気になって拾ってきてしまった綺麗な欠片。

この欠片が俺たちの運命を左右することになるとは、この頃の俺は知る由もなかった。

第十一話「告白」

玉石ぎよくせきから生まれし神と、獣から生まれし神。

それが、穂織の山の神が産み出した神なのだと、榎本さんから貰い受けた書物には書かれていた。

玉石から生まれし神は、黄金色の髪で見た者すべてを魅了するほどの美しい姿をしており、人を慈しむ心を持っていた。

獣から生まれし神は、白くて大きな勇ましい山犬の姿で、人間に対しては厳しいが、その力で穂織を厄災から守っていた。

「二柱の神が、穂織を守っていた……か。土地神から授かったとされる叢雨丸と何か関係があるのだろうか？」

徹夜で解読を進めた結果、新たに分かったことは二柱の神についてだけ。虫食いやカビなどのせいで朽ちた箇所が予想以上に多かったため、これでも完璧に解読できたとは言えないが、新たな情報はより多くの考察を生み出してくれる。

「お疲れ様。コーヒー淹れてこようか？」

「ああ、すまない……いや待て、菜子。いつから俺の部屋に居たんだ？」

「三十分くらい前かな？相変わらず、集中すると全然気づかないよね」
呆れた顔で菜子が答える。三十分も前から一緒にいたのに気づかないとは、大変失礼なことをしてしまった。

「悪い。自分でも気をつけているんだけど、目の前に資料があるとうしてしな。体調の方はもう大丈夫なのかい？」

「うん、バッチリ♪誰かさんが看病してくれたおかげでね」

「そうか。そう言ってくれると、その誰かさんも喜んでるだろうな」

「あは。ありがとね、幸彦」

お礼を言われるほどのことはしていないが、ありがとうと言われたら嬉しくなるし、自然と口元も緩んでしまう。まあ、最終的に姉さんの鉄拳制裁に倒れて最後まで面倒は見れなかったけどな。

「それで、なんでここにいるんだい？芳乃様のところにはいかななくて

よかったのか？」

「それが……いつも通り芳乃様の家に行ったんだけど、『病み上がりなんだから菓子は休んで』と言われちゃって」

「それで手持ち無沙汰になったから俺の家に来たわけか。家でゆっくり休むという考えは……なかったからここにいるんだよな」

「あは、そうゆう事。あと言伝も頼まれてるの」

「言伝？」

「有地さんが祟り神退治の時に拾った欠片を調べて欲しいって、ムラサメ様が」

ムラサメ様が調べて欲しいと言い出したという事は、欠片とやらから何か感じ取ったのだろう。さらにその欠片を見つけた場所が祟り神を退治した場所となれば、呪詛関係のものである可能性が高い。

「ムラサメ様が言うからには、ただの欠片ってわけじゃなさそうだな。姉さんには……」

「もう伝えてある」

「さすがだな。芳乃様たちはいつこちらに？」

「そろそろだと思っただけど——」

ちようどその時、家のチャイムが鳴り来客を知らせる。

「来たみたいだね。行こうか」

ここに来て呪詛の謎を解くカギになるかもしれないものが立て続けにでてくるなんて。これは偶然なのか、それとも有地が穂織に来たことで運命の輪が回り出したのか。

このチャンスを逃すわけにはいかない。俺は一際気を引き締めて、有地たちのところへ向かうのだった。

「ここが駒川診療所か……。幸彦はここに住んでるの？」

「そういえば、有地さんは初めてでしたね。駒川診療所はみづはさんがいつでも対応できるように奥が居住スペースになっているんですよ」

「へえ〜」

確かに、みづはさんって多忙だからな。こういう造りにしないと家に帰る事もままならないだろう。

チャイムを押すと中から幸彦と常陸さんが顔をだす。

「いらっしやい。茉莉子から話しは聞いてるよ」

そう言うのと俺たちを家の中に招き入れる。そのまま幸彦についていき案内されたのはみづはさんの書斎だった。

「おはよう諸君。待っていたよ。早速だけど、有地君が見つけたという欠片を見せてはもらえないだろうか」

「はい。これなんですけど」

俺はポケットから例の欠片を取り出し机に置く。

幸彦とみづはさんはそれを興味深そうに眺める。

「なるほど、確かに微力だが霊力を秘めているな」

「それだけではないのだ。その欠片からはなんだかご主人と似たような気配を感じる」

「有地と似たような…ですか。有地はどうしてこれを拾ったんだ？」

「どうしてって言われても、ただ気になったからとしか」

「気になったか。つまり何かしらに引き寄せられてる可能性もあるな。ふむ……」

幸彦は何やら考え込むと、次に朝武さんと常陸さんに目を向ける。

「二人はどう感じる？」

「ワタシにはただの綺麗な欠片にしか見えないかな。芳乃様はどうです？」

「私は……そうね。強いて言うならなんだか安心するような、そんな感じがする」

そう言いながら、朝武さんは欠片に手を伸ばす。瞬間

「きゃっ！」

何かに弾かれたように手を離す朝武さん。

「芳乃様!?!大丈夫ですか?」

「平気、ただちよつとビリつとしただけだから」

「また……ビリつとですか」

幸彦は常陸さんに目配りを見ると、常陸さんもそれに頷いて答える。どうやら二人には何か心当たりがあるみたいだ。

朝武さんはもう一度、今度は慎重に欠片に手を伸ばす。そして欠片を掴むと光に透かして覗き込む。

「でも、本当に綺麗な欠片ですよ。まるで水晶や宝石の欠片みたい」

「芳乃が触っても耳が生えることはないか。穢れもないようだし、呪との関わりは薄いかもしれんな」

「そうだね」

「ムラサメ様はなんと言ってるんだい?」

一人だけムラサメちゃんが見えないみづばさんに、ムラサメちゃんの手を伝える。

「確かに、そうかもしれないですね。でも、これで幾つかの問題がはつきりしたね。この欠片の大元になっているものがあるのか。なぜ祟り神を退治した場所に落ちていたのか。この欠片以外にもたくさん存在しているのか。これらの問題を一つずつ解いていけば何かわかるはずだよ」

みづばさんがこれから解いていくべき問題を提示してくれる。少しだけ前に進んでいけたような、そんな気がした。

そんな中、幸彦だけがまだ何か考え込んでいるようだった。

「綺麗な欠片。水晶か宝石のよう。祟りに関係あるかもしれないもの。叢雨丸に選ばれた有地を感じるもの。穂織の山で玉石から生まれ出た神様。もしかすると……いや、でも……」

顎に手を当てながらブツブツとつぶやいている幸彦。

「幸彦、何かわかったのかい?」

「いや、まだ仮説の段階だからなんとも言えないな。姉さんたちの思考の妨げにもなりかねない」

「わかった。何かあれば相談すること。いいね」

「わかってるよ姉さん。じゃあ早速相談んだけど、今日は学校を休

んで調査に——」

「却下だ。学生の本分は学校での勉強だ。それを疎かにすることは許されない」

「ぐぬぬ」

「調査なら吾輩が行こう。山で欠片を探せば良いのであろう？吾輩なら欠片の気配を感じる事ができる。それに霊体だからな。休憩も必要ない分効率もいい」

ムラサメちゃんが名乗りを上げる。彼女が言う通り効率はいいだろう。

「ムラサメちゃん、無茶はしないでよ。暗くなる前にはちゃんと戻ってくるんだよ？知らないおじさんについて行っちゃダメだからね？」
「ご主人！吾輩を子供扱いするでない！これでも立派なれでいなのだぞ！」

「ああ、ごめん。つい」

俺からすれば、ムラサメちゃんって普通の女の子って感じだから。

「ムラサメ様、よろしいのですか？」

「うむ。吾輩ももつと皆の力になりたいと思っていたのだ。今までは見ていることしかできなかったからな。むしろ任せてくれたら嬉しいぞ」

「わかりました。お任せします。もし欠片を見つけたら有地か俺に知らせてください」

「うむ。了解だ」

ムラサメちゃんは誇らしげに胸を張った。何百年と見守ることしかできなかった彼女にとって、朝武さんたちの役に立てることは本当に嬉しいことなのだろう。

「では、俺と姉さんは引き続き欠片の調査を。姉さん、欠片のことは任せていいかな。俺は文献から当たってみる」

「その方がいいだろう。考古学的知識は幸彦の方が上だからね。私は科学者の目線で調べさせてもらうよ」

改めて、幸彦とみづはさんの凄さを実感する。専門的な研究をしているとは聞いていたが、このことで俺が手伝えることはないだろう。

「さあ！学生諸君は早く学校へ行きたまえ。今なら二時間目の授業には間に合うだろう」

みづはさんの掛け声によりこの場は解散となり、学校へと向かうことになる。

診療所を出たところで朝武さんの足が止まった。少しだけ眼を伏せた後に視線を俺に向ける。

「朝武さん？どうしたの？」

「……有地さん。今日の夜、夕食が終わったら私の部屋に来てください。お話があります」

女の子から部屋に来てくださいと言われれば、舞い上がってしまうのが男として当たり前の反応だろう。だが、俺を見つめる彼女の眼は真剣で、邪な気持ちになどならなかった。

「……有地さん。今日の夜、夕食が終わったら私の部屋に来てください。お話があります」

芳乃様の緊張した声から、どうやら朝武の呪いについて有地に打ち明ける決心をしたのだと理解する。

内容が深刻であるだけに、有地に話すことを避けてきた芳乃様だが、これまでの有地の態度や姿勢を近くで見えて覚悟を決めたのだろう。

あとは有地が呪詛の詳しい内容を聞いてどう思うかだが、こればかりは本人次第になるだろう。俺たちができることはないので、今まで通り見守るしかない。

「わかった」

有地も芳乃様の気持ちを感じたのだろう。真剣な表情で頷いた。

「では急ぎましようか。もうすぐ二時間目が始まってしまいます」

「そうだな。あんまり遅くなると姉さんにまたどやされる」

茉莉がいつも通りの口調で登校を促し、俺も茉莉の発言に便乗する。

ここで今すぐ話をするわけではないし、変にかしこまる必要もない。

これから有地が聞く話は辛い現実かもしれないが、だからこそ今は学生の本分を果たすべきなんだ。

みんなが崇り神と、運命と戦わなくてはいけない分、日常生活の平和は何としても守つていなくては。そう思った時、どこかからかけられる嫌な視線を感じとる。

「すまない。先に学校へ行つてくれ。忘れ物をしてしまった」

有地と芳乃様に気取られないように言うと、茉莉に一瞬だけ視線を向ける。

茉莉はそれで理解してくれたらしく、小さく頷くと、芳乃様たちに声を掛ける。

「まったくドジですね。芳乃様、有地さん、幸彦は置いていつて早く行きましょう」

「ぐっ。棘のある言い方だな」

「忘れ物なんかするからですよ」

「忘れたものは仕方ないだろ」

「もう、幸彦も茉莉も子供みたいな言い合いしないの！」

「あはは、二人はほんと仲いいよな」

どうやら二人に気づかれずに離れられそうだな。

憎まれ口を叩きながら、俺は視線が向けられていたと思われる場所に向かった。どうやら視線は芳乃様を追っているようで俺の動きに勘付いてはいないようだ。

一キロほど離れた山の中に、その男はいた。

草の中でうつぶせになり、望遠レンズを付けたカメラを覗き込んでいる。

おれは気配を消してそいつに近付き、背後から相手の動きを封じるために関節を極めて頭を地面に押し付ける。榎本さんに教えて貰っ

た固め技である。

男はなんとか逃れようと身悶えるが、この程度で逃すような柔な鍛え方はしていない。

「動くんじゃない。下手に動くと関節が外れるぞ?」

俺が低い声で忠告すると、男は観念したのかそれ以上動かなくなつた。

「なぜ芳乃様を監視するような真似をした? 答えろ」

「……………」

「だんまりか。早く答えた方が身のためだぞ」

関節が外れない程度の痛みを与えるため手の力を強める。すると男の体の中からカチツという音と時計の針のような規則正しい音が聞こえてきた。まるで時限爆弾が作動したような……。

嫌な予感がした俺は、咄嗟に男を突き放し、木陰に身を隠す。

瞬間、鈍い爆発音と共に男の体は粉々に弾け散つた。

「つ!? こんなところで自爆だど?」

あと数秒、男を突き飛ばすのが遅れていたら無事ではすまなかつただろう。

木陰から慎重に身を乗り出すと、男の元へと向かう。しかしそこには男の肉片の代わりに肌色のプラスチックが転がっているだけだった。

「傀儡……いや、ただのマネキンか?」

近くには先ほどの男のようなマネキンの頭が転がっていた。

「これはどうやら、本格的に調べる必要があるな。」

呪詛の秘密がわかるかもしれない大事な時に、厄介ごとは次から次へと降りかかってくる。今回の件は、専門家に相談した方がいいだろう。

俺は散らばったプラスチックの破片を一つ手に取りポケットにしまうと、一旦学校へと向かうのだった。

診療所の前で言われた通り、夕食を食べ終えた俺は朝武さんの部屋へと向かった。ドアをノックし中に入ると、朝武さんが俺を待っていた。

「お待ちしてました、有地さん」

俺は朝武さんの前に腰掛ける。

朝武さんの部屋は想像どおり綺麗に整頓されている和式の部屋であったが、所々に可愛らしい小物が置かれている彼女らしい部屋だった。

朝武さんは一度姿勢を正してから話し出した。

「最初に、有地さんにお渡ししたいものがあります」

そう言っただけで彼女が取り出したものは、数冊のノートだった。

「これは？」

「朝武の呪いに関する資料です。みづはさんと幸彦から借りてきました」

ノートを手に取り中を確認すると、手書きでわかりやすく呪詛やその歴史について書かれてあった。

「すべてお話しします。朝武にかけられた呪いについて」

朝武さんは真っ直ぐ俺の目を見つめてくる。その目を見ればわかる。彼女がどれだけの覚悟で俺に話そうとしているのか。それはつまり、祟り神や獣の耳以外にも、朝武家が抱えている呪いが存在しているということだ。

「呪いについて話す前に、有地さんは穂織の伝承をどこまで知っていますか？」

「伝承って叢雨丸の話だね。たしか妖にそそのかさされた隣国の大名が攻めてきて、神様から叢雨丸を授かって、妖を見事に退治。隣国の大名も退けたって話だっけ」

「概ね間違っはいいません。その伝承は、本当にあった話なんです」

「まさか、そんなおとぎ話みたいなの……」

そう言つてハツとした。俺はこの穂織に来てから何度となく物語以上の奇怪な出来事に遭遇している。それに叢雨丸が実際に存在している時点で、伝承が事実を語っていることが証明されたようなものである。

「だいぶ脚色されている部分もあるので初めから説明すると――」

朝武さんは、呪いのきつかけとなつた出来事を俺に説明してくれた。

朝武家の中で家督争いが発生したこと。

当時の長男が傍若無人の考えなしたつたこと。

次男は頭脳明晰で思慮深く、周りから信頼されていたこと。

弟に家督を取られそうになつた長男が謀反を起こしたこと。

大きな厄災が穂織を襲つたこと。

叢雨丸が誕生した経緯。

そして……。

「結果、長男は次男に敗れました。ですが長男は亡くなる前に生き残つた朝武の人間を恨み、呪詛として残しました。呪いには種類があつて、一つが、ここ数百年間、朝武の子供には一度も男の子が生まれていないこと。もう一つは、朝武の当主は皆短命だということ。長くても五十歳が限界なんです」

朝武さんの口から淡々と語られる呪いの事実、俺の頭は混乱していた。

数百年間一度も男の子が生まれていない？

短命で長くても五十歳が限界？

「どうして、そんな……」

「恐らく、朝武の血を断絶させるためだと思われます。私の母も、少し前に亡くなりました。そしてそれは、私も同じ」

俺は絶句してしまふ。朝武さんは俺が想像していたよりもはるかに重い宿命を背負っていたのだ。慰めの言葉など出てくるはずがない。どれだけ言葉を飾ろうと、呪いというものの自体をどうにかしない限り、彼女の運命は決められてしまつているのだ。

きつとひどい顔になつていたのである。朝武さんはそんな俺の顔

を見て努めて明るく言ってくれた。

「今すぐどうこうなるわけではありません。私も健康に問題はありませんし、子供を産まずに亡くなった方もいません」

「そっか」

そんな言葉しか出てこない自分が不甲斐なかった。

「私は、この呪いを必ず解かなければいけないんです。じゃないと……。いえ、今の言葉は聞かなかったことにしてください」

なんでだろうか。必ず呪いを解かなければいけないと口にした彼女を見た時、とても危ういと思った。

「とにかく、これが……私が隠していたことです」

今までの俺の行動を振り返る。朝武さんが抱えているものを知った今、無神経な発言や行動があつたのではないかとひどく後悔した。

「……ごめん、嫌な話をさせちゃって」

「違います。私が有地さんに知って欲しいと思ったんです。だから、謝らないでください。有地さんにはこれからも、なんといいですか、今まで通りのままでいて欲しい……です」

少しだけ顔を赤らめる朝武さん。

ヤバい、なんかちよつとドキツとした。同時に彼女が今まで隠してきた意味がなんとなくわかった気がした。

最初からこの話を聞かされていたら、きっと俺は同情してしまう。腫れ物に触るような態度になっていたかもしれない。そして：朝武さんの事情を勝手に背負って、責任感のようなものからお祓いに参加していただろう。

きつと朝武さんはそれが耐えられなかったのだ。

誰かに自分の宿命を勝手に背負われるのが。

「うん。そうだね。ありがとう朝武さん。俺に話してくれて」

俺を信用してくれて。

「よーし！やる気出てきたぞー！」

「あの、有地さん。ですからあまり気を張り切りすぎないでも——」

「わかってる。でも、呪いをどうにかすることは俺のためでもあるし、何より」

俺は朝武さんの目を真っ直ぐ見つめる。彼女が俺にしてくれたように。

「友達が困っていたら助けてあげたい。本当の友達になれた今だからこそ、心からそう思うんだ」

そうだ。俺が朝武さんを助けたいと考えたのは、彼女の境遇や宿命を哀れんだからではない。

彼女の優しさを知ったから。彼女の笑顔を守りたいと考えたから。だから俺は彼女のために何かしようと思ったんだ。

目的は何も変わらない。

「だからさ、朝武さん。これからも一緒に探そう。呪いを解く方法を。俺たちと」

俺だけじゃない。常陸さんも幸彦も安春さんもムラサメちゃんだってみんな想いは一つなんだから。

「……そうですね。少し被害妄想が過ぎたのかもしれない。改めて、私からも宜しくお願いします」

お互いに笑いあう。少し前までは、朝武さんと笑いあうなんてできなかった。

そう。少しだが確実に俺たちは前に進んでいるんだ。

先の見えない長い戦いになるかもしれないが、明るい未来を迎えるためにこれからも進み続ける。朝武さんとなら、それができる気がした。

夕方。日が暮れて暗くなってくると、商店街の人通りはぐんと減る。だいたい19時を過ぎる頃には多くの店が閉まってしまう。

俺が向かっている魚屋「魚政」も例外ではない。

ちようど店の暖簾をしまおうとしている魚海の親父さんが俺に気

づいて声をかけてくる。

「おう、幸彦。もう店仕舞いだぞ。なんか用か？」

「おやじさん、折り入って相談があります」

「給料は上げないぞ？」

「お金の相談なんかしませんよ」

「冗談だ。そう怖い顔するなよ。ちよつと待ってろ」

そう言うのと暖簾やのぼりを店の奥にしまい出す。

「あつと、そうだ……相当厄介な相談だろ？今のうちに榎本呼んでこい」

「……まだ相談内容は言ってますけど」

「ばーか。何年お前の面倒見てると思ってるんだ。んなもんお前の顔を見りゃわかるっつの」

相変わらずこの人の直感力はすごいと思う。野生の感ともいうのだろうか。ありがたく先に榎本さんのところに向かう。

榎本さんも魚海のおやじさんと同じく、俺の顔を見ただけで察したらしく、俺が話しかける前に『すぐに向かいますから魚海のところで待ってなさい』と言ってきた。本当に頼りになる人たちだ。

榎本さんを連れてくる頃には店の片付けも終わっていて家の中に案内される。

「それで、相談つてのはなんだ？」

「私と魚海を呼んでいると言うことは恐らく状況は芳しくないのでしょうね」

「単刀直入に言いますと、お二人の力をお借りしたい」

今日、芳乃様を監視していた人形。それを操っていたであろう人物について、詳しく調べることが出来る専門家が、この二人だ。

呪詛を解くカギになるかもしれない欠片の調査と芳乃様を付け狙う輩の捜査。どちらも重要案件であり、早期解決が望ましい。

二兎追うものは一兎も得ず。どっち付かずにならないようにするにはこれが最善手だと考えたのだ。

「今日、芳乃様を監視している怪しいものを見つけました。その残骸がこちらです」

俺は拾ってきたマネキンの破片を二人に見せる。

「怪しいもの？人じゃなかったのか？それにこいつはプラスチックだぞ？」

「つまり、何者かが人形を操って巫女姫様を監視していた、ということですか？」

俺が取り出した破片を手に取り唸る魚海のおやじさんに代わり、榎本さんが素早くことの次第を推測する。

頭の回転の速さはさすがとしか言いようがない。

「はい。しかも周辺に操っている紐や遠隔操作するような機械は落ちていませんでした。それなのに人形はまるで生きているかのように動いていた。おそらくですが、何者かの超能力的な力によって人形は操られていたのではと、俺は考えています」

俺の発言に二人の目付きが変わる。初めて二人と出会った時そんな目をしていた。魚屋さんでも古本屋さんでもない。彼ら本来の目だ。

「改めて、協力をお願いします。非公式諜報機関「情報局特別班」元局長、魚海政重さん。同じく元参謀、榎本昭二さん」

第十二話 「レナさんの気になるあの子」

「それでは、今日は失礼します。ありがとうございました」
「おう、気をつけて帰れよ」

結論から言くと、魚海のおやじさんも榎本さんも調査の協力に快諾してくれた。

◇◇◇

「特班」の名前を出したのは一種の賭けだった。俺はじつと魚海のおやじさんの目を見つめる。

『まさか特班の名前がこんなところで出てくるとはな。幸彦、お前は今回の件にアストラル使いが関わっていると言いたいのか？』

『はい。それも、人を金で雇ったり、時限爆弾なんてものを用意できるほどの人物です。それなりの富豪、もしくは企業絡みではないかと考えています』

『その可能性は十分あるでしょう。なんにせよ、巫女姫様は相当厄介な奴に目をつけられたようですね。どうしますか、局長』

『元、局長だ。引退した今、俺はただの魚屋でしかない。だが……』

おやじさんは腕を組んだまま考え込むと、カツと目を見開く。

『……巫女姫様に手を出そうなんて、穂織に生まれたもんには喧嘩売ってるようなもんだろ。それにアストラル能力の悪用と聞いちゃ見過ごせねえ。榎本、知恵を出せ』

『まあ、辞めた身でどこまで動かせるかわかりませんが、巫女姫様のためです。脅し文句の一つや二つ、用意しますよ』

『へっ。それでこそ俺の参謀だ』

『元、ですけどね』
二人は小さく笑うと、俺に視線を向ける。その目はとても活き活きしていた。

『不埒ものの捜査は俺たちがなんとかしてやる。幸彦、お前はお前にできることをやれ』

『何かわかれば随時報告します。幸彦、あなたは安心して呪詛を解くことに専念しなさい』

こんなにも頼りになる人たちが俺の師匠で誇らしい。ここまで背中を押されたんじや絶対に呪いを解かなくてはな。俺は確固たる意志で頷いたのだった。

◇◇◇

芳乃様を嗅ぎ回る者のことは、当分は経過を見つつ、警戒していかないだろう。あとは魚海のおやしさんや榎本さんからくる情報を待つしかない。

二人が所属していた国の非公式諜報機関「情報局特別班」通称特班とは、その名の通り、公にできない事件を調査、解決していく秘密組織だ。主にアストラル使いが起こす事件の解決を行ってきた。

アストラル。

それはかつて、超能力と呼ばれていた超常的力のことである。アストラルに関しては専門外なので詳しく知っているわけではないが、たしか、20世紀末頃に発見された粒子「アストラル」が人の脳波と連動することで様々な力を生むというものだ。

アストラルは現在、生活の中で活かせないか研究が進められていて、暮らしを便利にしてくれるかもしれないものである一方、アストラル使用による犯罪も横行しているため、なかなか人々に受け入れられてはいない。

今回の件も、そのアストラル能力を悪用していると思われる。特班の力を借りられることは本当にありがたい。穂織出身の二人が特班になり、故郷に戻ってきて俺と知り合った一連の経緯も、もしかしたら運命だったのかもしれない。

家に戻った俺は、もう一つ調べたいことがあったので、ケースに入れた欠片を姉さんから借りて自室に戻った。

ケースを机に置きフタを開けると、ただの石にしては綺麗な欠片が目に入る。

何故だろう。芳乃様がこの欠片を見てなんだか安心すると言っていたように、俺もこの欠片をみるとどこか懐かしい感覚になる。

一旦頭を振り思考を整理する。今は検証に集中しよう。

「祟り神を退治した場所に落ちていた欠片。昼間の芳乃様の反応から推測するに、きつと俺にも……」

そつと欠片に手を伸ばす。そして表面に指が触れようとしたその時、身体中を電流が流れたかのような刺激が襲う。

「っ……やはり、彼女と握手しようとしたときに感じたものと同じだ」

はじめはただの偶然かとも思っていたが、ここまでくると何かしらの関係があるとみて間違いないだろう。

「レナ・リヒテナウアーさん。海外から来た彼女が、祟り神と何の関係があるというんだ？」

椅子に深くもたれ掛かり息を吐く。

わからないこと。やらなければならぬこと。調べなければならぬこと。どれも山積みではあるが、一つずつやっていくしかない。

まずは呪詛について、一から資料を調べなおそう。

俺は寝るのも忘れて、研究資料に目を通すのだった。

お父さん、お母さん、それからお祖父ちゃん。お元気ですか？

レナはとつても元気です！

日本に留学してから数週間が経ちますが、日本も、穂織の街も、お世話になってる志那都荘も、どれも素晴らしいところであります。もし日本に旅行することがあるのなら是非に志那都荘に泊まって欲しいですよ。タタリにオンネンといいこと尽くしですよ♪

宿でのお仕事は毎日大変ではありますが、オカミや大旦那さん、板長さんに支えられながら頑張っています。

友達もたくさんできました。

マコにユキヒコ、マサオミにコハルにレンタロウ。お祖父ちゃんの話していた巫女姫様にも会えました！みなさんいい人です。マコとユキヒコは巫女姫様に仕えているらしいのですが、二人とも大人っぽいというか、私に対しても優しく接してくれますし、マサオミとコハルとレンタロウは私がお世話になっっている志那都荘の旦那さんのお孫さんで、いつも私を笑わせてくれます。

穂織に来てから知り合った中で、少しだけ気になっている子がいます。その子は街でたまに見かけて声をかけるのですが、私に気づかないのかすぐに何処かへと消えてしまいます。初めて会った時からその子の目はどこか寂しそうで、どうしても放っておけないのです。なので、これからもめげることなく声をかけ続けたいと思います。

お父さんたちも体調には気をつけて。

レナ・リヒテナウアー

「送信つと。オカミがパソコンを貸してくれて助かりました！」

「いえいえ。レナさんが来てくれたおかげで宿の運営も随分楽になりましたから。このくらい当たり前ですよ」

女将が使わなくなったパソコンを貸してくれることになったので、仕事かひと段落したあとに動作確認も兼ねて家族にメールを送ることになった。

私が働くことになった宿、志那都荘の若女将の猪谷いのたに心子もっこさん。おっとりとして物腰柔らかな優しい人だが、怒らせると怖い。とても怖いです。

「あとはしっかりとした日本語を学んでいきましょうね」

「うう。申し訳ないであります…」

志那都荘に住み込みで働くことになり、用意されたこの部屋。

憧れの畳タタリがある部屋は、今ではすっかり私のお気に入り場所になっていく。この部屋で毎晩、仕事終わりに女将が日本語の勉強を教えてください。私は恵まれていると心から思う。

メールの中で書いた、私が気になっている子。

私は彼女の名前も知らない。どこに住んでいるのかも、何をしてい

るのかも、何も知らない。それなのに、初めて彼女を見かけた時には感じた。どこか私に似ていると……。だからだろうか？彼女とちゃんと話してみたいと思っただけなのよ。

「それでは今日はお疲れさまでした。明日からもまたお願いしますね」

「はい！オカミ、おやすみなさいませ」

オカミが部屋から出て行き、私一人になる。

少しだけ感じた寂しさを払うように、私は声を出す。

「そうです！明日は巫女姫様をご飯に誘ってみましょう。おなじかまのめしを食べれば仲良くなれるとお祖父ちゃんも言っていました。その時にユキヒコにあの子のことについても尋ねてみましょう。ふっふっふ。なんだかやる気が湧いてきましたですよ！」

我ながら名案だ。自画自賛しながら寝る準備に取り掛かる。

宿屋の朝は早い。しっかりと寝て食べて体力をつけなければならぬのだ。

「ふふ♪明日が……。楽しみ……。です……」

布団に入るとすぐに睡魔が襲ってきて、私はあつという間に夢の世界へと眠りについたのであった。

「あ—————!!!しまった—————!!!」

「うるさいな。どうしたんだよ」

午前の授業が終わり昼休みに入った時、廉太郎が頭を抱えながら叫んだ。

「弁当を、家に忘れてきた……」

この世の終わりのような顔をして床に膝をつく廉太郎。ここまでオーバーな動きをしてもほとんどの女子から無視されている。クラスメイトの田宮と大平から聞いた話では、廉太郎が昔やらかしたという二股事件がきっかけらしい。本人曰く時期はズレていたからセー

フだそうだが……。

自業自得とはいえ、ここまできるとさすがに同情する。

「取りに帰るか？」

「冗談言うなよ。今から走って戻ったんじゃ胃がひっくり返る」

「なら購買で買うしかないだろ」

「はあ、今から行ってもコツペパンぐらいしか売ってないんだよな」

「ないよりマシだろ。少しぐらいなら俺のおかずを譲ってやらなくもない」

「まさおみく！ やっぱり持つべきものは従兄弟だな！」

「その猫撫で声はやめろ」

男の、それも従兄弟の猫撫で声なんて聞くに堪えないぞ？

そんな俺の気持ちなんて気にしない廉太郎は、購買へ行こうとして教室を出て行くとき、女の子とぶつかりそうになる。

「きゃっ！」

「おっと！ ごめんよ」

「もう！ 危ないじゃん、気をつけなよ廉兄」

「なんだ、小春か。何の用だよ」

「ちよつと、それが忘れ物を届けに来た妹にする態度？」

女の子が小春だと気付いて露骨にがっかりする廉太郎。

その態度に腹をたてる小春。

うん。いつも通りの光景だ。

「忘れ物って、まさか」

「はい、お弁当。毎日持っていくものをなんで忘れるかな」

「おお！ 小春、いや、マイラブリーシスター！ 愛してるぜー！」

「キモい」

「そう照れるなよ、愛い奴め」

「猫撫で声やめて。ほんと、そんなだから彼女どこかクラスの女子に嫌われるんだよ」

「ほつとけちんちくりん」

「誰がちんちくりんよ！」

「あれー？ 小春の姿が見えないな。おつとそんなところにいたの

か。小さくて見えなかった」

「バーカバーカ」

「ブースブース」

相変わらず仲のいい兄妹だ。喧嘩するほど仲がいいと言うが、目の前のこれは喧嘩というよりじやれ合っているようにしか見えない。二人とも大きく成長しているのに本質は全く変わっていないということだろうか。

だが、このままでは話が終わらない。

「二人ともストップ。廉太郎。素直にありがとうって言えよ」

「お兄ちゃん……。あーあ、なんでお兄ちゃんが本当のお兄ちゃんじゃなかったんだろう」

「ありがとよ。ちんちく」

「誰がちんちくよ！これでも少しは大きくなってんだから！」

またしてもいがみ合う二人。ここは少し強引に話を別の方向へ持って行こう。早くご飯食べたいし。

「そうだ。よかつたら小春も一緒にご飯食べないか？久しぶりにさ」

「え？お兄ちゃん？んく……。お兄ちゃんと一緒にご飯は食べたいけど……」

そう言つて廉太郎の方に目を向ける小春。

「しっしっ。帰れ帰れ」

「あれと一緒にはちよつと……」

素直じゃなさすぎるだろ……。この兄妹……。休み時間ずっと喧嘩、もといじやれ合いを続ける気だろうか。早くご飯食べたいんだが。

「レンタロウ、仲がいいのはわかりますが、妹にむかつてその態度はあまりよろしくないと思いますよ？」

一連の流れを聞いていたのか、レナさんが会話に加わってきた。

「マサオミ、私もご飯と一緒にしてもいいですか？賑やかな方がご飯は美味しくなるですよ♪コハルも一緒に食べましょう」

まさしく救世主。いや、救いの女神か。

「レナ先輩とお兄ちゃんがそこまで言うなら……。一緒にさせてもらいますー。」

レナさんと小春は仲がいい。この前小春が志那都荘の手伝いをした時に知り合い、今ではすっかり小春がレナさんに懐いているようだ。

レナさんは面倒見がいいというか、包容力があるというか、誰からも親しまれるような性格をしている。小春が懐くのも当然である。

小春が教室にお弁当を取りに行っている間に席をくつつけ場所を確保する。

「つて、廉太郎。何先に食べようとしてるんだよ」

「え？待たなきやダメなの？」

「どうせならコハルが来てから食べましょうよ」

「ちえり。まあレナちゃんが言うなら……」

ふてくされながらも箸を置き、ちゃんと小春が来るのをまつ廉太郎。

「ふふっ」

「レナさんどうしたの？」

「いえ、レンタロウはなかなかのツンデレさんなのですわね」

「ちよ、レナちゃん？俺のどこがツンデレなの？」

「だって、なんだかんだ言いながらちゃんとコハルのことを待ってあげてるじゃないですか」

レナさんが言う通り、たしかに嫌いな相手ならレナさんに言われたとしても待つ必要なんてない。

「レンタロウはコハルのことが大切なんですよね」

「べ、別にそんなことないっすけど」

「じゃあ、嫌いなのですか？」

「嫌いってわけじゃないけど……あいつ生意気なことばっか言うんだよ」

「それはきつと、レンタロウが全て受け止めてくれると信じているからではないでしょうか。憎まれ口を叩き合えるなんて、なかなかできることではないと思うのです」

そしてレナさんは優しい笑顔を浮かべて言うのだった。

「家族が近くにいるとわからなくなるかもしれないかもしれませんが、お互いに言

いたいことを言い合えるのは素晴らしいことです。これからもコハルのことを大切にしてくださいね？」

「……」

その笑顔に思わず見とれてしまう。

「廉兄もお兄ちゃんも、なーに鼻の下伸ばしながらレナ先輩を見てるの？」

いつの間にか戻ってきていた小春がジト目で問いかける。

い、いかんいかん。これでも朝武さんの婚約者なんだから。しつかりしろ俺。

「くっ！レナちゃんがじいちゃんのところまで働いてなかったら絶対に口説いてたのに……っ！」

「ブレないな。お前」

呆れを通り越して尊敬するわ。さすが廉太郎。

「小春もきたことですし、いただきましょうか。オウ！そうですそうです。マサオミ、コハル、レンタロウ。誘いたい人がいるのですがいいでしょうか？」

特に断る理由もなかったので頷く。でもレナさんが誘いたい人って？

レナさんは嬉しそうに目的の人のいる場所に目を向ける。そこにいたのは……

「マコー・ユキヒコ！姫様！一緒にご飯食べませんか？」

一気に教室がざわめく。

巫女姫である朝武さんとそれに仕える二人はいつも一緒にご飯を食べている。なんとというか、完成されたその空間は誰にも入ることが許されないかのような雰囲気なのだ。まあ、周りが勝手に思っているだけなのだが。

とにかく、朝武さんたちに一緒にご飯を食べようと言える勇気が他の生徒にはなかったらしく、ゆえにここまで騒ついているわけなのだ。

「ワタシたちとですか？」

「俺は構いませんけど、芳乃様はどうです？」

「ご、ご迷惑でないのでしたら……」

常陸さんと幸彦が優しく微笑んでいる。俺もきつと同じようになっっているだろう。これは朝武さんが友達を増やすチャンスかもしれない。

「全然迷惑じゃないよ。一緒に食べよう、朝武さん」

「迷惑なんてとんでもない。むしろ一緒に食べたら超嬉しいよ！」

「私も大歓迎です！巫女姫様たちとご飯……ちよつと緊張する……」

どうやら廉太郎も小春も朝武さんとご飯を食べてみたかったらしい。

廉太郎は素早く座席の確保をしている。こいつは巫女姫様とご飯ではなく、女の子とご飯を食べることが嬉しいのだろう。粗相しないか心配だ。幸彦がいることを忘れないでほしい。

朝武さんは少し照れくさそうだ。おそらくだが幸彦たち以外とご飯と一緒に食べることで自体初めてなのではないだろうか。

「ウォー！姫様のお弁当おいしそうです！ご自分で作ってるのですか？」

「いいえ、これは菜子が作ってくれたんです。菜子は本当に料理が上手なんですよ」

「おお、それは素晴らしい！マコの手作り、食べてみたいです。私のおかずと交換しませんか？」

「そ、それでは！あの、条件というか、ご提案というか……」

朝武さんがもじもじする姿はとても新鮮だった。よく見ると耳が赤くなっている。

「私のことを、その……姫様ではなくてですね……芳乃と、呼んでください」

「ですが、穂織の姫様は敬うべきではないのですか？」

「前にも話しましたが、同じ学園で学ぶもの同士、身分の差なんてありません。それに私は……リヒテナウアーさんと、と、と、友達に！なりたいですからー！」

「……わかりました、ヨシノ♪」

「~~~~~っ!!」

声にならない叫びをあげて、みるみるうちに朝武さんの顔が真っ赤になる。

「ありがとうございます、リヒテナウアーさん！」

「ノンノン。私のことはレナとお呼びください。それが友達になった証ですよ」

「それでは……レ、レ、レナさん！」

「はい♪なんですかヨシノ」

「~~~~~!!」

微笑ましいやりとりだと思った。常陸さんと幸彦も優しい目でそのやりとりを見ている。完全に娘に初めて友達ができたのを喜ぶ親の目だった。

そこから女の子たちのおかず交換が始まった。

「この唐揚げ、常陸先輩が作ったんですか？おいしいです！」

「そう言っていただけだと嬉しいです。小春さんのお母様が作られたこの煮つころがしも絶品ですよ」

「なんと!?!これはユキヒコの手作りですか？」

「姉さんが忙しいからね。自分でできるものは作るようにしてるんだ」

「幸彦のだし巻き卵は絶品ですよ。ほんのり甘くて上品な味です」

「ヨシノがそこまで言うとは、私も食べてみたいです！」

「そうかい？なら、どうぞ」

「ありがとうございます！お返しに板長のちんきらごぼうを召し上がってください」

女の子たち（約1名男もいるが）を眺めながら廉太郎がしみじみと言う。

「なんか、いいよな。こういうの」

「ああ、そうだな」

その言葉には同意する。和気藹々としている彼女たちを見ていると和むというか、自然と笑顔になれる気がする。レナさんも言っていたけど、みんなとご飯を食べるのはやっぱりいいものだ。

「女の子と一緒にごはん……。こういうのだよ！俺が求めてたのは

！」

「おい」

俺の感動を返せ。

廉太郎はどこまでも廉太郎だった。

楽しい時間はあっという間で、昼休み終了まで残りわずかとなった。

次の授業の用意があるらしい小春が席を立つ。

「じゃあそろそろ教室に戻りますね」

「コハル、また一緒にご飯食べましょうね」

「はい！レナさん、お兄ちゃん、誘ってくれてありがとうございますでした。巫女姫様も常陸先輩も駒川先輩も。今日は楽しかったです」

小春が俺たちに律儀にお辞儀をする。

「おい小春。兄の名前が見当たらないぞ？」

「廉兄がいなかったらもつとよかったのに」

「ちんちくの癖に生意気だぞ」

「ちんちくじゃないもん！廉兄のバーカバーカ」

「ブースブース」

廉太郎に毒吐きながら小春は教室に戻っていった。

「では、私たちも片付けを始めましょうか」

「そうね。レナさん、誘ってくれてありがとうございます」

「いいえ、私が一緒に食べたただけでありますから。ヨシノと仲良くなれて嬉しかったですよ」

朝武さんは顔をまた赤くしながら俯きがちに微笑む。なんだか最近、朝武さんの表情が柔らかくなった気がする。

「ありがとな、有地」

「へ？なんでお礼なんか言うんだ？」

「芳乃様があんなに嬉しそうに笑えるのが有地さんのおかげだからですよ」

この二人に感謝されるとむず痒いな。とはいえ、俺は大したことはしていない。朝武さんが変わったのはきつと彼女自身が変わろうとしたからだ。

少し離れて朝武さんとレナさんを見守っていた俺たちだったが、思い出したかのようにレナさんがこちらに目を向ける。

「おお！そうでした。ユキヒコにお聞きしたいことがありました」

「ん？俺にかい？」

「はい。私がユキヒコに初めて話しかけた時に緑色の髪の小さな女の子と一緒にいましたよね。」

「っ！」

「何度か街で見かけたのです。それで、自分でも不思議なのですが、とても気になっっているんです」

その場にいた廉太郎以外の人間が息を呑んだ。何故ならレナさんが言った特徴を持つ女の子は、俺たち四人にしか見えないはずだから。

俺たちは小さく言葉を交わす。

「なあ、レナさんが言ってる女の子って」

「まだそうと決まったわけじゃないけど、レナさんと初めて会ったとき俺の近くにいたのは、ムラサメ様だ」

「でも、ムラサメ様はワタシたちにしか見えない筈では？」

「それを調べるためにも、ここは俺に任せてくれるかい」

俺たちが頷くのを確認すると今度は朝武さんに目を向ける。

朝武さんも幸彦の視線に気づくと、まるで任せたというように頷いた。

「ユキヒコ？どうしたでありますか？」

「いや、なんでもないんだ。それよりレナさん。今度その子に会ってもらえないか？」

「おい、幸彦!？」

「大丈夫だ。有地、君があの子のことを心配してくれるのはありがたいが、レナさんと友達になればあの子にとってもいい刺激になるだろう」

思わず声をあげてしまった俺のフォローをしつつ、幸彦は話を続ける。一体幸彦はどうするつもりなんだ？

「マサオミもその女の子の知り合いなんですか？」

「ああ。何故かは知らないが有地に懐いてしまったんだ。それ以来有地には良くしてもらっている。な、有地」

「う、うん」

有無を言わせない視線を送られ頷く。

「彼女は俺の親戚の子なんだ。体が弱くてなかなか外に出られないから、できればレナさんにはあの子の友達になってほしい」

よくもまあ、この短時間でそんな嘘を思いつくな。流石は幸彦といったところか。

「お、じゃあ俺にも紹介してくれよ」

「廉太郎はダメだ」

「えくなんでだよ」

「自分の胸に手を当てて考えるんだな」

廉太郎に容赦ない仕打ち。さ、流石は幸彦といったところか……。

言われた通り自分の胸に手を当てて考え込んでいる廉太郎を余所に、幸彦はレナさんに問いかける。

「どうかな、レナさん」

「私も彼女とお友達になりたいと思っていましたですよ！」

「それじゃあ決まりだね。日程はレナさんの都合になるべく合わせるよ。仲居さんの仕事は忙しいからね」

幸彦はそう言いながら再び視線を俺らに向ける。この話はここで切り上げようとその目は語っている気がした。

ちようどその時、5時間目の予鈴が鳴り、その場は解散となった。



放課後、案の定幸彦に呼ばれ、俺たちは保健室に集合する。

会話を切り出したのは朝武さんだった。

「それで、これからどうするの？レナさんにはあんな約束しちゃったけど」

「実際にレナさんにムラサメ様を会わせてみようと思います。どのみち、彼女について少し調べたいと思っていたので」

「レナさんを調べるってどういう事？」

「彼女が少なからず崇り神や呪詛に関係している可能性があるという事さ」

幸彦の発言に朝武さんと俺は驚く。事情を聞いていたらしい常陸さんは、驚かなかつたが、疑問を投げかける。

「確証はあるの？」

「ああ。芳乃様、有地が拾った欠片を触ろうとした時、ビリっとしたと言っていましたよね」

「ええ。それとレナさんと関係が……あつ」

朝武さんは何かに気づいたようで、幸彦を見る。幸彦はそれに応えるかのように頷くと説明を始める。

「実は俺も、欠片に触れる瞬間全身に電流が流れたような刺激を感じたんだ。そしてそれは、以前にも感じた事のある刺激だった。そうですよね、芳乃様」

「……たしかに、レナさんと握手しようとした瞬間感じたものと同じだったかも」

「それに、ムラサメ様がレナさんを見た時言っていたんです。『ご主人に似ている気配を感じる』と。ムラサメ様は欠片を見た時も同じ事を言いました。そして今日の昼、彼女の口からムラサメ様のような少女を見たと言言を得た。ここまでの事から推測すると、決して無関係とは言えないと思わないかい」

確かに、偶然とは言い難い。むしろ関係がない方がおかしいのではと思ってしまうほどだ。

「レナさんを朝武の呪いに巻き込む気なの？」

「安心してください、芳乃様。巻き込まないためにムラサメ様に合わせるんです」

「巻き込まないために？」

誰かしらに聞かれるとわかっていたのだろう。俺の疑問に幸彦は一度頷いて答えてくれる。

「人の好奇心というものは抑えられたり秘密にされると大きくなる。俺たちが知らないところで勝手に調べられるより、ある程度の情報を

与える事で行動を制限する方が安心なんだ」

「幸彦の言う通りかもしれない。下手に隠し事をして、夜の山に入ってしまったてはワタシや幸彦でも助けようがないですからね」

秘密にされると知りたくなる、か……。俺自身にも覚えがある事だったので痛いほど理解できた。レナさんが危険な目にあう可能性はあるのなら、少しでもリスクを減らした方がいい。心配性の幸彦らしい案だった。

「芳乃様。これからレナさんに、少なからず嘘をつく事になりますが、よろしいですね」

「……レナさんを騙すような事はしたくないけど、危険に巻き込またくなはなはなもの。幸彦がその方がいいって言うのなら、私が拒否する理由はない」

朝武さんは優しいから、友達に嘘をつくのは心苦しいのだろう。いや、ここにいるみんながそう思っているはずだ。だけど、祟り神の恐ろしさや、呪詛の残酷さを知った今、とてもじゃないがレナさんを巻き込むような真似はしたくはなかった。俺の時もみんなこんな気持ちだったのだろうか。

「とりあえず、ムラサメ様や安春様、みづはさんと玄十郎さんにも話をつけておきましょう」

「そうだね。口裏を合わせないとだな。まずはムラサメ様に同意を頂くところから始めようか」

こうして、レナさんとムラサメちゃんを会わせる計画が立てられた。

パズルのピースが揃うように。

歯車同士が噛み合うように。

ゆつくりと、着実に、運命の輪は回りだしている。

この日の稽古はなかなか集中できなかつたのだった。

第十三話 「男の子だもん」

それは、放課後に人知れず行われていた。

カーテンは閉め切られ薄暗い教室の中央には、怪しい儀式を執り行うかのごとく円形に机と椅子が並べられている。

「施錠完了」

「部外者の帰宅を確認」

「足止め班からはなんと」

「教師他、対象Kの足止めに成功との事」

「よし、それでは始めるとするか」

どうやらこの儀式？の幹部らしい、俺のよく知る男が開始の意思を告げると、周りのメンバーもそれぞれ自分の席に座る。

「あのー、聞いてもいいかな？」

「ふむ、有地将臣、発言を許そう」

「これは一体なんの集まりなんだ？廉太郎」

「ちよつ将臣！いいって言うまでは俺の事はRと呼ぶように言っただけろー！」

「いや、マジでワケがわからんだけど……」

事の発端は今日の帰りのホームルームが終わった直後。俺は廉太郎に大事な用があると言われ教室で待つ事になった。他のクラスメイトが帰るのを見送り、最後の女子生徒が帰った頃、同じクラスの男子が続々と教室に舞い戻り何やら準備を始め、今に至る訳だ。

「お前がこつちに転校してきて結構経つだろ？そろそろ親睦をもっと深めようと思つてな」

「親睦を深める？ありがたいけど、それとこれと何の関係があるんだよ」

「わかつてねえなく。男がより親睦を深めるためには、それ相応の話題があるんだよ」

チツチツチと指を振りながら得意げに話す廉太郎。周りの男子もフツフツと怪しげな笑みを浮かべている。どうでもいいけど仲良

いなお前ら。

「それ相応の話題、ねえ。一応聞くけど、その話題ってのは……」

「もちろん！下世話な話題に決まってるんだろ！好きな女の子のタイプ！ドキツとする女の子の仕草！自分がいったい何フェチなのか！普段話せないあれこれを語るときこそ、男の団結力は固くなるのだ！」

「ゲスいな、ほんと」

そのためだけにここまでの準備をするとか、ある意味このクラスの男子の結束は高いのかもしれない。

「あれ？そう言えば幸彦の姿が見えないんだが」

「幸彦には秘密に決まってるだろ」

「はあ!?待て、じゃあさつき言ってた対象Kって」

「駒川幸彦。あいつにバレたら……まあ一蓮托生だな」

「正気か!?下手すりや命の危機だぞ!」

こいつらもクラスメイトなら幸彦、もとい鬼彦の恐ろしさは知っているはずである。それなのにどうしてここまでのことを。

「みんな承知の上でここに集まった。お前のためにな」

「俺の、ために……」

みんなを見回すと、それぞれが覚悟をもった顔で頷いた。

「ちなみに、俺が朝武さんや常陸さんと仲がいいからとか、そんな理由じゃないだろうな」

もう一度みんなを見回すと、ほとんどの男子が目を背けていた。

おい、さつきの覚悟はどこに行った。

「まあ、いいじゃねえかよ。それじゃあ改めて、有地将臣を迎え入れる儀式を始めようと思う！」

マジで儀式だったのかよ……。

とはいえ、この手の話が嫌いな訳ではない。むしろ前の学校の奴らとしたバカな話を思い出してワクワクしてしまっている。

し、仕方ない。俺のために準備してくれた場なんだから、俺も楽しむべきだよな。うん。

「皆も知ってるの通り、穂織には美人が多い。大人の女性から、お姉さん系、そして我がクラスの女子も可愛い子ばかりだ。そのなかで諸君が

「一番いいなと思う女の子は誰だ？」

廉太郎がみんなに問いかける。なんだか知らないが口調まで変わっている。そういえば廉太郎って役に入るやつだったよな。昔戦隊ヒーローごっこしたときも役になりきってたし。

俺が斜め右方向に思考を傾けている間にも、クラスの男子の話は過熱の一途を辿る。

「小野さんに一票。元気があって親しみやすい。幼馴染にしたいタイプだな」

「俺は柳生さんかな。たまにおどおどするのが可愛いんだよ」

「フツお子様め。みづは様が一番に決まっているだろう。あの大人の魅力に気づかないとは愚かな者たちだ。白衣で黒髪眼鏡なのもポイントが高い」

「駒川ファンクラブの人間か。確かにみづはさんもいいが、大人の魅力なら中条先生だつて負けていないぞ。優しさと包容力を兼ね備えた美人教師。ああ、叱られたい……」

「田心屋の馬庭さんも美人だぞ。あの人目当てに遠方からお客が来ることもあるそうだ」

それぞれが好みのタイプを言っていく。そんな中沈黙を守る男が一人。

「おい、R。何黙ってるんだよ。」

「全く、お前ら揃いも揃って見る目がないな」

額に手を当てやれやれと首を降る廉太郎。

「なんだと？じゃあR、あんたの意見を聞かせてくれ」

「俺か？俺は断然、レナちゃんを押すぜ。綺麗な金髪、透き通った瞳。笑顔も眩しく、面倒見が良く、親しみやすい。それにお前らも見ただろ。……あのデカさを！」

カツと目を見開き力強く言う廉太郎。その言葉にその場にいる全員がゴクリと喉を鳴らす。

「た、確かにでかいな。あんなに大きなものは生まれてこのかた見たことなかった」

「さすがワールドクラスといったところか。俺なんか目が吸い寄せら

れるぜ」

「制服のブレザーも大きすぎて入らないって言ってたぞ」

「なんと、それは本当か!？」

教室が一気にレナさんの話題でおっぱい……間違えた、いっぱいになってしまった。ことエロに関してはカリスマ的能力を發揮する廉太郎なのであった。

「将臣、お前はどうかんだ?」

「えっ、俺も言わないといけないのか?」

「当たり前だろ。そのために呼んだんだから」

クラスの視線が俺に集まる。ぐっ、こんな大勢の前で言うのは恥ずかしいが、それは言い訳にならない。俺はもう、他の奴らの話を聞いてしまっている。ここで話さないのは不平等だ。

「俺は……やっぱ朝武さんかな」

「!!!!!!」

俺の発言にその場の全員が息を呑む。皆目を見開き、口を開けて呆然としたりしている。な、なんだ? 俺変なこと言ったかな?

「とうとう巫女姫様の話題が出たか」

「それって巫女姫様の側近、常陸さんも話題に出していいということか?」

「いいのか? 巫女姫様と常陸さんだぞ?」

「いや、今日はこのために来たと言っても過言じゃない」

「だが、対象Kに知られたら……」

「諸君、静まりたまえ」

教室のどよめきは廉太郎の一声で静かになった。

「我々はそろそろ、新しい扉を開けるべきなのかもしれない」

「だがRよ! 相手は巫女姫様と常陸さんだぞ? それはつまり、彼女たち専属セコム、対象Kを完全に敵に回すことになる」

「落ち着け。幸いこの場に対象Kはいない。それに、魅力溢れる彼女たちの話題を出さずしてこの儀式を終わらせてもいいのか? 確かに高嶺の花ではある。しかし! だからこそ燃えるのが男の性^{さが}ではないか!」

「……………「おお！」……………」

「巫女姫様のうなじ！白い肌とは対照的な黒いタイツ！常陸さんのスパッツから溢れ出る魅力的な太もも！諸君は魅力に思わないのか？いや！思わないはずがない！そうだろう！」

「……………「おお！！！」……………」

拳を掲げ力強く発言する廉太郎により、クラスの男子の士気が跳ね上がる。そこには先ほどまでの弱気な姿はなく、みんな目に炎を宿している。

さすがは性のカリスマ、鞍馬廉太郎である。

……俺も朝武さんの綺麗な肌や可愛い下着を拝見してしまったことを思い出してしまった。そう。俺は知っているのだ。制服ではよくわからないが、朝武さんも立派なお胸を持っているということ。

い、いや、あれは事故だ。記憶の奥底にしまっておかなくては。……だめだ！一度意識したら鮮明に記憶が蘇ってきた！

くっ！これも性のカリスマのなせる技か！！廉太郎恐るべし！

「では手始めに、巫女姫様と常陸さんのエロスについて語ろうじゃないか」

「芳乃様と茉莉の……なんだった？」

「だから、巫女姫様と常陸さんのエロスを……」

廉太郎はそう言いながら後ろを向く。

——気配など微塵も感じなかった。

だが俺の目には廉太郎の後ろに立つ男の姿が映っている。どれだけ瞬きをしようが目を擦ろうが、網膜はその男の姿を映し出す。

この場にいる人間もその姿に気付いたのだろう。廉太郎、いや、廉太郎の後ろにいる男から身を遠ざけるため後ずさりをする。

当の廉太郎はというと……

「……………「っっっっ！！！」……………」

白目を剥きながら声にならない悲鳴をあげていた。

それもそのはず、廉太郎の後ろには鬼が射殺すかの如く冷たい視線を向けて立っているのだ。

幸彦に視線を向けられ動けない廉太郎。その姿はまさしく、蛇に睨まれたカエルだった。

「ほう。芳乃様と茉莉のエロスか。興味深い話だな」

幸彦は興味深そうにつぶやくと、廉太郎の肩に手を置く。

廉太郎は壊れたロボットの如くガクガクと震えている。

「どうした？二人のエロスを語るんだろう？廉太郎、いや、Rと呼んだほうがいいのか。君は芳乃様と茉莉のどこに魅力を感じるのかな？」
「そそそそそれは、その、あの、うなじや太ももなんかが、とても、み、魅力的かとおおおおお思いますしゅ」

「ふざけるな！」

ダンツ！と幸彦が机を叩く。

ああ、廉太郎、無茶しやがって。お前のことは忘れない。だが心配するな。どうせ俺たちも後を追うことになるだろう。

その場の全員が心の中で廉太郎にお別れを言い、そしてその後待ち受ける自分の運命に嘆き目を閉じた。

「そんなもの、芳乃様と茉莉の魅力のほんの一部でしかない。君はそんな低レベルの次元で話を終わらせる気か」

思いもよらない発言に目を開けると、メガネをクイツと指で持ち上げながら席に着く幸彦の姿がそこにあつた。

いや、そのメガネどこから出したんだよ。

「幸彦？」

「幸彦じゃない。今の俺はKだ。クラスの一員として、俺にも語る義務がある。なに、心配するな。古本屋榎本直伝、女に好かれる男の仕事を交えて、君たちをさらに高みへ連れて行こう」

そのまま廉太郎の隣の席に着き、机に両肘を立てて寄りかかり、両手を口元に持っていく。所謂ゲンドウポーズというやつだ。

「さあ諸君、議論を再開しようじゃないか」

その日、クラスの幸彦に対する好感度が爆上がりした。



「あー、殺されるかと思ったぜ」

「人聞きの悪いこと言わないでくれないか」

儀式（仮）を終えた俺は廉太郎と幸彦と一緒に帰っていた。本来ならばいいちゃんにしごかれていた時間なのだが、廉太郎が事前に学校の用事があるから休むと連絡を入れていたらしい。その行動力を他に活かせないのだろうか。

「だってさ、俺のこと射殺すかのような目で見てたじゃんか」

「当たり前だろ。クラスの俺以外の男子が集まっているのに除け者にされたんだからな。いじめかと思ったぞ」

「わ、悪かったよ」

ジト目で睨む幸彦。どうやら結構傷ついていたようだ。

「でも意外だった。朝武さんや常陸さんの話がでたから絶対怒ると思ったのに」

「思うところがないわけじゃないが、さすがに、思春期男子の妄想を止められるとは思わないからね。実際に手を出したら命の保証はできないけど、本人たちにばれないように話すだけなら害はないからな」
サラツととんでもないことを口にしたように聞こえたんだが。命の保証はできないって、なにをされるのだろうか。

「それにうちのクラスにそんな不埒ふちちなやつはいないさ」

「断言するんだな」

「幼い頃から知ってる顔ばかりだからな。それぞれの人間性は把握済みなんだ」

「ちなみに一番注意が必要なのは？」

「廉太郎」

「おい将臣！その質問する意味ないだろ！幸彦も即答はやめろ！」

廉太郎の抗議も「自業自得だ」の一言で一蹴する幸彦。

それから男子高校生らしい日常のやりとりが繰り返される。授業の話や、友人の話。さすがに廉太郎のオカズの話には冷たい反応をしていたが、廉太郎と話す幸彦の姿はごく普通の高校生だった。これまで呪詛や祟り神が絡んだやりとりが多かったため、なんとなく大人な雰囲気きずなの幸彦しか目にしていなかったのも新鮮だった。

ふと、初めて祟り神退治に出かけた夜のことを思い出す。

あのととき幸彦にぶつけられた殺気。思い出すだけでも肌が泡立つ。今まで気にしたことはなかったが、普通の高校生があれだけの殺気を出せるだろうか。今の幸彦もあのとときの幸彦も同じ人物なのに、俺には別人のようにさえ思えてしまう。

(そういえば、朝武さんには呪いのことを教えてもらったけど、幸彦や常陸さん、ムラサメちゃんについては、まだ知らないことの方が多いんだよな)

毎日顔を合わせているから人となりは理解しているつもりだが、知らないことの方が圧倒的に多い。穂織に来てから半年も経っていないので当然といえば当然なのだが……。

「どうした将臣？ 深刻な顔して。あ！ さてはお前もオカズ不足か？」

「そんなんじゃない……ってまだその話し続けるのか？」

「だってよく。巫女姫様や常陸さんとほぼ同棲って色々溜まるだろ？俺たちは女の姉妹きょうだいが家族にいるから、そういうときの対処法に慣れているけどよ、お前去年までは一人っ子だったわけじゃん。限界超えて巫女姫様襲おそつちまうんじゃないかって心配してんだよ」

「その危険性には気づかなかったな……。早急に対策を考えないと」

「襲おそわないから！ ていうか、そういうのは朝武さんの同意を得てから——」

「ほほぅ。将臣の本命は巫女姫様か」

「あっ……！」

しまった！ つい本音が出てしまった！

廉太郎も幸彦もニヤニヤした顔でこっちを見ている。まさかこいつらグルだったのか!?

「いや、確かに朝武さんのことは気になっているけど、まだ付き合ってるわけじゃないし。でも、一応婚約者な訳だし。だからこそ誠実に接していきたいというか」

自分でもなにを言っているのかわからないほどに動揺してしまっただ。心なしか顔が熱いし口調も早くなってしまっ

そんな俺を見て幸彦は「あはは」と笑い、廉太郎は呆れたようにや

れやれと肩をすくめた。

「どうやら芳乃様とは仲良くやっているようだね。安心したよ」

「だから大丈夫だって言っただろ。こいつ、人と打ち解けるの早いから」

「本人から言質を取ることに意味があるのさ」

「いつもの心配性ってやつか。ほんと、巫女姫様や常陸さんのことになる」と神経質になるよなあ」

「二人は家族みたいなものだからね。廉太郎だって、小春ちゃんが変な男に引つかかっていたら嫌だろう?」

「そんなことねーよ。てか、小春に限ってそんなことおきやしないって」

「ツンデレだな」

「断じて違う!」

廉太郎がツンデレなのは置いといて、これでは幸彦にいいように手のひらで転がされたままになってしまふ。なにか違う話題、違う話題を探すんだ。

そう!こういうとき同じような話題を相手に持ちかけるんだ。前にいた学校では好きな人の話題が出たとき同じ質問を相手に問いかけたら曖昧な感じで話が終わった。目には目を。恋バナには恋バナをだ。

「そ、そういう幸彦は常陸さんのこと好きだよな」

「ああ。大好きだぞ」

「即答!?!」

「ももももしかして、幸彦と常陸さんってつつつつ付き合ってるのか!?!」

さも当たり前のように大好きだと宣言する幸彦。

「どうやら廉太郎も幸彦の反応には驚いたようで興奮気味に聞いたです。」

「残念だが、君たちが思っているような関係じゃない。茉莉は俺にとって大切な仕事仲間。それ以上でもそれ以下でもない」

さつきまでと同じ顔で話しているのに、幸彦の言葉はなぜだか有無

を言わせない迫力があつた。そういえば常陸さんも同じことを言っていたような。

「じゃあ、俺はバイトがあるからここでお別れだ。廉太郎、次はちゃんと俺に話をつけてからああいうことをするんだぞ」

「へーい」

「有地も、あんまり廉太郎に影響されるんじゃないぞ」

「おう！」

「なんで今日一いい返事してんだよ。てか、俺の扱い雑すぎるだろ！」

「じゃ！」

「あ！待てこら！幸彦！」

幸彦は廉太郎の制止を無視し、ものすごい速さで商店街へと消えていった。

「あくあ。相変わらず逃げるのが早いやつだぜ」

「廉太郎がぐいぐい聞くからだろ？」

「だって気になるだろ。常陸さんと幸彦の関係」

「そりや気になるけど……。でも幸彦、話したくないみたいだったからや」

「はあ〜」

廉太郎はやれやれと首を振りながらため息をついた。

「あのな、将臣。お前幸彦に対してだけおつかかなびつくりになつてないか。空気を読みことも人間関係のなかでは重要だけど、慎重になりすぎてる気がするぞ。お前らしくもない」

「俺らしくないって、普段は空気読まないって言いたいのか？」

「そうじゃねえって。いつものお前なら、空気を読んだ上でその壁を壊して仲良くなつていくだろ。相手を知ろうとするのはいけないことじゃないって言つてさ」

廉太郎の発言に目を丸くする。

こいつはたまに核心を突いてくる。みていないようで人をよく見ているところがクラスのムードメーカーたる所以なのだろう。女好きでなければ女子からの人気も高かつたことだろう。

たしかに、俺はどこか幸彦を対等の友人とはみていなかったのかも

しれない。自分でライバルだなんだと言っていたが、それは友人としてではなく、呪詛の関係者としての面が強かったのかもしれない。

まさか廉太郎に諭される日が来るなんて。

「だからさ、なんとかして幸彦と常陸さんの関係性を聞いてきてくれよ」

「さて、お前は幸彦に直接聞かないのか？」

「んな恐ろしいことできるかよ。だからこうしてお前を焚きつけてるんじゃないか」

「……」

前言撤回。俺の関心を返せ。

茉莉は俺にとって仕事仲間。それ以上でもそれ以下でもない。

今の俺にはそれ以上の関係性を語る資格なんでない。なんて、我ながら卑屈だな。

昔から何も変われない自分に嘲笑しながら商店街を一人歩く。少し強引に話題を切ってしまったことを後悔した。有地はきつと考えってしまうだろう。自分に話せない何かがあるのではないかと。

たしかに、人に話したい話題ではない。聞かれなければ話すつもりもない。……もしかしたら、話すのが怖いだけなのかもな。

「にゃー」

「ん？って、猫丸。また勝手に出てきてたのか」

俺の相棒である式神の猫丸が心配そうにこちらを見つめていた。こいつは俺が呼び出さなくてもたまに勝手に出てきてしまう。本来ならば勝手に出てくることなんてありえないはずなのだが、猫丸は昔から他の式神より何かと異質だった。

そもそも駒川の式神は陰陽道で言われている式神とすこしだけ異なり、使役するのではなく、自らの霊力を差し出す代わりに力を借り

ているのだ。靈力の強さや質によって呼びかけに答えるものも変わる。呼びかけに答えるもの。人はそれを鬼や精霊、そして神と呼ぶこともある。

「にゃっ」

「うわつとと。いきなり飛びつくなよ」

「にゃ〜♪」

俺の方に乗ってご機嫌な猫丸。ご機嫌なのはいいが、ここは商店街の真ん中。猫を肩に乗せながら歩くのは恥ずかしい。俺はポ○モンマスターは目指していない。仕方がないので抱きかかえるとゴロゴロと喉を鳴らしながらご満悦の表情の猫丸。

「慰めてくれたのか？」

俺の問いに答えるように尻尾が楽しそうに揺れる。

「ありがとな、猫丸」

お礼に首元を撫で回しながら歩く。猫丸も気持ちよさそうに目を細めていたが、ピクンと耳が動き顔を上げる。そのまま俺の腕から飛び降り駆け出してしまった。その先にいたのは……。

「きやつ。もー、猫丸。いきなり飛びつくと危ないよ」

「にゃ〜♪」

俺の複雑な心持ちの原因である幼馴染がそこにいた。彼女は猫丸を抱きかかえると周りを見渡し俺と目が合う。

俺は普段通りを心がけて声をかける。

「夕飯の買い物かい？ 菜子」

「うん。幸彦は猫丸とお散歩？」

「いや。バイトに向かう途中で猫丸がまた勝手に出てきちゃってね」

「はは〜ん。さては研究に熱中しすぎて猫丸のこと構ってあげてなかったんでしょ」

「あー……そういえば」

「あは、困ったご主人様ですね〜」

「にゃ〜」

菜子の言葉に猫丸も返事をする。猫丸さんや、一応君の雇い主は俺なんだけど？……まあ、最近散歩に連れて行くのを忘れていた俺が悪

いので何も言えないのだが。

猫丸は茉莉や芳乃様にも懐いている。むしろ俺より仲がいいかもしれない。

「なん度も言うけど、無理だけはしないでね」

「ああ、気をつけるよ。猫丸も、今度一緒に遊ぼうな」

茉莉に抱きかかえられている猫丸を撫でると満足そうににやんと鳴いた。

「バイトまでまだ少し時間あるし、買い物手伝うよ」

なんとなく、ここで別れるのは寂しいと感じてしまった俺がそう提案する。すると茉莉はキョトンとしたあとニヤニヤした表情で詰め寄ってくる。

「今日はやけに素直なんだね。あは、もしかしてやましいことでもあったんですか?」

やましいことか。ないわけではなかったが、ここは廉太郎の名誉のために黙っておこう。

「まさか。今日はそんな気分なだけだよ」

「あやしい」

「あやしくない。ほら、行くよ」

「目を見ないところがあやしい」

「くどいな君は」

お互いすこしだけ離れて並び歩く。近づきすぎず遠すぎないこの距離が、今はとても心地よかった。

第十四話 「名探偵芳乃」

むせかえるような血の匂い

『ば、化け物!?来るな!く、来るなあああ!!』

人の骨が砕ける音

『グギヤアアア!!やめてくれ!助けてくれええ!!』

人の肉がちぎれる音

『頼む!俺たちが悪かった!だから命は!命だけはっ!!』

耳をつん裂くような断末魔

『痛てえ……痛てえよ……は?おいおいおいおいまてまてまてまてまてまて死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬううううう!!!』

『そんなものを目の前にしている男の子。その子の顔は……』

『……早く死んじゃえ』

笑っているように見えた。



「つつつ!!かあっはあはあ。今のは……夢?」

目が覚めても手の震えは止まらなかつた。汗もひどい。なんてひどい夢だったんだらう。そして、なんてリアルな夢だったんだらう。

いつものように呪詛の研究に夢中になってしまい、布団の中に入ったのが深夜の3時。時計を見るとまだ4時をまわったばかりだった。太陽もまだ出ていないようで辺りは暗闇と静寂が支配している。

人が、何か得体の知れないものに惨たらしく殺される夢。

思い出すだけで吐き気がした。

夢とは眠っている間に脳の中で記憶を整理していることで起きるものと言われているが、あそこまで匂いも音も再現するものだろうか。

そもそも、俺にあんな記憶はない。ないはずだが……最期に見た幼い男の子。

あれは……俺？つまり、あの夢は、あの時の……。

寝起きで頭が働かない上にまだ一時間しか寝ていない。

とてもじゃないが思考がまとまらなかった。

だからと言ってもう一度寝直そうとも思えなかった俺は、仕方なくベッドから降りる。

「最悪の目覚めとはこのことだな。……シャワーでも浴びてスッキリするか」

まだ寝ているであろう姉を起こさないように静かに部屋を出る。

今はとにかく、少しでも早く汗を流したかった。

「うくん」

今日は休日。

朝武さんたちとの朝食を終えた俺は自室で頭を悩ませていた。

「どうしたのだご主人。朝っぱらから難しい顔をして」

ムラサメちゃんが物珍しい目でこちらを伺う。

「うん。ちよつと悩み事」

「またエロいことでも考えているのか？」

「たしかに思春期男子は四六時中エロいことを考えているかもしれないけど……ってムラサメちゃん？人聞きの悪いこと言わないでくれないか？」

「人の胸を触って硬いとぬかした者が何を言う」

ムラサメちゃん、まだあの事気にしてたんだ。

誤解を招かないように言っておくが、あれはムラサメちゃんにも非があるのだ。出会ったばかりで「吾輩には触れられない」なんて言う

から、胸の辺りに手を伸ばしただけなんだ。

真っ先に胸に手を伸ばしたのはなぜかって？

……まあそんなことはどうでもいいじゃないか。

「それで、一体何に悩んでいるのだ？」

冷や汗を流しながら目をそらす俺に、ムラサメちゃんは呆れながら問う。

「大したことじゃないんだけどさ、俺ってまだ知らないことの方が多
いなって」

「それはそうだろう。ご主人が穂織に来て幾分か経つが、それでも半
年と経ってないのだからな」

ムラサメちゃんの言うことはもつとものことと、俺もそう思っ
てきた。それでも一度気になってしまったら知りたくなってしま
うのが人の性か……。

「よし決めた！わからなければ調べるに限るよね！」

「なんだか妙に心配なのだが……ちなみに何を調べるのだ？」

「幸彦と常陸さんが付き合っているかどうか」

「ご主人……」

「じよ、冗談だよ」

ムラサメちゃんが冷めた目で俺を見てきた。いや、その気持ちはわ
かるけどね。それもこれも廉太郎が悪いんだ。うん。

俺は一度咳払いをして気を取り直す。

「と、とにかく。今日はいろんな人に話を聞いてまわろうと思うんだ。
ムラサメちゃんはどうする？」

「吾輩もついていこう。放っておいたら何かあるかわからんからな」
「だから、さっきのは冗談だった」

思い立ったが吉日。俺はさっそく行動を開始した。先ずは身近な
人から聞いてみるべきだろう。

俺はジト目で見てくるムラサメちゃんを連れて自室を出る。する
とタイミングよく朝武さんが居間から出てきた。幸彦と常陸さんの
幼馴染であり、二人を間近で見てきた朝武さんなら何か知っているか
もしれない。

俺は思い切って朝武さんに声をかけた。

◇◇◇

「幸彦と茉莉子について、ですか？改めて聞かれると難しいですね」

「なんでもいいんだ。例えば付き合ってるとか」

「付き合ってる……！あの二人ってそんな関係だったんですか!？」

「いや、俺が聞いてるんだけど……」

顔を真っ赤にした朝武さん。初心で可愛らしいが、この様子では二人が恋人関係であることはないのであろう。

「取り乱しました……」

「相変わらず芳乃は面白いのう。くつくつく」

「ムラサメ様あ！」

「そう怒るでない。愛い奴め」

ムラサメちゃんにからかわれる朝武さん。可愛い。

朝武さんは軽く咳払いをして話を戻す。

「コホン。たしかに二人は昔から仲が良かったのですが、私から見ると二人がこ、こ、こい、恋人関係、であるとは思えませんね」

「そっかあ。そうだよなあ」

俺から見ても、あの二人は彼氏彼女ではなくまさしく相棒といった方が今はしっくりくる気がする。朝武さんのおかげでその考えが正解である確率がぐんと上がった。

「有地さんはどうしてそんなことを聞くんですか？」

「いやさ、俺って幸彦のことも常陸さんのこともあんまり知らないなーって思ってたさ」

「それなら本人たちに聞けばいいじゃないですか」

「それもそうなんだけど、幸彦とかつてそういう話が出るとうまく躲してどっか行っちゃうからさ」

「ああ、たしかに」

思い当たる節があるのか朝武さんも納得してくれた。

でも朝武さんが言うように、俺がいきなり幸彦たちについて聞きま

わる行為は周りの人に疑問を抱かれるかもしれない。せめて一緒に聞き込みを手伝ってくれる人がいれば事情も説明しやすいのだが……。

さてよ。朝武さんが一緒にいればその問題も解決するんじゃないか？

「朝武さん。今日これから予定ある？」

「今日ですか？特に神社の手伝いを頼まれているわけではないので勉強や舞の練習をしようと思っただけです」

「じゃあさ、俺と付き合ってくれない」

「ふあい!？」

突然変な声を上げる朝武さん。

「なななななななにをいきなり言い出すんですか!？」

「え？ダメかな？」

「だ、ダメといいますが、そりゃ私たち婚約者ですけどそれはまだ一時的なものであって付き合うのはまだというか、心の準備もありますし、これからのこととかも考えたいですし、だからそのあの！」

顔を真っ赤にしてあたふたする朝武さん。可愛い。いや、そうじゃなくて、俺なんか変なこと言ったかな？この慌てっぷりはただ事じゃない。

「ご主人。もう一度自分が芳乃に言ったことを振り返ってみろ」

「俺が言ったこと？」

えーと、俺一人だと怪しまれるかもしれないから、今日一日一緒に聞き込みをしてもらうために「俺と付き合ってくれない」と言った。

はは、俺と付き合っただけで告白みたいだな。

……こくはく？

朝武さんの顔を改めて見る。相変わらずトマトみたいに真っ赤な顔でもじもじしている。

ははくん。つまりは……そういうことか。

自分の顔が一気に赤くなる。

「ち、違うんだ！今日一日聞き込みに付き合っただけという意味で、こ、告白というわけでは！」

「え、ええ！わかってます！わかってますとも！」

「……」

「……」

だめだ！恥ずかしくって朝武さんの顔が見れない！

そんな俺たちを呆れた様子で眺めるムラサメちゃんとニヤニヤしながら見つめる常陸さん……

「つて常陸さん!？」

「あはあ、随分お熱いですねえ。今日は赤飯を炊きましようか」

「ままま菜子？いつからそこに？」

「俺と付き合ってくれないか、の辺りからですね」

「うっ……ううううわああああああああんっ！」

頭を抱えてうずくまってしまう朝武さん。俺も正直穴があつたら入りたい。だが、常陸さんたちのことを聞いて回っていることを知られなかったことは不幸中の幸いか。

「どうやらお邪魔みたいなので、私は家事に戻りますねえ♪お二人とも、お幸せに。あはっ♪」

弁明の猶予もなく、常陸さんは姿を消した。

「有地さん。聞きたいのは幸彦と菜子について、でしたよね」

「うん」

「菜子について、一つだけ思いつきました。菜子はいたずらが大好きです」

「うん……知ってた」



常陸さんの件で出鼻をくじかれたが、気を取り直して聞き込みを再開していた。ちなみに朝武さんも一緒である。少しだけ気恥ずかしいが、聞き込みを手伝って欲しいと正直に伝えたところ「それって探偵みたいですね！」と目をキラキラさせていた。やっぱり、ちよつと子供っぽいんだよね、朝武さんって。そこがまた可愛いところなのが。

そんな俺たちが次に訪れたのは建実神社で働いている安春さんのところであつた。

「幸彦君と菜子君について、かい？ そうだね、二人とも真面目でとてもいい子たちだよ。本当にあの二人にはお世話になりっぱなしだよ」

「二人とも昔からあんな感じだったんですか？」

「根つこの部分で言えばそうだね。幸彦君なんかは随分とたくましくなつたけど」

「幸彦が小さい頃はとても可愛らしかつたんですよ」

「それみんな言ってるけど本当なの？」

未だに信じられないが、幸彦が幼い頃は引つ込み思案で泣き虫で、朝武さんたちの後ろをついて行つていたという。

「あはは、たしかに今の幸彦君からは想像できないかもしれないね。でも、心配性や集中すると周りが見えなくなるところなんかは昔から変わってないよ」

「変わっていないと言うか、むしろその二つに関してはひどく……いや、成長している気がするな」

安春さんの言葉にムラサメちゃんが苦笑いをする。

「じゃあ、幸彦と常陸さんが付き合ってる何てことは」

「お似合いだとは思うけどね。僕自身、そうなつてくれたらいいな」とは思っているよ。僕も秋穂、芳乃のお母さんとは幼馴染でね。高校に入る前にはもう意識してたから。いや、僕もあの頃は若くてね。告白の時なんか——」

安春さんの恋愛話か。おもしろそうだ。

なんて考えていると朝武さんが俺の袖をクイツと引つ張り小声で話しかけてきた。

「朝武さん？」

「次のところに行きましょう。この話、真面目に聞いていたら一時間以上かかりますから」

「吾輩も賛成だ」

うんざりした顔で言う朝武さんとムラサメちゃん。

どうやら安春さんの惚気話は長いことで有名ならしい。しかも聞い

ていて恥ずかしくなるものばかりらしく、娘として逃げ出したくなるレベルだそうだ。

俺らが目の前からいなくなっても語りをやめない安春さん。そんな彼に静かに一礼して俺たちは神社を後にした。



「もう、お父さんったら」

「ま、まあいいじゃないか。俺は羨ましいと思うけどね。いつまでも惚気られるなんて、それだけ朝武さんのお母さんを愛してたってわけでしょ」

「それはそうかもしれないですけど……。その惚気話を聞かされる娘のみにもなつてください」

「あー……。たしかにそれはきついかも」

そんな会話をしながら商店街までやってきた俺たち。ここでなら多くの人から話を聞けるだろうと朝武さんが提案してくれたのだ。

商店街の人に片っ端から声をかける朝武さん。なんだか俺より気合が入ってる。

商店街の方々は『幸彦は生真面目すぎる』だの『茉莉ちゃんは商店街のアイドル』だの好き勝手言っていた。どうやら二人は相当商店街の方々に可愛がられているようだ。

一通り聞きまわったので、最後に幸彦の師匠でもある魚海さんに話を聞こうと魚政に近づく。すると店の前には「陽成清掃」と書かれた軽トラックが止まっていた。

魚海さんはその清掃業者のアルバイト職員らしき人と話している。帽子を深くかぶってその顔はよく見えないが、俺と近い年ぐらいの男の子と背の低い金髪の女の子。あとは軽トラの中に運転をするであろう大人の男性がいた。

「——わかったご苦労。しっかし、ずいぶん大きくなったじゃねえか。どうだ？彼女はできたか？」

「それ、今の時代セクハラになりますよ」

「野郎なら問題ねえだろ」

「相変わらずですね……」

「お兄ちゃん、そろそろ」

「そうだな。それじゃあ魚海さん。俺たちは戻ります」

「おう。また何かあったら教えてくれ。それと、隆之介によるしくな」

清掃業者一行は軽トラに乗り込み去っていった。

ずいぶんと親しげだったが、常連なのかな？

魚海さんはそんな俺たちに気づき、いつものごとく元気に声をかけてきた。

「ん？おう！巫女姫様に坊主じゃねえか。二人揃ってデートか？」

「違います」

「おお、息ぴったりじゃねえか」

折角意識しないように頑張っていたのだから、余計な詮索はしないでほしい。幸彦がここにいたら「魚海のおやじさんにそんな器用な真似できるわけないだろ」って言いそうだな。

「実はですね。今、聞き込み調査をしていました」

俺がボーとしている間に朝武さんが質問している。メモとペンを持参して、すっかり探偵になりきっている。

「幸彦や茉莉ちゃんについて話を聞きたい？巫女姫様、そいつあなかなか面白い質問ですねえ。なんだか凄腕の探偵さんに話を聞かれていますみたいだ」

「本当ですか！」

なんだかとても嬉しそうな朝武さん。

「ねえ、ムラサメちゃん。朝武はなんであんなに嬉しそうなの？」

「おそらくだが、今茉莉に借りている漫画が探偵物なのではないか」

「あー。そゆこと」

常陸さんも朝武さんも漫画読むんだ……。たしかにこの街の数少ない娯楽の一つとも言えるしな。今度おすすめ漫画がないか聞いてみよう。

俺が小さな発見に思考を傾けていると、魚海さんが腕を組み大げさに唸った。

「ううむ。たしかに俺は二人に関しちやガキの頃から面倒見てるからな。巫女姫様の知らないことを話せるかもしれない。ですが、そういうのは本人に聞くのが一番手っ取り早いんじゃないですかね」

「それはそうなんですけど……」

「案外、話したがってるかもしれないですよ。なあ幸彦」

魚海さんはそういうと俺たちではなく俺たちの後ろに向かって声をかける。

「適当なこと言わないくださいよ、魚海のおやじさん」

その問いかけに反応する人間は一人しかいない。

気がつけば幸彦が後ろにいた。

ほんと、常陸さんも幸彦も、どうして気配を消して近づいてくるのだろう。心臓が飛び出るかと思った。



幸彦に見つかった俺たちは一度朝武家に連行された。

「俺と茉莉のことを嗅ぎ回っている者がいるって話を聞いてやってきたが、まさか芳乃様と有地だったとは」

「ごめんなさい」

「面目ない」

強制されたわけではないが、俺も朝武さんも正座をして幸彦の説教を受ける。幸彦の後ろでは常陸さんがニコニコしながらお茶を啜り、その隣でムラサメちゃんが我関せずという顔で座っている。

「とにかく、今後は軽率な行為は避けること。いいですか」

「はい……」

俺と同様、朝武さんもしよぼんとしていた。俺から朝武さんを誘っただけに、一緒に叱られると罪悪感を感じてしまう。

「あは、なんだか三人でみづはさんに叱られたときのことを思い出しちゃいました」

「うう、幸彦に叱られる日が来るなんて」

「俺も芳乃様を叱る日が来るなんて思いませんでしたよ」

「それもこれも、ご主人のおかげだな」

「勘弁してよ、ムラサメちゃん」

どこからか笑いが漏れる。常陸さんとムラサメちゃんりのフオローなのだろう。正直ありがたい。

「そういえば、芳乃様。先ほど安春様が手伝って欲しいことがあると言ってましたよ。用事が済んだら社務所に来て欲しいって」

「本当？有地さん、ムラサメ様、幸彦、すみませんが少し失礼します」

「あ、ワタシも一緒に行きます」

朝武さんと常陸さん、部屋を出て行く。

幸彦は二人を見送りながら俺に問いかけた。

「さっきの件だが、どうせ廉太郎にでも焚き付けられたんだろ」

「……正解」

「はあ。まあ、煮え切らない返事をした俺にも非はあるか。それに俺も有地のことは徹底的に調べたからな」

「まじ？」

「当たり前だろ。何処の馬の骨とも知らない奴に芳乃様の婚約者なんか務まらないからな」

衝撃の新事実。朝武さんのこととなると本当に心配性なんだなと改めて思った。

「そういえば、どうして幸彦は俺たちが商店街で聞き込みしてるってわかったんだ？」

「ああ、それはこいつらのおかげだよ」

そういつて幸彦が取り出したのは動物の形に切り取られた紙だった。

「有地は、俺が陰陽師の末裔だって知っているよね」

「うん、みづはさんに聞いたけど。えーと、その紙は？」

俺の疑問に答えるように、幸彦は呪文を短く唱える。するとただの紙だったものがたちまち猫の姿に変わっていく。

「式神。俺たち陰陽師の相棒みたいな存在さ。ちなみにこいつは猫丸って言って、俺が初めて召喚した式神なんだ」

「にゃー」

この街に来てもう驚くことはないと思っていたが……どうやら考
えが甘かったみたいだ。式神か。漫画とかではたしかにお約束の存
在だよな。

猫丸と呼ばれた式神は、綺麗な黄金色の毛に透き通った宝石みたい
な青い目をした猫だった。とてもじゃないがさつきまで紙切れだつ
たとは思えない。

「他にも昆虫や鳥の姿の式神を町中に配置しているんだ。怪しい者の
情報はそいつらから俺に送られてくる。生きた防犯カメラだと思っ
てくれると分かりやすいかもね」

「それってすごくないか!? 町中の情報が手に取るようにわかるじゃな
いか」

「式神も万能なわけじゃない。召喚しているだけで神力を使うから疲
れも溜まる。まあ、警備に使ってる式神は比較的省エネの奴らだけ
ど」

話には聞いていたが、実際目になると本当に陰陽師なんだなと実感
する。

巫女に忍者に幽霊に陰陽師か。去年の俺に話したらラノベ作家に
なれって言われるレベルの人間関係だな。あ、ムラサメちゃんは幽霊
じゃなくて叢雨丸の管理者か……。いかに今まで狭い世界で生きて
いたかがわかるな。

「やっぱり凄いな、幸彦は」

「俺はすぐくもなんともないよ。いまだに大切な人を救うことのでき
ない、ただの役立たずさ。俺なんかより君の方がずっと凄いと俺は思
うよ」

「相変わらず捻くれておるな、幸彦は」

「……しまった。努力はしてますが、性格はそう簡単には治らないみ
たいです」

幸彦は困ったように笑った。自分を卑下する発言は無意識のうち
に出ているらしい。つまりそれは、心の底から自分はダメな人間だと
思っていることに他ならなかった。

「でも、有地が凄いのは事実ですよ。有地が来てから芳乃様たちが明

るくなつたし、欠片のことだつて有地がいなかつたら誰も気づかなかつたでしょうからね」

「それには吾輩も賛同するぞ」

「おお、珍しく褒められた」

「ご主人は自分から突つ込んでいくようなやつだからな。そんなご主人だからこそ芳乃の壁を破り、崇り神に対しても活路を見出せた。どうだご主人……そろそろ幸彦に直接聞いたらどうだ」

ムラサメちゃんが優しく諭すように言った。

「聞く？俺と茉莉は俺が言った以上の関係じゃないですよ」

「いや、違うのだ幸彦。ご主人が本当に知りたかつたのは12年前の誘拐事件についてだ。そうだろう、ご主人」

「……あはは。ムラサメちゃんにはかなわないよ」

そう。俺がここまで悩んでいたのは、誘拐事件について踏み込んで行くべきかどうかだった。いろんな人から聞いてきた、幸彦は昔からずいぶん変わったという話。おそらくそれに関係しているであろう事件。

下手をしたらトラウマを抉るだけになってしまふかもと考えたが、それでも知っておくべきだと考えたのだ。

「改めて、幸彦。俺に教えてくれないか。12年前、幸彦たちに何があつたのか」

「……ただの興味本位というわけではなさそうだな」

幸彦は大きく深呼吸する。

そして覚悟を決めたように口を開いた。

「わかつた、話すよ。いつかは話さなければならぬと思つていたしな。ただし俺が話せるのは、俺が見聞きしたことだけだ。それでもいいかい？」

「うん」

まっすぐ目を向ける幸彦に俺は頷く。

幸彦はまたゆっくりと、昔を思い出すように話し出した。

「12年前のあの日。忘れもしない、自分の無力さを実感したあの事

件。俺はあの日、初めて……人を、殺したんだ」

第十五話 「忘れられない過去」

さて、どこから話したものかな。

あれは、そう。今から12年前。俺たちがまだ5歳のことだ。

夏の暑さがようやく鳴りを潜め、穂織の山の木々が紅葉し始めた10月。空は高く雲ひとつない、穏やかな日だった。

◇◇

その日、三日ほど風邪を引いていた芳乃様の体調が治ったと聞いた俺と茉莉は、遊べなかった三日分楽しもうと、走って朝武家へ向かっていた。

「ユキー！はやくはやく！」

「ま、待ってよ〜」

「あはっ。はやくしないとおいでっちゃんよー！」

この頃から俺は幼馴染の茉莉と一緒に芳乃様の家に行くのが日課だった。鈍臭かった俺は茉莉についていくだけでも精一杯。芳乃様の家に着く頃にはへトへトになっていた。

そんな俺たちを迎えてくれるのはいつも秋穂様だった。

「いらっしやい二人とも」

芳乃様の母親で先代の巫女姫、朝武ともたけ 秋穂あきほ様。

とても綺麗な人だった。明るくて、優しく、いつも俺たちを笑顔で迎え入れて。俺も茉莉も、そんな秋穂様を母親のように慕っていた。

「少し待っててね。今芳乃を呼んでくるから」

「あ、今日は芳乃様の部屋に直接行ってもいいですか？三日ぶりなのでサプライズです！」

「あら。ふふ、ありがとう。きっと芳乃も喜んでくれるわ。二人が来るのを今か今かと首を長くして待ってたから」

「でも、ぼくたちがいきなり押しかけて大丈夫かな。芳乃様風邪が治ったばかりだし……」

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫。幸彦くんのお父さんとお母さんがちゃんと診てくれたし、幸彦くんたちの顔を見れば芳乃の風邪もどつかに吹っ飛んじやうわ」

そう言つて秋穂様は俺の頭を優しく撫でてくれた。

「あは！ユキ照れてるー！顔真っ赤ー！」

「て、照れてなんかないもん！」

「うふふ。じゃあ二人とも、芳乃をよろしくね。私は台所にいるから何かあつたら声かけてね」

ほぼ毎日朝武家に通っているので家の間取りは俺も菜子も把握している。それを理解している秋穂様は「あとは三人で楽しんで」と自分の仕事に戻つていった。

「じゃあ芳乃様の部屋まで競争ね！」

「あ、ずるいよ菜子！」

今考えると、人様の家で駆けっこなんてやんちゃが過ぎるが、俺たちの頭の中は芳乃様と早く会いたいという想いでいっぱいだったんだ。

菜子は駆け出した勢いのまま芳乃様の部屋のドアを開けると、そのまま芳乃様目掛けて飛びついた。

「きゃっ！ちよつと菜子、びっくりしたじゃない！」

「えへへ〜♪芳乃様〜、すりすり〜♪」

「ひゃっ！ま、菜子、くすぐりたい」

「ユキもおいでよく。すべすべだよ〜」

「い、行かないよ！ほら、芳乃様から離れてって」

菜子をなんとか引き剥がしひと息つく。今まで三日も芳乃様のそばを離れたことがなかったので暴走してしまったらしい。

「少し時間をロスしましたが、気を取り直して遊びましょう！」

「今のは菜子のせいだと思っただけど……」

「ユキの着せ替えなんて如何でしょう♪フリフリのスカートなんか似合いそうじゃないですか？」

「ぼく、男なんだけど？」

「……たしかに、似合うかも」

「芳乃様!？」

あの頃はいろんな遊びをしていた記憶がある。

と言つてもお手玉やあやとり、おままごとなど、女の子の遊びがほとんどだった。まあ、たまに俺が茉莉や芳乃様の着せ替え人形にされることもあったが、三人揃って何かをすることが、ただ純粹に楽しかった。

そして部屋で遊びつくしたあとは、学園近くの山に作った秘密基地でもう一度遊び尽くすのが俺たちの決まりだった。

俺たちの秘密基地の存在は大人にも内緒だった。大人に知られたら秘密基地にならない、というくだらない理由で隠してきた。

だから秘密基地に向かう時も「公園で遊ぶ」だの「違う人の家に行く」だの適当に嘘をついて家を出ていた。

それはあの日も一緒だった。

俺たちはいつものように公園に行くと言った。

「行ってきます、お母さん」

「行ってらっしゃい。暗くなる前に帰ってきなさいね」

「秋穂様。芳乃様にはワタシがついてますのでご安心ください!」

「ぼ、ぼくだって芳乃様をお守りします!」

「ふふ、頼もしいわね。それじゃあ二人とも、芳乃のことお願いね」

「はいー!」

思い出しただけで嫌になる。口先だけの『守る』という言葉。

だが、このあと嫌でも思い知る。

弱い自分に守れるものなんて何もないということ。



「ユキ。昨日の話、芳乃様にも話してあげようよ」

「昨日の話って、あの本のこと?」

「うん。そのこと」

「なに？あの本って」

いつものように秘密基地の中で絵を描いて遊んでいた時、菜子が思い出したように話し出した。

あの本とは、駒川家の蔵で見つけた式神に関する本の話だ。

芳乃様が風邪の時、暇を持て余していた俺が蔵で偶然発見したのだ。本には駒川家が陰陽師だった頃に用いていたらしい式神との契約の仕方が書かれていた。

「式神って？」

「陰陽師が従える使い魔のことですよ。神力や霊力を捧げることの対価に力を貸してもらうんです」

「ほー……なるほど？」

「えーと……簡単に言えば、ペットみたいなものです」

「ペット！」

目をキラキラさせながら詰め寄ってくる。

朝武家も常陸家もペットの類は飼ってはいけないことになってる。

というのも、大昔の跡目争いの時、呪詛のために獣をたくさん殺したとされていたことや、イヌツキと周辺の地域から忌み嫌われていることから、これ以上恨みや呪いを生まないために動物の飼育は禁止されているのだ。

「ユキのことだから、今もその本持ち歩いてるでしょ」

「持ってるけど……」

「じゃあここで召喚してみようよ！」

「ええ!?無理だよ!ぼくまだ霊力の使い方下手くそなんだよ?」

「大丈夫!ユキって頭いいし、器用だもん。絶対成功するって」

「私も、その式神にあってみたい……かも」

「芳乃様まで」

「それに、菜子が言うように、ユキならできそうだなって」

「うう。失敗しても笑わないでよ」

菜子や芳乃様の押しに弱いのはこの時からだったようだ。

俺は仕方なく本を取り出し、準備を始める。

本に書かれた通りに召喚陣を書き、本に挟まっていた紙を使って依り代を作る。最後に依り代を二つ、召喚陣の真ん中に置いて準備完了。

「依り代を二つ置くのはなんで？」

「式神は二体で一つの役割を果たすんだって」

「じゃあ、成功すればモフモフが二倍なのね！」

「芳乃様、式神がモフモフとは限りませんよ？」

「どうやらさっきのペット発言が尾を引いているらしい。」

「気を取り直して召喚に集中する。」

「すう、はあー」

息を整え、本に書かれている通りに呪文を唱える。

「告げる——」

呪文を唱えている間、不思議と頭の中がスッキリしていた。

周りの音が遮断され、聞こえるのは自分の心臓の音のみ。

自分の中の霊力が吸い取られている感覚がするものの、嫌な感じではなかった。

俺はそのまま最後の一節を読み上げる。

「——我が元に下り、契りを結べ！」

すると、あらかじめ式神の器として用意してた紙が薄く光り出し、姿を変える。一つは猫の姿に。もう一つは犬の姿に。

「やった……成功した……あはは！成功した！やったあ！」

「すごい！すごいよユキ！」

「ほ、本当に紙が動物になりました！」

喜ぶ俺に茉莉が抱きつく。芳乃様も目を丸くしながら感嘆の声をあげていた。

俺は初めて召喚した二体の式神に顔を向ける。

呼び出した式神に名前をつけることで正式に契約は完了する。

「君は……決めた！君の名前は『猫丸』だ！」

「にやー」

「それで君は……『狛』！」

「ワン」

猫の式神「猫丸」と犬の式神「狛」。

それが俺の初めて召喚した式神だった。

「ぼくは幸彦。これからよろしくね。こっちはぼくの幼馴染みの茉莉と芳乃様」

「初めまして、常陸茉莉です」

「朝武芳乃です。よろしくお願いしますね」

俺たちの言葉に二匹はそれぞれの鳴き声で答えてくれた。

「にゃー」

「あは、猫丸は人懐っこいですね」

「本当だ。はわわわ。モフモフです」

自ら茉莉と芳乃様にすり寄っていく猫丸。それとは対照的に遠目からそれを眺める狛。

猫丸が腕におさまるぐらいの大きさに対して、狛は白い毛並みで大型犬ほどの大きさがあった。

俺は改めて狛に挨拶をする。

「狛も、茉莉や芳乃様と仲良くしてね」

俺が手を差し出すと、狛は前足をポンツと俺の頭に寄せ

「フツ」

と見下したような声を出したあと、勝手に何処かへ行ってしまった。

「あらら。完璧に下に見られてますね」

「あの、ユキ、元気出して」

「はは、いいんですよ。どうせぼくなんて所詮その程度だったんですよ。召喚に成功したぐらいでいい気になって……ぼくなんか……」

「大変です芳乃様！ユキが膝を抱えていじけちゃいました！なんとかしてくださいー！」

「ええ!? えつと……ゆ、幸彦。元気出してにゃー。幸彦はすごいにゃー（裏声）」

「芳乃様が必死に猫丸を演じていらっしやる……！なんて健気で可愛らしいのでしょうか。でも、猫語ならワタシも負けないにゃー！」

「もう！茉莉！からかってないで茉莉もユキを励ましてー！」

俺たちの中で誰かが悲しんでいると、他の誰かが励ましてくれた。俺が泣いたら茉莉と芳乃様が茉莉が落ち込んでいたら俺と芳乃様が芳乃様の元気がないときは俺と茉莉が

そうやってお互いが笑顔でいれる毎日。それが今まで続いていた。

あの日だって、いつもと変わらない日常だった。

なんだかんだ召喚のあと秘密基地で遊んだ俺たちは、日が暮れ始めたので家路についた。

「そういえば、狛がどっか行っちゃったままだけど大丈夫なの？」

「大丈夫だと思う。契約は完了してるからぼくが命令しない限り誰かに危害を加えることはないし、そのうち霊力が尽きてぼくの元に戻ってくるから」

「うう、狛もモフモフしたかったのに……」

「芳乃様、さつきからそればかりですよ」

いつもと変わらない日常。

それは簡単に崩れ去る尊いものだった。

「お嬢ちゃんたち。こんな時間に子供だけで山の中を歩くななんて危ないじゃないか」

そいつらは突然現れた。

中年の小太りな男と背が高く少し痩せこけた男。

街では見かけない顔と上下黒い洋服を着ていることから穂織の間でないことは明らかだった。

俺と茉莉はすぐに芳乃様を庇うように前に出る。見るからに怪しい連中だったし、秋穂様にも芳乃様を守ると約束していたから。

小太りな男が笑顔で語りかけてくる。その間も背の高い男の方は無表情だった。

「おじさんたちに送ってもらわなくてもワタシたちだけで帰れますから」

「あはは、頼もしいお嬢さんだ。おや、よく見ると可愛らしい顔してるね。なおさらおじさんたちは心配だよ」

小太りな男が舐めるように茉莉を眺める。

その目線に腹が立った俺は茉莉の前に出た。

「ぼくたちは大丈夫と言ったんです。急いでますので失礼っ——！」
息ができなくなる。

突然の出来事だったので背の高い男に鳩尾を蹴られたと気づくまでに時間がかかった。

うずくまる俺を男はもう一度蹴り飛ばし、馬乗りになって殴ってきた。

何度も何度も何度も何度も殴られた。

思考が全然追いつかなかった。その代わり、このままでは殺されると本能が叫んでいた。遠のく意識の中で茉莉と芳乃様の悲鳴が聞こえていた。

「やめろ。つたく、お前は荒っぽくていけねえ」

「こいつの目が気に食わなかったんだよ。いつまでもガキに下手に出ないでさっさと連れてきやいいじゃねえか」

「わかったよ。さあ、お嬢ちゃんたち、言うことを聞いてくれれば暴力はしない。わかってるね」

このままじゃ、茉莉と芳乃様がさらわれてしまう。

最後の力を振り絞って俺は——

「まだ意識あるみたいだな。変な気起こすと本当に、殺すぞ」

俺は——逃げた。

情けない声をあげて、泣きながら、逃げた。

怖かった。本当に殺されると思った。俺の足は止まることなく、走って逃げた。

人に向けられる殺気。溢れ出る悪意。殴られる痛み。その全てを知ってしまった。

男の笑い声が聞こえた。それすらも怖かった。

俺は……茉子と芳乃様を見捨ててしまった。

そこからはあまり覚えていない。

山から出てきた俺は玄十郎さんに保護された。

俺はまともにも話すこともできなかつたらしい。言葉の端々から自
体の重さに勘付いた玄十郎はすぐに町の自警団を収集。俺はそのま
ま駒川診療所で手当てをされたが、誰にも会わせる顔がないと思い部
屋に閉じこもった。

部屋の外からは大人たちの慌てた声が聞こえて来る。街をあげて
芳乃様たちの搜索を始めたらしい。

自分が許せなかつた。惨めで情けなくて弱くて、茉子も芳乃様も守
ることができなかつた。涙が止まらない。悔しくて悔しくて仕方が
なかつた。

部屋の端で膝を抱えて泣いていると優しく声がかけられる。

「幸彦、ここにおったか。探したぞ」

「ムラサメお姉ちゃん」

「みんな心配してたぞ。ひどい怪我なんだ。ベッドで横になっていな
くていいのか？」

「ねえ、ムラサメお姉ちゃん。茉子たち死なないよね」

「安心しろ。今玄十郎たちが探しておる。無事すぐ見つかるさ」

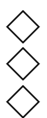
「ぼく、逃げたんだ。秋穂様を守るって約束したのに。逃げちゃった
んだ。茉子も芳乃様も見捨てて……ぼくは……ぼくっ……」

声を出すたび涙が溢れ出た。

「……一人にさせて」

「……」

ムラサメ様は何か言いたそうにしたが、そのまま姿を消してくれ
た。



一体どれだけの時間が経ったのか、あたりはもう真っ暗になってい

た。

外からは相変わらず大人たちの声が聞こえて来る。

もうこのまま石になりたいときえ思った。自分という存在を消してしまいたいと、そう思った。

その時だった。

——おい、人間。貴様こんなところで何をしている——
どこからか声が聞こえてきた。

——あの娘たちはお前の大切な存在なのであろう？

それなのにいつまでこんなところで蹲っているつもりだ——
顔をあげて周りを見渡すが、誰もいない。

俺は部屋の窓を開けて外を見る。そこにいたのは……

「……猫？」

白い大きな犬。間違いなく猫だった。

猫は俺と目が合うと「ワンツ！」と吠えて何処かへ走っていく。

俺はなぜか「ついてこい」と言われたような気がした。

俺は猫を追って走った。ここで走らなければきつと後悔すると思った。

猫は夜の山の中に入っていった。

『夜の山には入ってはいけない。』子供の頃から言われてきた約束を、俺はこの日初めて破った。

山に入って数分。猫の姿は見失ってしまったが、代わりに聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「くそっ！歩いてても歩いてても同じところをぐるぐる！どうなってんだよ！」

間違いなく小太りな男の声だった。とてもイラついているのがわかる。

俺は咄嗟に木陰に身を隠す。

あれからずっと歩いていたのだろう。よく見ると皆息が上がっていた。特に疲れているのが芳乃様だった。肩で息をして座り込んでいる。心なしか顔色も悪かった。

「おらっ！さっさと歩きやがれ！」

背の高い男が大声を上げる。さっきの恐怖が蘇ってきて手足の震えを止めることができなかった。

俺が恐怖に震える中、茉莉は芳乃様の前に出て抗議する。

「やめてください！芳乃様は病み上がりなんです！もう少し休憩を……」

「うるせえ！こっちは切羽詰まってるんだ！ガキがどうなろうと知ったことか！別にすぐ死ぬわけでもねえ」

「瀕死だろうがなんだろうが、要はお前たちがここにいるだけで大金が手に入るんだ。ここで捕まるわけにはいかねえんだよ！」

目の前の大切な人を助けるためにここにきたはずなのに、動けなかった。喉が張り付いたように声も出せない。

「茉莉……私は大丈夫、だから」

「いいえ。大丈夫ではありません。ワタシが不甲斐ないばかりにこんなことになってしまったんです。これ以上、芳乃様に何かあつては、安春様にも秋穂様にも顔向できません！」

「茉莉……」

「ごちやごちやうるせえガキが。おい。必要なのは銀髪のカキだけだろ？こっちのカキは殺してもいいんじゃないか？」

（殺す？誰を？）

一瞬で頭が真っ白になった。男は銃口を茉莉に向けている。

「そんな！お願いやめて！」

「おうおう。さすがは巫女姫様だ。無駄な殺生は好まないかい？だがな、俺たちも余裕がないんだ。不確定要素は少ないほうがいい」

「ああ、そういうこつた！」

「お願い！銃を降ろして！茉莉を殺さないで！」

（だめだ。そんなの、だめだ！）

芳乃様の言葉でわかってしまった。このままでは茉莉が殺されてしまう。

「あばよ嬢ちゃん。あの世でたっぷり後悔しな」

「くっ……」

（動け、動け動け動け！）

歯が欠けるほど力を込め、自分の手足に命令を送る。そして
「やめろおおおおおおおおおおおおお!!!」

ようやく俺は動き出す。火事場の馬鹿力だろうか、自分でも驚くほど速く銃を構える背の高い男に飛びかかる。

「っ！なんだこのガキ。どっから出てきた!?!」

(間に合え！)

いきなり俺が出てきたことよって男は混乱する。

狙いは男が持っている拳銃。

「うああああああああああああああああ!!! 茉莉と芳乃様に手を出すなああああああ!!」

俺の体当たりによつて男はバランスを崩し、あさつての方向に向かつて発砲する。そのまま小太りな男を巻き込み倒れこんだ。

「ユキ!? どうしてここに?」

「説明はあと！今は芳乃様を安全なところに！ぼくが囿になる」

「っ!? そんなことしたらユキが……」

「いいから早く!!」

芳乃様は無理をして意識が朦朧としている。

茉莉は一瞬間をしかめてから、諦めたように芳乃様の肩を持って木陰に避難した。

その間に男たちも起き上がる。

「このクソガキ……舐めた真似しやがって。殺す」

「おじさんたちを怒らせるとどうなるかじっくり教える必要がありそうだ」

相変わらず震えが止まることはないが、息を整えながら相手の出方を確認する。

「ほら、謝るなら今のうちだよ。おじさんたちも子供一人相手に暴力はふるいたくないんだ」

「おじさん、さっきと口調が変わってる。高圧的な態度の方があんたにはお似合いだよ。それに……一人じゃない。人数は互角だ」

「何を言ってる……っ!?!」

油断していた小太りな男に白い影が襲いかかる。

他でもない、狛だった。

狛は容赦なく男の腕に噛み付いていた。

「ぎゃああ、痛い！痛い！」

「このやろうっ！」

もう一人の男が狛に向かって発砲するが、狛は軽々回避する。

「こ、殺せ！早く撃ち殺せ！」

「やってるっつうのー！」

何度も発砲するが狛に銃弾が当たるとはなかった。

「狛っ!!ぼくのありったけの霊力を君に渡す!だから力を貸してくれ
!」

「ワンッ！」

狛は「当たり前だ」というように男たちの元へと駆けていく。

その牙で、鋭い爪で、男たちにダメージを与えていく。

俺は石を投げて狛の援護に回った。霊力が狛にどんどん持つて行かれて正直立っているのもやっとだったが、倒れるわけにはいかなかった。

いける!そう思った時、背の高い男が狛や俺ではない方向へ銃を向けた。

その先には茉子の姿があった。

「茉子っ!危ない！」

(先ほどのように男に体当たりすれば。)

(いや、この距離じゃ間に合わない。)

(じゃあ茉子を押しのけて回避すれば。)

(だめだ。茉子は男より遠くにいる。)

(だったら……。茉子が撃たれる前にぼくが撃たれればいい。)

俺は自ら銃口の前に飛び出した。弾は俺の右肩を貫通した。

そして……

「きゃあっ!!」

俺は茉子の元へ駆け寄る。男は狛が相手をしてくれた。

「茉子!茉子、しっかりして!!」

茉子の体に触れるとビチャツと暖かい液体に触れた。

男なんだ」

「……幸彦は、全然悪くないじゃないか……！」

「だが俺が原因で人が死んだのは事実だ。たとえそれが悪人だったとしても。……幻滅したかい？」

「……幻滅なんかするもんか」

俺の言葉に、幸彦は短く「そうか……」と言うと立ち上がった。

「さあ、昔話は終わりだ。俺は芳乃様と茉莉の様子を見てくるよ」

これ以上話を続けるつもりはない。おそらくそういうことなんだろう。立ち去ろうとする幸彦に俺は声をかける。これだけは伝えておきたかった。

「幸彦。俺はやっぱり、お前はすごいと思う」

幸彦は立ち止まり、小さく囁く。

「ほんと、俺には眩しすぎるよ、君は」

結局振り返らず朝武さんのところへ行ってしまった。

そんな幸彦の後ろ姿を見ながら、ムラサメちゃんが心配そうな顔を
して俺の顔を覗いてくる。

「聞いたこと、後悔しておるか？ご主人」

「いや。むしろもつと朝武さんたちの役に立ちたいって思ったよ」

「うむー」ご主人ならそう言ってくれと思うたぞ」

俺の知らないみんなが、そこにはいた。

それを知ることができたのだ。

過去は変えられないけど未来は変えられる。

絶対朝武の呪いを解いてみせると、俺はもう一度心に誓ったのだ
た。

第十六話 「レナさんの気になるあの子2」

穂織の夜はとても静かだ。

そもそも娯楽の少ない街であるから、夜中に出歩く者はいない。神社の境内に足を運ぶ者などいるはずがない。

今この場所にいるのは吾輩と、吾輩の友だけだ。

なんてことはない。ただ、今日は友と話がしたかったのだ。

吾輩はゆつくり夜空を見上げる。月我が友は変わらずそこにいた。

「今日もお主は綺麗だな。……最近な、皆いい顔をするようになった。芳乃も茉莉も幸彦も。ご主人が来てから明るくなった。さすが我がご主人だ。叢雨丸が選んだだけのことはある」

自分の声だけが暗闇に溶けていく。

「ご主人と芳乃たちが力を合わせれば、朝武の呪いも解けるかもしれない。そう思うようになってきた。だが……同時に考えてしまうのだ。呪いが解けたら吾輩はどうなってしまうのか。もちろん芳乃のためにも早く呪いを解いてやりたい。でも……吾輩は怖いのだ。ご主人たちと別れるのが、怖くて怖くてたまらんだ」

口にして改めて思う。自分はどうしてこんなに我儘なんだろう。死から逃げ、大切な人たちの想いを裏切った自分に、今更できることがあるのだろうか。

「なあ、月よ。吾輩は一体どうしたらいい?」

吾輩の問いかけに、当然答えなど返ってこなかった。

「こいつが捜査資料だ。お前が拾ってきた傀儡の欠片の出处や怪しい

動きをしているアストラル能力者がいないか調べてはいるが、存外難航してやがる。どうやら相手は相当やり手だぜ」

有地に12年前の事件を話した次の日。

朝早く魚政を訪ねた俺は、魚海のおやじさんから例の傀儡使いについての報告を受けていた。

「たった数日でここまで調べられる特班も相当のやり手ですよ。事件に関わっているかもしれない企業のリストまで作ってもらえるとは。早速玄十郎さんと安春様に話して芳乃様のお見合い相手から洗ってみます」

「こつちも引き続き調べておく。といっても調べるのは榎本と隆之助だけだな」

引退したとはいえ、さすがは元特班の局長だ。仕事モードのおやじさんは、その場にいるだけで周りの空気を引き締めしてくれる。

しばらく渡された資料に目を通してしていると携帯の着信音が聞こえてきた。

「おっ・葉子ちゃんからラブコールか??」

気がつけば魚海のおやじさんが後ろから携帯の画面を覗き込んでいた。毎回なぜこの人はこうも簡単に背後に回りこめるのだろうか。とんだ才能の無駄遣いだな。

俺はおやじさんを見捨てて電話に出る。

「もしもし」

『あ、おはよう幸彦。もう準備できた?』

「しまった、もうそんな時間か。悪い、すぐ向かうから先に行つてくれるかい」

『はあ、電話して正解でしたね。遅刻したら罰金だよ』

「そうならないよう急がなきゃな」

『もう、調子いいんだから。じゃあまたあとでね』

「ああ、それじゃあ」

俺が電話を切ると同時に魚海のおやじさんがグイッと顔を近づけてくる。なんだか目がキラキラして興奮してるようにも見えるが……。

「幸彦！ やつと…… やあつと 茉莉ちゃん とデートする日 が来たんだな！」

「え？ デート？」

「照れるなつてこのやろう！ お前さっきの電話、デートの待ち合わせの話だったろ？ 遅刻したら罰金だよ♥とか、またあとでね♥とかとか！ いや〜 若いっていいね〜」

「どうやらおやじさんは 壮大な勘違い をしているようだ。 おやじさんのハートマーク がついた ような声なんて 聞きたくないんだが。」

「というか、それは 茉莉の真似か？ もし そうなら 怒るぞ？」

「デートがあるなら先に 言えよ！ ほら、早く行けつて。 茉莉ちゃん 待たせたら 承知しねえぞ」

否定するのは 簡単だが、説得するのは 骨が折れそうだ。 茉莉から電話があった ように 約束の時間が 迫っていたので、俺は おやじさんを 放置して その場を 離れる。

今日は デートではなく、レナさんに ムラサメ様 を紹介する日。

俺はその 足で 志那都荘へ と向かうの だった。

今日は レナさんに ムラサメちゃん を紹介する日。

この日のために じいちゃん や みづはさん にも 協力してもらった。あとは レナさんに ムラサメちゃん が 霊体である 事が ばれない ように 紹介する だけだ。 心なしか みんな 緊張している ように見える。

俺たちは 志那都荘の 前で 幸彦と 落ち合った。

「すまない、遅くなった」

「女性を待たせるなんて 感心しませんね〜 幸彦」

「うっ 悪かったよ。 今度 埋め合わせは するから 許してくれ」

「田心屋の 新作スイーツで 許してあげる」

「わかった。 今度 ご馳走するよ」

「あはっ♪ 約束ですよ」

「ほらそこ、イチヤイチャするでない。今日はでえとの日ではないのだぞ」

ムラサメちゃんがジト目で突っ込むと、幸彦も常陸さんも少し頬を赤らめながら「あはは」と笑ってごまかした。

「付き合っていないんだよね」

「そ、そのはず……です」

この前付き合っていないと断言した朝武さんも少し言い淀む。早く付き合えばいいのと思うが、きつとこの二人には一歩踏み込めない何かがあるのだろう。〴〵いつかそうなればいいのだがな……”と前にムラサメちゃんが言っていた言葉もなんとなくわかるようになってきた。

ともあれ、常陸さんと幸彦のおかげで少しだけ緊張が和らいだ。あの二人の事だから、案外狙ってやっているのかもしれないな。

「それでは行きましょうか」

俺たちは志那都荘の中へお邪魔する。

ムラサメちゃんが俺たち以外に見えないことを考慮して、志那都荘の一室をじいちゃんが貸してくれたのだ。

「ムラサメちゃん、緊張してる?」

「何を申すか。そもそも本当に吾輩を見ることができるのか、甚だ疑問でもあるのだ。緊張する訳無かろう」

「じゃあなんで俺の後ろに隠れるの?」

志那都荘に入った途端、俺の後ろにぴたりくっついて移動するムラサメちゃんに目を向ける。そんなにくっつかれると歩きづらい。悪い気はしないけど。

「こ、これはあれだ!そのレナとかいう者が本当に吾輩を発見できるか確かめるためののだ」

「心配しなくても、レナさんは優しくていい子だからきつと友達になれるって」

「……そういう心配ではないのだ」

「ん?なんか言った?」

「なんでもない。気にするなご主人」

何か言っていたように思ったが、ムラサメちゃんはそっぽを向いてしまった。その態度に少し引つかかりを覚えたが、部屋に着いたのでとりあえず思考を止める。

部屋に入るとレナさんが満面の笑みで出迎えてくれた。

「おお！みなさんいらっしやいませ！もちを長くして待つてましたよ」

相変わらず惜しい感じで間違ってるんだよな。

しかし、レナさんの笑顔を見ているとこっちまで楽しくなるのだから不思議だ。そんなレナさんは朝武さんを見て一層顔を輝かせた。

「ヨシノも来てくれたでありますね！嬉しいです！」

「レ、レナさん。本日はお日柄もよく……」

「朝武さん？なんでそんなに緊張してるの？」

「だって、茉莉たち以外の友達の家にお邪魔するのなんて初めてなんですもん」

今朝からなんとなくソワソワしてたと思ったが、相変わらずの箱入り娘な朝武さん。そんなところも可愛いのだが。

「ヨシノ、そんなに気負わなくていいのですよ。マコやユキヒコと接するみたいになればいいんです。私とヨシノは友達なんですから」

「レナさんっ……！」

レナさんの手が朝武さんの手を優しく包む。本当にレナさんの優しきは俺たちを温かく包んでくれるようだ。俺より後に転校してきたのに俺よりも断然クラスに馴染んでいるのも彼女の人柄のおかげだろう。……俺に問題があるわけではないはずだ。

「それで、例の女の子はどちらにいますのしょうか？」

「ああ、それなら——」

「じーっ……」

ふとどこからか視線を感じる。後ろを向くと、襖から覗き込むムラサメちゃんと目が合った。なんで一緒に入ってこないんだよ……。

「およう……どこから視線を感じます」

どうやらレナさんも感じ取ったらしく、襖に目を向ける。

「きゃっっ」

ムラサメちゃんは素早く襖の陰に隠れる。

「おかしいです。確かに誰かが覗いていた気がしたのですが……もしや妖怪もぐもぐメンですか!？」

「なにかを美味しそうに咀嚼していそうな妖怪ですね」

「ッメン」ということは、性別はオスだろうね」

「目目蓮の事じゃないんです?」

朝武さんが冷静に突っ込んでいるが、あの二人に関しては楽しんでいるだけだろう。ていうか、早くムラサメちゃん紹介しないのかな?

「じじーっ……」

またもやムラサメちゃんから熱い視線が向けられる。

レナさん、今度は先程より早く振り返る。が……

「さささのさっ」

今日一番の速さで襖の陰に隠れてしまうムラサメちゃん。

いったいなにをやっているんだ……。

「もういいから出てきなよ、ムラサメちゃん」

俺の言葉でようやく襖から顔を出し、レナさんと対面する。

ムラサメちゃんが見えるならちゃんと反応するはずだけど。

「おおー! やくやくしっ! 顔を見れました。初めまして。レナ・リヒテナウアーです。あなたのお名前を教えてくださいますか?」

ムラサメちゃんに目線を合わせるよう屈みながら微笑むレナさん。

「む、ムラサメ……です。よろしく頼……お願いします」

ムラサメちゃんは顔を赤らめながらも、病弱で人見知りな幸彦の親戚の子を演じていた。普通の敬語を使うとするムラサメちゃんか……なんだか新鮮だな。顔を赤くしちゃって、恥ずかしいのかな? と思っているとムラサメちゃんが小声で何かつぶやいた。

「くっ、なにを食べればそこまで大きくなるのだ。屈んだことでより胸を強調してくるとは、吾輩への挑発か!？」

ああ……憤りのせいで顔が赤くなってるのね。

大丈夫だよムラサメちゃん。レナさんは規格外だから。それに小さい方が好きな人間もいるから。うん。人間胸で判断するのはよくないよ。

さて、話が脱線しかけたが、どうやらレナさんにははつきりとムラサメちゃんが見えているようだ。幸彦も半ば確信していたのだろう、驚いた様子はなくなにか思考を巡らしている。だけどそれも少しの間で、すぐにいつもの調子でレナさんに話しかける。

「この子が俺の親戚のムラサメちゃん。人見知りだから、まだ恥ずかしいみたいだね」

「……うん」

頷きながら俺の後ろに身を隠す。今日の俺は壁役だ。唯一触れることができる俺の近くにいれば、霊体だと気づかれる確率が低くなる。レナさんと一定の距離を取るための苦肉の策である。

「大丈夫でありますー！これから徐々に仲良くなってみせますので！」

レナさんは自信たっぷりそう言った。

「それで、どうしてこうなった」

「仕方ないだろ、レナさんがもつと仲良くなるためにはウィンドウショッピングが一番だって言い出したんだから」

「だが吾輩は服も着替えられないし食事もできんだぞ」

志那都荘で自己紹介を終えた吾輩たちは今、皆で街に繰り出していた。どうやら一緒に街を見て回ることで仲良くなるというレナの作戦らしい。

まあ、吾輩も綺麗なものや可愛いものを愛でるのは嫌いではない。むしろ普段見れないものを見て多少興奮している。だが、物に触れることのできない吾輩にとっては気が休まらないのも事実なのだ。

「私たちもフォローします。安心してください」

「芳乃様の言う通りですよ。いざとなったら有地さんが一肌脱いでくれますから」

幸彦がレナの気を引いているうちに芳乃と茉莉が小声で言う。そこまで言われては仕方がない。大船に乗ったつもりでやってやるか

のう。

しかし、このレナという娘は想像以上にいいやつだな。多少強引なところもあるがしつかり吾輩に気を配って店を選んでいる。吾輩が退屈しないようによく話しかけてくれるし、表裏がないまっすぐな少女という印象だ。

ふとレナの足が服屋の前で止まる。なにやら店の中をうらやましそうに眺めている。

「レナさん？どうしましたか？」

「あ、いえ……私もヨシノたちが着ているような服が欲しいなと思っ
てしまいました」

穂織に住む人間は、穂織で独自に発展した着物をアレンジした服を着ている。みづはや幸彦などはたまに普通の服を着ることもあるが、これは少数派だろう。

「ではせっかくですし、レナさんの私服を買いましょうか」

「ええ!?大丈夫でありますよ!みなさんの時間を割いてまでそんな」

「そんなこと言わないでください。今日は十分楽しい時間を過ごさせてもらってますから」

「芳乃様は昔から人の服を選ぶのが好きなんですよ。幼い頃は幸彦に似合う可愛い服を探しては着せていましたから。ね?幸彦」

「……ハハハ、オボエテナイナ」

あの頃を思い出しているのか顔を背けて冷や汗をかく幸彦。たしかに、芳乃と菜子が着せ替えた幸彦はなかなか可愛らしかった。

「ですがムラサメちゃんもいますし」

レナが申し訳なさそうにこちらを見てくる。

周りに気を配るのもいいが、レナは些と優しすぎるな。

「気にするでな……気にしないでください。わがは……私も人の服を
考えるのは好きですから」

ううむ。自分でしゃべって違和感がある。口調を変えるのはなかなか難しいのう。

「俺たちは店の外で待ってるから。女の子だけで見てきなよ」

「ダメですよ、有地さん。ムラサメさ……ちゃんは有地さんに一番な

ついでるんですから。一緒に来てください」

「でも、女の子ばつつかのところは俺たち男子が行くのはちよつと……」

「よかったじゃないか。両手に華どころじゃないぞ」

「あは、もちろん幸彦も一緒に行きますよね」

「ア、ハイ」

ご主人も幸彦も半ば強制的に店の中へ入る。幸彦に至っては茉莉に腕をがっしり掴まれていた。

店の中でいろいろ試着してみるレナだったが、けしからんことにはほとんどの服が入らなかった。ふつ。胸が大きいのも考えものだのう。

サイズが合うのが数着しかなかったため、買い物が終わるまでそれほど時間はかからなかった。

「じゃんじゃかじゃーん！着替え完了でありますよ！」

とても嬉しそうに皆の前でぐるりと一周する。さつきまで二つ結びだった髪型も服装に合わせて一つ結びに変えてきた。ふむ、なかなか似合うではないか。

肌の露出はそこまで変わらんが、へそはちゃんと隠れている。その代わりに、肩にはスリットが入っていて肩から脇にかけて肌があらわになっていた。

「すごく……可愛いと思う」

「ああ、とても似合っているよ。普段も綺麗だけど、今は華やかっ感じかな」

「あはは、褒めすぎですよ二人とも。なんだか照れてしまいます」

「美しい女性は素直に褒めるよう榎本さんに言われてきたからね」

「俺も素直な感想だよ」

服を選んだ芳乃と茉莉も満足げに頷いていた。

吾輩もご主人の後ろから手を出し親指を突き上げる。

「えへへ。ありがとうございます、みなさん！」



それから一日中街をぶらつきながら、ウィンドウショッピングを楽

しんだ。

歩き疲れた吾輩たちは公園のベンチで一休みをしている。

最初はどうなるかと思ったが、何とかここまでハプニングなくやってこれた。あとは帰るだけだが、最後まで気を抜くわけにはいかないだろう。帰るまでが遠足だ。

「飲み物買ってくる。みんなはここで待ってて」

「あ、ワタシも行く」

幸彦と茉莉が自動販売機の元へ行く。

「有地さん！あの人お財布落として行っちゃいましたよ！追いかけてきゃー！」

「ちよつ朝武さん。一人でどっか行くのは危ないって！レナさん、ムラサメちゃん。すぐ戻るからちよつとだけ待ってて。おーい朝武さんー！」

芳乃とご主人も落とし物を届けに行ってしまった。芳乃もご主人も人がいい。

と、必然的にレナと二人きりの時間ができてしまった。

「あはは、二人きりになってしまいましたね」

吾輩は頷く事で同意の意を表す。

「あの、ムラサメちゃん。今日は楽しかったですか？」

「うん……はい。久しぶりに街を大勢で散策できたので楽しかったです」

「……」

わずかな沈黙のあと、レナは優しく微笑みながら吾輩に語りかけた。

「口調、無理して変えなくてもいいでありますよ」

突然の事で目を丸くしてしまう。

「……なぜ無理していると思うのだ？」

「ムラサメちゃん、すごい喋りにくそうにしましたよ。」

「ふふふ」とレナは面白そうに笑った。たったそれだけで看破されるのは吾輩たちの誰も予想しなかっただろう。

「はあ、バレてしまつては仕方ない。お言葉に甘えていつも通りにさせてもらうぞ」

「はい♪そうしてもらえると私も嬉しいです」

「ここまで言われて偽るのも悪いと思い、口調を戻す。

やはりこの方が話しやすい。」

「しかし、見破られるとわな。恐れ入ったぞ」

「ふっふっふ。このぐらい朝飯前ですよ。ヨシノもマコもユキヒコもマサオミも、普段よりよそよそしい気がしました。それに、ムラサメちゃんのことを呼ぶときもムラサメ様と言おうとしてみましたし、まるで何かを隠しているようでした」

「ここまで言うとなレナは少しだけ寂しそうな顔をした。

「だから……きつと、私に知られたくない秘密があのだと思つたですよ」

「すまない。だが、芳乃たちを恨まないでくれ。今は話せないが、これには訳があるのだ」

「わかつてますよ。ヨシノもマコもユキヒコもマサオミも、理由もなしに嘘をつくような人ではないと知っていますから」

困つたように笑うレナ。その表情は寂しそうであり、どこか慈愛に満ちているようにも感じた。

「……疎外感を感じるのなら、ヨシノたちにちゃんと言うのだ。吾輩に言ってくれてもいい。レナを悲しませたなら、本末転倒だからな」
「ふふ、ムラサメちゃんはやっぱり優しいでありますね。今日会つたばかりの私の心配をしてくれるなんて」

「わ、吾輩はただ、思つた事を口にしただけだ」

「ありがとうございます、ムラサメちゃん。ですが、聞くのはやめておきます。いつか話してくれるのを待ちますよ」

吾輩はレナの事をよく知らない。だが今日一日共に過ごしてわかつたが、此奴は筋金入りのお人好しだ。

ふと、そんなレナがなぜ吾輩の事を気にかけるのか気になった。

「レナは、どうして吾輩の事が気になったのだ？」

吾輩の質問にレナは一瞬考え口を開く。

「……似ていたであります、私に。どこかと聞かれると困るのですが、なんとなくそう思ってしまった。それから何回か街中でムラサメちゃんを見かけましたが、なんだか泣きそうで、とても寂しそうな目をしているのを見て、あの子の笑っている顔が見たいって不思議と思うようになったでありますよ」

「……」

見ず知らずの吾輩を見てそんな事を考えると。此奴はやはり――

「やはりおぬしはご主人に似ておるな。気配だけでなく性格までそっくりとは。まったく、吾輩の周りはお人好しだらけで困る」

「ご主人が誰かはわかりませんが、それほどムラサメちゃんが愛されているという事ですよ」

「かもしれないな。少なくとも悪い気はせん」

吾輩が素直に頷くとご主人たちが戻って来る。

「ジュース買ってきましたよ。幸彦の奢りですよ」

「じゃんけんなんてするんじゃないよ……」

「財布を拾ったお礼にみかんもらっちゃいました！」

「無事に届けられてよかったね、朝武さん」

一気に場が騒がしくなる。やはりこのぐらいうるさい方が心地いと感じるな。

「レナさん、ムラサメちゃん、お待たせ。あれ？二人とも御機嫌みたいだけど何かあった？」

「乙女の秘密です！ね、ムラサメちゃん」

「うむ、乙女の秘密なのだ！」

吾輩たちの様子を見て芳乃たちは顔を見合わせながら首を傾げた。



日も暮れてきたので吾輩たちは帰路につく。とりあえずはレナを志那都荘まで送り届ける事にした。

霊体なので体の疲労はないが、精神的な疲れはある。神力を使うの

とはまた違った疲れだ。

「また遊びましょうね、ムラサメちゃん！」

「うむ。今日は存外楽しかったからな。頻繁には無理だが、たまにはこういうのも悪くない」

「本当に、俺たちがいない間に何があつたんだ？」

吾輩たちの前を歩くご主人たちが疑問の声を上げている。

「普通に話をしていただけですよ」

「うむ、それだけだな」

最初はあまり気がのらなかったが、悪くない一日だったな。

この疲れも嫌な疲れじゃない。今日は久しぶりに芳乃と風呂にでも入るか。

そう考えながらご主人たちのあとを歩き始めたそのときだった。

突然ゾワリとした感覚が襲う。何かの悪意、黒い気配だ。その気配を辿って上を見上げると、ちやうどご主人の真上に置いてある花瓶が落ちる寸前だった。

「ご主人！危ない!!」

とつきにご主人の背中を押す。物に触れることのできない吾輩であれば怪我をすることはない。合理的な判断だった。だが、その日は普段とは違い、吾輩が霊体だと知らぬ者がいた。

「ムラサメちゃん!!」

声と共に吾輩を柔らかく暖かいものが包み込む。

レナだ。

レナが吾輩をかばって抱きつくように覆いかぶさったのだ。

馬鹿者！今すぐ離れろ！おぬしが怪我をする！と叫びたくても口がレナの胸で蓋がされていて声が出せない。というか、く、苦しい。

「ふっ！」

「はっ！」

レナに花瓶が落ちる前に、葉子がクナイで花瓶を砕き幸彦が式神でその破片を防ぐ。

二人のおかげで誰も怪我をすることはなかった。

「ムラサメちゃん！大丈夫でありますか!？」

「大丈夫！大丈夫だから離れろ！苦しい！」

「おお、申し訳ないです」

「ぶはっ」とようやく息を吸うことができた。

……いや待て、この状況はおかしくないか？

確かに感じるレナの温もり。けしからんほど大きくて柔らかい胸の感触。

なぜレナは、吾輩に触ることができているのだ？

「レナ……おぬし、吾輩に触られるのか？」

「？おかしなことを言いますね。当たり前じゃないですか」

ご主人も芳乃も茉莉も、幸彦ですら困惑の表情を浮かべている。

それほどのイレギュラーなのだ。

今日はレナに吾輩を紹介する日。

レナの謎を解き明かすはずだったこの日に、奇しくも謎がさらに深まってしまったのだった。

第十七話 「不穏な気配」

「ムラサメちゃん、あーん」

「あーん」

幸彦が買ってきたプリンをスプーンですくい、ムラサメちゃんに食べさせる。確かに口に入るのを確認するが、ムラサメちゃんの表情は晴れない。

「……なんの味もしない」

「……だよー」

決してイチャコラしているわけではないと、先に言っておく。

これは幸彦の提案だ。その証拠に、ここは朝武家の居間。周りには朝武さんたちもいて、じつとこちらを見つめている。半ば公開処刑といってもいいだろう。

ちなみに安春さんもいるが、微笑みながら目を細めて話の流れを見守っている。

「ふむ、やはり物体を挟んでしまうと有地でも干渉することはできないか」

先ほどのプリンが乗ったスプーンを観察しながら幸彦が呟く。

さつきからどこか様子がおかしい幸彦。何か急いでいるようなそんな感じ。レナさんを送って家に帰ってきてからずっとだ。

「まだ何かやらされるのかな？」

「こうなった幸彦は止められん。納得するまで付き合っただけやるしかない」

「そうなんだけど、なんとなく嫌な予感がするんだよね」

「というか、幸彦がこれから提案しそうなことが容易に想像できてしまったのだ。」

「じゃあ次は、指でプリンをすくってやってみよう」

「ほらね！言うと思った！」

得てして、嫌な予感というのは大抵当たるものである。

「つ、つまり吾輩にご主人の指をしゃぶれということか!? 無理だ! そんなはしたない真似できるか!!」

「大丈夫です、ムラサメ様。有地には手を洗ってアルコール消毒もさせますので」

「そういう問題ではないっ!」

「私も、それはちよつとやり過ぎじゃないかと思う」

「そうですか?……では口移しの方が——」

「それはダメです!!」

顔を真っ赤にしながら止めに入る朝武さん。まあ口移しなんて言われても絶対やらないけどね。ましてや人前でやることじゃないでしょ。

「なんだか幸彦おかしくない? 普段あんなデリカシーのないこと言わないよね」

「あれは研究者モードですね。自分の探究心が勝ってしまったて人の言うことを聞かなくなります」

「なんてとって付けたような設定なんだ……」

常陸さんが真面目な感じで説明してくれたが、この人も結構楽しんでいるよな……。一方の幸彦だが、説得が難しいと考えたのか「わかりました」といって話を一旦区切る。

「恥ずかしいと思うから恥ずかしいんです。その証拠に……菜子、ちよつとこつちに来てくれ」

「ん? 何?」

幸彦は常陸さん呼び寄せると、おもむろに自分の人差し指でプリンをすくい常陸さんの顔の前に持っていく。

「はい、あーんだだだだだだだ!! 痛い! 指はそつちに曲がらない!」

「あは♪ てつきり逆関節に曲げたいのかと」

「あだっ悪かったから! 謝るから離してくれっ!」

常陸さんのどす黒い笑顔、久しぶりに見た。あの幸彦が人差し指をあらぬ方向に曲げられて蹲うずくまりながら謝っている。なんとも新鮮な光景だった。



レナさんにムラサメちゃんを紹介し、俺たちが打ち明けるまで呪詛関係の話は聞かないと了承を得た俺たち。そこまでは予定通りだったのだが、レナさんは見えるだけでなくムラサメちゃんに触れる事もできる事が判明した。

幸彦にとつてそれはとても衝撃的だったらしく、研究者の血が騒ぎ出してしまったようだ。その結果がこの暴走。

常陸さんの説教ですこし頭が冷えたのか、幸彦は一度咳払いをするところらに目を向け話し出した。

「すまない、取り乱した。レナさんがムラサメ様に触れることができるとわかった今、有地がどこまで干渉できるかを知っておきたくて」「それがムラサメちゃんにプリンを食べさせることなの」

「食べれるか食べられないか。これはとても重要なことだよ。俺たちには、特に有地にとつてはムラサメ様を見て触れられるから実感が無いかもしいないけど、本来霊体に触れたり、そこから温もりを感じるなんてありえないことなんだ。それなのにレナさんも有地もムラサメ様の体温を感じると言う。これでもし有地経由で物を食べることでできるとなると、一つの仮説が成り立つ」

興奮したように早口で説明する幸彦。その後一度気持ちを落ち着けるように息を吐く。

「だが、確信がないうえに混乱を招きかねないから君たちには話せない。今後確信を得るためにも、知っておきたいんだ」

その言葉に邪な気持ちなど何処にもないように思えた。こんなにもつすぐな目で迫られると俺たちも断れない。

「はあ。とつとと終わらせるぞ、ご主人」

「いいの?」

「幸彦がここまで言うのだ。それだけやる価値があるのだろう」

「ムラサメちゃんがそう言うなら」

しぶしぶ人差し指でプリンをすくう。みんなの視線が俺の指に集まる。なんだかドキドキするな……。そんな事を思っているうちに、ムラサメちゃんは意を決して俺の指を啜えた。

「っ!!」

「……どう？ムラサメちゃん」

「あ、あああ、甘〜いっ♪」

ムラサメちゃんは目をキラキラさせながら一心不乱に指を舐めてくる。れるれろと舌をつかい、ちゆうちゆうとしやぶり付く。ムラサメちゃんが、俺の指を……だめだ！深く考えるな！

そんな俺たちを興味深かそうに観察する幸彦と常陸さん。驚いたように目を見開く安春さん。朝武さんに至っては真っ赤になった顔を隠すように手で覆いながらも、その目は指の隙間からガン見である。

「安春様からはどのように見えますか」

「不思議な光景だよ。将臣君の指についてたプリンが溶けるように消えていく。マジックでも見ているかのようだ」

「普通の人はそんな風に見えるのか。参考になりました」

幸彦は安春さんにお礼をいうとひとりで何やら考え始めた。

「味覚情報まで読み込めるのか。それに部質の転移？だとすると消えたプリンは一体……やはりムラサメ様の体は何処かに——」

ひとりの世界に入り込んでしまったようでブツブツ何かをつぶやいている。小さくてよく聞こえないが、どうやらさつき言っていた仮説の実証に一步近づいたのかもしれない。

「……ところで、俺は一体いつまで舐められなきやいけないんだ？」

「ああ、すまない。考え込んでしまった。ムラサメ様、有地、協力ありがとうございました」

「むっ!?もういいのか？もう一口検証に付き合ってやらんでもないぞ？」

どうやらムラサメちゃんはプリンが気に入ったみたいだ。それもそうだろう。だって彼女にとっては数百年ぶりの甘味なのだから。

「だけど、そんな事言っちゃうと幸彦が——。」

「それでは、今度レナさんも同じ事ができるのか検証したいのですが」

「しかたないの〜！協力してやろう！なっご主人！」

「やっぱりこうなるのね……」

こうして、俺の休日の予定が一つ埋まったのであった。

「らしくなかったね。今日の幸彦」

「自分でもそう思う」

「安春様にまで気を使わせて」

「……面目無い」

帰り道。いつものように茉莉と並んで歩く。

冷静になればなるほど、先ほどの俺はどうかしていた。仕える者の家で勝手に暴走。ただ知識欲を満たそうがためにムラサメ様や有地にも迷惑をかけてしまった。その上夕飯までご馳走になるとか、自分で自分を殴りたい。

「なにか悩み事？」

茉莉が心配そうな目でこちらを見てくる。

もう何度めだろうか。全くもって不甲斐ない。茉莉には心配されてばかりだ。彼女にかっこ悪い姿は見せたくないんだけど。でもこの目を見ていると、弱い自分が出てきてしまう。

「悩み事とは違うかもな。ただ、少し焦ってしまったんだ」

「焦り？」

そう。俺は焦っていたのだ。何もわからない、何も解決していないこの状況で、さらにわからない事が増えてしまった事に。少しでもいいから、回答が欲しかったのだ。

「有地が穂織に来てから、まるでピースが一つずつ揃うかのように呪詛を解決する糸口が見えてきた。それなのに俺は、あれから一つも真実にたどり着けていない。……なんて、悩んだって仕方ないようなことばかり考えてしまう。本当に俺は、昔から何も変わってない」

「ワタシは無理して変わらなくていいと思う」

「え？」

思わず茉莉の顔を見る。茉莉はいつものように微笑んだ。

「無理して自分を変えようとして自分を見失ったら本末転倒だよ。こ
う言ったらなんだけど、自分のことで悩んだり、ワタシたちのことにな
ると心配性になったりするのが幸彦だもん。そしてワタシたちは、
そんな幸彦に支えられてきた。忘れたの？前にも言ったけど、ユキが
自分を否定してもワタシがユキを肯定するんだって」

いつかの夜に言われた言葉。それは俺にとってとても心強い言葉
だった。

「ワタシが信じてるんです。もつと胸を張ってもらわないとね。それ
でも自信が持てなかったら、ワタシの信じるユキを信じればいいの」
「……どっかで聞いたような言葉だな。漫画の影響か？」

「あはっ、本心だよ♪」

あざとくウインクしてみせる茉莉。

本当に不思議なことだ。茉莉が隣にいてくれるだけで俺の心は温
かくなってしまふ。単純な男だな、俺は。

だがなんとなく、このまま話を終わらせるのは負けたような気がす
るのでせめてもの意趣返しで茉莉の鼻をつまんでやる。

「いたた、ちよっ何するんですか!？」

「気にするな。……ちよつとした照れ隠しだ」

「照れ隠……そっか。うん。なら許してあげる」

にやにやした視線が鬱陶しかったので顔をそらす。茉莉は俺の反
応に満足したのか、そのまま歩みを進める。

「それじゃあ、さっさとやること終わらせて帰ろっか」

「そうだな……って、ついてくるのか？」

「当たり前でしょ？ユキはワタシの相棒なんですから」

有地目掛けて落ちてきた花瓶。ムラサメ様やレナさんのおかげで
有地に怪我はなかった。だけどあの一瞬、僅かだが悪意の塊のような
気配がしたのだ。茉莉を家まで送り届けたあとで調べようと思って
いたのだが、俺の相棒は逃がしてはくれないようだ。

「わかった。一緒に来てくれ、茉莉」

「あはっ。もちろんです！」

予期せぬ助っ人だが、その存在はとても頼りになる。これなら調査も捗るだろう。

「ムラサメ様、いますか？」

「ここにいる。このまま呼ばれずに忘れられるかと思ったぞ」

暗闇に向かって声をかけると、ムラサメ様が姿を表す。もとよりムラサメ様と二人で極秘に調査する予定だったのだが、もはやその必要はなくなった。菜子も薄々感じていたようだしな。

「まあ、いいものを見せてもらったから許してやるがな。わっはっは」「やましいことはしてないけど、面と向かって宣言されると恥ずかしくなってくるね」

「だな」

ムラサメ様がそばに控えていることは知っていたが、こんな話をすると考えていなかったのも、多少顔に熱がこもる。

でも今は恥ずかしがるより、ムラサメ様には先に言っておかなければならないことがあった。

「ムラサメ様、改めて謝らせてください。申し訳ありませんでした」

「それは、先ほどの検証のことを言っておるのか」

「はい」

検証のためと言って、俺はムラサメ様に甘味を食べさせた。その残酷さに気づかず行動してしまった。

数百年食事を必要としなかった、いや、したくても食べられなかったムラサメ様に味覚を思い出させてしまったのだ。下手をすればそれは麻薬ほどの依存を生みかねない。

「気にするな、と言っても無理なのだろう？おぬしは」

「はい。ですので責任を取らせてください」

「責任？」

俺は頷くと、一度菜子に目を向ける。

菜子がさつき俺に言ってくれたこと。少しでも彼女の想いに近づける俺になるためにも、醜く足掻くのが俺の道なのかもしれない。

だからこそ、やったことの責任はすべて背負う覚悟が必要なのだ。

「俺が必ず、ムラサメ様を救う方法を見つけ出します」

俺はまっすぐムラサメ様を見据える。俺にできるのは逃げずに向き合うことらしいからな。

「面白い。ではその時は、田心屋のすいーつをたらふくご馳走になるうじやないか。吾輩が満足するまでな」

俺の言葉にキョトンとしていたムラサメ様だが、すぐにニカツと笑う。

俺にしては明るい宣言だったかもしれないな。

「幸彦も有地さんの影響を受ける一人つてことですね」

たしかに有地の影響もあるが、茉莉のおかげでもある。

……照れ臭いから口では言ってもやらないけどな。



「ここだな。ご主人目掛けて花瓶が落下してきたのは」

「ええ。どうやらこの建物の二階、あの窓のあたりから落ちてきたみたいですよ」

例のごとく、この時間に外を歩いている人は見当たらない。花瓶の欠片は危ないのでその場で回収したが、特に変な点は見つからなかった。ここに住んでいる方にも会い謝られたが、それだけだ。

「あの気配は一体何だったんでしょか」

「わからんが、崇り神の気配に少し似ておる気がした。悪意や嫉妬、そういうった悪い感情の集まりのように思えたな」

悪い感情の集まりか。有地を恨む誰かの仕業とみていいかもしれないな。となると、例の傀儡使いと関係があるかもしれない。

俺とムラサメ様が気配について考えていると、家の様子を探っていた茉莉が神妙な様子で語りかけてきた。

「幸彦、ちよつとおかしいよ」

「ん？なにがだ」

「花瓶が落ちてきた後、ここに住んでる人が謝ってきたよね？」

「ああ。それがどうした？」

「人が住んでる家なのに、この時間明かりがついてないのは変じやな

い？それどころか、今この家からは人の気配が全くしない」

言われてみれば、たしかにおかしい。娯楽の少ないこの街で、この時間に家に帰っていないなんて旅行中でもない限りほぼありえない。それどころか人の気配が全く感じられないなんて。

「調べてみよう」

俺はすぐにこの家のチャイムを鳴らす。だが反応は返ってこなかった。

次にドアに手をかける。すると、ギイイと鈍い音を立てながらドアは簡単に開いてしまった。

「鍵がかかっていない」

「いくら田舎でも鍵は閉めるよね」

茉莉とムラサメ様に目を配ると二人とも無言で頷いた。俺はそのまま家の中に入っていく。中を探すが人の姿は見当たらない。

「誰もいませんね」

「そ、そのようだな」

「二階に行ってみよう」

若干一名怖がつているが、調べないことには始まらない。慎重に階段を登り、件の花瓶くたんが落ちたと思われる部屋にたどり着いた。

窓から月明かりが入るだけで、部屋の中の視界は悪い。電気もつかなかった。ますますきな臭くなってくる。

「ここから下に落とされたんですね」

「な、なあ。なにもないみたいだし、そろそろ帰らないか？」

「ムラサメ様、怖いのでしたらワタシのそばを離れないで下さい」

「うむ。わ、わかったのだ」

窓際に茉莉とムラサメ様が集まった時だった。

突如、身の毛がよだつほどの異様な気配を感じて振り返る。

誰もいなかったはずのそこには見知らぬ男が立っていた。

部屋の出口の前に立っているため月明かりが届かず、その顔ははっきり見えない。それどころか男の存在自体が臙げに感じる。

ただ、そいつがまさに悪意の塊だということだけは本能が告げていた。

『ここまで調べにくるとはな。その疑い深さ、血は争えぬということか』

男の声にまるで生気が感じられない。抑揚のないその声は、鼓膜でとらえているのか脳に直接話しかけられているのかわからなくなるほどだ。不気味な存在を前に冷や汗が額を伝う。

「お前は何者だっ！あの傀儡使いの仲間か？それとも本人なのか？」
『傀儡使い？……ああ、あれか。そうだな。あれのおかげで俺はここにいるが、あれは俺ではない。仲間でもない。あれも俺のことは知らないだろうからな』

男は興味がないのか、つまらなそうに語った。男の話を鵜呑みにできるのか考えているとムラサメ様が小声で話しかけてくる。

「幸彦、この男只者ではないぞ。吾輩の姿をしつかり捉えておる」
「ワタシと幸彦に気づかれなくても、十分厄介者です」

有地が来てからイレギュラーだらけで困る。いや、有地のせいにするのはお門違いだな。ムラサメ様が言うように、この男は普通ではない。逃げようにも部屋の出口に男が立っているので逃げられない。

『ふはははっ。得体の知れない者に恐怖を覚えるのは正しいことだ。だが安心しろ。今はまだ手はださん。だが……ふむ。叢雨丸の守護者と、そこにいる娘はもしや……』

菜子に目を向けた男は興味深そうに笑うと、一瞬で姿をくらます。そして次の瞬間には菜子の目の前に姿を現した。

「っ!？」

『これはこれは！よもやまだ途絶えていないとはな！』

目を見開き不気味な笑みを浮かべる男。

顔がくつつくのではないかと思うほど、男は菜子に顔を近づける。俺の中で何かがブチ切れる音がした。

男が菜子に触れる前に、全力の回し蹴りをお見舞いする。男は避けることもせずにそのまま壁まで吹き飛んだ。

「菜子に触れるんじゃないやねえ。ぶっ殺すぞ。……菜子、大丈夫かい」

「う、うん。ありがとう」

しかし男は何事もなかったかのように立ち上がる。魚海のおやじ

さんでも今の蹴りを食らえばしばらくは動けなくなるのに。

『……まったく、生身の人間なら死んでもおかしくないぞ。相変わらず野蛮な一族だな、駒川の者よ。そなたはやはり使えそうだ』

男はニヤリと笑うと自分の姿形を変える。数秒もたたずに、見覚えのあるマネキンの姿になってしまった。

「マネキン？……まさかっ!? 莱子！窓を開けてくれっ！」

あれが傀儡使いのマネキンであるなら自爆する可能性がある。ここでいつものように自爆でもされたらひとたまりもない。よって取るべき行動は一つだった。

俺はすぐさまマネキン……もとい、傀儡に掴みかかる。そのまま勢い良く体をひねり窓の外目掛けて傀儡の体を放り投げた。

ぐしやりと気味の悪い音が聞こえて来る。窓から外を覗くと、ギギギと人間ではありえないような起き上がり方をしていた。あれは十八禁だな。

「あれは一体なんですか!? 人なのか人形なのか」

「わからないが、とりあえず自爆に巻き込まれる危険は無くなった。急ごう、逃げたらなにをするかわからない」

「無駄だ。もう遅い」

ムラサメ様が窓の外を指差す。そこにはもう男の姿も傀儡も見当たらなかった。

「幻術の類か……。おそらく夕方の人間もあやつが化けていたのだろう。吾輩にまで作用する幻術使いとは、あれは本当に人間か？」

ムラサメ様の言葉に、俺たちは言い知れぬ恐怖を感じるのだった。

後日玄十郎さんに調べてもらったところ、あの家の住人は旅行中であることがわかった。つまりはあの日謝ってきた人間は、ムラサメ様の言う通りあの男だったのだろう。

さらに家の中を調べさせてもらったが、俺と男が争った形跡は見当たらなかった。

あの日起きた出来事は現実だったのか。

今ではそれもわからない。

両親が用意した見合いを終え、自宅に戻る。

今日もつまらない、無駄な時間を過ごしてしまった。

父上も母上も、どうしてあんなに婚約者をつけたがるのか。理解ができないな。お見合いの相手も相手だ。用意するならもつと僕にふさわしい女性を連れて来るべきだろう。まあ、どんな女性も彼女ほどではないけどね。

「義満様^{よしみつ}。本日のお相手ですが……」

「却下だ。あんな下賤の者に興味はない」

「ですが義満様」

「くどい！僕に意見を言うのか！」

「……申し訳ありませんでした」

まったくわかっていない。父上も母上も爺も。僕にはすでに心に決めた人がいるのだ。それなのになぜ、かたくなに僕の邪魔をするのだ。

「部屋に戻る。間違っても僕がよばない限り部屋には入らないように」

「かしこまりました」

うるさい爺を下がらせ僕の部屋に戻る。

やはり部屋は落ち着く。

第十八話 「仲良く喧嘩しな」

男には、負けられない戦いがある。

特に、身近のライバル的存在には絶対に負けたくないと思うものだ。

ゆえに全力。俺は遠慮なく右ストレートを放つ。

瞬間、全身を浮遊感が襲う。あれ？なんで俺、空なんか見上げてるんだ？

「いでっー！」

気がつけば地面に仰向けで倒れていた。

くそっ……これで10回目だぞ。

「ほら、立てるかいい？」

上を見上げると、幸彦が手を差し伸べていた。

「まだまだ、絶対今日中にマスターしてみせるっ」

差し出された手に掴まり起き上がる。俺の言葉に幸彦も真剣な顔で頷き、すぐさま構える。そこに隙は見当たらない。

「じゃあ、もう一本。行くぞっー！」

俺と幸彦は、本日11回目となる組手を再開した。



ムラサメちゃんとレナさんを会わせた次の日、俺は幸彦から朝武さんを付け狙う輩の存在を聞いた。俺に向けて花瓶が落ちてきたのも、その輩が関係しているかもしれないということだ。

いきなりのことで頭が追いつかないが、幸彦が嘘をつくとは思えない。深く考えず事実として受け取るしかなかった。

『……黙っていてすまなかった。本当なら君に危険が及ぶ前に処理するはずだったんだが、昨日の一件で自分の考えの甘さに気付かされた。全部俺のミスだ』

幸彦が深く頭をさげる。

その顔を伺うことはできなかったが、彼の両手は強く握りしめられていた。幸彦のやつ、相当まいっているらしい。どうやら俺の知らないところで色々あったみたいだな。

こいつの不器用さは朝武さんに似たところがある。

『今まで黙っていたのは、俺や朝武さんに余計な心配をかけたくなかったからだろ?』

『ああ。だがその結果、君を危険にさらした。それはまぎれもない事実だ』

幸彦は自分を許すつもりはないらしい。幸彦らしいバカ真面目さだ。けれど幸彦は下を向かず、俺を真直ぐ見据えて言った。

『恥を忍んでお願いする。有地、君の力を貸してくれ』

まさかあの幸彦から力を貸してくれなんて言われると思っていなかったので面食らってしまう。頼られたことが少しだけ嬉しいのは秘密だ。

『えーと、力を貸すって具体的には?』

『君には護身術を覚えてもらいたい。君自身を守るためにも、芳乃様を守るためにも。負担を増やしてしまい申し訳ないが――』

『わかった。護身術だな』

幸彦が言い終わる前に了承する。

じゃないといつまでも謝られそうだ。

『い、いいのかい?』

『いいに決まってる。朝武さんがつけ狙われてるかもしれない上に、俺も狙われるかもしれないんだろ?だったら護身術を会得するのは俺のためにもなる。デメリットなんかないじゃんか』

俺の言葉に今度は幸彦が面食らったらしい。そんなに驚くようなことかな?

珍しく驚いた顔をしていた幸彦だが、一度息を深く吐くと小さく微笑んだ。

『そうか。君はそういう人だったね』

『おい、それどういう意味だよ』

『ほめ言葉だ。……本当にありがとう』

相変わらず、幸彦にありがとうと言われるとむず痒い。

『それで、俺に護身術を教えてくれる人って誰なんだ？』

『俺だ』

『へ？』

『俺だ』

『幸彦？』

『ああ。悪いが、教えるからには全力だ』

やる気に満ち溢れた幸彦の顔。頼もしいが恐ろしい。

『は、ははは、ほどほどでおねがいします』

こうして、俺に新しい稽古相手が加わったのだった。



あれから数日経ち、俺は毎朝少しずつ幸彦に護身術を教えてもらっている。そのための組手だ。幸彦曰く、口で説明するのも大切だが、体で覚えた方が早いらしい。おかげでこの数日間、何回幸彦に投げ飛ばされたことか……。

『それでは今日の朝稽古はこれまで』

『ありがとうございます』

俺たちはじいちゃんの言葉で稽古を終える。幸彦はお辞儀をし終えると帰りの準備を済ませ「お先に失礼します。有地、また学校でな」と足早にその場を後にした。

「わしも戻る。宿の仕事があるのでな。将臣、体が冷える前にちゃんと真っ直ぐ帰るように」

「わかってるって。忙しいのに付き合ってくれてありがとな、じいちゃん」

「なに、好きでやっていることだ」

じいちゃんはそれだけ言うと、志那都荘へと帰って行った。

その姿が見えなくなるのを確認すると自然とため息が出る。

「はあ」

「どうしたのだ、ご主人。ため息などついて」

「いや、改めてさ。その……実力の差って言うの？そういうのを感じちやってさ」

組手をする前、幸彦も俺と一緒にじいちゃん的基础トレーニングをしている。それなのに幸彦は、全く息が乱れない。対する俺は今でも一杯一杯だ。一緒に稽古をしているとその差がいやでもわかってしまう。

「当たり前だろう。ご主人が穂織に来て毎日稽古を頑張ってきたように、幸彦は12年間休むことなく鍛錬を続けてきたのだ。まあそれを言うなら芳乃や茉莉も変わらんがな」

「そうなんだよなあ……」

そう。俺の周りの人はみんな、普通では考えられないような努力を重ねている。自分が目指す先がとんでもなく険しい道だと再確認したのだ。少しぐらい落ち込んだって仕方のないことだろう。

だけど、このまま落ち込むだけでは幸彦に負けたと認めるようですごく悔しい。俺はこんなに負けず嫌いだっただろうか？……いや、相手が幸彦だからこそ、負けたくないんだ。

「……まあ、あれだ。ライバルがスゲー奴だってわかったからさ。さっきのは、ため息じゃなくて感嘆符。俺もこれから頑張らなくちやっ！つてね」

弱気な自分を奮い立たせるために、わざと前向きな言葉を口にす。幸彦に負けたくない男の意地ってやつだ。

「うむっ！それでこそ吾輩のご主人だぞ！」

どうやらムラサメちゃんは俺の態度が気に入ったらしい。ニツと笑いながらそう言ってくれた。応援してくれる声は俺の心を熱くしてくれる。

ただでさえ出遅れているのにへこたれてなんかいられない。俺にできるのは前に向かって突き進むことだよな。

「よっしゃっ！努力してれば幸彦にだっていつか追いつけるよね、ムラサメちゃん」

「……ご主人、早く帰って学校の準備をしたほうがいいのではないかな？」

「ちよつ、ムラサメちゃん！この流れは力強く、そうだ！がんばれご主人」って言うところですよ!?っておい！待ってって！ねえっ！」
目をそらしその場から逃げるように立ち去るムラサメちゃんを追いかける。

今日はまだ始まったばかりだ。



朝稽古を終えた俺はいつものように朝武さんたちと朝食をとり、学校に出かける。もちろん朝武さんも常陸さんも一緒だ。

毎日両手に花。穂織に来てしばらく経つが、いつまでたってもドキドキしてしまう。なんと行ったって学校でもトップクラスの美少女二人だ。

世の男どもが一度は夢見るシチュエーションを毎日堪能しているようなもの。このドキドキも仕方のないことだろう。だって男の子だもん。

だが、そのドキドキも学院の入り口前に佇んでいたある男によって打ち消される。

「まああああさおみいいいいいい!!!」

他でもない、俺の従兄弟の廉太郎によって。

廉太郎は俺の姿を見つけた瞬間、涙を浮かべながら勢い良く飛びついてきた。学院の入り口で男に泣きながら飛びつかれるとかなんの罰ゲームだよ……。周りの視線がやばい。

「将臣いいー！お前だけが頼りなんだよ〜！」

「わ、わかったから！離してくれっ！」

俺の肩をがっちり掴みながら前後に揺らす廉太郎。

助けを求めようと朝武さんたちに目を向けるが……。

「あは、お取込みのようなのでお先に教室に行ってますね♪行きま

しようか、芳乃様」

「え？でも有地さんが……」

常陸さんが危険を察知。朝武さんを連れて行った。くっ、だがまだムラサメちゃんがいる！

「ご主人、強く生きろ……」

ムラサメちゃんにも逃げられた……。

誰か、誰か俺を助けてくれる人間はいないのか!?

ちようどその時、カバンで顔を隠してコソコソと歩いている男子生徒を発見する。間違いない。ちくしょー、自分だけ逃げようたつてそうはいかないんだからな！

「おーい！幸彦！お前も今きたところか？」

俺に声をかけられてビクリツと体を震わす男子生徒。もとい幸彦。わざとらしく大声を出したおかげで廉太郎も幸彦の存在に気づいたようだ。目を光らせながら幸彦へ飛びかかる。

「ゆううきひこおおお!!心の友よおお！」

「うわあつ！やめろ、くつつくんじゃない！これ以上面倒ごとを増やさないでくれええ!!」

幸彦の悲しい咆哮が学院に響き渡るのだった。

……

……

……

「それで、いったい何があったんだ？」

学院の前で騒ぐのは悪目立ちすると考えた俺たちは、廉太郎を落착かせて校舎裏に移動した。幸い始業までまだ時間がある。俺たちは今のうちに廉太郎があそこまで取り乱した理由を聞くことにした。

「話を聞いてくれるのか？」

「聞くだけは聞く。悪いけど、今面倒ごとが立て込んでるんだ。くだらない話だったらもちろん手は貸さない。それが話を聞く条件だ」

幸彦がぶつきらばうな口調で話を促す。

それでもいいと廉太郎は頷き、深刻な顔で話し出した。

「実は……小春と喧嘩したんだ」

「……………はあ」

「あーお前らバカにしただろ！今そのせいで家に居ても針の筵なんだぞ！お袋も親父もみんな小春の味方でさ」

あれだけ取り乱していたから何があったかと思えば、いつもの喧嘩。幸彦はもう呆れ果てて頭を押さえている。

「小春と廉太郎の喧嘩なんてよくあることじゃなか。今更なんでそんなに悩んでるんだよ」

「それが、今回ばかりは俺が悪いことしちまったなあって思ってた。なあ、俺どうすればいい？」

「素直に謝れ。以上」

「ままだ待ってって、話は最後まで聞いてくれって」

幸彦はそれだけ言うとその場を去ろうとする。慌てて廉太郎が止めにかかるのと心底面倒くさそうな顔をした。まあ、その気持ちはわからなくもない。

「俺も謝ろうと思ったんだけどよ。あいつ態度でかいし、ムカつくこと言ってくるから俺もカチンときちまって、いつも以上に酷いこと言っちゃってさ。目も合わせない口もきかない状態なんだよ。お袋も、ちゃんと謝るまで飯抜きとか言ってくるし。さすがの俺も、この状況があと何日も続いたら参るっていうか。だから早く謝ろうって思ったんだけど、いざ謝ろうとするとどうやって謝ればいいかわかんなくなっちゃって……」

そこまで言うのと廉太郎は深く頭をさげる。

「頼む……こんなこと頼めるのお前らしかないんだ！この通り！」

家の居心地が悪いからか、本当に小春に悪いことをしてしまったと思っているからかはわからないが、謝ろうと本気で思っていることだけは伝わってきた。

俺としても、従兄妹が喧嘩したままの状態にいるのは心苦しい。

「わかった。俺でよければ協力するよ」

「おおつ、将臣！持つべきものは従兄弟だな！」

「幸彦はどうする?」

「……はあ、仕方ない。乗り掛かった船だ」

「おおおつ、幸彦! いや、幸彦様あく!」

なんだかんだ協力しちやう幸彦。ほんと、押しに弱いつていうか、根が優しすぎるんだよな。

「ただし条件がある。今日の昼休みにちゃんと小春ちゃんに謝ると」

「げえ、それっていきなりハードル高くね?」

「自業自得だ。早いに越したことはない。有地、小春ちゃんに昼ご飯一緒に食べようつて誘っておいてくれるかい」

「了解」

「それじゃ、どうして小春ちゃんを怒らせたのか詳しく聞かせてくれ。助言はそれからだ」

今日の私はダメダメだ。教科書も忘れちゃうし、授業で先生に指さしても気づかなかった。なんというか、やることすべてに身が入らない。

「小春、大丈夫? あんた今日ずっと上の空だけど」

クラスの友達にまで心配されるほどとは。熱や体調不良というわけではないのでなんだか申し訳ない。私は普段の調子を思い出しながら返事をする。

「うん、大丈夫。なんだか今朝から調子でなくて」

「そう。具合悪かったら保健室行きなよ。あ、今朝といえばあんたの兄貴、なんだか校門前で騒いでたつて話だけど……」

「廉兄のことはどうでもいい」

「おお。気持ちいいぐらいきっぱり拒絶するわね」

心配してくれてるのはありがたいが、今廉兄の話をするのはやめた
い。だって私がダメダメなのは廉兄と喧嘩したことが理由だから。

「おーい、小春ー」

と、そんな状態の私を呼ぶ聞きなれた声がする。振り向いてみると
お兄ちゃんが手招きしていた。

「どうしたの？お兄ちゃん」

「いや、よかつたら一緒にご飯食べないかなって。朝武さんやレナさ
んたちも一緒なんだけど」

「巫女姫様たちと？」

急な誘いに驚いてしまうが、巫女姫様やレナ先輩たちのご飯はと
ても楽しかったので魅力的な話だと思った。

「いいなー巫女姫様達とご飯なんて」

「一緒にご飯食べたって言えば喜んでくれると思うけど？」

「そうだな。君も一緒に食べる？」

「無理です無理です！あの輪に入るのには恐れ多いです！あたしは後で
感想を聞くだけで十分」

「あはは。じゃあ、おみあげ話用意しないとね」

「うん。小春、先輩方に迷惑かけるんじゃないよ」

この街で暮らしている人が巫女姫様のお誘いを受けたら尻込みし
てしまう。なんとって幼い時から高嶺の花として認識しているのだ
から。私はお兄ちゃんのおかげで大丈夫になってきたけど。

こうして私はいつものグループを離れ、巫女姫様達とご飯を食べる
ことになった。



案内された席が廉兄の真ん前だったことよって、この食事の席
は、廉兄が私に謝るために先輩方が用意してくれたものだど理解し
た。おそらく廉兄がお兄ちゃんか駒川先輩あたりに相談したのだろ

う。

相談するのは悪いこととは思わない。だけど、ちょっと頼りすぎだと思う。自分から謝ろうと本当に思っているのか疑問に思ってしまった。私は、やっぱりひねくれているのかもしれない。

「なあ小春。昨日のことなんだけど——」

「わあ。常陸先輩のお弁当おいしそう！この肉巻きってどうやって作ってるんですか？」

「なあ小春さ——」

「レナ先輩ってお弁当の具、どれが好きですか？私はシゲさんの作った厚焼き卵が好きなんですよね」

「なあ小——」

「そうだ！駒川先輩。こんど新しいデザートを試食して欲しいって芦花お姉ちゃんが言っていましたよ」

廉兄の謝罪をことごとく躲す。

私も意地になりすぎているのかもしれないが、どうしてもまだ仲直りできる気持ちになれなかった。

そんなことを3回ほど繰り返した時だった。

「廉太郎、有地、悪いが一緒に来てくれないか。保健室の備品を運ぶのに男手が必要だって姉さんからご指名だ。」

駒川先輩が廉兄とお兄ちゃんを連れて席を離れる。私の反応から作戦を立て直すのかもしれない。なんだか、先輩方には迷惑をかけて申し訳ない。

廉兄の姿が見えなくなってから、私はこの場に残った巫女姫様たちに向かって頭をさげる。

「巫女姫様、常陸先輩、レナ先輩、すいません。空気を悪くするようなことをしてしまって」

「気にしないでください。事情は幸彦から聞きましたから」

巫女姫様は優しく微笑んでくれた。それだけでこの場の悪い空気も浄化される。

「そうですねよコハル！むしろ私たちはコハルの味方です！」

「詳しい内容までは聞いてませんが、小春さんがここまで怒るのは理由があるからではないですか？」

巫女姫様に続きレナ先輩も常陸先輩も、私に笑いかけてくれた。

「ここはひとつ、人生の先輩に相談するのも手です」

「私たちでよろしければ話を聞きますよ？コハル」

「そうですね。私たちはと、友達！なんですから。友達のために何かをしたい。それだけです」

「友達……？はわわ！私と巫女姫様がですか!？」

そんなことがあっていいのだろうか。思わず耳を疑ってしまう。

「嫌……ですか？」

「嫌だなんてそんな！むしろ私と友達なんてもったいないというか」

「そんなことありません。小春さんも鞍馬君も私の大切なお友達だと思っています」

「はうう。巫女姫様……」

なんて尊いお方なんだ！お兄ちゃんのごことは好きだけど、こんなお方と婚約者だなんてちよつと妬ましい。

ここまで言ってもらっているのだ。今話さなくてはバチが当たる。

私は先輩方に感謝しながら喧嘩の経緯を話し始めた。

「実は昨日、廉兄が私のマグカップを落として割ってしまったんです」「マグカップ、ですか？」

「はい。幼いころ廉兄が誕生日にくれたカップだったんで、その……一応大切に使用して愛着もありました。それなのにあの駄兄ったらひどいんですよ！人がせつかく大切に使用してあげたのに『そんなボロっちいの割ったぐらいで怒るなよ』とか、『俺のおかげで新しいやつが買えるな』とかとか！大切にしていたのがバカみたいに言ってくるんですよ！もー腹が立って、あの駄兄が謝るまで口をきかないって決めたんです」

「それは鞍馬君が全面的に悪いですね」

一度愚痴や不満を吐くと止まらなくなってしまったが、巫女姫様はうんうんと頷いて同意してくれた。

「さっきのだって、お兄ちゃんや駒川先輩に頼りすぎです！自分から謝ろうとしているようには見えませんでした」

「確かにそうでありますね。まあ、レンタロウの気持ちもわからなくもないですが」

「レナ先輩が廉兄の気持ちを知ってる？」

意外な人物が廉兄のフォローに入ったので驚いてしまう。

「私も昔お祖父ちゃんに叱られた時、どう謝ればいいのかわからなくなってしまうことがあるですよ」

「レナ先輩が叱られるなんて想像できない。何があつたんですか？」

私の問いかけに、レナ先輩は少し恥ずかしそうに頬をかきながら答えてくれた。

「恥ずかしながら、お祖父ちゃんの大切にしていた宝物を飲み込んでしまいました」

「ええー!?大丈夫だったんですか？」

「はい。お医者さんに診てもらってレントゲンも撮りました。宝物、えーと、綺麗な石の欠片みたいなものだったので、その欠片らしい影も見当たらず、気づかないうちに排出したのだろうと」

大事なかったと聞いてホッと胸を撫で下ろす。そういえばお兄ちゃんも昔、川で溺れて川底の石を飲み込んで大騒ぎになったっけ。レナ先輩にもそんなやんちゃな時代があつたとは意外である。

「レナさんが言うように、親しいものだからこそ、喧嘩した時どう謝ればいいのかわからなくなる時ってありますね」

「私も、お父さんと喧嘩した時は菜子と幸彦に助けってもらったっけ」

「そういえば、私も……」

言われて気づく。私が廉兄と同じ立場だったら、廉兄と同じようにお兄ちゃんやレナ先輩に助けを頼むだろう。

「ですので、コハル。レンタロウが次謝ってきたら、その時はレンタロウの声に耳を傾けてあげてください」

「そうですね。それでも許せない時はワタシたちがまた力になります。ね、芳乃様」

「もちろんです。安心してください、小春さん」

「こんなにも頼もしい人たちは他にいないだろう。美人で優しくて頼もしいなんて、私もこんな女性になりたい。」

先輩方のおかげで変な意地も消え去っていた。レナ先輩が言うように、今度謝ってきたら素直に聞いてあげよう。

だけどここの日、学校で廉兄と会うことはなかった。



「小春ちゃん、お疲れ様。気をつけて帰ってね」

「うん。お姉ちゃん、お疲れ様」

結局学校では廉兄に会えなかったので、バイトにも身が入らずお姉ちゃんやおじさんにまで迷惑をかけてしまった。

「はぁ」

一人になるとため息が自然と溢れる。

『ですので、コハル。レンタロウが次謝ってきたら、その時はレンタロウの声に耳を傾けてあげてください』

レナ先輩に言われてせっかく話ぐらいは聞いてあげようと思ったのに。これだから女性にモテないんだ。お兄ちゃんと駒川先輩を見習ってほしい。

「はぁ」

帰り道二回目のため息が出たとき、前の方に見慣れた人影が目に入った。

「廉兄?」

私が声をかけるとビクツと体を跳ねらせる。声かけただけでその反応はちよつと失礼じゃないだろうか。

「よ、よお。今バイト帰りか？」

「うん。廉兄は何してるの。こんな時間にこんな場所で」

「いや、なに、たまたまな。買い物してたら遅くなっちゃって」
なにやら様子がおかしいが、もしかして……。

「もしかして、私を待ってた？」

「おう。一応な」

「……だれのアドバイス？」

「……幸彦」

「駄兄のくせに素直じゃん」

「バカな妹を迎えるなんて、ガラじゃないからな」

しばらく沈黙が二人を包む。

その沈黙を破ったのは廉兄だった。

「その……小春。すまなかった！お詫びじゃないけど、これ」

廉兄から袋を渡される。何か入っているようだが？

「将臣にプレゼントなんてどうだって言われてさ。そっくり同じのは
さすがに無理だったけど、昔買った店で選んでみた」

袋の中には、割れてしまったものと同じサイズのマグカップが入っ
ていた。

「廉兄……あのカップが廉兄からも貰ったやつだって気づいてたの
？」

「そりゃあ俺が買ったやつだからな。それなのにお前にひどいこと
言っちゃって。だから、今回は全面的に俺が悪かった」

そう言ってまた頭をさげる。

買った店までわざわざ買いに行ってたんだ。そっか。

「ほんと、廉兄ってバカなんだから」

「はい」

「もう救いようがないよね」

「おっしゃるとおりで」

「だから一生彼女できないんだよ」

「おい待て！それは言い過ぎだぞ！」

彼女の話になるとムキになるとか、バカみたい。でも――

「まあ、今回は許してあげる」

「ほ、本当か？」

「これ以上お兄ちゃんや駒川先輩に迷惑かけるわけにはいかないからねー」

「おお！さすが我がまいらぶりーしすたー！」

「キモい」

このどうしようもなくキモくてバカな人が、私のお兄ちゃんなんだもんね。

少しだけ心のもやもやが晴れた気がした。

廉太郎・小春喧嘩事件の翌日。

学院にはいつもの騒がしさが戻ってきていた。

「もう信じらんない！妹が兄の忘れたお弁当持ってきてあげたのになによその態度は！」

「だからあんがとさんって言うてるだろ。ほらほら、お子様はこどもの国へ帰りな」

「カツチーン！そんなだから女の人に嫌われるんだよ？」

「おまえ！それは関係ないだろ！」

「関係大ありりだよ！ああ、なんでお兄ちゃんが本当のお兄ちゃんじゃないんだろ」

「俺ももつと可愛くて気立てのいい妹だったらよかったのにな」

「なによ！」

「なんだよ！」

「バーカバーカ！」

「ブースブース！」

そうそう。これがいつもの騒がしさだよ。……従兄妹の喧嘩で落ち着くとは我ながらどうかとも思うが。

「やはりレンタロウとコハルはこうでないですね♪」

「仲直りできたようでワタシも嬉しいです」

「あれは……仲直り、なんですか？」

「はは、元通りなのは間違いないですけどね」

「まあ、仲良く喧嘩、ってことで見守っていいこうよ」

俺たちの生暖かい視線も気にせず、二人の喧嘩は昼休みが終わるまで続くのであった。

「~~~~~ふんっ!!」

第十九話 「乙女な忍者」



小京都と呼ばれるほどの美しい街並みを持つ穂織の街。ワタシはこの街で、忍者として育ってきた。

本格的に忍者としての厳しい訓練を始めたのは、あの12年前の誘拐事件の後。右肩の怪我が治ってからのことだった。

周りの同年代の子達が遊んでいるときも、ワタシは訓練を続けた。正直、毎日が地獄のようだった。

忍者としての身体能力や精神力を得るには生半可な訓練など許されない。気を抜けば大怪我では済まない訓練だつてある。あまりの辛さに、訓練が終わると陰でこっそり泣いていたこともあった。

そんなとき、いつもそばにいてくれたのは幸彦だった。自分だつて呪詛の研究を引き継いで大変だというのに、ワタシが泣き終わるまでずっと隣に座っていてくれた。

ある日のことだ。膝を抱えて泣いているワタシに幸彦は言った。

「昨日、玄十郎さんが言つてたんだ。都会に出ていたすごく強い人たちが穂織に戻ってくるんだつて」

「……………」

突拍子もない話題にワタシは思わず顔を上げた。幸彦はこちらを見ず、ただまっすぐ前を見つめて話を続ける。

「ぼく、その人たちに弟子入りしようと思う」

「な、んで……………？ワタシが頼りないから？」

泣いていたせいだろう。情けないほどしゃが唖れた声しか出なかった。

ワタシの問いかけに幸彦は首を横に振る。

「ぼくがやりたいこと、できることを考えたんだ。茉莉も芳乃様も強いし頼りになるよ。でもぼくは、そんな二人を守りたい。祟り神に対しては何の役にも立てないぼくだけど、せめて普段の生活だけでも守

りたい。この前みたいな思いは……もう二度とごめん」

幸彦は泣きそうになっていた。でも涙は流さなかった。

あの弱虫な幸彦が拳を強く握りしめ、涙を我慢していた。

「だから……ぼく、強くなるよ。強くなって二人を守るんだ」

涙をこらえながら力強く宣言する幸彦の姿は、すごく情けないように思えたけれど、少なくともワタシには格好よく見えた。



「おー……思っていたよりも狭くて浅い川ですね。レンタロウ、魚はちゃんといるのですか?」

「いるよ。ところどころ深くなってるところがあるから。ほら、泳いでる陰も見えるでしょ」

「おお、本当であります!」

ワタシたちは山の中にある沢に来ている。土曜日だし、息抜きを兼ねて遊びに行こうと有地さんと鞍馬君に誘われたのだ。

芳乃様、ワタシ、有地さん、レナさん、鞍馬君のメンバーで釣りをすることになった。ちなみに幸彦は調べ物があるため不在。小春さんはバイトのため残念ながら来れなかった。

「私、釣りをするのは初めてです!」

「にゃー」

初めての釣りに興奮気味の芳乃様。その隣では釣れた魚が目当てなのだろう、猫丸が楽しそうに鳴いていた。

ご覧の通り、護衛として猫丸が幸彦の代わりに同行してくれている。幸彦曰く、猫丸の索敵能力は凄まじいので何かあれば役に立つ、だそう。山の中にも幸彦の式神が多く放たれており、警戒に抜かりがない。

心配性の幸彦らしい。そんなに心配なら一緒にくればいいのに。

「菜子？ぼーっとしてどうしたの？」

「なんでもありません、芳乃様。今晚のメニューを考えていました」
幸彦のことを考えていたとは言えないので、それっぽいことを言っ
てごまかす。

うん。我ながらうまい言い訳だと思う。

「だったら、今日釣れた魚を晩御飯にするっていうのもいいんじゃない
い？」

「おお！それは名案ですね、マサオミ。私も板長にお願いしたら作っ
てもらえるでしょうか？」

「シゲさんなら大丈夫だって。昔小春がつくし採ってきたときも天ぷ
らにしてくれたから」

有地さんの提案にレナさんも賛成する。

釣れた魚を晩御飯に……確かにいいアイデアだ。うまくいけば晩
御飯の買い出しに行かなくて済むかもしれない。

「それではせっかくなので、ワタシは山で山菜を採ってきます。芳乃
様、有地さん。たくさん大物を釣り上げてくださいね。でないと晩御
飯が寂しいことになってしまいますよ」

「げ、責任重大だな……」

「有地さん、頑張りましょう！それで、この後どうすればいいのでしょ
うか？」

「ああ、まずはその針にミミズを——」

芳乃様があんなに楽しそうにはしゃいでいる。普通の少女のよう
に笑う芳乃様を見ているとやはり嬉しくなる。幸彦が期待したよう
に、有地さんは芳乃様の冷たく凍ってしまった心を溶かしてくれた。
その様子が観れただけで今日は満足だった。

森の中に入ったワタシは、早速食料調達を開始する。

つくしの季節は終わってしまったが、森の中にはまだまだ山菜が沢
山ある。忍者としてのサバイバル知識を活かし、食べられる山菜を
採っていく。

「これは天ぷらにすると絶品なんですよね。あ、こっちは煮物にす

るのもアリかな。そういえば焼いてマヨネーズをつけて食べると美味しいって幸彦が言ってたっけ。試してみよっと♪」

今日の献立を考えながら山菜を採っているこの時間が一番楽しいとワタシは思う。食べた時の芳乃様たちの笑顔を思い浮かべるとなおよし。家事はワタシの息抜きの一つになっている。

それから数分経った頃のことだった。夢中になって山菜を採っていると、どこかでチュンチュンと鳴き声が聞こえてくる。気になって鳴き声のする方へ見に行くと、巣から落ちてしまったらしい雛を見つけた。

「あそこの木から落ちたんでしょうか?……よし」

このままでは雛が死んでしまうと考えたワタシは雛を優しく拾い上げる。

「すぐにお家に帰してあげますからね」

そのまま勢い良く走り出し、木の幹を垂直に駆け上がる。忍者なので木登りなんてお茶の子さいさいなのだ。

「これで良しつと。もう落ちたらダメですよ?」

雛を巣の中に戻し、はたと気づく。自分が犯した失態に。

「……ふああああ高いっ……めっちゃ高い……っ」

木登りなんてお茶の子さいさいだが、ワタシは高所恐怖症なんだつた。雛を助けることに夢中でそのことを失念していた。

忍者でも苦手なものぐらいある。特に高いところは昔から苦手だった。

(どうしましょう!どうしましょう!!大声で助けを呼んでも芳乃様たちがいる沢まで聞こえるとは思えないし……もしかして、ワタシこのままずっとこんな高いところで……!?)

恐怖で頭が働かない。周りに使えそうなものがないか探すが、高くてもとてもないが見渡せない。

情けないことに泣きそうだ。足の震えが止まらない。

「だ、誰かぁ。助けて……」

「何してるんだ?そんなところで」

弱々しい声で助けを求めた瞬間、聞きなれたとても安心する声が聞

こえてきた。勇気を振り絞って下を見下ろすと、幸彦が呆れた顔でこちらを見上げている。なぜここにいるのか疑問にも思ったが、いまは問いただす余裕はない。

「幸彦お。おとおおりおりりりり」

「お、落ち着けて。経緯は兎も角、なんとなく現状は理解したから」
壊れたロボットのような言葉しか出なかったが、長年の付き合いのおかげか理解してくれた。幸彦はそのまま少しだけ考え込み、何かを閃いたようだった。

「そういえば某子、いつも鉤繩かぎなわ持ち歩いてなかったか？」

「それです!!」

私の持ち歩いている忍者道具の一つ、鉤繩があれば地上に降りる事ができる。怖くてそこまで頭が回らなかった。

「慌てるなよ。落ちても俺が受け止めるから」

「お、落ちないから!縁起でもないこと言わないで!」

幸彦の忠告に従い深呼吸をして心を落ち着かせ、懐から鉤繩を取り出す。慎重に木の幹に括り付け、なんとか無事地上に降りることができた。

「は、はあ……はあ……はあ……」

「大丈夫か? って大丈夫じゃないよな。立てるかい?」

「待って。まだ足に力が入らなくて……」

安心したせいか腰が抜けて立つことができない。

当分動けそうになかった。

「もう少しだけここで休ませて」

「わかった。無理はしないほうがいいからな」

それだけ言うと、幸彦はワタシの隣に腰掛けた。

「えっと、幸彦?」

「朝から歩き回ったせいで疲れたんだ。ちょうどいいから少し休憩させてもらうよ」

どうやらワタシが動けるようになるまで一緒にいてくれるらしい。不器用な彼らしい行動だ。ワタシの隣に腰掛けて一息ついた幸彦は、一度大きく伸びをするとジト目で問いかけてきた。

「それで、どうして高所恐怖症の君が木の上に行ったんだ？そもそも芳乃様達と遊びに行ってるはずだと思っただが」

「あは、まあ色々ありまして……。幸彦こそ、どうしてここに？調べ物があるって言ってたよね」

「その調べ物が終わったから、ついでに欠片を探してたんだ。そしてら聞き覚えのある声が聞こえてきてね。来てみたら木の上にいる葉子を見つけたってわけさ」

つまり休日返上で働いていたわけだ。相変わらず何かしていないと落ち着かないらしい。休めと言っても聞かないのは問題だが、今回はそれで助かったのでよしとしよう。

考えてみれば、昼間に幸彦と二人つきりというのはかなり久しぶりな気がする。ワタシは家事があるし、幸彦はバイトや研究があるので昼間は基本別行動だ。

だからだろうか。毎日顔を合わせているはずなのになんとなく小っ恥ずかしいく感じるのは。ワタシ達はしばらく山の音に耳を傾けることにした。

穏やかな風が草木を揺らし、音を立てる。今日はいい天気なので枝葉から差し込む日の光が暖かい。

何も言葉にしていけないのに、幸彦が隣にいただけで安心するのはなぜだろう。そう考えたとき、ふと幼いときの記憶が蘇ってきた。

「こうして二人で並んで座っていると、なんだかあの頃を思い出します」
「あの頃？」

「訓練が辛くて泣いていた頃、幸彦はずっと隣にいてくれたよね」

「ああ、随分と懐かしい話だな」

「あの頃はまだ口調が幼かったな。ねえ、なんで口調変えたの？」
なんとなく気になっていたことを聞いてみる。

幸彦が自分のことを「俺」と言い出したのは小学校に上がる少し前だ。

「単純な話さ。その方が強そうに思えたから」

「本当に単純ですね」

「男なんてそんなものだよ。あの頃は強くなりたいてって思いが強くて

必死だったからね」

自分を強く見せる方法が一人称の変化とは、とても可愛らしくて小学生らしい考えだ。幸彦のことだから、精一杯考えた結果なのだろう。

「もやしっ子で泣き虫だった幸彦が立派になっちゃって」

「その泣き虫だった俺も、もう高校生だ。長かったような、あつという間だったような」

「なんだかジジくさいよ?」

「たまにはいいじゃないか」

幸彦は楽しそうに微笑んだ。

つられてワタシも笑顔になる。

幸彦との会話で落ち着きを取り戻したのだろう。気がつけば、先ほどまで力が入らなかつた体が動かせるようになっていた。

幸彦は頃合いを見て立ち上がりワタシに手を差し出す。

「どうだい?そろそろ立てるかな」

「うん。大丈夫そう」

差し出された手につかまり立ち上がる。軽く屈伸をしてみたが、どこにも異常はなさそうだ。

「ワタシはそろそろ芳乃様達のところに戻るけど、幸彦はどうするの?」

「俺はもう少しだけ欠片を探してみるよ。ムラサメ様と合流できたら一緒に探すつもりさ」

幸彦ならそう言うと思っていたが、少し残念でもある。どうせなら一緒に遊びたかったけど、ワタシのわがままに付き合わせるわけにもいかない。

「そっか。……たまにはちゃんと休まないとダメですからね」

「わかってるって」

「本当にわかってる?」

「おいおい、信用ないな」

「普段の行いの成果です」

「うっ……」

ワタシの言葉にたじろぐ幸彦。自覚があるなら反省してほしい。

「わかった。菜子がしつかり休むなら、俺もちゃんと休むよ」

「ワタシは今日休んでますけど」

「一人で夕食のために山菜採ってる時点でアウトだと思うが」

「むっ……」

一理あると思ってしまった。楽しいからそれでいいと言いつ返そうとも思ったが、幸彦なら仕事も楽しいと言いかねない。

「じゃあ、そういうことで。俺は失礼するよ」

「あ、逃げるんですか!?!」

どう言えば幸彦が休むか考えているうちに、幸彦はそそくさと山の中へ逃げていく。

「もう木に登るんじゃないぞー!」

「もうっ! 過労で倒れても知りませんからねー!」

ワタシの言葉に幸彦は振り返らず、手だけをひらひらと振って応える。あつという間に幸彦の背中は見えなくなってしまった。

「やつぱり、一緒に行こうって言えばよかったかな……」

なんて、未練がましい自分が少しだけ恥ずかしかった。



山菜も十分に取れたので沢に戻ると、芳乃様が笑顔で今日の成果を見せてくれた。それだけで十分楽しめたことが伝わって来る。

「菜子、見て見て! こんなに大きい魚が釣れたの!」

「すごいじゃないですか! 芳乃様、お見事です♪」

数こそ多くはなかったが、なかなか立派な魚が釣れたようだ。素直に褒めると芳乃様は誇らしそうに胸を張った。その動作一つ一つが可愛らしい。

「初めは魚を外すだけで大変だったけどね」

「仕方ないじゃないですか。ヌルヌルして、ビクンビクンって動くんですもん」

「朝武さん、さつきも言ったけどその表現はきわどいからやめよう」

有地さんも色々苦労したようだ。芳乃様の天然さは秋穂様譲りだ
と思う。有地さんにはこれからも頑張ってもらいたい。

「私もレンタロウに教わったおかげで大漁でありますよ!」

「いやー女の子に囲まれて、今日は実にいい一日だった!」

レナさんも鞍馬君も満足した顔をしている。猫丸に至ってはレナ
さんの胸の中で気持ちよさそうに眠っていた。

「ネコマルは賢い猫さんですね。さすがユキヒコのペットです。私に
魚が多く泳いでいるところを教えてくれたんですよ!お礼に釣れた
お魚をおすそ分けしたら満足して寝ちゃいました」

「俺にはぜんぜん懐いてくれませんでしたけどね……」

「あは、猫丸がワタシ達以外の人に懐くのは珍しいですから。落ち込
まないでください、鞍馬君」

ワタシ自身レナさんに懐いた猫丸に驚いているのだ。式神だし、ム
ラサメ様に触ることのできるレナさんに何かを感じているのかもし
れない。あとで幸彦にそれとなく伝えておこう。

「ところで茉莉、何かいいことでもあったの?なんだかご機嫌に見え
るけど」

「ふええ!?あ、あは、芳乃様の気のせいですって。ワタシはいつもと変
わらず平常運行ですよ?」

「……なんか怪しい」

幸彦に会えて嬉しかったが、もちろん顔に出ないようにしていたは
ず。こういうことには鋭くなるから芳乃様は侮れない。

「そ、それでは暗くなる前に帰りましょう!色々と下ごしらえをしな
ければいけませんから」

芳乃様に深く聞かれる前に家に戻ることにした。

先ほど幸彦に逃げられたワタシが、今度は芳乃様から逃げるように
その場を去るなんて。これでは幸彦のことを悪くは言えませんね。

「菜子と別れてからも欠片を探して山を歩き回った結果、一つだけ同じ欠片を見つけたことができた。やはり、欠片は複数存在すると考えていいだろう。」

「帰り際にムラサメ様にもあったが、どうやらムラサメ様も欠片を見つけたらしい。明日有地と取りに行くと言っていたので任せることにした。」

「ただいま」

「おかえり、幸彦。随分と帰りが遅かったね」

「家に入ると姉さんが出迎える。ちようど診療所の方もひと段落ついたのでいいだろう。」

「調べ物ついでに例の欠片を探してたんだ。ほらこれ」

「そういつて拾ってきた欠片を姉さんに渡す。」

「見つけてきたの？我が弟ながらおそるべきオーバーワークね」

「これくらい平気だって」

「俺の言葉に呆れたのか、姉さんはやれやれと肩をすくめた。」

「それで、肝心の『駒川の秘術』について何かわかったのかな？」

「俺が今日していた調べ物。それが駒川の秘術についてだ。」

「三日前のことだ。」

「榎本さんに譲ってもらった土地神に関する本。その中に描かれていた絵が穂織の山の地図であることが判明した。」

「解読した内容によると、その地図の場所には駒川家がまだ陰陽師だった頃に作った祠があるらしい。その中には駒川が使っていた『守りの秘術』に関する書物が隠されているという。」

「祠までなかなかの距離があるため、休日の今日を利用して調査に出ているというわけである。」

「この通り、書物は見つけることができた。使えるかどうかは解読してみないことにはわからないかな」

「カバンから古びた書物を取り出す。見た目はかなりボロボロなの

だが、不思議なことに中身は腐食や虫食いの跡がなかった。もしかしたら、これも守りの秘術が関係しているのかもしれない。

「なら、幸彦はしばらくその解説に専念しなさい。欠片の調査は引き続き私がやろう。新しい欠片も見つかったことだしね」

「ありがとう、姉さん」

ここは姉さんのお言葉に甘えさせてもらおう。この秘術がどこまで役に立つかはわからないが、傀儡使いや幻術使いに対しての保険にはなるかもしれない。

休むよう言ってくれた茉莉には悪いが、今日も徹夜になりそうだ。

ワタシが忍者として育った穂織の街は、観光地として有名だ。毎年多くの観光客が穂織を訪れている。

観光客はこの街の貴重な収入源の一つであるが、中には迷惑な観光客というのもある。

中でも女性の敵とも言えるのが、ナンパ目的で穂織を訪れる輩だ。穂織に住む女性は魅力的な方ばかりだ。それはワタシの周りを見れば一目瞭然だろう。そのためか、最近ではしつこくナンパされて困るという相談が町内会で取り上げられることもあるらしい。

なぜ今こんなことを話しているのかというと、ワタシが今まさにナンパされているからだ。

「君ほんとにかわいいね。ねえ、いいでしょ？ちよつとだけでいいからさ。俺と一緒にお茶しようよ」

なぜだろう。この殿方に褒められてもまったく嬉しくない。

もっと魅力のある方がたくさんいるので、ワタシがナンパされるなんて思ってもなかった。話には聞いていたが、ここまでしつこくついてくるなんて。正直買物物の邪魔である。

「先ほどから申し上げている通り、用事があるのでお断りします」
「えー、そんなのサボっちゃえばいいじゃん。俺と一緒にいた方が楽しいに決まってるって」

なぜこの殿方はこんなに自信満々に根拠のないことをいうのだろうか？もしかしてバカなのでは？

「あまりしつこい方は嫌われますよ？」

「なに？俺のこと心配してくれてるの？そんなに俺のこと好きなの？」

「……………」

どうしたらその結論に至るのだろうか。呆れて物も言えなくなる。「本当に迷惑なので、失礼します」

付き合っていられなくなったワタシは忍者の運動神経を駆使して男から離れようとする。しかし。

「おっと、逃げなくなっちゃっていいじゃないか」

ワタシが走るより早く男が壁に手をつけて道を塞いでくる。これにはさすがに驚いてしまった。まさかワタシよりも早く動くんなんて夢にも思っていなかったのだ。

「どいてくださいーこれ以上しつこくするなら——」

「するなら？」

男の目を見た瞬間、ふいに頭がぼーっとしてくる。何かがおかしいのになにも考えられなくなる。

「ねえ。俺と一緒にお茶してくれるよね」

「……………」

断ろうと思うのに言葉が出ない。

男はニヤリと笑いゆっくり手を伸ばすが、その手がワタシに触れることはなかった。

「悪いが、軽々しく彼女に触れないでくれないか？」

幸彦が男の手を掴んでいた。瞬間、先ほどまでぼーっとしていた意識がはつきりしてくる。あれ？ワタシは一体なにをしていたのでしょうか？

「な、なんだよお前」

「彼女の連れさ。すまないが彼女と約束があつてね。行こうか、茉莉」
「ひゃっ！ちよ、幸彦?!」

そう言つてワタシの手を握り歩き出す。突然手を握られて心臓が飛び出すかと思つた。だが男も簡単には引き下がらない。

「おいおい。待てよ。その子は俺とお茶を——」

「そうそう、言い忘れてたけど……」

ナンパ男が何かを言う前に幸彦は立ち止まり振り返る。

「次はないぞ」

短く発したその一言には明確な敵意があつた。

幸彦たちが去るのを確認した男は、先ほどまでとは別人のように表情がなかつた。

『あと一歩のところだったのだがな。まあいい。またの機会を待つとするか。せいぜい気をつけることだ、駒川の者よ』

男はそこまで言うとそのと目を閉じる。一瞬脱力したかと思うとパツと目を開けてあたりを見回した。

「あ、あれ？俺なにしてたんだっけ？」

どうやら今までの出来事を覚えていないらしい。男は困惑しながらもその場を去るのだった。

まるで少女漫画のワンシーンのようだった。ヒロインのピンチに

現れる王子様のような。漫画の中では割とべたな展開だが、実際に体験するなんて思ってもみなかった。

ワタシはそのまま幸彦に手を引かれて商店街を歩く。握られている手から幸彦の体温が伝わって来る。大きくて暖かい手だ。

殿方に手を握られたのはお父さんを除けば初めてかもしれない。こんなにドキドキするものなのか。商店街の皆さんの目線が暖かすぎて恥ずかしい。

耐えきれなくなったワタシは堪らず幸彦に声をかける。

「幸彦っ。もう、大丈夫だから」

「あつ。……すまない」

幸彦もようやく現状に気づいたのだろう。慌てて手を離れた。

「あ、あは。ありがとうね、幸彦。あのナンパしっこかったから」

「いやお礼を言われるほどのことじゃ……。俺も少し熱くなりすぎたしな。騒ぎにならないでホッとしたよ」

幸彦は照れたように笑う。少しだけ疲れたように見えるその顔の目の下にはクマがあつた。

「……また徹夜ですか?」

「調বেনাকいやいけないものがあつたからね。でもちゃんと二時間は寝たぞ」

「基準がおかしいんですよ」

「そうか?」

幸彦に悪気はないようだ。いや、悪気がないのが問題なのだが。しかも今はバイトの休憩時間らしく、これからまた戻るといふ。

「おつと、もう休憩時間が終わるな。また夜に迎えに行くから」

「うん。ありがと。幸彦もバイト頑張つて」

「ああ。それじゃあ」

走つてバイト先へ向かう幸彦。確かにその姿には疲れた様子は見えなかった。

昨日忠告した時から予想はしていたけど、幸彦にとって二時間睡眠は十分休んだことになるようだ。みづはさんもあんな弟をもつと色々大変だろう。

みづはさんで思い出す。今朝がた有地さんが欠片について電話したところ、報告があるから診療所が終わった頃に来るよう言われていたのだった。詳しい内容まではわからないが、もしかしたら欠片についてなにか進展があったのかもしれない。

それなのに幸彦からその話題が出なかったということは、研究中で話を聞いていかなかった可能性がある。

念のため幸彦の携帯電話にメッセージを送り、夕飯の買い物再開することにした。

バイトを終えて帰路につく。

日も落ちて辺りはすっかり暗くなっていた。茉莉と手をつないでいたことが商店街で話題となっていたらしく、帰り際にいろんな人からかわれたせいだ。

家の前に着いたところでふと違和感を覚える。暗くなっているにもかかわらず診療所も自宅の方も電気がついていない。

「姉さん、出かけてるのかな？」

仕方がないので家の鍵を出そうと鞆を探る。すると携帯にメールが入っていることに気がついた。

(茉莉からメール来てたのか。あとでお詫びのメール出さなきゃな) そんなことを考えながら鍵を回すが、どうやら鍵は開いていたように軽い感触がするだけだった。

不審に思いながらも玄関のドアを開ける。

「不用心だな。鍵閉め忘れた……」

玄関に一步踏み入れた瞬間、どろどろと渦巻く嫌な気配にゾワリと全身の毛が逆立つ。

この前の幻術使いの時と似ているようで異なる気配。それが診療

所内に充満していた。

「この気配……っ！まさかっ!？」

嫌な予感がする。俺は土足のまま駆け出し診療所の奥に向かった。勢い良くドアを開けるとその先には、信じられない光景が広がっていた。本棚が壊され、本は散らばり、床や壁も傷だらけだ。

その中でも異様な存在感を放つ存在に、頭をハンマーで殴られたような強い衝撃を受ける。

そう。俺はその存在を知っている。

「嘘、だろ……」

この禍々しくどす黒い感情の塊を。

「なんで……」

殺意にあふれ復讐に溺れた感情の塊を。

「なんでこいつがここにいるんだ!？」

俺の目の前には、本来ここにいない崇り神の姿があった。

第二十話 「対峙・崇り神」

「なんでこいつがここにいるんだ!？」

俺はじつと目の前の存在に目を向ける。見間違えるはずがない。俺は今まで崇り神と二度も遭遇しているのだから。

あまりの出来事に止まりかけた思考を叩き起こす。これは現実だ。夢じゃない。崇り神は今も部屋の中をまるで怒りを爆発させたように暴れまわっている。

(急いで有地達を呼びいくか? いや、それだと崇り神が街に逃げだす可能性もある。街に被害を出さないためにもここで食い止めるしか……っ!)

そのとき、部屋に横たわる人影が目に入った。

「姉さんっ!!」

考えるより早く俺は部屋の中に飛び込み、崇り神の体から伸びる触手のようなものを避けながら姉さんのもとまで駆け寄る。ぐったりとして意識はないが呼吸は安定している。

ホツと胸をなでおろすが、現状は変わらない。どうにかして打開策を考えなければならぬのだが――。

(この距離だと式神を呼び出すだけでも崇り神に影響を与えかねない。かといって姉さんを抱えながらこの部屋を出るのは不可能だ。なら、俺にできることは……)

どうやら覚悟を決めるしかないようだ。

俺は姉さんの前に庇うように立ちながら、自身の集中力を高めるため深く息を吐く。

(朝までこいつを食い止める。それしかない)

崇り神が逃げないよう、何かあった時のために用意していた結界を起動させる。

そう。崇り神が存在できるのは夜の間のみ。であれば朝まで崇り神をこの場に抑えることができればいいだけのこと。

たとえ崇り神を祓う力が使えなくても、こういうときのために俺は修行を続けてきたのだから。

「悪いが、朝まで付き合ってもらうぞっ」

崇り神と向き合い、構える。

こうして俺の長い夜が幕を開けた。

俺はなんとなく、朝武さんの行う舞の奉納を静かに眺めていた。というのも、みづはさんからの報告が気になって何をしてもいまいち集中できないのだ。一刻も早くみづはさんの報告を聞きたいのだが、診療所や往診があるため訪ねるのは午後からということになっている。

朝武さんの舞は相変わらず綺麗だった。その一挙手一投足から彼女の努力が伝わって来る。ゆっくりとした動きは体力を使う。それを彼女は最後まで綺麗に舞うのだ。子供の頃からやってきたことだから当然と彼女は言うが、誰でもできることではないだろう。

「お疲れ様」

舞の奉納を終えて一息吐く朝武さんにタオルを差し出す。

「ありがとうございます」

「本当に綺麗な舞だね」

「そう言ってもらえると私も嬉しいです。でもどうしたんですか？舞の奉納なんて見ていて面白いものでもないでしょう？」

「いやあ、みづはさんの報告が気になって落ち着かなくて。神社の境内をウロウロしてたら朝武さんが舞の奉納しているのが見えたからつい見惚れちゃったんだよね」

「み、見惚れて……！その、あ、ありがとうございます」

朝武さんの顔が赤くなる。うん。かわいい。

恥ずかしくなったのか朝武さんは話題を変える。

「有地さんは、もう用事は済ませたんですか？」

「うん。といつても、さっき言った通りいまいち集中できなくて祖父ちゃんに叱られたりしたけどね」

「ふふふ、その気持ちはわかります」

どうやら朝武さんもみづはさんがどんな報告をしてくるのか気になっていたらしい。だが俺とは違って舞の奉納をきちんとなすのだから、見習いたいものである。

「それでは、そろそろ診療所に——あつ」

「ん？どうかしたの？」

「いえ、そ、その……ん、んんっ！」

突然朝武さんが艶っぽい声とともに身をよじる。以前にも同じようなことがあった。この反応はまさか……。

「やつ、あつんっ、あああああつ！」

必死に耐えようとするが、彼女の体が大きく震えるとともに我慢の限界といった声が零れる。そして次の瞬間には……。

「はあ……はあ……はあ……」

彼女の頭に獣の耳が生えていた。



獣の耳が生えたということは、今晚また祟り神退治に出かけなければならぬ。だがそれは夕食の後で大丈夫だ。その前に俺たちは朝からの予定通り駒川診療所に向かうことにした。しかし。

「……だめだ。全然でない」

先ほどからみづはさんに電話をかけているのだが、何回かけても留守番電話に切り替わってしまう。

「常陸さん、幸彦にはつながった？」

「それが、先ほどから何度も電話をかけているのですが……」

「どうやら幸彦も電話にでないらしい。」

「まだ往診が終わってないのでしょうか？」

「かもしれませんが、幸彦はこの時間バイトを終えてるはずなんですよね。それなのに電話に出ないなんて、また研究に熱中してるのでしょうか？」

常陸さんがなにやら思案顔になる。幸彦ってそういうことに対してはしっかりしてそうだし、連絡がつかないことなんてなかなかないのだろう。まあ何かに集中している時を除いてだろうけど。

「おや？ヨシノではありませんか！」

診療所に向かう途中で、仲居姿のレナさんと遭遇する。俺たちを見つけると嬉しそうにこちらへ駆け寄ってきてくれた。

「マサオミもマコも、ムラサメちゃんまで一緒とは。どこかにお出かけですか？」

「うん。ちよつとね」

「レナさんはどうしたんですか？」

「女将にお願いされた届け物を終わらせてまして、今から志那都荘に帰るところなのでありますよ」

「相変わらずレナは仕事熱心だな。吾輩が褒めてやろう」

「ふふ、ありがとうございます、ムラサメちゃん」

あれから何度か顔を合わせているうちに、レナさんとムラサメちゃんは仲が良くなった。というより、ムラサメちゃんがレナさんに懐いたというべきか。

今も当たり前前のようにレナさんがしゃがんで、その頭をムラサメちゃんが撫でてている。年の離れた姉妹がじゃれあっているようだ。

「ところでヨシノ……わたしからも質問よろしいでしょうか？」

ムラサメちゃんに撫でられながら、レナさんは朝武さんの頭に目を向ける。

「どうして、ケモミミを頭につけているんですか？」

「……………え？」

「その耳です。どうしてそのような物を付けて出歩いているんでしょうか？おお！もしやこれから仮装パーティーですか？」

「——な、なんでツ?!?!?」

慌てて頭の耳を隠そうとする朝武さん。俺が初めて見た時も隠そうとしてたけど、その大きな耳は手からはみ出している。あれじゃ隠しているとは言えないよな。

いや、問題はそういうことではない。

「もしかしてレナさん……見えてるの?」

「?? ヨシノが付いているケモミミのことではありませんか? もちろん見えておりますよ。ヨシノはケモミミ姿も可愛いでありますね♪」

心から褒めているのだろう。レナさんはニコニコしながら朝武さんのケモミミ姿を観察している。

どうやらレナさんは獣の耳を仮装か何かだと勘違いしているようだ。

「まさか、もう誰でも見えるほど呪いが強力に?」

「そんなつ、それじゃあ私は……ここまで他の人に見える状態で街を歩き回って……?」

「いや、いくらなんでも早すぎる。耳が生えたのは夕方だろうか?」

「それにここまで何人かすれ違っただけど、誰も変な視線は向けてこなかった」

周辺の街から「イヌツキ」と呼ばれ嫌厭けんえんされてきたのに、その街の巫女姫がケモミミを付けて歩いて視線を集めないはずがない。

「レナは吾輩を見ることができただけでなく、触れることもできる。おそらく芳乃の耳が見えるのも何か関係があるのかもしれない。つまり——」

「他の人には見えていない……」

「そう考えていいだろう」

ムラサメちゃんの言葉に安堵の表情を浮かべる朝武さん。

「問題は、レナさんが芳乃様の耳を見てしまったことですね。本人は仮装パーティーと思い込んでいるようですが、他言されるといらぬ誤解を生みかねません。……芳乃様、ここはレナさんも一緒にみづはさんと幸彦のところに入れて行って説明するべきだと思います」

「でも、レナさんを巻き込むのは……」

常陸さんの言う通り、ここは一度幸彦たちにしつかり説明する方がいいのかもしれない。朝武さんもそのことは理解しているけど、それでも巻き込みたくないと思っっているのだろう。

「……わかりました。レナさんも一緒に来てもらいましょう」

しばらく考え込む朝武さんだったが、他に答えが出なかったようだ。しぶしぶといった様子でレナさんに目を向ける。

「な、なんでしょう？ そんなに見つめられると照れてしまいますよ」

「レナさん。誠に恐縮ですが、このままワタシたちと一緒に来てくださーい」

「申し訳ありませんが、お付き合ってください」

常陸さんに左腕を、朝武さんに右腕を拘束されるレナさん。

「キョウシユク？ え？ な、なんですか？ 神隠しでありますか？ わたし、仕事に戻らねばならないのでありますが――」

「祖父ちゃんには俺が連絡しておくから」

「すまん、レナ。悪いようにはせんから安心しろ」

「ちよ、ちよつとお待ちを〜〜」

半ば強引ではあるが、レナさんも一緒に診療所に向かうことになった。



初めはいきなりの出来事で混乱していたレナさんも、幸彦の自宅兼診療所の前に着く頃には落ち着きを取り戻していた。

「レナは？」

「幸彦のお家ですよ。この街の診療所も兼ねているんです」

「オオ！ ユキヒコの家はお医者様だったのですか……それで、なぜユキヒコのお家に？」

困惑した表情を浮かべるレナさん。いきなり連れてこられたのだから不審に思っただろう。

そんなレナさんを安心させるために早速常陸さんが説明にはいる。「幸彦のお姉さんであるみづはさんに相談があるのですが、レナさんにも一緒にいて欲しいんです」

「……それは、以前ムラサメちゃんが言っていた秘密と何か関係があるのですか？」

「うむ、関係がある話だ。仕事で申し訳ないが、大事な話になる。玄十郎にはご主人が連絡を入れて許可をもらっている」

「ムラサメちゃんのご主人ですか？」

「ええつと、その話も色々ややこしいからあとで詳しく話すよ。だから、お願いします」

それぞれがレナさんに頭をさげる。レナさんは俺たちの必死さに少し驚いた様子だったが、小さく息を吐くと困ったように笑った。

「わかりました。みなさん面白半分ではなさそうですので」

「ありがとうございます」

レナさんの優しさに感謝しつつ、改めて駒川診療所へ顔を向ける。未だにみづはさんや幸彦に連絡が繋がらないことに多少の疑問はあるが、ここまで来てしまったのでお邪魔することにした。

家の扉に手をかけると、鍵がかかっていた。

「あれ？開いてる」

どうやら出かけているわけではなさそうだ。しかし、それはそれで違和感がある。辺りは日も落ちて暗くなっているのに明かりがついていないのだ。それどころか人の気配も感じられない。

扉を開けて呼びかけようと診療所に一歩足を踏み入れる。瞬間、開いた扉からまるで冷気が漏れ出たように背筋が凍りつく。

「な、なんなんですか、これ」

「芳乃様、どうかしたんですか？」

「扉を開けた瞬間、耳が……頭の耳が、ピリピリして……」

「……んっ……」

「レナさんまで。大丈夫ですか？」

「はい。ただ……いきなり頭痛が……」

俺だけでなく、朝武さんやレナさんも何かを感じ取っていた。

「これは……幸彦の結界か？おそろくご主人が扉を開けた瞬間、この家に張られていた結界が壊れたのだ」

「結界って、どうしてそんなものがここに張られてたんだ？」

「わからぬが、幸彦が意味もなく結界を張るはずがない。それにこの嫌な気配……」

「まさか……。——ッ！」

ムラサメちゃんの言葉を聞いた常陸さんが弾けるように飛び出し、土足のまま診療所の奥に向かう。

「あ、常陸さん！一人じゃ危ないって！」

「こらっ！二人とも不用意に中に入るでないっ!!」

後ろから聞こえるムラサメちゃんの緊迫した声。嫌な予感がする。

「幸彦ッ!!」

その予感が正しいものだと、一足先に入った常陸さんの様子で確信する。

常陸さんの目線の先には――。

「ぐッ……ああッ……!!」

黒い塊から伸びた触手に首を持ち上げられた幸彦の姿があった。

幸彦はそのまま壁に思いつきり投げられる。

「がはッ！」

「幸彦！」

思わず幸彦のもとへ駆けつけようとした時、彼の叫ぶような声が聞こえてきた。

「上だ！」

「——っ!？」

気がつけば頭のすぐ真上に触手が迫っていた。恐怖で硬直する体。もうダメかと目を閉じるが、俺に触手が当たる前に幸彦の声に反応した常陸さんがクナイで攻撃を受け流す。

「ワタシが引きつきますから、有地さんは幸彦をつ！」

「わかった！」

急いで幸彦のもとへ駆け寄る。近くで見るとよくわかるが、身体中怪我だらけだった。

「幸彦、大丈夫か!？」

「ああ。俺より姉さんを頼んでいいか？」

「それはいいけど……幸彦は？」

「姉さんを運ぶ時間を稼ぐ。なるべく早く頼むぞ」

「ちよ、その怪我で無理するなつて」

俺が言い終わるより早く、幸彦は祟り神のもとへ走り出した。

「あーもう！人の話は最後まで聞けよ！」

仕方なく、文句を言いながらも今度はみづはさんのもとへ駆け寄る。彼女の体の周りには緑色のバリアのようなものが張られていた。恐らく幸彦の術の何かだろう。これでみづはさんを庇いながら祟り神と対峙していたらしい。ほんと無茶をしゃがる。

急いでみづはさんを担ぎ上げる。気を失った人間はこれほどまでに重く感じるのか。

そのまま部屋を見回すと、幸彦と常陸さんがうまく祟り神を部屋の端に追いやっていた。俺は全速力で部屋を離脱した。

ちようどそこに朝武さんたちが遅れてやってくる。

「なつ、なんでありますか、アレは……生き物？」

「あれは、祟り神!？」

「バカな!?!山から下りてきたというのか!?!」

ムラサメちゃんがここまで驚いているということは、それだけありえないことなのだろう。それに、いつもの祟り神よりもひと回り大きく見える。

この場に全員揃ったところで、幸彦と常陸さんが祟り神から一旦距離をとる。

「幸彦、これは一体？」

「わからない、俺が帰ってきたときにはすでに祟り神が発生していた。それと……すまない、まさか結界でも祟り神が反応するとは思わなかった」

幸彦が顔をしかめる。

前にみづはさんから聞いた話を思い出した。何故かはわからないが、幸彦が霊力を使うと祟り神の力が増してしまうという話。そのせ

いで幸彦は崇り神を祓うことを諦めたということだった。

崇り神がひと回り大きくなっているのもそれが理由なのだろう。俺たちが来るまで、力の増したあの崇り神と一対一でやり合っていたなんて。改めて幸彦の身体能力の高さを実感する。

「ここは一旦退くのだ！ 叢雨丸か神具を取りに戻るしかない」

「でも崇り神をこのままにしておくわけには」

「俺が崇り神を引きつけます。芳乃様と有地はレナさんを連れて一旦戻ってください。茉子は芳乃様たちの護衛を」

いつ襲つてきても対応できるように崇り神を見据えながら幸彦が言う。すごい集中力だ。だけど幸彦一人をここに残すなんて……。

「ワタシも残ります」

「茉子！」

「万が一幸彦が倒れたらどうするんですか！ 引き付ける役が多いほうが、街への被害のリスクを軽減できます」

「……わかった。無茶はするなよ」

「どの口が言ってるんですか」

幸彦と常陸さんが再び崇り神へと向かっていく。退くなら今しかない。

「行こう朝武さん。早く神具を取りに行ってまたここに戻って来るんだ」

「……そうですね。行きましょう！」

急いで玄関まで戻ろうとしたとき、崇り神がありえない速さで幸彦たちを躲し、出口へ向かう廊下方面の壁を打ち砕いた。

「しまったー！」

崇り神が先ほどとは比べものにならないぐらいの速さで芳乃様た

ちのもとへ突っ込んでいく。まるで引き寄せられているようにも見えた。もしかしたら俺たちの会話を理解しているのかもしれない。

芳乃様たちに怪我はなかったものの、玄関までの道をふさがれてしまった。

「茉莉子！」

「わかってます！」

すぐさまカバーに回り芳乃様たちを下がらせる。俺はそのまま崇り神に体当たりし、力の限り押し戻す。

「おおおらっ!!」

火事場の馬鹿力を無理やり引き起こす、魚海のおやしさん直伝の脳筋技だ。これで明日は筋肉痛間違い無しである。

しかしおかげでまた距離をあげることができた。今のうちに次の一手を考えねばならない。俺たちはその案が出るまでまた時間稼ぎだ。

すぐさま崇り神は触手を伸ばして攻撃してくる。狭い部屋の中だと弾き飛ばすのも受け流すのも一苦労だ。俺は次第に茉莉子と分断されてしまう。

「ッ！視界が——ッ!？」

「茉莉子！危ない！」

崇り神が暴れまわることによつて巻き上げられた塵によつて視界が急激に悪くなる。その隙について崇り神が茉莉子に向けて触手を伸ばす。

茉莉子は間一髪直撃を防いだものの、そのまま勢い良く壁まで弾き飛ばされる。

「——あぐッ!？」

「茉莉子!!」

受身も取れずに崩れ落ちる茉莉子に崇り神はとどめを刺そうと勢い良く触手を横に振り抜く。

（また、俺は救えないのか？手の届く距離にいるのに、俺は、また……！）

手を伸ばすが届かない。全てがスローモーションのように見えた。心の底から黒い感情がドロドロと湧き上がる。

（ちくしょう……ちくしょう!!俺の大切な人を傷つけさせるものか!）

心が黒で染め上げられる。

全てが黒い感情に飲み込まれそうになったその時、ふと声が聞こえてきた。

『なにをぼさつとしている。貴様の大切な娘なのだろう?ならば恐れるな。力を使え。貴様の力で守ってみせろ。飲み込まれずに受け入れろ。まずはそこからだ』

声が聞こえなくなると同時に、体を冷たい何かが巡る。冷たすぎて逆に熱く感じる。ドライアイスを身体中に流し込んでいるかのようだ。全身が謎の感覚で満たされるとぼんやりとしていた意識が戻ってくる。

（茉子に怪我をさせるぐらいなら、俺が茉子の壁になる!）

駆け出した足は驚くほど軽く、間に合わないと思った距離を一瞬で移動する。そのまま茉子の前に出て崇り神の触手を受け止める。瞬間メキツつと嫌な音が聞こえたが関係無い。俺の体なんてどうなっただっていい。

「俺の大切な人を傷つけるな」

俺はそのまま思いつきり崇り神を投げ飛ばす。

「ゆ、幸彦……う」

茉子の消え入りそうな細かい声が聞こえる。先ほどの攻撃でしばらく動けそうにないが、ちゃんと生きている。ならそれでいい。

まずは崇り神だ。こいつは姉さんを傷つけた。こいつは茉子を傷つけた。茉子を傷つけようとするやつは殺す。こいつを殺す。俺の

大切な人を傷つけたこいつを。殺す。殺す。殺す。殺す。

「にやー!」

「わぷっ!」

突然猫丸が顔に飛びつき俺の顔を思いつきり引つ搔いた。

「痛つて。猫丸!いきなり出てきて引つ搔くな!」

「にやー」

なんとなく「目は覚めたか」と言われている気がした。

そこではたと気づく。猫丸に引つかかれる前、俺はなにを考えていた? 崇り神への憎しみ、殺意で頭がいっぱいになってしまっていた。この感覚は12年前のあの時と似ている。思わず背筋が凍りつく。

あのままだと、崇り神以外の人間にまで殺意を向けていたかもしれない。

「ありがとう猫丸、助かった」

「にやー!」

先ほどの感覚はもう無い。あれは恐らく、無意識のうちに大量の霊力を体に巡らせたのだろう。おかげで茉莉は助かったが、崇り神にも変化が起きていた。

穢れを溜め込んだその姿はいつもの黒い塊ではなく、一匹の狼のようだった。

「あれは本当に崇り神なのか!?!」

まるで溶けかけているような黒い塊だった崇り神の体が、黒い獣のようになっている。そこまで大きくは無いが四肢・口・牙がある。触手と思っていたソレもどうやら尻尾だったようだ。

『二……クイ。カエセ』

「喋った!?!」

「幸彦の靈力に反応して強力になったらしい。たった一瞬力を使っただけでこれとは……」

ムラサメちゃんも目を見開きながら驚いている。とはいえあそこで力を使わなければ常陸さんが危なかった。誰も幸彦を責めはしない。むしろグツジヨブだ。

「ムラサメちゃん！ なにかいい方法はないの？」

「ないわけではないが……しかし……」

「迷っている時間はないよ！ 常陸さんもしばらく動けそうにないし、あの祟り神相手じゃ幸彦もいつまで持つか——」

「わかっておる！ だがそれをするには吾輩と繋がりがあるものでなくてはならんのだ！」

「だったら俺は!?!」

俺のとつきの判断にムラサメちゃんは目を見開く。どうやら可能らしい。

「ぐツ！ 有地！ ムラサメ様！ 申し訳ないがあまり持ちそうにない！」

振り回される大きな尻尾を避けつつも、果敢に祟り神と渡り合う幸彦。それでも俺たちが来る前から受けていたダメージは刻一刻と増えていつている。

「わ、私たちだって少しぐらいだったら！ やあああ！」

朝武さんが落ちていた木材を祟り神に投げつける。

「え？ え？ よ、よくわかりませんが、えええいつ！」

わけがわからぬままのレナさんも、朝武さんを真似するように一緒にになって木材を投げつける。

「ムラサメちゃん！」

「ええい、痛むからな！ 覚悟しろ、ご主人！」

幸彦たちが作ってくれた隙を無駄にすることなく、ムラサメちゃんが俺の顔を引っ掴んだ。そして——。

柔らかで温かい感触。ムラサメちゃんとキスしていると気付くまでに少し時間がかかった。女の子の唇はこんなに柔らかいのか……。

瞬間、触れ合う唇から熱が流れ込んできた。熱湯でも流し込まれたみたいに、体の奥が熱くなる。半端じゃない激痛が俺を襲う。まるで

全身大やけどを負ったようだ。

「きやつ！」

「ヨシノ!？」

「芳乃様!？」

崇り神の攻撃を避ける際に朝武さんが尻餅をつく。当然崇り神がその隙を逃すはずがない。

「させるか！」

幸彦が朝武さんのもとへ駆けつけるが、崇り神の本当の狙いはレナさんだった。

「——ひっ!？」

「待てこのっ！」

勢い良く振りかぶった俺の拳が崇り神を床に叩きつける。

(体が軽い。これなら！)

そのまま抑え込むが、思った以上に崇り神の力が強い。

「くっ！崇り神の穢れが予想以上に大きすぎる！ご主人一度退けっ！」

「いいや、このチャンスを逃したらまずい！このまま押し切る！」

神力のおかげで多少力が強くなったとはいえ、これ以上長引かせるのは得策じゃないように思えた。こうなれば意地の勝負だ。

「穢れをどうにかすればいいんですね。なら……」

幸彦がすかさず近づき、俺が押さえ込んでいる崇り神に両腕を突き立てた。すると崇り神は苦しむように大きな尻尾を幸彦へ叩きつけた。

「ぐッ………まだまだッ！」

まるで幸彦に吸い込まれていくかのように、崇り神がどんどん小さくなっていく。

「まさか………！幸彦やめるのだ！それは危険すぎる！」

「やらなきや、やられるだけです……。俺のせいどころまで大きくなったんですから、俺がなんとかしない……と……」

幸彦の腕が黒く染まっていく。それでも決して崇り神を離そうとはしなかった。

「いけええッ！有地！」

「大人しくしろおッ！」

幸彦が作ってくれたチャンスを無駄にはしない。俺は無理やり抑え込むように右腕を奥まで押し込む。

先ほどのように声は出ないが、大きく震え上がるその姿はまるで断末魔をあげているようだった。

そしてついに泥の塊は、黒い霧のように四散していった。

「はあ……はあ……はあ……やっただのか？」

「みたいだな……」

肩で息をしながら辺りを見回す。部屋の中は荒れているものの黒い泥の塊はない。静寂がこの場を支配している。

二人揃ってボロボロだった。よくぞ無事だったと自分を褒めてやりたい。

「ご主人！急いで神力を剥がさなければ！」

慌てて飛んできたムラサメちゃんに再び口づけをされる。初めと違い今度は身体中に広がっていた熱を吸収されるようだ。だが痛みは引かず、むしろひどくなっていた。

唇が離れると同時に、右腕に激痛が走る。見ると幸彦と同じように腕が黒く染まっていた。まるで部屋の電気を誰かが点滅させているように、目の前がチカチカしてきた。

俺の隣にいた幸彦も限界らしく、顔から倒れこむ。

（だめだ……俺も、意識が……）

幸彦に続いて俺も地面へ倒れる。その感覚すらどこか遠い感じがした。

「ご主人！幸彦！気をしっかり持て！」

「二人とも！しっかりしてください！」

「はわわわ!?衛生兵！衛生兵はどこですかー!？」

三人の声が遠くから聞こえる。だが返事さえできず、そのまま俺の意識は泥の中へと引き込まれていった。

第二十一話 「犬に噛まれ猫に救われ」



夢を見ていた。

以前にも話したと思うが、人の夢とは自分の記憶情報を整理するものだ。

だからだろう。目の前の光景には見覚えがある。

ここは芳乃様の家だ。襖の奥から秋穂様や安春様、ムラサメ様に某子の両親、そして俺の父さんと母さんの声が聞こえる。

ここまですれば、この記憶がいつのものかわかる。誘拐事件の後、俺が祟り神との二度目の対峙を経験した日の記憶。……また嫌な記憶を引っ張り出してきたものだ。

12年前のあの事件を、実行犯の死亡という形で終結させた原因。俺の霊力の暴走。その時俺が見た光景が正しければ、泥のような黒い塊が湧き、男たちに襲い掛かった。少し記憶が曖昧ではあるものの、あの泥のような黒い塊は祟り神で間違い無いだろう。

秋穂様たちの話によると、事件後実行犯が亡くなっていた場所には祟り神の姿こそなかったものの穢れに満ち、その穢れを祓うのに三日はかかったという。その三日間秋穂様の頭には、祟り神出現時と同様獣の耳が生え続けていたらしい。

なぜ祟り神が現れ、実行犯を殺したのか。原因はわからない。手がかりは俺の曖昧な証言のみだった。

ただ一つ確かなのは、俺が式神である「狛」を呼び出していたことと、狛を呼び出すために使った霊符が穢れを溜め込んでいたこと。

薬と同じだ。病気に対してどれだけ強い効き目を持っていたって、その副作用で体を傷つけては元も子もない。俺たちはなにが原因な

のか確かめる必要があった。

俺の陰陽師としての霊力で祟り神に異常が生じているのなら、その力は巫女姫にとっての脅威に他ならない。

俺の体が回復するのを待ち、秋穂様と当時秋穂様の護衛を行っていた茉莉子の両親と共に森へ入った。

そしてその日、俺の霊力によって祟り神の力が増幅する事実が証明された。

「誠に申し訳有りません。悴せがれが原因で秋穂様たちに大変な危険を……」

「いえ、いいんです。彼の力が祟り神に影響を及ぼすのか、確かめたいと言いつ出したのは私たちなんですから。こちらこそ申し訳ありません。まだ子供の幸彦君を危険に巻き込んでしまいました」

「いえ、幸彦も望んで同行しました。あの子自身、自分の力についてはつきりさせたかつたんだと思います」

大人たちの間に重苦しい空気が流れる。襖越しに聞こえて来る大人達の会話。俺はただ無表情に彼らの会話に耳を傾けていた。

俺の処遇をどうするのか、大人達の議論は続いた。みんな言葉には出さないが、俺という危険性の高さ、厄介さは理解しているようだった。何より自分が一番理解していた。自分の力の恐ろしさに。

結局その日結論は出なかったが、次の日俺から祟り神に関わらないことを申し出た。

役に立てないことが悔しくて涙が止まらなかったのを覚えている。父さんも母さんも、泣きそうになりながら俺を優しく抱きしめてくれた。

思えば、涙を流したのはそれが最後だったように思う。

いきなり視界がぐにやりと歪むと、場面が森の中に移っていた。

最悪なことにまたしても俺はこの場所を知っている。12年前、誘拐犯と直接対峙したあの場所だ。

ただ少しだけ違和感を感じる。なんというか、古い映像を見せられているような感じだ。

これは本当に俺の記憶なのだろうか。湧いた疑念が俺を混乱させる。もし違うなら、これは一体誰の記憶だというのか。

『おおおっ、おおおおおッ!!?』

悲しいみ、怒り、憎しみ。その全てがグチャグチャに混ざったような唸り声。驚くことに、その声は確かに自分の口から発せられている。いや、正確には自分ではない。

気がつけば俺の意識は大きな白い山犬と同化していたのだ。

視線を上に向けると、刀をもった武士の男が山犬を踏みつけていた。男の顔はよく見えないが、その手には綺麗な水晶のような宝玉が握られている。

誰かの感情が俺の中に流れ込んでくる。

この感情や記憶はこの山犬のものなのか？

山犬は必死にもがきながらも射殺するような視線を男に向ける。

『たかが数百年で姉君から受けた大恩を忘れ果てて……姉君がどれほどの思いでお前らを……それなのに我らにこのような仕打ちをするとはッ。許せん！許せん！決して許してなるものかッ!!』

「たかが犬ころが。我が一族に伝わる道具を俺が使って何が悪い！所詮貴様も道具にすぎん。せいぜい俺の復讐の糧になるがいいッ！」

男は躊躇うこともなく山犬おれに向かって刀を振り下ろす。激痛が山犬おれ襲う。今まで一度も経験したことのない激痛。死んでもおかしくない痛みのはずなのに、逆に意識が鮮明になる。

山犬おれの目は首を切り落とされてなお、男の持つ宝玉に向けられている。た。

『止めてくれ！姉君だけは……姉君にだけは手を出さないでくれッ……』

声にならない叫びをあげる。だがそれは叶わない。

男は俺山犬の目の前で笑いながら宝玉を砕いた。



「やめろおおおッ！」

今まで出したことのないような叫び声。その声は先ほどとは違い、間違いなく俺の口から発せられていた。

勢いよく起き上がった俺の体は悲鳴をあげていた。どうやらまともにも動ける状態ではないらしい。

意識がまだはつきりしない。夢の中だというのに俺じゃない誰か、いや、この場合はあの山犬だろう。あいつの感情が俺の意識と混ざり合っつてぐちゃぐちゃになる感覚。

幻なんかじゃない。あれはあの山犬が実際に感じていた感情だ。うまく言えないが確信があった。

落ち着きを取り戻そうと深く深呼吸をするが、霞がかつた意識は晴れることなく視界もボヤけている。

まずは自分の状況を確認しなければ。ここがどこで俺は一体なにをしていたのか。たしか診療所で祟り神に遭遇して、それから……。俺が記憶をたどり始めたその時だった。

—— オオーン

どこかから聞こえてきた遠吠えに、俺の思考が妨げられる。

なぜだろうか。俺にはその遠吠えがどこか悲しい叫びのように聞こえた。

「今のは……」

『お願い。あの子に会いに行つて』

「っ!？」

女性の声が頭に響く。知らない声のはずなのにどこか懐かしさを感じる自分に困惑する。

辺りを見回すが、この部屋には俺の姿しかない。その間も女性の声が途絶えることはなかった。

綺麗な声だ。まるで鈴の音のように凜としている。

『あの子が呼んでいる。お願い。どうか……』

「あの遠吠えが聞こえるところに行けばいいのか？」

返事は返ってこない。だというのに不思議と向かわなければならぬような使命感に駆り立てられる。

「行かなきゃ……」

俺はベッドから起き上がる。なぜか体の痛みは無くなった。

部屋を飛び出した俺は遠吠えが聞こえた山の方へ向かい駆ける。外はとても静かだった。真夜中らしく人の姿はない。

どこから聞こえてきたかなんて曖昧なはずなのに、俺の足が止まることはない。誰かに導かれるように山に入り獣道を突き進んでいった。

たどり着いたのは、12年前のあの場所。

夢で山犬おれが殺された場所でもある。

そこには月明かりに照らされ町を見下ろす大きな山犬の姿があった。

『誰かと思えば貴様か。何の用だ、人間』

「はあ、はあ……やっぱり君だったのか。〃狛〃」

12年前のあの日から一度も召喚してこなかったが、その姿を見た瞬間目の前の山犬が俺の式神。〃狛〃であると理解した。あの頃と比べると大きさが倍以上になっている。

狛と呼ばれるのが気に食わなかったのか、不愉快そうな鋭い視線で俺を一瞥する。

『気安く呼ぶな人間。自分の式神もうまく扱えん未熟者が』

「君が俺を呼んだんじゃないのか？」

『貴様を呼んだ？……まあいい。用がないなら立ち去れ。久しぶりに

現界したんだ。人間なんぞが側にいたら気分が悪くなる』

ずいぶん言い草だが、狛はその場を立ち去ろうとはしなかった。狛から送られる視線は鬱陶しいコバエを睨みつけるようだ。この場合コバエは俺か。

だが、ここまで来て「はい、そうですか」と帰るわけにはいかない。俺が導かれるようにこの場へ来たのは、なにかしらの意味があると思っただ。

「用ならある。聞きたいことがあるんだ。あれは……狛の記憶なのか？」

『……さあな。その質問に対する答えは持ち合わせていない』

質問の体を成していないような俺の抽象的な問いに狛が答える。俺が何を見ていたのかわかっているようだった。

つまりはあの夢で見た記憶はやはり……。

「なら聞き方を変える。君は、あの犬神なのか？」

夢で見ていた時からなんとなく思っていた。俺が見たあの光景は祟り神が、呪詛が発生する原因になった出来事ではなかったのはいかど。つまりそれは、あの山犬が伝承の中の犬神だったということ。

そして目の前にいる狛。

その容姿は夢で見た犬神そのものだった。

『残念だが、私は犬神であって犬神でない』

「どういうことだ」

『未熟者め。私を召喚したのはどこの誰だ』

「それは……俺だけだ」

『そう、私は貴様が生み出した式神。確かに以前は犬神だったのかもしれないが、今の私にその記憶はほとんどない。ただ漠然と、犬神であった事実だけを記憶しているのだ。だからこそ私は犬神であり、全く別の存在だともいえる』

簡単に言えば、狛はもう大昔存在していた犬神ではないということだ。理屈は理解できる。でも納得はできなかった。なにも覚えてないなんて、そんな奴があんなに悲しそうな遠吠えをするとは思えな

かった。

「なら何故君は、君が消滅させられたこの場所でそんなに苦しそうな顔をしてるんだ？」

『何故、か。先ほどから質問ばかりだな』

「答えてくれ」

『……探しているのかもしれない。私が失ってしまったものを。私がなくした感情を。私にとって、姉君がどういう存在だったのかを』

崇り神になるほどの憎しみを抱いた犬神。でもそれは結果でしかなかった。あの夢で犬神は、死を目の前にしても最後まで姉君という存在を想っていた。

大切な人を忘れる。

そんな残酷なことがあつていいわけがない。

俺はいつの間にか、狛を救ってやりたいと思うようになっていた。

「なあ、俺にできることはないのか？」

『身の程を知れ人間。自分の力さえも使いこなせぬ貴様になにができる』

「だからってこのまま君を放っておくことは——」

『くどいッ！』

狛の大きな尻尾がドゴンツと鈍い音を立てながら俺の目の前に叩きつけられる。明確な拒絶の意思を感じる。

『貴様ら人間の綺麗事など聞き飽きた！自己満足でしかない偽善を押し付けるな』

「違う！俺はっ！」

狛に向かい一歩踏み出した時だった。突然体の力が抜け膝から崩れ落ちてしまう。同時に狛の体も消えかかっている。

『ふん、限界か。人間、今日のこととは忘れろ』

「くっ……逃げるな！話はまだ、終わってない！」

『馬鹿め。誰が逃げるか。貴様の私を限界させる霊力が底を尽きただけだ』

言われてみれば、この脱力感は式神を動かしすぎた後の感覚に似ている。つまり狛は猫丸のように勝手に現界したわけではなく、俺が無

意識のうちに召喚していたのか。

薄れていく意識の中で、狛が歪んだ嘲笑を俺に向ける。

『私に力を貸したいと言った人間。もし私に力を貸すことでお前の大事な娘たちを危険にさらすことになったらどうする？』

「なにを、言つて……」

『私が探している感情や記憶を持っている存在に一つだけ心当たりがある。貴様らが崇り神と呼ぶ存在だ。あれを喰らえば私は私を取り戻せるかもしれない。それがなにを意味するかは貴様が一番よく知っているだろう』

崇り神を取り込むということは、崇り神が持つ穢れも一緒に取り込むということだ。あれだけ濃い穢れを取り込めばその者の魂まで穢れてしまうだろう。

穢れと共に犬神の持つ朝武家への強い憎しみまでも取り戻した場合、狛が芳乃様に牙を向けるかもしれない。そのことへの忠告なのだろう。

『それでも構わないというのならばまた私を呼び出せ。私は貴様のすぐそばにいる』

「……くそっ」

狛の姿が消えると同時に俺の意識も深い闇の底へと落ちていった。

「これでよし。もう服を着ていいよ」

「はい、ありがとうございます」

時刻は朝の7時半。ワタシは今、駒川診療所でみづはさんに怪我の経過を診てもらっていた。といつても少し強く背中を打ち付けてし

まったただけで大した怪我じゃない。

「ところで常陸さん、最近少し働きすぎじゃないかい？ 芳乃様から報告を受けてるよ」

「む、無理なんてしていませんよ。ただちよつと、ほんのちよつと芳乃様が心配なので毎日お手伝いしているだけです」

「はあ。布団から出るなどは言わないけど、なるべく安静にしておくこと。でないと治るものも治らなくなるからね」

みづはさんはお医者様なので私の体を気にかけてくれる。でも心配しすぎです。私自身無理しているとは思っていないし、辛いこともない。ここは一つみづはさんに安心してもらうために自分の胸をドンと叩く。

「ワタシは大丈夫ですから。芳乃様のことはワタシにドンと——ツツ!? ……うう……くうう……。を、をまかへくらはい……」

少し強く叩きすぎてしまった。これじゃあ逆効果じゃないですか。ワタシのバカ……。

「言わんこつちやない。痛みがなくなるまで無理に動いたり、衝撃を与えないように」

「い、痛くなんかありません……」

みづはさんが優しく背中をさすってくれる。うう、優しい。それに比べてワタシの情けないこと。こんな姿を幸彦には見せられない。

……その幸彦はまだ目を覚ましていない。

崇り神との戦いから五日が経とうとしていた。芳乃様もレナさんも怪我はなく、みづはさんもかすり傷程度で済んでいた。あの場でひどい怪我をしたのは幸彦と有地さん。有地さんは二日前に目を覚まして順調に回復している。

幸彦は私たちが駆けつける前のダメージや私を庇った時の怪我で隣町の病院へ搬送された。五日経った今もまだ目を覚ましていない。

「みづはさん。幸彦の容体は……」

「安心していいよ。意識こそ戻らないけど怪我の方は回復に向かっている。何よりあのタフな幸彦だ。すぐに良くなるさ。私もあの子に

「はちちゃんとお礼を言わなきゃいけないからね」

ワタシを安心させようと優しく頭を撫でてくれる。彼女の言葉は私に向けられたものだが、自分に言い聞かせているようにも聞こえた。姉弟ですから、みづはさんも心配しているのだ。

そんな時、みづはさんの携帯が着信を伝える。

「少し失礼するよ。……はい駒川です。はい。いえ大丈夫です」

誰からだろうか？みづはさんはワタシに断りを入れると電話をしながら診療所の奥へ向かった。

「お医者様は大変ですね。そうだ！幸彦が起きるまでみづはさんのお手伝いを……ってこういうのがダメなんだよね」

先ほどみづはさんから注意されていたのに。どれだけ家事が好きなんだと自分を問い詰めたくなる。

ふと、カリカリと何かを引っ掻くような音が聞こえてくる。なんの音だろうか。あたりを見回すと原因はすぐ見つかった。

「猫丸？」

「にゃー」

診療所の窓を開けて欲しそうに引っ掻いている猫丸を見つけた。こんなところで何をしているのだろう。とりあえず窓に近づき開けてあげる。

「猫丸、どうしたの？……あれ？そういえば、幸彦の目が覚めてないのに猫丸だけで行動できるんだっけ？」

いろいろイレギュラーなやつだと幸彦は話していたけど、術者がいないのにどうやって動いているのだろうか。

ワタシの疑問をよそに猫丸はこちらに駆け寄ってくる。数回ワタシの周りをぐるぐる回ると靴紐を咥えてクイクイっと引っ張る。

「一緒に来て欲しいの？」

「にゃ〜」

「あ、猫丸！どこに行くんですか!？」

猫丸は開けた窓からまた外へ飛び出してしまった。逃げたわけではないみたいで、外でワタシが来るのを待っているのか、こちらをじっと見つめている。

これは付いて行った方がいいのでしょうか？

ワタシが窓の外を覗きながら悩んでいると、電話を終えたみづはさんがどこか焦った様子で戻ってきた。

「みづはさん、どうしたんですか？」

「あ、ああ。なんでもない。少し急用ができてね。申し訳ないが今から隣町に行くことになったんだ」

「隣町って……幸彦に何かあったんですか!？」

「いや……そうだね。常陸さんには話しておこう。実は、幸彦が病室からいなくなったらしいんだ」

「なんですって!？」

「五日も眠っていたんだ。そうでなくても怪我をしていた体で遠くへは行っていないと思う。私はこれから幸彦を探してくる」

幸彦が居なくなったという話はワタシをひどく恐怖させた。もし幸彦に何かあったとしたら、ワタシは……。

「猫丸……」

「え？」

「猫丸がいたんです！ワタシと一緒に来て欲しいように靴紐を引っ張って、もしかしたら——ッ！」

ワタシは急いで猫丸の元へ駆け出す。

もしかしたら猫丸は、幸彦の居場所を知っているのかもしれない。

「あ、ちよつと常陸さん！」

「ワタシは猫丸を追いかけます！何かわかったら携帯に連絡を入れませので！」

「あ、ああ。ありがとう。じゃなくて！安静にしているように言っただけじゃないか！」

「お叱りは後で必ず受けます！それでは！」

みづはさんの制止を押しつけ猫丸の元へ向かう。ワタシが来るのを確認すると、猫丸はまた走り出す。

忍者として俊敏性には自信があったが、猫の早さには追いつけない。ワタシが遅れるたびに猫丸は立ち止まり、近づくと走り出す。

やっぱりワタシを何処かへ導いているようだった。

商店街に差し掛かったところで猫丸を見失ってしまう。息を整えながら猫丸を探す。きつとまだ近くににいるはずだ。

「はあ……はあ……猫丸、どこにいったの？」

「こおらああ！商品の魚を盗むんじやねえ！」

聞き覚えのある低くて渋い声。その声はワタシも幸彦もよく知るお店から聞こえてきた。間違いない、「魚政」からだ。

視線を声のした方へ向けると猫丸がお魚を啜えながらお店を飛び出していた。猫丸の後をこのお店の主人である魚海さんが追いかける。

「待ちやがれ！この泥棒猫！」

すごい形相だった。あの巨体で猫丸に負けない速さで走っている。幸彦の師匠だけあってあの人の底が知れない。

(……って、ブーツとしてたら見失っちゃいます！)

幸いなことに、猫丸よりはるかに大きい魚海さんがいい目印になってくれたおかげで見失うことはなさそうだ。

やはり猫丸は連れて行く人を考えている。ワタシに魚海さん。どちらも幸彦と関わりが強い二人だ。でも連れて行くなら榎本さんの方が良かったのでは？なんて魚海さんに失礼か。

走り続けること数分。ワタシと魚海さんは鵜茅学院の裏山を進んでいた。

先ほどから見覚えのある道を走っている。なるべく近づきたくない場所。ワタシ達にトラウマを植え付けたあの場所へ続く道だった。もしかして幸彦がいる場所って――。

「よおし！捕まえたぞこの野郎！」

「にゃー！にゃー！」

あの場所に着く前に魚海さんが猫丸を捕まえた。

捕まえられるような速さで逃げていかなかった気がしますが、そこは魚海さんだからということに納得しましょう。それよりここで猫丸を捕まえてしまったら道案内がいなくなってしまう。

ワタシは慌てて魚海さんに声をかけた。

「魚海さん！ちよつと待つてくださいー！」

「お？菜子ちゃんじゃねえか。こんなところで何してんだ？」

「猫丸をずつと追ってきたんです。魚海さんの後ろにずつといたんですよ？それより猫丸を放してやつてください。猫丸が盗んだお魚の代金はお支払いしますので」

「あゝ？猫丸？？そーういやお前幸彦の……」

猫丸の首根っこを持ちながらジロジロと猫丸を観察する魚海さん。その隙を付いて猫丸は必死にもがき、魚海さんの手から逃れた。

「あ、猫丸！待つてくださいー！」

「なんだか訳ありみたいだな……」

猫丸はさらに山の奥へと駆けていく。ワタシはその後を追ひ、ワタシの必死さをみた魚海さんも付いてきてくれた。

どんどん昔の記憶が蘇ってくる。最早ここまできたらどこに向かっているのか確信する。この先は12年前の事件があった場所だ。と、目の前に倒れている人影を発見する。

間違いない。幸彦だった。

「幸彦っ!!」

「おいおい、どうなってるんだ!?!」

ワタシと魚海さんの驚きの声が山に響き渡る。幸彦はぐったりとしてその顔は白く生気が感じられない。嫌な想像が頭を駆け巡る。

「幸彦っ！しっかりして幸彦っ!!」

大きな声で呼びかけても返事はない。

「ユキ……嫌です……そんな……」

「菜子ちゃん、落ち着いて。幸彦はまだ死んじやいない」

魚海さんが正気を失いかけたワタシの肩に優しく手を乗せる。ワタシが落ち着くのを確認すると、手慣れたように幸彦の体に異常がないか調べていく。とてもじゃないが魚海さんの手さばきには見えなかった。

「大丈夫だ。弱々しいがちゃんと息もしてるし、脈も問題ない。ただ衰弱がひどい。急いで運ばねえと。手伝ってくれるよな」

魚海さんはニカつと笑った。ワタシを落ち着かせようとしてくれたのだろう。ワタシは自分の胸に手を当てて深く深呼吸をする。

「……はい！お任せください」

「うしっ！それでこそ商店街の天使だぜ！」

そういえば、幸彦がよく言っていた。魚海のおやしさんはここぞというときに頼りになると。まさに今がそのときだった。

「魚海さんって頼りになりますね」

「がっはっは。当然だろ！」

「初めは榎本さんが一緒の方が良かったかもなんて思ってしまった」

「あいたた！そこを突かれると痛いぜ。だけど、その猫はおそらく狙って俺だけ連れてきたみたいだぜ？」

「狙ってますか？」

「どういうことだろうか？ワタシが考えている間に魚海さんは携帯を取り出す。」

「菜子ちゃんは携帯持ってるか？」

「あ、はい」

「なら菜子ちゃんのみづはちゃんに連絡入れてくれ」

「わかりました。えっと、魚海さんは誰に？」

「決まってるだろ」

慣れた手つきで着信をかける。相手はすぐに電話に出た。

『もしもし』

「おう、榎本。俺だ」

『まったく貴方は。店番を放り出して何してるんですか？花恵はなえさんがカンカンに怒ってましたよ』

「げっ」

花恵さんとは魚海さんの奥さんのことだ。昔から魚海さんは花恵さんに頭が上がらないことで有名だった。

「いろいろあったんだよ。それより車をまわしてくれるか？大至急だ」

『……なにかあったんですか？』

「緊急事態だ。お前はみづはちゃんを回収して鵜茅学院の前で待機してくれ」

『はあ……了解。みづはさんは診療所に?』

「今茉莉ちゃんに連絡を入れてもらう。悪いなきなりで」

『いつものことです。私的にはその方が面白いので一向に構いません』

「へっ言ってくれるじゃねえか。そんじゃ頼んだぜ」

「なんかというか、信頼し合っている。そんな会話だった。幸彦が慕っている理由がわかった気がする。」

そして猫丸が魚海さんだけ連れてきた理由がこれなのだろう。離れていても状況を察して対応してくれる榎本さんは街の方で待機していた方が動きやすい。

「そういうわけだ。みづはちゃんには診療所で待ってるように伝えてくれ」

「は、はい」

ワタシは急いでみづはさんに連絡を入れた。少しの小言を言われたが「弟を見つけてくれてありがとう」とお礼も言われてしまった。みづはさんにお礼を言われるのはなんだかむず痒い。

「よし、そんじゃあ幸彦担いで学院まで戻るか。しかしとんでもない猫だよな、お前」

「にゃー」

「へっ。とぼけやがって。まあ、お前のおかげで幸彦が見つかったわけだ。その魚は幸彦につけとくぜ」

「にゃー」

猫に話しかける大男の凶。はたから見れば滑稽だが、ワタシも猫丸に心からありがとうと言いたい。もしあのまま幸彦を見つけれなかったら……考えるだけでも恐ろしい。

「えーと、おい猫、帰り道ってどっちだ?」

「……にゃ」

「あ、お前今バカにしただろ?」

最後の最後で締まらない。それが魚海のおやしさん。

幸彦の言う通りだった。

「ワタシがご案内します。飛ばしますのでついてきてくださいね」

「おう！頼んだぜ菜子ちゃん」

なぜ幸彦がここにいたのか。それはまだわからない。でも幸彦を助けるために頼りになる大人達がいることはわかった。

幸彦は無事だった。ちゃんと生きている。ホツとして涙が出そうだったけど、なんとか堪えながらワタシ達は山を駆け下りる。

目を覚ましたらガツンと文句を言ってやりますから。覚悟していただくさいね、幸彦。

第二十二話 「頼りになる大人」

「……………」

病院の待合室は痛いほどの静けさに包まれていた。時計の針はもうすぐ15時を迎えようとしている。

ワタシたちが病院に来てかれこれ四時間が経とうとしていた。

魚海さんや榎本さんのおかげで幸彦を隣町の病院に連れて行くことができた。衰弱がひどかった幸彦はみづはさん立ち会いのもと体に異常がないか詳しく検査をしてもらっている。今はその結果待ちだ。

大丈夫だと自分に言い聞かせていても、血の気の失せた幸彦の顔が頭から離れてくれない。待合室で待つ時間が長くなるほど不安で胸が潰されそうになる。

「にやー」

「……………ありがとう、猫丸」

猫丸が心配そうな目でワタシの顔を見つめ鳴く。大丈夫だと励ましてくれているようだった。お礼にワタシも猫丸を優しく撫でてあげる。

待合室に来てから猫丸はずっと私の膝の上で丸くなっている。どこか安心する暖かさだった。手触りといい体温といい式神だなんて到底思えないほどだ。

「ほれ、菜子ちゃん」

「あ、ありがとうございます。魚海さん」

魚海さんから投げられたペットボトルをキャッチする。待合室の外にある自動販売機で買ったのだろう。ホットココアだった。

「ま、心配すんなって。幸彦ならきつと大丈夫だ」

そう言う自分用に買った缶コーヒートのプルタブを開け一気に呷あおった。

「つぶは。幸彦は決して強い奴じゃあねえが、あいつのタフさは折り紙付きだ。俺が保証する。だからそんな顔しなくていいんだ」

「……ワタシそんなに酷い顔してますか？」

「俺がココアを奢りたくなるぐらいにはな」

「魚屋さんの基準はどうあれ、確かに今の茉莉さんは少し元気がないですね。状況が状況なので仕方ないことですが、貴女には悲しむ顔より笑顔の方が似合っていますよ」

どうやら相当酷い顔をしていたのだろう。魚海さんたちが励ましてくれる。幸彦はたまに自分のことのように彼らを自慢することがあったが、その気持ちは今ならわかる気がする。幸彦の師匠がこの人たちでよかった。

「おい、お前が茉莉ちゃん口説いてどうすんだ」

「口説く？ 私は事実を伝えただけですよ？」

「かー、気障つたらしいや奴。様になってるからさらにむかつくぜ」

「なにを今更。貴方だって、花恵さんを口説くときに私に泣きついてきたじゃありませんか」

「ば、バカ！ 茉莉ちゃんの前でその話は無しだろ！ 恥ずかしいじゃねえか」

真つ赤になった顔を手で隠す魚海さんとしてやったり顔の榎本さん。二人のいつも通りの掛け合いを見ていると自然と心が落ち着いてくる。

「あはっ、お二人ともありがとうございます。魚海さんのお話は後日花恵さんのお茶会に使わせてもらいますね♪」

「そ、そりやないぜ茉莉ちゃん……」

魚海さんの様子に笑いを耐え切れず榎本さんが吹き出す。自然とワタシも笑みがこぼれ、魚海さんも最後は一緒になって笑っていた。

魚海さんからもらったココアが半分ほど減った頃、猫丸の耳が何かに反応してピクンと動き待合室の入り口に顔を向ける。

数秒後入り口が開きみづはさんが顔を出した。

ワタシは思わず立ち上がり、猫丸を抱えながらみづはさんに駆け

寄った。

「みづはさん！あの、ユキ……幸彦は……!?!」

「大丈夫、安心していいよ。体に異常は見られなかった。弟が心配をかけてごめんね」

みづはさんの手がワタシの頭を優しく撫でる。

心の底から安心したようなみづはさんの顔。長い付き合いの中で初めて見る表情だった。

そっか、幸彦、大丈夫なんだ……。

不意に体の力が抜けて床にぺたんこ腰を下ろす。とつさにみづはさんが支えてくれたのでどこかをぶつけることはなかった。

どうやら思っていた以上に気を揉んでいたらしい。みづはさんの口から幸彦が無事だと聞いて、張っていた緊張の糸が一気に緩んでしまったようだ。

「大丈夫かい？」

「平気です。少し気が抜けてしまつて。ありがとうございます」

「いいや、お礼を言うのはむしろ私の方だ」

みづはさんは改めてワタシたちを見渡し深々と頭を下げた。

「常陸さん。それに魚海さん、榎本さん。本当にありがとうございます。あなた達のおかげで弟は助かりました。幸彦の姉として心から感謝します」

「にやー」

「猫丸も本当にありがとう。君には今度とっておきのご馳走を用意するよ」

「にやー♪」

嬉しそうな猫丸と、どこかホツとした様子の魚海さんと榎本さん。重苦しい空気も霧散し、待合室はようやく安堵に包まれた。

「幸彦は病室ですか？」

「ああ。衰弱がひどかったから点滴をして眠っているよ。今回の失踪に関してまだ謎はあるし、ムラサメ様の助言もいただきたいところだけど……。医者を目線から言わせて貰えば明日にでも目を覚ますかもしれない。あとは様子を見て三日ぐらいで退院できるだろう」

「三日で退院？ 祟り神の怪我で最低でも一ヶ月は入院する必要があるって言っていないでしたか？」

診療所に現れた祟り神を撃退するために幸彦もワタシも有地さんも少なからず怪我を負った。中でもワタシ達が駆けつける前からみづはさんをかばいながら祟り神と対峙していた幸彦は打ち身や裂傷、ひどいものでは肋骨や左腕の骨折など重傷だったはず。

「そこが不思議なんだよ。先程も言った通り幸彦の体に異常は見当たらなかった。つまり、祟り神との戦闘で負った怪我が全部治っていたんだ。両腕の穢れを残してね。幸彦が姿を消し、あの山の中で見つけたことと何か関係があるかもしれないが、本人から話を聞かないとなんとも言えないね」

顎に手を当てて思案顔になるみづはさん。

確かに不思議だ。誰かが幸彦の怪我を治してくれたのだろうか。治癒に特化したアストラル能力があると聞いたこともあるが、それでも一日であれだけの怪我を完治させるのは難しいと思う。そもそも何のために怪我の治療を？

(……難しく考えても仕方ないですね。幸彦の怪我が治ったんだから、今はそれで十分です)

むしろ治してくれた人がいるならお礼を言いたいぐらいだ。

「ほーん。不思議なことね……。おい不思議猫。お前なんか知ってるんじゃないか？」

「はあ。魚屋さん、貴方って人は……」

「かわいそうな人を見る目を向けんな。今回の件、鍵を握るのはこの不思議猫だ。俺のカンがそう言ってんだよ」

「今回猫丸が活躍したのは認めますが……さすがにそれは過信しすぎだと思えますよ。ほら、猫丸をご覧なさいな」

榎本さんが指差す先では猫丸が大きなあくびをしている。随分とリラックスしているようだった。今回近くで猫丸の活躍を目にしたワタシにはこのリラックスも計算のうちのように見えなくもないですが……どうなのだろう？

猫丸はみんなの視線が集まっていることに気づくと、体をよじって

ワタシの腕から抜け出し待合室を出て行く。

「あ、猫丸！どこ行くんですか!？」

さすが猫というべきだろう。あつという間にいなくなってしまった。

「行ってしまいましたね。魚屋さんが変なこと言うから」

「俺のせいにすんな古本屋。あー、でもどうすつか。病院に猫だけ残していくのはマズイか」

「あつちには幸彦の病室があるけど……一応様子を見に行つた方が良さそうだね。せつかくだから常陸さんたちも幸彦の顔を見てから帰つたらどうだい?」

「よろしいんですか?」

「少しぐらいなら構わないよ。ここの医院長先生は父さんの知り合いでね。穂織の事情も知っていて気を利かせて個室を用意してくれたんだ。他の患者に迷惑がかかることはない」

いまだ周辺の街にイヌツキと言われ忌み嫌われている穂織。その穂織出身の幸彦が隣の病院にすんなり入院できたのは医院長先生のおかげだったようだ。

何はともあれ魅力的な提案だし、ワタシたちはみづはさんの案内で幸彦のお見舞いをすることにした。

みづはさんに案内されたのは病院の端にある病室。この中に幸彦がいるらしい。少し深呼吸をしてドアに手をかける。そのときだった。

「猫丸重い……どいてくれないか……」

「にゃー♪」

「いや、にゃーじゃなくて……はあ、まあいいか」

病室の中から声が聞こえて来る。この声は……。

ワタシは思わず勢いよくドアを開ける。すると驚いた表情の幸彦と目が合った。そう、目があつたのだ。

「ゆぎ、ひひ……?」

「葉子……。良かった……無事だったんだな」

ワタシの顔を見た途端ホツとした表情になる幸彦。そんな幸彦をみて、ワタシは内心冷静ではいられなくなった。

(目が覚めたばかりなのに、ワタシを見た後の第一声が無事で良かったなんて。ワタシがどれだけ心配したと思ってるんですか！大抵いつつも人の心配ばかりして自分犠牲ばかりで！なんでもっと自分を大切にしてくれないんですか！今日という今日はガツンと文句を言っつてやるんですから！)

ワタシは無言で幸彦に近づく。幸彦が怪訝な目線を送ってくるが関係ない。

ベッドの側まで来たところで思いつきほっぺたをつねってやる。痛っひゃ!!あの、まほひゃん。いひゃいんだけどー!

(言っつてやるんですから。文句を、言っつて……)

一旦手を離し一歩下がると、また幸彦と目が合っつてしまう。もう限界だった。

ダムが決壊したように涙が溢れ出す。同時に安堵と苛立ちの気持ちがあぐしゃぐしゃになって押し寄せる。気がつけばワタシは幸彦の胸に顔を埋めていた。

「うえ!?ま、茉莉子?」

「本当に心配したんですから!ほんと……本当に……うええんゆきひこお」

「茉莉子!?な、泣かないでくれっつて!」

ワタシも泣くつもりなんてなかったのに。

止まらないものは仕方ない。

「女性を泣かせるなんて最低ですね」

「あーあ、商店街の天使を泣かせたなんてあいつらが知っつたら大変だぞ」

「我が弟ながら情けないね」

「にゃ」

「お、俺が悪かったから勘弁してくれー!!」

元気な声で騒ぐ幸彦。

その声を聞くとびにしばらく涙は止まらなかった。

『さあ、起きてください』

暗く深い意識の底で鈴の音のように美しい声が聞こえて来る。この声は確か、俺に狛を探しに行くようお願いしてきた女性の声だ。

『貴方の大切な人が待っていますよ』

俺の大切な人？

真つ先に思い浮かぶのは幼馴染の顔だった。世話好きで人をからかうのが好きで少し抜けたところのある優しい幼馴染。そういえば、彼女は大丈夫だったのだろうか。俺は彼女を守れたのだろうか。

そう思った瞬間、ふわりと体が浮く感覚とともに、どこか安心する暖かさを胸に感じた。

鈴の音のような美しい声の持ち主は俺に言った。俺の大切な人が待っている。もしかしたらそこに彼女がいるのだろうか。だったら早く起きないと。

意識がどんどん鮮明になっていく。

そして目を開けたそこには――。

「にゃー」

猫丸が俺の上で丸くなっていた。

何だろう……安心したような、残念だったような。ていうか猫丸？ご主人様の上で丸くなるのはいただけじゃないぞ？

「猫丸重い……どいてくれないか……」

「にゃー」

「いや、にゃーじゃなくて……はあ、まあいいか」

猫丸の自由気ままさは今に始まったことじゃないな。どかそうと思っても腕がうまく動かない。仕方ないので腹筋を使って起き上がりベッドの縁に寄りかかる。

辺りを見渡し、気づいたが、どうやら俺はどこかの病院にいるようだ。点滴までしているということはだいぶ眠っていたのだろう。つまり祟り神の戦闘で怪我をして……そういえば豹のあれは夢だったのだろうか？

俺がいろいろ考えていた時だ。病室のドアが勢いよく開けられ、知った女の子と目が合う。

他でもない茉莉子だった。

「ゆき、ひ……？」

「茉莉子……。良かった……無事だったんだな」

心から安心した声が漏れ出る。見た所大きな怪我をしているようには見えない。少しは体を張った甲斐があったようだ。

俺の言葉を聞いた茉莉子は一瞬大きく目を見開くと俯きながら近づいてくる。どうしたのだろうか？俯いているせいで表情が読み取れない。

ベッドの側まで来たところで思いつき頬をつままれる。

「痛っひゃ!!あの、まほひゃん。いひゃいんだけどー!」

今まで何度か頬をつねられ叱られたことはあったが、今回は加減がない。要するにとても痛かった。いや、そもそもなんでつねられるんだ!?

茉莉子は数秒ほど俺の頬をつねるとやっと手を離し、一步後ろに下がる。そこでもう一度彼女と目が合う。すると……。

「……ぶわっ!?!」

「——ッ!?!」

茉莉子の目から滝のように涙が溢れ出した。しかもそのまま抱きつくように俺の胸に顔を埋めてきた。腕が動かないのでなされるがまだ。

「うえ!?!ま、茉莉子?」

「本当に心配したんですから!ほんと……本当に……うええんゆきひこお」

「茉莉子!?!な、泣かないでくれって!」

男は得てして女の子の涙に弱いものだ。当然俺も例外ではない。

いつまでも泣き止まない茉莉にあたふたしてしまう。ど、どうすればいいんだ。

「女性を泣かせるなんて最低ですね」

「あーあ、商店街の天使を泣かせたなんてあいつらが知ったら大変だぞ〜」

「我が弟ながら情けないね」

「にや」

そんな俺をからかうように師匠たちや姉さんの声が聞こえてくる。この人たち絶対楽しんでる！にやにやしてるし！猫丸まで笑っているように見えるんだけど？

「お、俺が悪かったから勘弁してくれー!!」

こうして俺は茉莉が泣き止むまで必死に謝り続けるのであった。



「落ち着いたかい？」

「うう、見苦しいところをお見せしました……」

数分後、茉莉の顔は真っ赤になっていた。

……正直、思春期男子には刺激が強かった。そういえば有地を助けるために山に入った時にも同じようなことがあったっけ。でも今回は数分間ずっと密着していたわけであって……。

いや、それだけ心配させてしまったんだよな。よく見たらまだ目が真っ赤じゃないか。罪悪感が俺を襲う。

「まあなんだ。そんなに恥ずかしがることはないよ。俺も今のは忘れるようにするからさ」

「……だめ。忘れないで。恥ずかしいけど、みんなにどれだけ心配かけたか分かってもらわないといけませんから」

「……わかった。反省する」

「わかればいいんです。わかれば」

拗ねたように頬を膨らませそつぽを向く菜子。可愛らしい仕草だが、これは本当に怒っている証拠でもある。当分は口答えしないようにしないとな。

と、ここでようやく菜子も周りの大人たちがにやにやしていることに気づく。慌てたように立ち上がり早口でまくりたてる。

「幸彦の元気な顔も見れたので今日は失礼しますね！そ、それでは！」
次の瞬間にはそこに菜子の姿はなく丸太が一本転がっているだけだった。変わり身の術で逃げるなんて相当恥ずかしかったんだな……。

「若いっていいねえ。俺まで若返っちゃおうよ」

「そのセリフ自体ジジくさいですよ」

「うるせー魚屋」

「あの、師匠たちはなんでここに？」

目が覚めてからずつと疑問に思っていたがようやく聞けた。俺のお見舞いに来るにしても、この時間はお店も忙しいはずだ。何か特別な事情でもあるのだろうか。

「説明すると長くなるんだが……俺たちも菜子ちゃんを送る大事な使命があるからな。みづはちゃん、あとは任せるぜ」

「ええ。元々幸彦には話さなければいけないことがたくさんあるので構いませんよ。常陸さんを宜しくお願いします」

「わかりました。幸彦、あなたはもつと自分の体を大事にしなさい。あなたを大切に思う人のためにも。それでは」

榎本さんが先に病室を出る。去り際に残した言葉は短いが、俺の心に刺さるものだった。厳しくも優しい榎本さんらしい言葉だ。

榎本さんに続いて退室しようとした魚海のおやじさんだったが、思い出したように手を叩くとこちらを振り向く。

「おつとそうだ。退院したらちよつと報告がある。急ぎじゃねえんだが、まあ早く知りたいなら大人しくしてるんだな。じゃあな幸彦」

気になることを言って去っていく魚海のおやじさん。報告というと例の傀儡使いのことだろうか？今すぐ問いただしたいところだが退院するまで絶対話してくれないだろう。

大人しくおやじさんを見送ると姉さんと二人だけになる。傀儡使いのことも気になるが、今はもつと大事なことがある。

「それで姉さん。聞かせてくれるかな。あの後、祟り神を退治して俺が眠っている間に何がどうなったか」

「もちろんそのつもりさ。だけどその前に幸彦が目覚めたことを報告に行かないと。ちよつとだけ待っててもらえる？」



主治医の先生と姉さんから軽い問診を受けた後、再び姉さんと向かい合う。そこで俺は師匠たちや茉莉がここにいた理由を聞いた。

「山の中で倒れていた、か……」
それはつまり、狛に会って話をしたのは夢じゃないということになる。

「そうゆうこと。何があつたか覚えてる？」

「覚えてるけど、何処から話せばいいか……。先に姉さんの話を聞いてからでいいかな？」

夢の中で俺が知ったこと。狛に会ったこと。そこに姉さんの話を合わせれば祟り神や呪詛の真相に近づけると思つた。

「わかつた。先に謝っておくけど、幸彦が眠っている間に他のみんなで一応の答えを出させてもらった。有地くんが見つけた欠片と彼が見た夢が鍵になつた」

「そうか……」

また有地に助けられたな。本当なら俺が……。いや、今は素直に喜ばないとな。

「幸彦？」

「なんでもない、続けて」

「……わかつた」

姉さんは一瞬怪訝な表情を浮かべたもののすぐに説明に戻ってく

れた。

「まずは何故診療所に祟り神が現れたかについてだが、あれは診療所で発生したものだ。原因は私が例の欠片を削ったことにある。あの欠片自体が祟り神の核だったんだ」

「祟り神の核、か。つまりあの欠片自体が祟り神を作り出した憑代ということか。そして姉さんが憑代を削ったことによつて祟り神が現れた。……憑代は一つに戻りたがっている？」

「あはは、さすが専門家だね。私たちも同じ結論に至ったよ。その証拠に、欠片同士を近づけたら一回り大きな一つの欠片になった。」

欠片が一つになんて非科学的だが、あの欠片が憑代の一部ならうなずける。

あの日診療所に現れた祟り神に違和感を感じていたが、ようやく納得できた。

診療所に現れたこと。芳乃様の元に真っ先に向かわず診療所内で暴れるだけだったこと。芳乃様が体勢を崩したとき芳乃様ではなくレナさんを狙ったこと。

朝武の者の命を狙う存在の行動とは思えなかったが、その発生の仕方自体イレギュラーだったんだ。

あの日発生した祟り神は憑代を傷つけたことに対する怒りの表れ。大切なものを傷つけられたんだから怒つて当然だ。夢の中であいつの感情を知ってしまった俺には痛いほど理解できた。

「有地くんが見たという夢では大神の声が聞こえてきたらしい。ぼんやりだが、『返せ』』という言葉とともに明確な怒りを感じたとか。私たちは勘違いしていたかもしれない。呪詛は朝武家の長男ではなく、呪詛のために利用され殺された大神の怒りから生まれたものだった。もし憑代の欠片をすべて集めて大神の怒りを慰撫することができれば呪いが解けるかもしれない。これが私たちが導き出した答えだ」

幸彦はどう思う？と姉さんは俺に目を向ける。

話を聞いている分には納得出来る答えだった。それなのに俺の中でなにかモヤモヤしたものが引つかかる。

自分の考えを整理するためにも今度は俺が話す必要があった。

「有地が夢を見たように、俺も夢を見たんだ。その中で俺は明確に犬神の記憶と感情を知ることができた」

「どういうことだい？」

「順を追って話すよ。最初はそうだな……」

俺は自身に起きた出来事を一つ一つ説明していった。

夢の中で見た出来事から山で狛に会ったことまですべてを話す。普通なら到底信じられないことだったが、姉さんは最後まで真剣に耳を傾けてくれた。

「とても興味深い話だね……。幸彦の見た夢と有地くんが見た夢の差はなんだろうか？聞いている限りほとんど同じ場面を見ているが、情報量に明確な差がある」

「きつと祟り神の穢れにどれだけ触れたかじゃないかな。狛が言っていたんだ。祟り神を食らえば元に戻るかもしれないって。あの穢れが犬神の恨みや怒りの感情が祟り神になって形になったものだと考えれば、取り込んだ穢れが多い俺の方がより犬神の記憶にも干渉しやすかったんじゃないか」

もちろんそれは魂まで干渉するということで、一歩間違えれば祟り神に心に乗っ取られる可能性もあったわけだ。改めて危ない橋を渡っていたのだと知り冷や汗が流れる。

「だとしたら、幸彦が見たというその水晶のような宝玉が憑代だろうね。そしてその宝玉が犬神の姉と何かしらの関係があると」

「前に榎本さんからもらった書物によれば、山の神が産み出した二柱の神がいたって。たしか宝玉から生まれし神と獣から生まれし神だったはず。獣のほうか犬神だとするなら宝玉の神が犬神の姉的存在だったんだろう」

「宝玉の神か……。つまり朝武の長男は犬神だけでなく宝玉の神に関する神物をも自分の復讐のために使ったわけだ。なんて罰当たりなことを……」

なまじ神々や呪いについて研究している分、それがどれだけ恐ろしく愚かな行為であるかがわかってしまう。言いようもない憤りから

言葉が出ない。

「やはり憑代を集めて犬神の怒りを鎮めることが呪詛を解く鍵だと思うが……まだなにか言いたそうな顔だね」

姉さんの言う通り、なぜだかそれだけで終わらない気がしてならない。姉さんとの意見交換でだいぶ思考も考察もまとまってきたが、どうしても腑に落ちないのだ。

「なんだかモヤモヤするんだ。うまく言葉にできないけど、祟り神はやっぱり犬神だけの問題じゃない、と思う。……そう思いたい」

もしかしたらこのモヤモヤは俺の認めたくないという気持ちなの表れなのかもしれない。

夢で犬神と意識が一つになって、それから猫と話してみても俺は思った。なんでこいつが祟り神なんかにならなければいけないかなかったのだと。確かに最後には怒りに呑み込まれたかもしれないけど、その怒りだって犬神のお姉さんを大切に思う気持ちから派生したものだ。

大切な人を思う気持ちに祟り神を生んだなんて、俺は認めたくないかったんだ。

（いや、これは俺のわがままだ。芳乃様を救うことができる可能性があるなら、その可能性に全力を注ぐのが主に仕える者としての使命だ）

俺はかぶりを振り姉さんに向き直る。

「ごめん姉さん。あんまり気にしないでくれ。どのみち欠片を集めてみないと先に進めそうもないや」

「そう……、じゃあこの話はここまでだね。幸彦の見解を含めた説明は私から芳乃様たちに報告するよ。それから遅くなったけど——」

姉さんはベッドの座る俺に視線を合わせると、そのまま頭を優しく撫でた。驚きのあまり固まってしまった。

「幸彦が無事で本当に安心したよ。それから、ありがとう。私を守ってくれて。君は私の自慢の弟だ」

姉さんにこんなに優しく撫でられたのはいつぶりだろう。この歳になって撫でられるのは恥ずかしいしすぐすぐつたい。

「幸彦は賢い子だからいろんなことを抱えているのかもしれない。で

も我慢はしなくていいんだ。もしも、少しでも辛かったり大変だと感じたりしたら私に言いなさい。私たちは家族なんだから。いいね」

優しく諭すとはこのことだろう。俺の悩みなんてお見通しらしい。姉さんはいつまでたっても俺の姉さんだ。賢くて綺麗で、怒るとちよつと怖いけど俺の自慢の姉さんだ。

『……探しているのかもしれない。私が失ってしまったものを。私が無くした感情を。私にとって、姉君がどういう存在だったかを』

あいつのお姉さんも優しい人だったのかな……。

今となっては知るすべのないことかもしれない。それでも足掻くことができるのなら、狛ともつと話をしてみよう。いつかお互いの姉自慢が出来るように。

第二十三話 「病院は暇なんです」

幸彦が目を覚ましたという嬉しいニュースを聞いたのが昨日の夜。それでもって、俺たちも今日学校に復帰した。

崇り神との戦いでまさに死ぬ思いを経験した俺たちは一週間ほど学校を休ませてもらった。安春さんとじいちゃんが療養と看病のためにと学校に掛け合ってくれたらしい。

久しぶりの登校だったので、今朝は大変だった。

クラスのみんなが押し寄せて喜びや心配の声をかけてくれた。朝武さんや常陸さんだけでなく、この春転校してきたばかりの俺にも声をかけてくれるんだから、本当にいいクラスメイトに恵まれたものだ。

そんな日の昼休み。俺は最早お約束と言えるまでになったメンバーで昼食をとっていた。

「ということ、幸彦のお見舞いに行こうと思う！」

「相変わらず唐突だな」

廉太郎からの突然の提案。心なしかテンションが若干高めな気がする。

「将臣にもお見舞いしに行ってやっただろ？それなのに幸彦にはしないなんて不公平じゃんか」

「それはそうだけど、そのテンションだと何か下心がある気がしてさ」
「馬鹿野郎！親友が苦しんでるんだ！下心ナンカアルワケナイダロ！」

じゃあなんで片言になってるんだよ。ていうか目をそらすな。

俺が廉太郎にジト目を向けると思わぬ方から助け船が出される。

「レンタロウの言う通りでありますよ。友達のためにお見舞いに行きたいと思うのは当たり前のことです。さすがのレンタロウも下心なんて抱くはずがありません」

「へ？そ、そういうこと！さすがレナちゃんわかってるね」

冷や汗を額に浮かべる廉太郎。純粹で優しいレナさんを騙すなんてさぞ心苦しいだろうに。それとも本当に幸彦のことを心配してるだけなのか？

どのみちこの場で白状しそうにないし、あとで小春あたりにこっそり聞いておこう。

廉太郎は気を取り直して朝武さんたちに顔を向け直す。

「なあ巫女姫様も常陸さんもレナちゃんも一緒に行かない？」

「ちよつと、なんで私のことは無視するのさバカ兄」

「なんだよ、お前も来るのか？」

「当然でしょ？私だって駒川先輩にはお世話になってるんだから」

膨れっ面になる小春と露骨に嫌な顔をする廉太郎。普通なら険悪な雰囲気になりかねない会話も、この二人がするとどうして微笑ましく思えてしまうのだろう。相変わらず仲がいい兄弟だ。

廉太郎との兄弟喧嘩に一区切りつけると、小春は少し俯きがちに視線を下げ心配そうに俺と朝武さんを見つめる。

「でも駒川先輩が入院してる病院って隣町なんだよね。大丈夫かな？」

「小春？どうしたでありますか？大丈夫と言いますと……？」

「ええつと、あんまり言いたくないですけど……穂織って周辺の町からあんまりよく思われてないんです」

「なんですと?!?こんなにもいい人ばかりの素晴らしい街なのにですか!?!」

レナさんが驚きの声を上げる。

その気持ちは痛いほどわかる。俺も最初は信じられなかった。だが実際、俺がここに来た時に乗っていたタクシーの運転手も露骨に穂織を嫌っていた。この街で生活した今、あのタクシーの運転手に一言物申しておけば良かったと思う。

「まあ田舎ならではの風評被害ってやつ？昔から『イヌツキだ、疫病神だ』って言われて毛嫌いされてんだよ」

「イヌツキ、でありますか……」

レナさんが悲しそうな視線を俺に送る。どうやら察してくれたら

しい。俺もそれにそつと頷いた。

この前の崇り神との戦闘に意図せずではあるもののレナさんを巻き込んでしまった。あの状況だ、ごまかせるレベルを超えている。俺が眠っている間に、安春さんと朝武さん、そしてムラサメちゃんがレナさんに朝武の呪いのこと全てを打ち明けたらしい。

「イヌツキ」とはまさに朝武家にかけてられた呪いの擲擧でもある。優しいレナさんのことだ。シヨックは大きかっただろう。

「確かにまだ穂織を嫌う人は多いですが、お見舞いについては大丈夫だと思いますよ？あの病院は幸彦のお父様の知り合いが経営しているとみづはさんも仰ってましたし、医院長先生が個室を用意してくれていたのだから」

みんなの心配を和らげるためか、常陸さんが優しく微笑んだ。俺と朝武さんもこの流れに乗ることにする。

「私も幸彦のお見舞いに行きたいと思っていたので、お父さんに聞いてみますね」

「それでも心配ならじいちゃんに相談すればいいんじゃないか？もしかしたら車も出してくれるかもしれないし」

「お、それありだな。んじゃあとはお見舞いの品だけ……おーいみんなー！幸彦のお見舞い行くけど渡して欲しいものがあつたら持ってきてくれー！」

廉太郎の掛け声でぞろぞろと人が集まってくる。それだけみんな幸彦のことを心配していたのだろう。しかしこういう時の廉太郎の行動力は本当に見習いたい。

「そうだ、今のうちに……」

「なあ小春。廉太郎がお見舞いに積極的な理由ってわかるか？」

「うーん、なんだかんだ言っつて駒川先輩のことすごく心配してたから、お見舞いに行きたいって気持ちに嘘はないと思うな」

「そこはまあ、そうだろうな」

廉太郎が友達想いなやつなのは長年の付き合いで把握している。

「……そういえば」

「そういえば？」

「昨日おじいちゃんと廉兄が話してたんだけど、隣町の病院に三司あやせ」さんにそっくりな白衣の天使がいるって」

「三司あやせ？」

「知らないかな？今日日本で一番有名って言われてるアストラル使いの女の子」

「あー、あの子か！」

三司あやせ。

たしか1年前にアストラル研究のメツカ「わしず驚逗研究都市」でおきたクレイン事故のとき、そのアストラル能力で建物の下敷きになっていた人の救助を行った女の子だ。アストラル使いがその能力で人を助けたということだけでも話題性があつたが、その容姿がとても可愛らしく一躍注目の的になっていた。この前もどこかの学校の生徒会長になったって騒がれてたっけ。えっと、確か橘花学院きっかだっけ？

小春の話によると、その三司あやせっていう子はネットによく動画を配信しているらしく、自身が通う橘花学院のPRや歌なんかも発信しているらしい。

廉太郎はそのあやせさんのファンで動画を見ていたところ、じいちゃんに見つかり、その動画を見たじいちゃんが隣町のあやせさんに似ているという白衣の天使について語ったと……。

「つまり廉太郎のもう一つの目的は白衣の天使か」

「なるほどそういうことでしたか」

気配もなく常陸さんが俺の背後から会話に混ざる。心臓に悪いからやめて欲しい。

「ひ、常陸さん？いつからそこに？」

「ワタシ、忍者ですから」

ドヤ顔で言われると何も言えなくなる。まったく便利な言葉だ。

「常陸先輩、すみません。うちのバカ兄がご迷惑をおかけして」

「迷惑なんかじゃありませんよ。幸彦って意外に寂しがりやですのできつと喜んでくれますから」

「えっと、不純な動機が混ざってるのはいいの？」

「構いせんとも。むしろ放っておいたほうが面白そうですので。あ

は♪」

完全にこれから起こるであろうことを想像して面白がっている顔だ。いたずら好きだもんな常陸さんって。悔しいことにいい笑顔なんだよなあ。

「さてと、こんなもんかな」

と、ちようどお見舞いの品募集も終わったようだった。

「綺麗な飾りですね！これはどういうものなんですか？」

「千羽鶴といって早く元気になりますようにというおまじないみたいなものですよ」

「ほらこの前レナちゃんにも折り紙で鶴折ってもらったでしょ？それを重ねて作ってあるんだ」

「おお、本当であります！これは私がおった鶴さんですね。ですが、どうして鶴なのでしょう？」

レナさんの鋭い質問に朝武さんも廉太郎も固まってしまふ。助けを求める視線が俺と常陸さんに向けられる。……なんで鶴なんだろうね？

「そうですね。諸説ありますが、日本では昔から鶴はおめでたい鳥とされてきました。昔話でも鶴は幸福を運んでくれますよね。そんな鶴が千羽もいるということは、〴〵良いことが来る前触れだ〴〵と考えたみたいですよ。お見舞いだけじゃなくてただお願い事のためだけに作る人もいるそうです」

「ほー、日本人は昔から面白くて素敵な考えをしますね♪」

目を輝かせながらメモをとるレナさん。日本が好きと明言しているレナさんにとって、日本の昔からの風習というのは珍しくも面白いものなのだろう。そういう彼女の感性も素敵だと思う。

俺ももつと自分の国のことぐらい知っておかなきゃな。

「常陸さんよく知ってたね」

「昔、幸彦が教えてくれたんですよ。おまじない関係は詳しいですか」

「そういえば私も、幼い時に元気が出るおまじないを教えて貰いまし

た。掌に元気つて三回書いて飲み込むんです」

「あはあ、芳乃様。可愛らしいので抱きしめてもいいですか?」
「なんで!?!」

朝武さんの可愛らしいおまじないの話は置いて、幸彦がおまじない関係に詳しいのはきつと呪詛の研究の副産物なんだろう。幸彦が知るおまじないか。本当に効果がありそうだ。今度何か教えてもらおうかな。……いや、やめておこう。おまじないにもいろいろあるからな。触らぬ呪術に祟りなしだ。

「しっかし羨ましいぜ。お見舞いで千羽鶴とか、もし俺が入院しても誰もくれないだろ」

「廉兄人望ないもんね」

「事実だが実の妹に言われると結構心にくるな……」

そつと胸に手を立てる廉太郎。哀れだ。

「廉兄と違って駒川先輩は働き者だもん。こう言ったらあれだけど、今回の入院で少しでも休めたらいいなって」

「そうだなあ。案外休みができて本人も喜んでるんじゃないか?」

確かに、幸彦はここ最近ずつと忙しそうだった。

この前俺たちが山で釣りをしていた時も調べ物があると言ってこなかったし、それ以前だって……よく考えたらあいつほとんど休んでないんじゃないか?

朝は俺との稽古。学校が終わるとバイト(本人曰く週5を目安にしているらしい)。休日は崇り神の研究。あれ?よく考えなくてもほとんど休んでないな、あいつ。

「そうですねー。ちゃんと休んでればいいのですが……」

「菜子?なにか気になることでもあるの?」

「いえ、そういうわけでは。ただ幸彦は忙しくないと死んじゃう病ですから。案外暇と退屈を持って余して死にそうになっているのではないかと」

「……確かに」

「ま、まさかー。二人とも考えすぎたって。いくら幸彦でも、幸彦でも……」

思わず言葉に詰まってしまった。
いくら幸彦でも休みが苦痛だなんて思わない、よな？

「あー……暇だ。暇すぎる。死ぬ。俺は退屈に殺されるんだ……」

自分の声が虚しく病室に響き渡る。

俺が入院することになっているのは三日間。今日はその一日目なのだが……暇すぎる!!初日からこんなに退屈に悩まされるなんて。

姉さんや主治医の先生からこの三日間は念のため絶対安静だと言われた。筋トレはもちろん禁止。小説や雑誌、漫画の類は読んでもいいが、呪詛に関する研究のノートや資料の閲覧は禁止。もちろん入院中にバイトはできないし、病院の手伝いもさせてもらえない。

こんなに暇になったのはいつぶりだろうか。

俺はなんとなく天井に手をかざし、シミまで数えつくしてしまった天井と包帯でぐるぐるに巻かれた腕をぼんやりと眺める。

両手を握ってはまた開く。明らかに昨日よりもスムーズに動くようになっていた。

この包帯は穂織の湯で清め安春様に祝詞を捧げてもらった特別なものだ。

崇り神との戦闘で穢れを吸収した影響か、俺の両腕は霊感がない人でもわかるぐらい真っ黒に変色していた。医学上問題はなくても穢れは身を蝕むものである。俺の両腕は鉛のように重くジンジンと鈍い痛みが伴っていたのだ。

その穢れを取り除くための応急処置として提案したのがこの特殊包帯である。これを巻いていれば少しずつだが穢れを祓うことがで

きるのだ！……理論上は。

「狛もあれから呼びかけても出てこないし。いやまあ単純に俺の霊力が回復してないからだろうけど。猫丸も現界解けちゃったし。とにかく！やることがない！」

もういつそのこと筋トレしてしまおうか。体鈍っちゃうし。腕立てぐらいなら大丈夫だろう。

『……だめ。忘れないで。恥ずかしいけど、みんなにどれだけ心配かけたか分かってもらわないといけませんから』

……いや、やめよう。これ以上心配をかけるのは良くないよな。たった三日の辛抱だ。

幼馴染の悲しそうな顔が脳裏をよぎり、俺は頭を振って考えを改める。と、ちょうど病室のドアが開き俺担当の看護師さんがやってくる。

「幸彦くん。検温の時間ですよ」

「あ、よろしくお願いします」

この人は柏木さんかしわぎといつてこの病院の看護婦長だ。母さんの知り合いということもあり、入院中もお世話になっている。親切丁寧で一部の人には白衣の天使と呼ばれていたらしい。

「熱はなさそうね。でも油断しちゃダメよ。みづはちゃんにしっかりと見ておくように言われてるから」

「は、はい」

さすが姉さん根回しが早い。

「あ、それからね。今朝女の子が来て『幸彦くんが暇してるだろうから渡してください』って」

柏木さんは手に持っていた紙袋を俺に手渡す。手に取ると意外とずっしりした重さを感じる。中を覗くと、そこには漫画が数冊入っていた。

おそらく茉莉が気を使ってくれたのだろう。

思わず顔が緩んでしまう。

「随分と可愛い子だったけど、彼女さん？」

「違いますよ。ただの幼なじみです」

「あら、ふふ、じゃあそういうことにしておいてあげる」

何かあったらいつでも呼んでと言いつつ残し柏木さんは病室を出て行った。

早速紙袋から漫画を取り出してみると手書きのメモが出てくる。

『幸彦が気に入りそうな漫画を厳選してみました。お礼はハーゲンビッツ一個で許してあげるね♪ 茉子より』

「ははは、ちゃっかりしてるよな、茉子のやつ」

俺が暇を持て余していることなどお見通しというわけだ。

俺が気に入るような漫画か。いったいどんなのが入っているのだろうか。

改めて茉子が貸してくれる漫画を確認する。そこには――。

「これって、少女漫画じゃないか」

茉子のやつ。厳選したって言ってたけど自分のお気に入りをお勧めしてきたな。少女漫画は男子高校生には敷居が高すぎると思うぞ？

どうする、読んでしまうか？個室だし、部屋に来るのも柏木さんぐらいだ。茉子が勧めるぐらいだから面白いことには間違いないが……。

「せっかく貸してくれたんだしな。読まないのも悪いか」

試しにと手にとってページをめくる。

少し癖があるけど純粋に絵が上手い。

背景の描写も細かくペンが入っている。

ふむふむ……

……

……

……

……つは！

気がつくとも日が傾き始めていた。

悔しいが、面白いじゃないかこの漫画。

「それでは榎本。巫女姫様を頼んだぞ」

「よろしくお願いします、榎本さん」

「玄さんの頼みですからね。しっかりやりますよ。安春くんも安心してください」

お見舞い当日。じいちゃんと安春さんに相談したところ護衛を兼ねて古本屋の榎本さんが車を出してくれることになった。万が一に備えて朝武さんも帽子を深くかぶり伊達眼鏡をかけている。朝武さんの眼鏡姿。可愛いです。

車はワゴン車で、助手席に常陸さん、真ん中の列に朝武さんレナさん小春。後部座席には俺と廉太郎が座っている。ちなみにムラサメちゃんはお留守番を買って出てくれた。代わりに今度プリンを食べさせてくれとお願いされてしまったのだが。あれ恥ずかしいんだよね。

車が走り出したところで廉太郎が小声で話しかけてくる。

「なあ、あれって商店街の古本屋さんだよな。幸彦のバイト先の」

「そうだよ。ついでに言えば幸彦の師匠でもある」

「なるほど。だから車も出してくれるんだな。じいちゃんの舎弟なのかと思っただぜ」

「二人とも、聞こえていますよ?」

榎本さんに声をかけられビクツとする。魚海さんは最近慣れてきたけど、榎本さんと会話する機会なんてあまりなかった。こ、怖いんじゃないよね?

「残念ながら舎弟ではないですよ。昔からの腐れ縁みたいなものですかね」

「榎本さんは穂織の出身ですから玄十郎さんとも仲が良かったってお父さんから聞きました」

「ははは、巫女姫様の言う通り、確かに他の人より目をかけてもらっていましたね。玄さんはね、私たちの世代で知らない人はいないぐらい

強かったんですよ?」

榎本さんは朗らかに笑う。

「大旦那様やエノモトさん若い頃の話でありますか!ちよつと聞いてみたい気もします」

「あ、俺も聞きたいっす!」

「おじいちゃんって昔のことあんまり話してくれないもんね」

「わ、私も……聞いてみたいかも」

「俺も聞いてみたいですよ」

「ワタシもよろしいですか?」

満場一致だ。俺らの反応に榎本さんも嬉しそうに頷く。

「おやおや、頼まれてしまったら話すしかありませんね。といつても特別な話はありませんけど。私たちが中学生ぐらいの時ですかね。玄さんはね、穂織に玄十郎ありと謳うたわれるほど、畏怖いふと憧れの存在だったんですよ」

鞍馬家長男の玄十郎は穂織一の剣の達人。じいちゃんはそう言われていたらしい。規律に厳しく、弱きを助け悪しきを挫く。なんだか聞いてて恥ずかしくなるぐらい有名だったようだ。

「で、うちのバカ、ああ、魚海のことですけど、『そんなに強いなら戦わないと』と言い出しましてね。決闘を申し込んでボコボコにされました。そんなのが数十回続いた頃、玄さんが決闘の後にご飯をご馳走してくれたんですよ。元気なやつは嫌いじゃないなんて言ってる。腐れ縁はそこからですよ」

「くつ、じいちゃんのくせにカツコイイじゃんか」

「榎本さんも玄十郎さんと決闘したんですか?」

「ええ。あの頃は私も若かった」

「なんだか意外です。魚海さんなら想像できますけど」

「若気の至りですよ、巫女姫様。決して誇れることではありませんからな」

榎本さんはそれから目細めて昔を懐かしむように語った。じいちゃんと魚海さんと熊を倒した話。じいちゃんとばあちゃんの話。昔の鵜茅学院の話。幸彦の話。他にもたくさん。

寡黙で恐い人の印象があつたが、実際は気さくで話し上手な英国紳士だった。話してみるものだな。気がつけばあつという間に病院に着いていた。

「さて、病院に着きましたよ。受付を済ませてきますからみなさんはロビーで待っていてください」



「あの人が？いや違うか……。お、あの人は!?……むう、可愛いけど俺の天使じゃないな」

「もう、何キヨロキヨロしてるのさバカ兄」

「少しは自重しろよ」

「わかつてるって。あ、あの後ろ姿そうじゃないか!？」

「つて、言ってるそばからどこ行くんだよ!」

「安心しろって。さすがに病院内を走ったりしないからさ。ちよつと話しかけてすぐ戻るから」

「そういうこと言ってるんじゃないんだけど……」

ナンパ慣れしているからか行動が速い。行くと決めた瞬間に行かないやナンパなんてできないと前に言っていたが、その行動力をもつと別のところで生かしてほしい。

「おや？彼はどこに行くのですか？」

榎本さんが受付から戻って来る。事情を話すと意外にも納得したような顔をした。

「綺麗な人に声をかけるのは男の性さがですからね。しかし彼は幸彦の病室を知っていなかったはずですね」

「すいません、うちの兄が……」

「構いませんよ。私が連れて行きますから。小春さん、お手数ですが一緒に来てください。常陸さん、有地くん。大丈夫だと思いますが、巫女姫様とリヒテナウアーさんを宜しく願います」

榎本さんは小春を連れて廉太郎を探しに行った。

「たく、廉太郎の奴」

「相変わらず鞍馬くんは欲望に忠実ですね」

「私は慣れてきたですよ」

「あは、とりあえず先に幸彦の病室に行きましようか」

常陸さんに案内されたのは病院の端っこの病室だった。人通りもほとんど無い。確かにここなら穂織出身者がいても何も言われないだろう。

ドアをノックすると「どうぞ」と声がする。

中に入ると幸彦がベッドの上で出迎えた。

「みんな来てくれるなんてな。ベッドの上で申し訳ないが感謝するよ」

「幸彦こそ、無事でよかった。とつても心配したんだから」

「ご迷惑をおかけしました。あつと、芳乃様と有地は迂闊に近寄らないようにしてください。穢れがまだ完全に祓えてないので」

ホールドアップしてみせる幸彦。その両腕は包帯でぐるぐるに巻かれていた。

「それってお父さんに頼んでた包帯？」

「はい。これでゆつくり穢れを取り除いてます」

「本当にそんなんで穢れが祓えるのか？」

「多分な。前例がないからなんとも言えないけど、少なくとも巻く前よりは腕が楽になった」

大げさに腕を振り回す幸彦。常陸さんが言っていたように腕以外はほとんど完治しているらしい。

「ユキヒコ。これクラスのみんなからです」

「お、千羽鶴か。ありがたい」

「えへへ。僭越ながら私も鶴さんを折らせていただきました。改めて、あの日は助けてくれてありがとうございます」

レナさんが丁寧に頭をさげる。あの日とはもちろん崇り神と戦った日のことだろう。

「お礼を言われるほどのことじゃないよ。俺はできることをやっただけだから。それに祟り神を倒せたのは有地がいたからだしね」

「それでもです。マサオミもユキヒコもマコも、体を張って助けてくれました。あの時のマサオミとユキヒコ、かっこよかったであります！」

「あ、ああ。かっこよかったか。レナさんに言われるなんて光栄だな」
「あは、幸彦ったらどうしたんですか？鼻の下なんか伸ばして、やくらし〜」

いつの間にか幸彦の隣にいた常陸さん。ニヤニヤしながら半目で幸彦を見つめている。

「べ、別にいいだろ？褒められたら嬉しいものだ。レナさんみたいに綺麗な女性に言われたら尚更な」

「ワタシが褒めてあげても伸びないくせに……」

「ん？何か言ったか？」

「なんでもありません。幸彦には関係ないことです」

「そう言われると気になるじゃないか」

「むつつりスケベな幸彦には教えませーん」

「なっ！誰がむつつり助兵衛だ！」

この常陸さんと幸彦のやりとりを見るのも約一週間ぶりだ。ようやくいつもの日常に戻ってきたような、感慨深い気持ちになっている。

「ふふ。マコがなんだか嬉しそうです。この一週間ずっと元気がなかったので心配していましたが……。幸彦のおかげでありますね♪」

「うえ!？」

常陸さんが素っ頓狂な声を上げる。

確かにレナさんの言う通り、ここ最近の常陸さんはどことなく元気がないように見えた。ぼんやりしているような、心ここに在らずみたいな。でも今はいつも通りの常陸さんに戻っている。

「い、いやですよレナさん。ワタシの元気がなかったのは怪我のせいで芳乃様のお世話に支障が出ていたからで、決して幸彦の目が覚めな

かったのが理由では……」

「茉莉が一番心配してましたからね。幸彦が目覚めた日もですね、茉莉ったら私の部屋に飛び込んできて——」

「わーわー！芳乃様！それ以上は恥ずかしいので言わないでください！」

「どうして？ぬいぐるみを抱えながら涙ぐむ茉莉すごく可愛かつムギユ」

「ですから！それが恥ずかしいんですってば!!」

慌てて朝武さんの口をふさぐ常陸さん。

常陸さんがうろたえながら頬を紅潮させ、耳まで同じ色になっている。すごくレアな光景だった。

「とにかく……この話はなしです!」

「うう。可愛かったって言ったかっただけなのに」

話を止められシユンとする朝武さん。どうやら本人にからかう気は無かったらしい。さすが朝武さん、相変わらずの天然である。

「で、幸彦。お前はなんで紙袋を頭からかぶってるんだ?」

「……放っておいてくれないかい?今心を鎮めている最中なんだ」

「あ、そう……」

入院して頭がおかしくなったかと思った。まあ俺が幸彦の立場だったら間違いなく顔を真っ赤にさせてるだろうし、幸彦も恥ずかしいんだろう。そつとしいてあげよう。



「これは商店街の方たちからです」

「ありがとうございます楳本さん。小春ちゃんも廉太郎も、来てくれてありがとうございます。嬉しいよ」

あれから数分後、楳本さんが小春と廉太郎を連れてやってきた。どうやら白衣の天使は見つからなかったらしい。露骨にがっかりして

いた廉太郎だが、幸彦の顔を見て機嫌を取り戻したようだった。

「まじで心配したんだぞ。『幸彦と将臣が崖から転げ落ちた』って聞いた時はさすがに血の気が引いたぜ。小春なんかまじ泣きしてたんだからな」

「だ、だって！お兄ちゃんも駒川先輩も意識不明だって聞いたから……」

さすがに、『崇り神との戦いで怪我をしました！』なんて他の人に言えるわけがない。なので『山で落石にあい、俺と幸彦が朝武さんと常陸さんをかばい崖から転げ落ちた』という設定になっている。普通に死んでもおかしくない設定だが、あの幸彦を意識不明に追いやるにはこのくらいの設定でないと不審に思われるらしい。みんなの中で幸彦⇨不死身みたいになってるのかな。俺は心の中でライバルをそつと憐んだ。

「あの、これ。田心屋のプリンです」

「おお！ありがとう。そろそろ田心屋の味が恋しいと思ってたんだよ」

「いえ、喜んでくれて良かったです！」

「あの、これ。クラスの男子からです」

「焼いて捨てろ」

「ちよ！さすがに辛辣すぎるだろ!？」

小春からは田心屋のプリンが入った紙袋を嬉しそうに受け取った幸彦。逆に廉太郎には冷たい視線を送っていた。まあ、廉太郎のお見舞いの品はどうせエロ本だろう。俺も渡されたし。

だがしかし、エロ本を受け取らないなんて男としてどうなのだろうか。

「冗談だ。貰ったものは大切にしないと」

そのままみんなの死角に貰ったものを隠す幸彦。

幸彦もやはり男だった。

「それでだ、幸彦。ここからが本題なんだけどな？」

「お見舞いが本題じゃないのかよ」

「ちつちつち、わかってないな将臣。それも本題だがこつちも大変重

要なんだよ。なあ幸彦、白衣の天使について知っていることはないか？」

廉太郎はキメ顔で幸彦に尋ねた。小春は軽蔑の眼差しを、朝武さんとレナさんは苦笑いを、榎本さんと常陸さんは面白そうに笑みを浮かべている。

「白衣の天使って、柏木さんのことか？」

「知ってるのか!？」

「知ってるも何も、今の担当看護師が柏木さんだからな」

まさか本当に知っているとはい思わなかったのだろう。廉太郎が大きくガッツポーズをとる。こんな偶然もあるんだな。

幸彦はというと、何を喜んでいいのかわからない様子だったが、常陸さんがそつと耳打ちすると悪そうな笑顔を浮かべた。

あ、これは悪戯を思いついた子供の顔だ。

「そうか、廉太郎は彼女みたいなタイプが好みだったんだな。良かったら紹介するけど?」

「い、いいのか!?!是非とも頼むぜ!」

「ああ、いいとも。だけど彼女は俺から見ても素敵な女性だ。廉太郎じゃ相手にされないと思うが」

「ばっか、お前。俺だってそこそこスペックいいんだぜ?万が一があるなら当たって砕けろってな」

完全に舞い上がってやがる。廉太郎には悪いが、まだ春が来るとは思えない。だって常陸さんも幸彦もすごくいい笑顔なんだもん。

朝武さんもこの二人の笑顔には見覚えがあるらしく、小声で注意する。

「ちよつと二人とも。あんまり鞍馬君をからかわないの」

「大丈夫ですよ、芳乃様。聞けば廉太郎は、勤務中の看護師さんにナンパなんて業務妨害をしたらしいですね」

「そうですね、芳乃様。これは鞍馬君へのペナルティーです」

「それに柏木さんもこういう悪戯が昔から好きな人ですから、悪いようにはなりませんよ」

「で、でも……」

さつきまでの気まずさはどこへ行ったのやら。阿吽の呼吸で朝武さんを説き伏せにかかる二人。朝武さんが折れるのも時間の問題だった。

「——というわけですよ」

「そう言われると……反論できません。むう、うまく言いくるめられた気がします」

「あの二人に勝つのは難しいって。むしろ頑張った方だと思うよ?」

「なんだか悔しい。有地さん、次は負けませんから見ていてくださいね」

「そうそう、その意気だよ朝武さん」

ただ話の趣旨がだいぶ変わっちゃってるけどね。デイベート大会じゃないんだから。

「なあその柏木さんっていつ来るんだ?」

「そう焦らずとも、そろそろ検温の時間だしもうすぐ来るんじゃないか?」

そわそわと落ち着かない様子の廉太郎が我慢できずに幸彦へと問いかける。

と、ちょうどその時病室のドアがノックされた。

「幸彦くん、検温の時間ですよ」

「友達からでいいので俺と連絡先を交換してください!!」

まさかのどつ直球。俺はこの瞬間を一生忘れないだろう。それほどの痛い静寂が病室を包んだ。初対面でとる行動じゃないだろ。

「お兄ちゃん。私を本当の妹にする気ってない?」

「諦めろ。あれが小春のお兄ちゃんだ」

「うう、頭が痛いよ……」

今回は小春に同情せざるを得ない。

かわいそうなので頭を撫でてあげた。

「あらあら、こんなに若い子に言い寄られるなんて、私もまだ捨てたもんじゃないわね」

「……え!?!」

顔をあげた廉太郎が間の抜けた声を上げる。それもそうだろう。

目の前にいる女性は俺らよりもはるかに年上の風貌をしていたのだから。

「ゆ、幸彦？これは一体？」

「紹介するよ、廉太郎。こちら柏木悦子えつこさん。この病院の看護婦長を務めている方だ。確か玄十郎さんと同じ年で、俺の母さんも昔からお世話になってるんだ。ここいらの医療関係者で知らない人はいないんじゃないかな？白衣の天使ってあだ名まであるんだから」

「昔の話よ。昔の話。今じゃすっかりおばあちゃんになっちゃったから」

じ、じいちゃんと同じ年!?確かに俺らよりもはるかに年上だと思っただけど、それでもせいぜい60歳届くか届かないかぐらいだと思っただのに。お若い方だなく。それにきれいな人だ。若いころ三司あやせさんに似ていたと言われるのも納得してしまう。

「柏木さん。こちら玄十郎さんの孫の廉太郎です」

「玄十郎くんのお孫さん?まあ大きくなったのね。こんど玄十郎くんに会ったら自慢しなくちゃ。お孫さんに連絡先を聞かれたって♪」

「へあ?え?ええ!」

まだ理解が追いついていないのだろう。廉太郎は幸彦と柏木さんの顔を交互に見渡しながら困惑している。このことがじいちゃんに知れたら恐ろしいことになるだろうが、ショックでそこまで気が回らないのだろう。

そんな廉太郎の様子を見て幸彦はニヒルに笑い、廉太郎の肩に手を乗せる。

「ま、これに懲りたら次からはもっと慎重に、周りの迷惑も考えて行動することだな」

「は、ははは……。はは……」

廉太郎は真っ白に燃え尽きるのだった。

お見舞いを終えてみんなが穂織へと帰っていくのを見送ると、部屋はいつもの静けさを取り戻す。あれだけ賑やかだったので少しだけ寂しさを感じた。

「いいお友達ね」

「ええ。自慢の友人たちです」

これだけは胸を張って言える。彼らの前では絶対に言わないけどな。

「柏木さん。その、すいません。なんか巻き込んだりやって」

「いいのよ。若い子に言い寄られるなんてこの歳になるとなかなかないもの。むしろ若返った感じがするわ」

「あはは、柏木さんは十分お若いですよ」

「お世辞でも嬉しいわ。ありがとう。ああそうそう。そういえばまたあの女の子から預かり物があるんだけど」

「あの女の子って、茉莉のことですか？」

「そう、その茉莉ちゃんから。はい、これ」

手渡されたのは、この前と同じ袋に入った漫画だった。

「直接渡してくれればいいのに」

「女心はそういうものなのよ。私も若いころを思い出すわ。さて、私は仕事に戻るから、何かあったら呼んで頂戴」

柏木さんが病室を出ていくのを確認したのち改めて袋の中身を確認すると、あの少女漫画の続きの巻が入っていた。

「茉莉のやつ。いいところで終わったと思ったら、わざとだったな」

昨日渡された漫画はヒロインの女の子がピンチになるところで終わっていた。この後どうなってしまうのか内心悶々としていたのだ

が、布教活動の作戦だったとは。まんまと策にハマってしまったわけだ。

袋から漫画を取り出していると、漫画以外にも何か入っていることに気がつく。また何かのメモだろうか。

取り出してみると一匹の折り鶴が出てくる。丁寧に折られたその鶴の羽根には茉莉の字で何か書いてあった。

『どうか一日も早く、』

幸彦が元気になりますように』

「……………」

ほんと、不意打ちは卑怯だってあれほど言っているのに。今だけはみんなが帰っていてよかったと心から思う。

顔が熱い。頬が緩む。

こんな顔、誰にも見せられないよ。まったく。

第二十四話 「辛い時には漫画でも」

綺麗に瞬いていた星たちが姿を隠し、穂織の山々を朝日が照らす。春もそろそろ終わりに近づいてはいるものの山の朝はやはり冷える。うつすらと朝靄あさもやを纏う山の中はどこか神秘的な魅力があった。

夜と朝の間の時間。朝日を浴びた山の木々が呼吸を繰り返す、とても静かな時間だ。

木々とともに俺も深く息を吸い、肺に空気を取り込む。血液に酸素が行き渡る感覚。目を閉じて雑念を取り払い、呼吸に集中し自分の体と対話する。

「……よし」

目を開け開始するのは師匠たちに骨の髄まで叩き込まれた体術の型。一つ一つの動作を確認しながら大胆に且かつしなやかに体を動かしていく。体に違和感を感じられない。強いてあげるなら腕がまだ重く感じるが、それでも微々たるものだ。念のため包帯は取らないでおくが、これなら日常生活に支障はないだろう。

俺が退院してから二日が経った。鈍った体を鍛えなおすため、今朝は早くから山に入り体を動かす。一週間も寝ていたので相当なりハビリが必要かと思っただが、思いの外体は好調だった。姉さんたちがきつく休むように言ってくれたおかげで体が休まり超回復でも起こったようだ。

「あとは……猫丸！」

懐から猫丸を召喚するための霊符を取り出し霊力を込める。比較的低燃費な猫丸は俺の呼びかけに応え目の前に姿を現した。霊力も順調に回復しているらしい。この調子なら狛を呼び出せる日もそう遠くないだろう。

「にゃー！」

「うわっと、いきなり飛びつくなって」

「にゃ〜♪」

「あはは、心配してくれてありがとな、猫丸」

嬉しそうにすり寄ってくる猫丸を撫でてやる。茉莉たちの話では俺を助けるために猫丸が色々してくれたようだ。イレギュラーの多い猫丸だが、俺の一番信頼出来る式神でもある。今日の晩御飯は約束通りご馳走をあげないとな。

「さてと、今朝はこのくらいにしておくか。今日は用事があるから無理だけど、明日は久しぶりに遊ぼうな」

「にゃ〜!」

猫丸との遊びはもっぱら追いかけてこなのだが、茉莉からは激しすぎる追いかけてっこと言われている。確かに普通の人にはきついかもしれない。猫丸の運動能力は高く、式神なので息がきれることもない。木と木の間を飛び、野山を風のように駆け抜けるのだ。

これが結構いい特訓になる。猫丸の運動不足の改善にも繋がるし一石二鳥だ。まあ捕まえられるかは別の話だが。茉莉なら頑張れば捕まえることができるかもしれないな。ちなみに俺は今まで全敗である。

「つと、そろそろ学院に行かないと。猫丸はどうする?」

「にゃー」

猫丸は山の中へと入っていった。久しぶりの現界だし、ゆっくり散歩もいだろう。

「夕飯までには戻ってこいよー!」

俺は猫丸に声をかけその足で学院に向かうのだった。



退院して初日の登校時はみんなから心配の嵐を食らったが、二日目ともなるといつも通りの日常が訪れる。特筆することもなく一日の授業を終えた俺は一度深呼吸をして気持ちを切り替え、そのまま魚政

へと向かった。入院時言っていた話を聞くためである。

「おう、待ってたぜ。まあ上がってくれ」

「お邪魔します」

魚海さんの家に入ると既に榎本さんが座って待っていた。

「来ましたね。どうです？あれから体の方は」

「休んだおかげで絶好調ってところですかね。とはいえもう入院なんてこりごりですけど」

「今回はまあ巫女姫様や茉莉ちゃんを守るためだし仕方なかったが、次からはあんまり無茶するんじゃないぞ。ほら、退院祝いだ」

「……退院祝いがジューズ一本ですか」

「わがまま言うなら返せ」

「冗談です。ありがたくいただきますよ。……それで、そろそろ本題に入ってもいいんじゃないですか？」

退院を祝ってくれるのはありがたいが、俺が今日ここにきたのは傀儡使いについて新しく入った情報を聞くためだ。

「そう怖い顔すんな。焦らずともちゃんと話すからよ」

魚海さんが一瞬で仕事モードの顔に切り替わる。それだけ重要な話ということだ。

「今からお前に話すのは、傀儡使いと思われる男の身元についてだ」

「っ！身元が分かったんですか!?!」

「落ち着け。まだ確定したわけじゃない。容疑者とも言えない段階だ」

「思わず身を乗り出すように詰め寄ってしまった俺を魚海さんは右手を前に出し制する。」

「こいつが今掴めてるの情報だ。榎本、説明してくれ」

「ええ。まずここ数年で穂織を訪れたアストラル使いを調べたところ、十四人ほど候補を絞り込むことができました」

榎本さんは淡々と説明しているが、穂織を訪れたアストラル使いだけを探するのは決して簡単なことではない。俺一人だったら調べ上げるのに半年はかかるだろう。

「そのうちマネキンを操作できるようなアストラル能力を持った人間

はただ一人。齋賀さいが 義満よしみつ。デベロツパーで有名なあの齋賀財閥の一人息子です」

想像以上の相手に思わず息を呑む。齋賀財閥といたら都市開発や数多くのテーマパークを手がける大財閥だ。手渡された資料にも齋賀の情報が詳しく書かれていた。

「齋賀財閥はアストラル研究にも協力的でな。毎年多額の投資をしている。そして齋賀家の一人息子は品行方正で有名だ。慈善活動にも積極的に参加し、アストラル使いへの偏見をなくそうと行動してきた。正直こんなことをするような人間には思えんぐらいだ」

「ですが調べていくうちに妙なこともわかってきました。半年前を境さかいに表に姿を見せなくなつたこと。それどころか齋賀家に仕える者たちからこんな話まで出てくるようになりました。『義満様はご乱心なされた』とね」

何を持ってご乱心と言っているのかは分からないらしい。これ以上の捜査をするにはまだ証拠が足りないという。相手がアストラル研究に協力している財閥というのも慎重にならざるを得ない理由だろう。

「齋賀義満の能力は『パペット』。人形やマネキンを操るのに特化したかなり特殊な能力だ。傀儡使いもそれに似た能力だろう。偶然とは考えにくい。だがこればかりは慎重に捜査をする他に手がねえんだ」

魚海さんの言っていることは理解できる。特班も組織だ。いくらカリスマ性の高い魚海さんや榎本さんでも、引退した人間が組織を自由に動かすことはできない。今ある組織のためにも危険をおかすわけにはいかないのだ。

そう、わかっている。仕方のないことだ。むしろここまで調べてくれた特班や師匠達に感謝するべきだ。

それでも思ってしまう。もどかしいと。一度湧いてしまった感情はふつつつと湧いて出てくる。もどかしさはやがて苛立ちとなって俺の心を揺さぶってきた。

俺は感情をこらえながら魚海さんたちに話しかける。

「……わかりました。これだけの情報を短期間で集めるなんて、流石の特班ですね。あとは——」

「あとは俺がなんとかします。なんてバカなことは言いつこなしだぜ」

「——!?!」

「へっ、なに驚いた顔してんだよ。何年お前の面倒見てると思ってんだ」

魚海のおやしさんが腕を組みながら呆れた顔を向ける。

「お前が巫女姫様や茉莉ちゃんのことを大切に思っていることはよく知ってる。でもな、だからって全部背負い込むなんざ最善策なわけがねえ。少し落ち着け」

俺の気持ちを知ってかしらさるか、おやしさんはいたって冷静に語りかける。その姿を見て俺の心から湧き出た黒い感情が、体だけでなく思考にまで靄のように広がっていく。

「落ち着け、ですって? 落ち着いてなんかいられるわけないじゃないですか!?! 十二年前、なにがあったのかおやしさんたちも知っていますでしょう?」

愚かな人間は何がきつかけで牙を剥くかわからないのだ。

十二年前のあの事件だって、『穂織の山には財宝が隠されている』なんて馬鹿げた噂を信じる輩がいたから起こったんだ。人は欲望を前にすると正常でいらなくなる。

そんな愚か者のせいで芳乃様や茉莉の日常が壊される可能性があるんだ。考えるだけで腸が煮えくり返る。

「可能性があるなら一刻も早く取り払うべきだ。跡形もなく。たとえばこの手を汚すことになっても……」

「幸彦っ!!」

「!?!」

喝を入れるような大声にハッと我に返る。同時に自分の口からでた言葉に戸惑う。俺は今、誤魔化すことのできないほど黒い感情、殺意を抱いていた。

「俺がお前に教えたこと、覚えてるか？たとえ誰かを守るために拳を振るおうが、そいつは正義なんかじゃない。暴力は暴力だ。相手がどんなクズだろうが正当化なんか出来やしないってな。ましてやその拳を私怨だけで振るうなんざ絶対にあつちやならねえ。そいつは正義でもねえ、悪でもねえ。クズ以下の最低の奴に成り下がつちまう。俺の弟子をそんな奴にするわけにはいかねえよ」

「……………」

「わかっていると思いますが、巫女姫様を狙われて腸が煮えくり返っているのはあなただけではないのですよ。今回の件、私も魚海もこんなところで終わらせるつもりは毛頭ありません。それに特班も本腰を入れて捜査する必要があると判断したようです。時間はかかるかもしれませんが、必ず尻尾をつかんで見せますよ」

「そういうことだ。お前は一人じゃない。もう少し俺たち大人を信じちやくれないか？」

尊敬する師匠達がここまで言ってくれているのだ。こんなにありがたいことはない。

わかっている。わかっているんだ。俺の周りには俺にはもったいないぐらい頼りになる大人たちがいるんだって。

「……………すいませんでした」

感謝の言葉も反論も胸のモヤモヤに飲み込まれてしまう。結局俺の口から絞り出した言葉は謝罪の言葉だけだった。



帰り道。

魚政から直接家に帰ることもできたのだが、どうにもそういう気分にはならなかった。気分が晴れないとき、その気晴らしの方法は人それぞれだ。俺の場合、適当になにも考えず、ただブラブラと歩き回ることにしている。

俺はやはり焦っていたのだろうか。

何に對して？決まってる。自分自身の不甲斐なさにだ。自分を律することすらままならない。黒い感情に吞まれるなんて、茉莉や芳乃様を傷つけたあいつらと何にも変わらない。こんなんじや有地に勝てるわけがない。

「かつこ悪いよな、俺」

休憩がてら公園のベンチに腰をかけ一人愚痴る。入院のせいで独り言の癖がついているのかもしれない。

「なんて、こんなんじやまた茉莉に注意されちゃうよな」

あの幼馴染は変なところで鋭いから。俺がいくらポーカークフェイスでいようが必ず気づいてしまう。最近慰められてばかりだったし、俺も反省しているのだ。

「傀儡使いのことは師匠たちがなんとかしてくれらんだし、これはむしろありがたい状況なんだ。俺には俺にできることを精一杯やるしかない。よし！」

自己暗示じみた言葉を口に出し気持ちを前向きに持って行く。うん。ポジティブな言葉を口にするだけで元気が少しだけ湧いた……気がする。

「なに独り言言ってるんですか？」

「……いつからそこにいた？」

「かつこ悪いよな、俺」

「もうわかったから、忘れてくれ」

気がつけば茉莉がニヤニヤしながら俺の顔を覗き込んでいた。今一番顔を見せたくない人物に一番最初に出会ってしまったわけだ。それにしたってタイミングが良すぎるだろう。リーダーでもついでるんじやないだろうか。

「なーんか暗い顔してたから話しかけようと思ったんだけど、その調子なら大丈夫そうですね。偉い偉い」

「あ、頭を撫でるんじやない！子供じやないんだから」

「あは、照れてる♪」

「当たり前だ！」

まったく、心臓に悪い。高校生にもなつて女の子に頭を撫でてもらうなんて。そういうのはこう……男からしてあげるのが普通だろう。「それで、こんな時間に珍しいじゃないか。いつもなら夕飯の準備の時間だろう?」

大きく咳払いをして話題を変える。じゃないと永遠にいじられるような気がした。

俺の質問に菜子は決まり悪そうに頭をかいて笑った。

「あは、じつは芳乃様に『今日は私がご飯作るから菜子は休んで』と言われまして……。せつかなので有地さんと買い物に行つてもらつて、ワタシはその様子をこっそり覗き、じゃなかった。陰で警護していたんです」

「本音が漏れてるぞ?」

「初々しいお二人は見ていて飽きませんでした♪」
「本音を隠せ」

芳乃様の従者が聞いて呆れるよ。

……いやまあ俺も見てみたいと思つたけども。

「幸彦こそどうしたんですか?こんなところで一人なんて。確か魚海さんのところに用があるつて言つてたよね」

「え?あー、まあな。用事が早めに終わつたから散歩でもしてのんびりしようかなーつて」

思わず目を逸らしながら適当に話を濁す。傀儡使用のことは菜子も知っているので話してもいいのだけれど、なんとなく憚はばられた。

菜子は俺をじつと見つめたかと思うと「そつか」と俯きがちに微笑んだ。

「……ねえ幸彦。この後時間ある?」

「この後か?特に予定はないけど」

「だったら、約束守つてもらおうかな」

「約束?」

「うん。ハーゲンビッツ買ってもらう約束」

「ああ、あれか」

お見舞いの時貸してもらつた漫画のお礼。漫画が面白くてすつか

り忘れていた。

「別にいいけど、今手持ちがな……。入院でバイト出れなかつたし」
「仕方ないですね。パプコで許してあげます。それなら二人でシェアもできるもんね」

「まあ茉莉がそれでいいなら」

「そうと決まれば早速買いに行きましょう！」

「あ、ちよつと！引つ張るなつて！」

半ば強引にコンビニに連れて行かれてパプコのチョココーヒー味を購入。茉莉は宣言通り半分を俺にくれた。

「——それでバンパイアのルークが結衣を庇うシーンなんてすごくキュンとしちゃつて！」

「確かに。あそこはルークが初めてデレた場面でもあつたし面白かつたな」

「わかつてくれますか!?!」

「あ、ああ。だけどちよつと落ち着こうな」

そのまま帰るのも勿体無い気がしたので公園に戻つた俺たちは、パプコ片手に茉莉に貸してもらつた少女漫画の話で盛り上がつていた。特に茉莉が。

「あ、ああ。ごめんね。誰かと漫画の話題で盛り上がるなんて久しぶりだったので」

「芳乃様にも進めればいいじゃないか。こんなに面白いんだし」

「芳乃様には今探偵モノの一押しを貸しているのです」

「……あんまり変な影響与えてないよな？」

「……おそらく」

芳乃様はあれですごくのめり込みやすいタイプだから少し心配だ。嬉々として聞き込みをする芳乃様の姿が容易に想像できた。

「まあ、芳乃様は大丈夫だと信じて。印象深いシーンといえればあそこもだな。伯爵に操られた結衣をルークが助けるところ」

「おお！さすが幸彦、わかつてますね。操られた結衣に刺されながら

も強く抱きしめ、そこで――」

「『嫌ならよけろ』」

示し合わせたかのように声が重なる。ルークが結衣に口付けするときに放ったセリフである。

「あれがファーストキスなんて……どれだけ私たちをキュンとさせれば気が済むんですかね、ルークは」

「キザったらしい言葉も、ルークが言うとしつくりくるんだよな。実に興味深い」

「どこに興味を持ってるんですか」

呆れた顔の茉莉。そんなに変わらうか？キザな言葉ほど自然に言うのは難しいモノだ。今度榎本さんにも漫画を見せてじっくり語り合いたい。

「それにしても、こういうセリフって容姿が整った生き物しか受け入れられないよな。俺なんか言っても寒気がするだけに思えてならないんだよ」

「わかってませんねー幸彦は。こういうのは好きな人に言われるからこそキュンと来るものなんですよ」

「そういうものか？」

「そういうものなんです。乙女心は複雑なんですから」

まあ茉莉が言うのだからそうなのだろう。男の俺にはまったく理解できないものだが。

「ワタシ思うんです。このルークって幸彦に似てるなーって」

「……俺こんなに無愛想なのか？」

「そうじゃなくって、性格の話。つんけんしてるのに優しいところとか、意外に子供っぽいところとか」

それは喜んでいいのだろうか？もつとカツコイイところが似てる！と言われた方が嬉しいのだけど……。

「それから、なんでも背負い込んで一人で解決しようとするところとか」

「……………」

思わず茉莉子の方に目を向けると、まっすぐこちらを見つめる茉莉子と目が合ってしまう。吸い込まれてしまいそうなほど真っ直ぐな眼差しから目を逸らすことはできなかった。

「何を隠してるか知らないけど、ワタシはいつだって幸彦の力になりたいって思ってますから」

そう言って優しく微笑む茉莉子。

そうだ、俺はこの笑顔にいつも救われてる。

だから俺はこの笑顔を守りたい。

俺は努めて小さく笑う。

「そういう茉莉子も結衣にそっくりだけだな」

「え！本当ですか!？」

「ああ、お節介なところとか、意外にいたずら好きのところとか」「む、そう言われるとあんまり嬉しくない」

優しく笑顔が素敵なところとか。……は言わないでおこう。別に恥ずかしいとは思っていない。

「なるほどのう。つまり茉莉子も幸彦もお似合い同士ということだな」

「ええ、そういうことに……ってムラサメ様!？」

「どどどどうしてここに!？」

いかにも「面白いものを発見した!」と言わんばかりに満面の笑みを浮かべるムラサメ様が俺たちの背後から顔を出す。

「いやなに、ご主人と芳乃が揃って買い物に出かけると聞いてな。こっさり覗き……いや、陰で見守っていたのだがな」

俺の記憶が正しいなら先ほど同じことを聞いた気がするのだが？
出歯亀でばかめは一人ではなかったらしい。ちらりと茉莉子の方を伺うが、顔を真っ赤にした茉莉子はそれどころではないみたいだ。

「そしたらたまたま二人を見かけてな。ほれ、吾輩は隠れておるからチュツチュしても構わんだぞ?」

「い、いえーこれはそういうことではなくて!」

「なにが違うのだ？話を聞くにその『るーく』と『ゆい』は書物の中では恋人同士のだろう？それならその二人に似ている菜子と幸彦の相性もバッチリ！なのではないのか」

「そ、それはそうかもしれないませんが！そうではなくてええだからその~~~~~！——っ！」

恥ずかしさが限界を超えたのだろう。

次の瞬間には菜子がいたはずの場所に丸太が転がっていた。

しまった！逃げ遅れた！お、俺を置いていかないでくれ！

「わっはっはっは。ご主人や芳乃もそうだが、菜子や幸彦もなかなか面白い反応をするな！」

「……かんべんしてください」

愉快に笑うムラサメ様を前に肩を落とす。

ああ、これであと一週間はからかわれるんだろうな。確定した未来に、俺は盛大にため息をつくのだった。



日が傾き始めたこの時間。夕飯の買い物をする主婦や宿へと戻る前に食べ歩きをする観光客で商店街が賑わう。混雑とまではいかないが穂織にしては人が多くなる時間帯でもある。

その中を俺と菜子は並んで歩いていった。

「とんだ災難だったな」

「ワタシ、今度からは芳乃様をからかうのもほどほどにしようと思う」

ムラサメ様がいい反面教師になってくれたのだろう。菜子の頬はまだほんのりと朱に染まっていた。

「はあ、芳乃様の家に向かう足がこんなに重いなんて」

「俺も一緒に行くんだからしっかりしろって」

「……なんで幸彦は平気そうなんですか？」

「何でって、隣であたふたされると逆に落ち着いてしまうあの現象のせいじゃないか？」

「むうう、なんだか負けた気分です」

もちろん嘘である。本当はめちやくちや恥ずかしい。ポーカーフェイスでなんとか凌いでいるけれど。とりあえず帰るまでは我慢できそうだ。

しかし意外だ。暗い気持ちを隠そうとしてもバレるのに、こういうポーカーフェイスは見破られないんだな。

「とにかく！ワタシがさつき言いたかったのは、なんでも一人で抱え込まないでってことです！わかった？」

悔しそうに唸っていた茉莉は一変、俺の方を振り向くとグイッと顔を近づけ人差し指を俺の胸に当てる。身長差からか若干の上目遣いだ。思わず仰け反ってしまった俺は観念するように両手を挙げた。

「わ、わかった。今日の帰りにでも話すよ。それでいいかい？」

「約束ですからね」

満足げな表情を浮かべた茉莉はそのまま後ろを振り返り歩いていく。なんだかうまく乗せられた気がしないでもないが、そもそも俺が茉莉に素直に話さなかったのがすべての始まりである。反省してまず、はい。

気持ちを切り替え茉莉の後を追いかけてしようとした、その時だった。

『お前は一生、黒い感情からは逃れられない。俺と同じさ』

「っ!？」

知らない男がすれ違いざまにかけた言葉。同時に感じる背筋が凍るようなゾツとする感覚。俺は思わず振り向いた。しかし……。

「……いない」

ほんのわずか目を離したただけなのに、男の姿は人混みに消えてしまった。

「幸彦？どうかしましたか？」

「いや、なんでもない」

あの感覚はただならない。危険だ。普段なら相手の顔が確認できるまで警戒を解くことはないだろう。それなのに今は、何故か追いかけようとは思えなかった。

「なら芳乃様の家に急ぎましょう。早くしないとお二人のほうがワタシ達より先に家に帰ってしまいます」

「ああ、そうだな。早く行こう」

不審に思ったのは一瞬だ。自分の行動に違和感を覚えながらも、俺はその場を離れる。見ず知らずの男の言葉はねつとりと俺に纏わりつき、いつまでたつても耳から離れることはなかった。

人も獣も木々さえも眠りにつく丑三つ時。穂織の山を一人の男が歩いていた。街灯などある訳もなく、星の明かりだけが山を照らすのみで辺りは真っ暗である。それなのに男はまるで見えているかのようには迷いなく山道を進む。

どこか嬉しそうに笑みを浮かべ歩く男の前に一輪の杜若かきつばたが咲いていた。暗い山の中でもその姿は凜として美しく思わず見とれてしまうほどだ。

「ほう、美しい花だ」

男もその存在に気がついたのだろう。迷いのなかった足を止め、ゆっくり花に近寄ると、次の瞬間には思いつきり杜若を踏みつけた。

一度や二度ではない。何度も何度も男は杜若を踏みつける。何度も何度も何度も何度も、男は一心不乱に踏みつけた。

「はあ、はあ、悪く思わないでくれよお。お前が綺麗すぎるのが悪いんだ」

男は花だったものにねつとりと囁きかける。

跡形もなくなるまで徹底的に踏み続けた男の表情は愉悦で満ちていた。

「ケヒヒツ!! 嗚呼! 楽しいねえ! 楽しいねえ!! 体が疼いて疼いて我慢できねえよ!! つと、汚い言葉が出てしまった」

大声で笑ったかと思えば、感情のない能面のような顔に早変わり。常人が彼のことを見たら気が狂った男にしか思えないだろう。

「父上、母上、そして弟よ。見ているか? 俺は今幸せだ。なんだって――」

男はその目でギョロリと空を見上げる。

「この手で再び、貴様らに復讐する機会が与えられたのだからな」

男、幻術使いは頬を釣り上げ狂った笑みをその顔に浮かべる。その瞳に光はなく、暗く深い闇が幾重にも重なったかのようなだった。

「朝武芳乃、有地将臣、叢雨丸の守護者の小娘、それに常陸菜子と駒川幸彦。じっくりじっくり楽しませてもらおうぞ。ケヒツ、ケヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ!!」

男の笑い声が闇夜に包まれた穂織の山に響き渡る。

絡みつくように、ねつとりと。

第二十五話 「加速する齒車」

朝日が差し込む穂織の山。

その山の中で大きな山犬と青年が向かい合っていた。

鋭い双眼で睨みつける山犬に、青年は必死に語りかける。

「狛、少しだけでもいい。話を聞いてくれ」

『貴様と話すことなどないと言っている。祟り神を私に喰わせてくれるのなら話は別だが』

「それは……できない」

『ならばこれ以上の会話は無意味というものだ。徒労に付き合う義理はない』

「待ってくれ！君の力になりたいのは本当なんだ。話し合えば、祟り神を喰らう以外にも君を取り戻す術が見つかるかもしれない」

『自惚れるなよ人間。身の程を知れと言ったはずだ。』

地響きのように重く突き放すような声に青年は息を呑む。

『いたちぐつこがしたいなら独りでやれ。次くだらないことで呼び出したらその首を食いちぎる』

「あ、狛！まだ話は終わって——」

青年が呼び止める前に山犬は姿を消し、一枚の霊符だけがその場に残った。

「だああ！もう！狛のわからず屋——！！」

普段の青年からは想像もできないような叫び声が穂織の山に木霊する。斯くして今日も、青年《幸彦》の一日が始まるのだった。

「はああああ」

「朝っぱらから盛大なため息とは、どうやら難航しているようだね」

「そうなんだよ。あんなに拒絶されたら意思疎通も難しすぎる……」

俺が退院してから3週間が経った。狛を呼べるほどにまで回復した俺は、ほぼ毎日、狛と会話を試みているのだが……。

「契約主に対して首を食いちぎるはないだろ……。怖すぎるって」

まさしく連戦連敗。俺の言葉に耳を傾けることなく話を打ち切られてしまう。式神に逆らわれるなんて、陰陽師の末裔が聞いて呆れる。思わずため息が溢れ出る。

「狛が本当に犬神の生まれ変わりなのだとしたら当然の反応なんじゃないかな？ 伝承が正しいなら犬神は人間に対して相当な憎しみを持っているはずだから」

「それはそうなんだけど。でもあいつ自身は犬神だった頃の記憶や感情をなくしたって言ってたし。今まで話してみte思ったんだけど、なんだか言動と行動がちぐはぐってというか、違和感があるんだよなあ」
その違和感がなんなのかはわからない。

でもなにか引つかかるものがある。

「ああもうーさっぱりわからん！」

「まあ落ち着きなさい。ほら、コーヒー」

「ありがとう、姉さん」

姉さんに渡されたコーヒーは珍しく俺好みの甘さになっていた。普段は体に悪いから砂糖の量を制限されているのだが、今日は特別なのだろう。姉さんの心遣いがあった。ありがとうがたかった。

「ところで欠片の方はどうなったのかな？ あれから進展はあったの？」

「一応少しずつ回収していつてるよ。今日も朝から欠片を探しに山へ行くって朝稽古の時に有地が言ってたから」

呪詛を解くカギになるかもしれない欠片。その欠片も今では手のひらサイズにまで大きくなっている。ムラサメ様が毎日山に入り欠片を探し、有地たちが回収する。地道だが、確実に成果は出ていた。

「時間はかかるかもしれないけど、ちゃんと前には進めてる。さすが

は有地つてところかな」

俺をライバルだと言ってくれた彼は俺のはるか先を進んでいる。それなのに俺はこの体たらく。悔しさを飲み込もうとコーヒーに口をつけた時だった。

「——ッ!?!」

ガシャン

鋭い刃物で切りつけられたような鋭い痛みが両腕に走り思わずカップを落としてしまった。今までに感じたことのない痛みに困惑する。

「幸彦!?大丈夫?」

「あ、ああ。大丈夫。ちよつと狛を呼び出すのに力を使いすぎたみたいだ」

慌てて駆け寄ってきた姉さんを安心させるため、咄嗟に誤魔化す。割れてしまったカップを拾いながら姉さんに気づかれない程度に腕の調子を確認するが、特に違和感は感じられなかった。包帯のおかげで穢れも順調に払えているはず。

それでは、今の痛みはいったい何だったのだろうか。

自身の体に起きた異変に多少の疑問を抱きながらも、とりあえずは目の前の割れたカップを掃除することにする。

ああ、お気に入りのカップだったのに……。狛には威嚇されるしカップは落とすし、今朝はとことんついていない様だ。

「今日のお昼はスタミナのつくものにしませう!」

そう宣言してお昼のお弁当作りを始めた常陸さん。台所からは美味しそうな匂いが漂ってきている。

「なんだかいつも以上に気合が入ってない?」

「おそらくご主人たちが心配なのだろう。今日の祟り神退治に菜子は参加できないからな」

「もう、菜子は心配しすぎなんです」

そう言いながらもどこか嬉しそうな朝武さんの頭には白い獣の耳がぴよこりと生えていた。

今朝方朝稽古を終えた俺は、ムラサメちゃんが見つけたという欠片を回収するために朝武さんや常陸さんと一緒に山に入った。

無事に欠片は回収できたが、帰り際、朝武さんの頭に祟り神出現の合図でもある獣の耳が生えてしまったのだ。

常陸さんはまだ怪我が治りきっていないため祟り神退治に参加できない。みづはさんからキツクドクターストップをかけられているらしい。本人曰く大丈夫らしいが、以前みづはさんの言いつけを破つて無理をしたらしく逆らえないと言っていた。まあみづはさんが許しても幸彦が許さないと思うけど……。

なので今日は俺と朝武さんだけで祟り神を祓わなければならない。

「ところで、ご主人は何も変わりないか？先ほどは何かと呼ばれている気がすると言っておったが」

「ああ、うん。なんとなく気にはなるけど、体に異常があるわけでもないし大丈夫」

「ならいいが。でも気をつけるのだぞ。ご主人が呼ばれたと感じたすぐ後に芳乃の頭にあの耳が生えたのだ。何かしら関係があるかもしれない」

ムラサメちゃんが言うように、欠片を拾った後にほんの一瞬感じた言葉では表しづらい感覚。呼ばれているが一番しつくりくるのでその説明しているが、もちろん誰に呼ばれているかはわからない。一度幸彦に相談したほうがいいだろうか。

「菜子くん、僕も手伝おうか？」

「お父さんがいたら菜子の邪魔になるかもでしょ？私が菜子を手伝うから、お父さんは早くお仕事の準備をすること」

「ええ!?芳乃が料理のお手伝い!?!」

「お父さん？その反応はなに？」

「いやあ娘の成長が嬉しくて、つい驚いちやってね。卵を電子レンジで爆発させていたあの芳乃が、今では立派に料理の手伝いができるなんて」

「いつの話をしてるんですか!!？」

顔を真っ赤にしている朝武さん。俺的には可愛らしい朝武さんの昔話を聞けてラッキーだが、本人にしたら恥ずかしい話を暴露されたようなものだし当然の反応か。安春さんはそんな朝武さんを見て嬉しそうだ。

「お二人とも。楽しそうなところ申し訳有りませんが、台所ではしゃぐのは大変危険なのでやめてくださいね」

「すみません……」

で、でた！常陸さんの黒いオーラ！笑顔なのが怖さを助長してる気がする。朝武さんも安春さんもしゅんとして謝っている。その姿はまるで台所仕事をしているお母さんにちよっかいを出して叱られる父と娘のようだった。



……ダメだ。全然集中できない。

教卓で先生が話している内容が右から左へと流れていく。朝からずつとこんな調子だ。授業にまったく身が入らない。机に広げたノートは真っ白なまま、俺の視線は黒板ではなく窓から覗く穂織の山々に吸い寄せられていった。

「おい将臣」

「廉太郎、授業中に話しかけるのはまずいだろ」

「ばーか、とっくに放課後だっつうの」

「へ!？」

周りを見渡すと各々が帰り支度をしている。もう教室にいない生

徒もちらほら。思った以上に上の空だったようだ。まさか帰りのホームルームに気づかないとは。

「ったく、ボーツとしてないで早く帰る準備しろよ」

「もしかして待っててくれたのか？」

「なに言ってるんだよ。今日は俺も厨房の手伝いがあるから一緒にじいちゃん家に行こうぜって昼飯ん時に話してただろ」

「あー……」

そういえばそんな話をしていたような、ないような。正直な話昼休みも心ここに在らずだったので記憶が曖昧だ。廉太郎に申し訳ない気持ち湧く。

「悪い、すぐ支度するから」

「おう。しかし随分と上の空だったな。今回約束してたのが俺だから良かったけど、これが巫女姫様だったらお前どうすんだよ。もつとしっかりしないとあの鬼彦にこっぴどく叱られるぞ？」

「確かに、芳乃様が待たされるなんてことがあれば小一時間は説教するだろうな」

「どわあッ!いい、いきなり背後から現れるのは心臓に悪いだろ!」

いつもの如く気配を消した幸彦が廉太郎の背後から姿を現した。

「すまない。癖だ」

「なんだよ、癖なら仕方ない……ってなおさらタチが悪いわ!」

「あはは……それで幸彦、俺に何か用か？」

「ああ、ちよつと有地に聞いておきたいことがあったんだ。その前に、廉太郎。さつき俺のこと鬼彦って言ったかい？」

幸彦はニコつと笑いかける。一見爽やかな笑顔だが、黒いオーラが溢れ出ている。

「怖い!怖いよ!常陸さんもだけどそのオーラってどうやって出してるの!？」

「ソナナコトイッテナイゾ」

下手くそか!?! 自白してるようなもんだぞ!?!

廉太郎は額から汗をダラダラと流し目が泳いでいる。そんな廉太郎に幸彦は「そうか」と頷き教室の窓側まで移動すると、おもむろに

窓を開いた。

「猫丸、いるか?」

幸彦の呼びかけに猫丸が窓の外から姿を現した。幸彦は懐から紙を一枚取り出し猫丸の前足にくくりつける。

「これを玄十郎さんのところまで持って行くんだ。頼んだよ」

「にやー」

そのまま走り去る猫丸。猫丸が見えなくなったところで俺は幸彦に問いかける。

「なあ、猫丸に何を持って行かせたんだ?」

「どこかの誰かさんが病院で柏木さんに行った行為を綴った密告文」

「だあああ!待ってくれえ!猫丸うう!!」

廉太郎は血相を変えて教室を飛び出し、ものすごい速さで猫丸を追いかけて行った。

「ちよつとやりすぎじゃないか?」

「安心しろ、ブラフだ。廉太郎がここにいたら話せない内容だったからな」

と言いつつちよつとだけスッキリしたような顔をしている。きつと鬼彦呼びが気に入らなかつたのは本心なんだろう。今後鬼彦呼びはやめよう。廉太郎の二の舞はごめんだ。俺は密かに胸に誓ったのだった。



話を誰かに聞かれないよう教室を出た俺たちは、学院の裏手にある自動販売機前のベンチに移動した。昼休みは飲み物を買ってくる生徒で賑わうこの場所も放課後になるとほとんど人通りはなくなる。

俺は幸彦に今朝の出来事や俺が感じた誰かに呼ばれるような感覚について相談した。幸彦は俺の話に真剣に耳を傾けている。

「なるほど、どおりで授業中も山を見ていたわけだ」

「あー……気付いてた?」

「うまく誤魔化そうとはしていたけど、あれじゃあ俺や茉莉は騙せないぞ。まあ芳乃様は気づいていないようだったけど」

さすがは忍者と医者の子息といったところだろうか。彼らの観察眼にかかれば隠し事なんかすぐにはれてしまう。

「茉莉なんか『何か大きな危険を感じてるんじゃないか』って心配してたんだからな」

「うう、余計な心配をおかけしてしまったようで……あとで常陸さんに謝らないと。そういえば朝武さんや常陸さんは?」

「芳乃様は念のため保健室で姉さんに診察してもらってる。茉莉はその付き添いだ。その間に俺が君に話を聞きに来たってわけさ。この話も芳乃様が有地に伝えたって言ってたけど、どうやら聞いてなかったようだな」

「……面目ない」

廉太郎だけじゃなく朝武さんの話まで覚えてなかったとは。罪悪感がすごい。

幸彦はやれやれと息を吐くと、真剣な表情に切り替える。

「話を戻すが、誰かに呼ばれた感覚がしたと言っていたね。今日は一日中そんな感覚なのか?」

「いや、今朝の一瞬だけだったけど、それが無性に気になって」「ふむ」

幸彦は顎に手を当て考え込む。そして自分自身を確認するように言葉を紡いでいった。

「考えられるとするなら、有地が叢雨丸の使用者だからか、それとも有地自身が憑代と何かしらの縁えにしを結んでいるか」

「縁?」

「そうだ。繋がりと言えばわかりやすいか?」

「繋がりが?俺と憑代に?」

頭をフル回転して考えるが、俺と憑代の繋がりがなんて思い浮かばないし覚えがない。

「縁というのは必ずしも実感できるものじゃない。自分の身に覚えがないような小さな関わりでも縁にかわりない。袖振り合うのも他生の縁という言葉があるようにそれが前世からの魂の繋がりであるかもしれない」

「そんなの、確かめようがないじゃんか」

前世の繋がりがりなどわかるはずがない。そもそも前世があつたのかさえわからないのだ。俺の当たり前の反応に幸彦は冷静に頷く。

「その通り。でも可能性としては否定できない。……少し大きさに話したが、君は小さいころ穂織によく来ていた。覚えていないだけで憑代の欠片となにか接点を持ったのかもしれない。まあどちらにせよ推測の域を超えることは難しいから今は深く考えなくてもいいだろう。問題は、何故今になって呼ばれるような感覚がするようになったかだが……」

幸彦はそのまま俺のポケットを指差す。そこには念のため持ち歩いている憑代の欠片が入っている。

「憑代を集めることによって、憑代自体の力が強くなっているのかもしれない。今回有地が感じた誰かに呼ばれるような感覚に関して言えば特別危険はないだろう。でももしこの先憑代の力が強まりすぎて私生活にまで影響がある場合は、なにか対策を考えたい方がいいかもしれない」

そこまで言い終わると早速対策について考え始める幸彦。全く頼りになる奴だよ、ほんと。

「……どうした？ なにか案でも思いついたかい？」

「いや、幸彦ってすげーなって思ってたさ」

「すごい、か。……それは光栄だね」

幸彦は照れたように笑った。一瞬表情に陰りが見えた気がしたが、気のせいだろう。幸彦は「さて」と話に区切りをつけると、腰掛けていたベンチから立ち上がり、飲み終わった缶コーヒーの空き缶をゴミ箱に捨てる。

「憑代についてはあとでムラサメ様や安春様に相談してみるよ。引き止めて悪かったね」

「そんなことないって。むしろ相談にのってもらって幾分か気持ち楽になった。サンキューな」

「それなら良かった。今日は茉莉がついていけないから。芳乃様を頼んだよ」

「おう！」

自分自身に対しての鼓舞も兼ねて右手を上げて力強く返事をする。それを見た幸彦は満足そうに頷くと保健室のほうへ歩いて行く。朝武さんを迎えに行くのだろう。俺もじいちゃんのところに向かわねば。

俺が踵を返したときだった。幸彦が「そうだ」と何かを思い出したように声をあげる。こちらを振り返ることなく幸彦は俺に問いかけた。

「最後に一つだけ。今朝誰かに呼ばれた感覚がしたとき痛みは感じたかい？ ナイフで切られるような鋭い痛み」

「え？ 痛みは何も感じなかったけど」

「そうか……いや、なんでもない。じゃあまたあとでな」

表情こそ確認できなかったが、幸彦の言葉に彼の感じている不安のようなものを感じた。もしかしたらまた何か厄介ごとを一人で抱えているのかもしれない。

「俺が聞いても、教えてくれないんだろうなあ。……はやく幸彦に頼られるような男になればいいけど。まずは今日の祟り神退治だ。うん」

特別気負うわけではないが、自然に拳に力が入る。山が気にならなくなつたわけじゃないけど、集中できないほどじゃなくなった。あとは稽古の素振りで心を落ち着かせればいつも通りの自分を取り戻せるだろう。

「おや？ マサオミではありませんか」

学院を出たところで偶然レナさんと遭遇する。

「レナさん？ 珍しいね、こんな時間にまだ学院にいるなんて」

「今日はたまたまです。ミヅハさんにお薬をもらいに保健室によつて

いたので」

「薬?どこか具合が悪いの?」

そう言われてみれば、少し顔色が悪い気がする。

「大したことじゃないですよ。ただ、今日は朝から少し頭痛がしてまして。日本にきてからたまに痛くなる時があったのですが、慣れない環境で無理は禁物とミツハさんに注意されちゃいました」

「レナさんは働きの者だから。ちゃんと休んだほうがいいよ」

「ふふ、心配してくれてありがとうございますよ、マサオミ。女将にも今日と明日はゆつくり休んでいいと言ってもらえたので大人しくしていようと思います」

レナさんはぼつが悪そうに笑ったあと、「ところで」と周りを気にしながら小声で話を続けた。

「ヨシノの頭にケモミミが付いていましたが、今日も、その……タタミ神と戦うのですか?」

相変わらず絶妙に間違えてくるレナさん。きっと祟り神のことだろう。『畳』のことを『祟り』って言い間違えてたのが懐かしい。

「うん、そうだよ。放っておくと強くなっちゃうみたいだし、欠片も集めなきゃいけないしね」

「欠片でありますか?」

「あれ?朝武さんやムラサメちゃんから聞かなかった?」

「タタミ神や呪いについては聞きましたか……」

どうやら朝武さんたちは欠片の説明までしなかったらしい。まあ確かに、診療所で祟り神と戦った時点では欠片が呪詛を解く重要な手掛かりだと確信はなかったはずだし省いたのだろう。ただでさえレナさんはシヨツキングな内容を一気に知ってしまったのだから。

「あの、マサオミ。よければ私にも欠片について教えてくれませんか?私に何が出来るかわかりませんが……友達の、ヨシノのために何かできることがあるのなら協力したいんです!」

レナさんがグイツと顔を近づけ訴えかける。

近い可愛い匂い、という男子高校生の劣情さえも引つ込んでしまうほど、レナさんはまっすぐ俺の目を見つめてくる。

俺こういうのに弱いんだよ……。

俺はレナさんを危険に巻き込まない程度に欠片について説明した。「で、これがその憑代。欠片を集めて憑代を元通りにして犬神の魂を慰撫すれば呪いが解けるんじゃないかって、俺たちは考えてるんだ」「これが、憑代……」

レナさんはじつと憑代を観察する。

「他の欠片もこのくらい大きいのでありますか？」

「ううん、もつと小さかったよ。5センチもなかったぐらいかな」

「ムムムム……」

レナさんは必死に何かを思い出そうと唸る。

「この欠片、どこかで見たように気がするのですが……」

「本当!？」

「ハイ。ただ、私はどこで見たのでしょうか？」

「いや俺に聞かれても……」

「ムムムムムム……!」

レナさんはますます唸って思い出そうとするも出てきそうになかった。

「レ、レナさん。無理に思い出さなくていいって。もしかしたら勘違いかもしれないし、頭痛だっしてしてるんでしょ?」

「うう、申し訳ありません。ですが!何かわかればすぐに報告しますので!」

「うん。その気持ちだけでありがたいよ」

レナさんを見ると、心から朝武さんのことを心配しているのだとわかる。朝武さんにこんな素敵な友達がいると思うだけで俺まで嬉しくなるのだから不思議だ。

「そうだ。俺もじいちゃん所に寄らなきゃだから、よかったら一緒に帰らない?」

「オオ!モチのロンでありますよ♪」

俺はレナさんと一緒に志那都荘へと向かう。この後幸彦に騙されて先に志那都荘にいた廉太郎がレナさんと一緒に帰った事実を知り血の涙を流すが、それはまた別の話。

みなさん、こんにちは。常陸菜子です。

突然ですが、ワタシはもうダメかもしれません。何故かって？それは現状を見てもらえれば分かると思います。実は今、ワタシ、木の上にいるんです。

「た、高い……微妙に高い……」

なんで高所恐怖症のワタシが木の上にいるのか。話は数分前に遡る。

芳乃様がみづはさんに診てもらっている間お手隙になったワタシはなんとなく校舎を巡回していた。多分、祟り神との戦いに参加できないことで若干の焦りがあったのだと思う。とにかく何かをしていないと落ち着かなかったのだ。当然校舎には目立った危険はなくワタシはそのまま外に出た。

「いや〜」

弱々しい仔猫の鳴き声を聞いたのはそんな時だった。辺りを見回すと木の上で震えている仔猫を発見した。どうやら降りられなくなってしまうのだろう。

純粹に仔猫を助けてあげたかったし、何より祟り神は元々犬神、獣を司る神様だ。もし仔猫に何かあったら祟り神になんらかの影響があるかもしれない。仔猫がいる枝の高さはせいぜい2メートルちよつと。これぐらいならワタシでも大丈夫だろう。

なん度も言うがワタシは焦っていた。

ワタシは勢いをつけて木の幹を蹴るようにして駆け上がる。そし

て案の定といつかなんといつか……。

「た、高い……微妙に高い……」

こうして冒頭の場面に戻るといわけである。

(……って冷静に回想してる場合じゃないです！早く仔猫を助けてあげないとっ！)

「ももももう大丈夫ですよ。お大人しく、大人しくしててくださいね。るーるるるる……るーるるるるる」

木の実に必死にしがみつきのながらなんとか右手をゆつくりと前に差し出す。なるべく怖がらせないように、そして安全に木から降りられるように。

「にやああああ〜〜」

「ひい!?逃げないでえ、動かないでえ、揺らさないでえ、離れないでえ」

仔猫が怖がって体をよじるたびに木がグラグラと揺れ動く。正直泣きそうなほど怖いですが、頑張るんだ菜子負けるな菜子。

「あと少し……もう少しで……」

足場にしては頼りない枝の上でグツと手を伸ばしそして……。

「にやあ」

「あ、やったー！仔猫確保！」

「にやう、にやう、にやうにやにやあ！」

いきなり捕まって驚いたのだろう。ワタシの腕の中で仔猫が暴れだす。

「あ、待ってーダメ、暴れないで、お願いですからっ」

あばばば揺れる揺れるう！

仔猫が落ちないように両手で抱え込む。しかし仔猫は止まらない。

両手を木の枝から離れたせいでバランスを崩す。あ、これはまずい。そう思った時には遅かった。

「あつ、きやつ、きやあああああつ!?!」

枝から離れた体は当然重力に従って落ちる。受け身を取れないこともないが、その場合仔猫が怪我をしてしまうかもしれない。ワタシはとっさに猫をかばいぎゅっと目を閉じる。

「ぐっ……」

「——ッ！」

しかしいつまでたつても痛みは襲ってこなかった。

「か、間一髪つってところだな。無事か？ 茉莉」

代わりに聞こえてきたのは聞きなれた幼馴染の声だった。恐る恐る目蓋を開けてみる。すると息を切らせながらも心配そうにワタシの顔を覗き込む幸彦と目が合った。

「あ、あれ？ 幸彦？ ワタシは一体……」

「少し落ち着けて。それより怪我はないか？ 痛むところは？」

「あ、うん。へ、平気。痛みはどこにも……」

「そうか、はああああ良かった」

幸彦は心から安堵したような声をあげた。えっと、混乱してて状況が上手く把握できない。

「そうだ！ 仔猫！」

「にゃ〜」

腕に抱えていた仔猫を確認すると、先ほどまで怯えていたとは思えないほどの気の抜けた声を出した。良かった、怪我もないみたい。

仔猫はそのままワタシの腕から飛び出しどこかへ去っていった。

「あ、行っちゃった」

「あの様子なら大丈夫そうだな」

「うん。……ところで幸彦」

「なんだ？」

「ワタシ、枝から落ちてしまったような気がするのですが……？」

「ああ」

「でも、痛くない……？」

そこでようやく、ワタシは今自分が置かれている状況を一つずつ確認していく。いつもより近い幸彦の顔。幸彦と会話しているのに立っている感覚がない。そして、私を包み込むように抱きかかえている幸彦の腕……。

「ッ?!?!」

「気に顔が熱くなる。」

「あのっ、あのっ、こ、こ、これっていわゆるお姫様抱っこ……という
ものでは?」

「今頃気付いたのか?」

幸彦はやや呆れたように笑った。

「咄嗟だったからな。でも良かった。茉子も仔猫も怪我がなくて
「ツツツ」

幸彦の言葉で心臓の鼓動が早くなる。

こ、この鼓動の高鳴りはなんですか!?!落ち着け常陸茉子。深呼吸深
呼吸。だ、だめです! 恥ずかしくって幸彦のことを直視できない!

ワタシは思わず両手で顔を隠す。こんなみつともない顔幸彦に見
せられない。

「茉子?大丈夫?」

「だ、大丈夫ですっ、本当につ。ただ、すごく恥ずかしくって」
「あー……………」

幸彦は少しだけそっぽを向くと申し訳なさそうに話し出した。

「そんなに恥ずかしがられると、その、俺まで恥ずかしくなってくるん
だけど……………」

「ご、ごめんねっ、嫌だとかそういうわけじゃなくって、むしろ落ち着
くっていか、ってワタシ何言ってるんだろっ!?!」

「い、いや、謝らなくていいから落ち着けて」

思わず本音が出てしまったが、幸彦の腕は力強くとても安心でき
た。あんなに小さかった幸彦である。まあ春祭りの時にそれはわ
かっていたことだったが、彼の腕に抱きかかえられて改めて実感す
る。

「力、強くなったね」

「まあ、鍛えてきたからな」

「ワタシ重くなかった?」

「全然。むしろ軽すぎて心配になるぐらいだ」

「そ、そっか……………」

「顔赤いぞ？」

「だ、だって、殿方にお姫様抱っこされるなんて初めてで」

「俺も、まさか菜子を本当にお姫様抱っこするとは思ってもみなかった」

冗談でなら言ったことはあるけどな、と照れた風に笑う幸彦。

心臓が張り裂けそうなほど大きな音を立てている。これ以上はおかしくなりそうだ。

「あ、あの！そろそろ下ろしてもらえませんか？」

「え、あ、ああ。そうだな。でも本当に大丈夫かい？また腰抜かしてたりしないか？」

「大丈夫。大丈夫だけど、その……緊張とドキドキでうまく体が動かせなくて」

「わかった。ゆっくりおろすから」

ワタシを下ろした後も、幸彦は左腕でワタシの体を支えてくれる。いつも通りといえども通りなのだが、今は遠慮して欲しかった。ドキドキが収まらなくて死んでしまう。

「幸彦っ。も、もう一人で立てるから」

「あ、ああ、すまない」

幸彦の手が離れる。名残惜しいと思ってしまう自分がひどく恥ずかしかった。

ワタシの体に異常がないとわかった幸彦は一度息を吐いて腕を組み、眼を細める。

「しかし、随分と無茶をしたじゃないか。下手したら怪我だけじゃすまなかったんだぞ」

「うう、ごめんなさい」

ぐうの音もでない。確かに幸彦が来てくれなかったらあのまま背中から落ちていただろう。打ち所が悪ければ大変なことになっていたにちがいない。

「でも、よくワタシが木の上にいることがわかったね」

「保健室に行ったら、まだ菜子が戻ってきてないと芳乃様に言われてな。校舎にいなかったから外だろうと思って探したら木の上で仔

猫と一緒に震えてる葉子を見つけたんだ。まったく、肝を冷やしたぞ」

お姫様抱つこの時息を切らしていたのは、ワタシのために駆けつけてくれたからだったのか。

「本来ならデコピンの一つでも食らわせてやりたいところだが……今回は見逃そう。その子に免じてね」

「え？」

幸彦の目線の先には先ほど助けた仔猫とその母猫が佇んでいた。仔猫はワタシの足元に啜えていた猫じやらしを置くと「にゃー」と一声鳴いて母猫とともに山の中へ戻っていった。

「随分律儀な猫だな。よかったじゃないか、葉子。葉子が頑張ったから、あの仔猫もああして母猫と一緒にいられるんだ」

親が子供を褒めるように、幸彦はワタシの頭をポンポンと撫でて優しく微笑んだ。もう限界だった。

「わ、ワタシっ！お先に失礼しますっ!!」

逃げるようにしてその場を離れる。最後のは反則だ。顔の火照りも胸の高鳴りも治らない。どうせこの後芳乃様の家で会うことになるのだが、とにかく少しでも落ち着く時間が欲しかった。

「芳乃様、どうかご無理はなさらないでくださいね」

「わかった」

「危ないと思ったらすぐに逃げてくださいね！」

「わかったから」

「いいですか、芳乃様。くれぐれも、くれぐれもお怪我のないように気をつけてくださいね!!」

「もう、茉莉。心配しすぎです。有地さんもムラサメ様もいるんだから」

「それはそうですけど……やっぱり心配で」

夜。支度を終えた芳乃様と有地を見送るため、俺たちは山の麓に集まっていた。診療所での一件以来、久しぶりの祟り神退治である。

今回参加できない茉莉はそわそわと落ち着かない様子だ。まあ気持ちには痛いほどわかるけどな。

「くつくつく、幸彦が増えたな」

「それはどういう意味ですか、ムラサメ様？」

「なに、心のそこから身を案じてくれる者がいるのはとても素晴らしいことだと暗に言いたかっただけだ。気にするでない」

にんまりとした表情を見せるムラサメ様。どことなくからかわれたような気がしなくもない。

「おーい、ムラサメちゃん。そろそろ出発するよー」

と、気がつけば出発の時間になったようだ。芳乃様と有地が並び立って待っている。

「有地、芳乃様を頼む」

「うん。大船に乗ったつもりで……とまではいかないけど、朝武さんと協力して頑張つてくるよ」

短い会話を交わし、拳を合わせる。後は信じて待つしかない。

「二人とも、どうか気をつけて。いつてらっしゃい」

「いってきますー！」

安春さんの言葉に元気に返事をした二人はあつという間に見えなくなつた。

「待つだけというのが、これほど辛くて怖いなんて」

二人の姿が見えなくなるまで手を振っていた茉莉がか細い声で囁く。よく見ると茉莉は小さく震えていた。

「大丈夫。きつと無事に帰ってくるさ」

「……幸彦も安春様もお強いですね。ワタシ、まだ震えが止まりませ

ん」

「菜子……」

こんな時に気の利いた言葉を投げかけられればいいのだが。不甲斐ないことに、俺は菜子の肩にそつと手をやることしかできなかった。

「そうだ、菜子君。これから夜食の準備をするんだけど、手伝ってくれないかな?」

「お夜食、ですか?」

「うん。芳乃も将臣君も張り切ってたから、きつと頑張りすぎてお腹が空いちやうと思んだよ。だからおにぎりでも握ってあげようかなって」

安春様は普段と変わらぬ様子で菜子に語りかける。この場にいる誰よりもこの時間を悔しいと思っているはずなのに、誰よりも人のことを思いやることができる。安春様はそんなお方なのだ。

「そうですね……わかりました!この常陸菜子にお任せください!」

菜子もそれをわかつているのだろう。空気かもしれないが、顔を上げて家の中へと戻っていった。

「申し訳ありません、安春様。お気遣い感謝します」

「そんなにかしこまらなくていいって。菜子君には日頃からお世話になってるし、彼女の気持ちもわかるからね。それにね、自分の娘のことを心から心配してくれる友人がいるんだ。親としてこんなにも誇らしいことはないよ」

安春様は優しく微笑んだ。

俺の両親も誇れる人だと思っているが、安春様は本当に素晴らしい父親だ。だからこそ、俺も菜子も安春様や芳乃様にお仕えしているのだ。

「僕は菜子君のところに行くけど、幸彦君はどうする?」

「俺はもう少しだけここにいます。あとで向かいますのでお先に戻っててください」

「そうかい?今日は少し冷えるから早めに戻っておいでね」

安春様を見送ったのち、俺は山へと向き直る。そして、いるかもわ

からない神様に向けて祈るのだった。

どうか今日も、

芳乃様と有地が無事に戻りますようにと。

『やあ、レナー！メールをくれてありがとう！どうやら日本で充実した毎日を送っているようでお祖父ちゃんも嬉しいよ。おっと、そうだ。お前が知りたがっていた話だけど、随分懐かしい話を持ち出してきたね。あの時は怒ってごめんよ。孫娘より大切なお宝なんて存在しないのにな。』

ハハハまた脱線してしまった。そうそう、あの欠片についてだけど、あれはレナが言うように日本の穂織から僕のお祖父ちゃんが持つて帰ってきたものだよ。聞いた話だと、僕のお祖母ちゃんが穂織の山でトロールから貰ったらしい。本当かどうかはわからないけどね。

しかし感慨深い気分だ。孫娘が僕のお祖父ちゃんとお祖母ちゃんが出会った街にいるなんて。よかったらまた話を聞かせておくれ。それじゃあ体には気をつけて。お祖父ちゃんより」

お祖父ちゃんからのメールを読み終えた私の顔は真っ青になっていた。もし、メールに書いてあることが本当なら。私は取り返しのないことをしたことになる。

真っ白になりそうな頭を振り、なんとか自分を落ち着かせる。まだ

そうと決まったわけではない。思い過ぎしの可能性だってあるのだ。私には判断できないことでも、ユキヒコなら……。

私は時計を確認する。今日は祟り神退治をしているので、ユキヒコたちはヨシノの家にいるだろう。

もしかしたら嫌われるかもしれない。でも話さなければ。ヨシノを救うにはそれしかない。私は急いで志那都荘を飛び出した。

穂織の街はすっかり日が落ち暗闇が広がっている。私は街灯の少ない道をひたすら走った。心なしか頭痛が酷くなっている気がする。

「はあ、はあ……なにか、おかしいです」

これだけ走ればもうとつくにヨシノの家についてもいいはず。それなのに、先ほどから全くヨシノの家が見えてこない。まるで迷路の中をぐるぐる回っているように。

「おや、お嬢さん。こんな時間にそんなに急いでどちらに向かうのですか？」

いきなり見ず知らずの男の人が私に声をかけてきた。目の前に姿があるのに、カメラのピントがずれるようになってなぜだかその存在をはっきり認識することができない。

その男の声を聞くとびに体からは冷や汗が流れ、頭が割れるように痛くなる。

「申し訳ありません。私急いでおりますので、失礼します」

直感とでも言うのだろうか。今すぐこの男から逃げなければならぬと本能で感じた。私は足早に男の前から立ち去ろうとする。しかし私の行く手を男が塞いでしまう。

「悪いけど、君をこの先に向かわせるわけにはいかないんだ。ようやく探していた最後の欠片が見つかったんだからね」

「何を言ってる……っ!？」

男が私の腕を掴む。同時にトンカチで何度も頭を殴られるような激しい頭痛が私を襲う。

「僕もこんなことはしたくないんだ。でも、俺の復讐の為なんだ。くはは、でひゃひゃ、ふはははは。ごめんよ」

形容しがたい嫌悪感で鳥肌が立つ。と同時になにか違和感を感じる。あまりの頭痛で、気を抜くと意識が飛んでしまいそうになるのを我慢しながら、私は男に問いかける。

「あなたは……いいえ、あなたたちは一体なんなのですか!？」
「……………」

私の発言に、先ほどまで明るく笑っていた男の顔から表情がなくなる。

例えるなら、そう。日本の能面のように、感情を全て無くしたような、そんな顔。私は思わず身震いする。得体の知れないなにかがそこにはいた。

「……異国の娘に見透かされるとはな。随分と良い目を持っているらしい。それは憑代の力か、それとも……まあいい」

男のしゃべり方が変わった。こちらも先ほどとは真逆の抑揚のないじゃべりだ。

「そうだ。いいことを思いついた。ここでそなたの欠片を奪うことは簡単だが、くくく、今はまだそのままにしてやろう。ただ……」

男は私の頭に手を当てる。
体が金縛りのように動かない。

「記憶は少し弄るがな。はは、震えているな。だが安心しろ。その恐怖もすぐに忘れる。そして然るべき時にすべてを思い出してもらおう」

「ど、どうして、あなたは欠片のことを知っているのですか?なぜ、こんなことをするのですか!？」

「なぜ……?決まっている」

そこで男は大きく体をのけぞらせ空を仰ぐ。先ほどまで表情のなかった顔には、見たこともないような邪悪な笑みを浮かべていた。

「復讐だ!俺を裏切った朝武家に!先祖の恨みを忘れ下僕に成り下がった常陸家に!俺が味わった以上の絶望を与える為のな!!」

まるでシェイクスピアの劇のように大げさに声を上げる男。そし

てまた次の瞬間には能面のような表情に変わる。私は、それが不気味で不気味でしかたなかった。

「娘、そなたにも協力してもらおうぞ？そなたがこの記憶を思い出した時、どのような顔を見せてくれるのか。実に楽しみだ」

私の頭に当てられた手に力が込められる。

瞬間、私の意識はブラックアウトした。

「……………っ!？」

「幸彦？どうかしたんですか？」

「いや……………なんでもない。少し、腕が痺れてさ」

「なら僕が代わりに食材を切るから、幸彦君は少し居間で休んでていいよ」

「いえ、せめて盛り付けだけでも手伝います」

「だけど……………そうだね。よし！芳乃や有地君が戻ってくるまでに美味しい夜食を完成させよう」

「ああつ！安春様！それはケーキを切る包丁ですつて！」

「……………心配だ。……………いろんな意味で」

第二十六話 「大切だからこそ」

「——せあッ！」

触手を勢い良く叩きつける崇り神の攻撃を回避し、懐に飛び込み胴体を横薙ぎにする。手応えは薄いものの、なんとか崇り神の体勢を崩すことに成功した。

「朝武さんっ！」

「はい！」

打てば響くように帰ってくる返事に思わず頬が緩む。初めの頃は全然息が合わなかったのに、今では自然に連携が取れるようになってきた。

朝武さんは崇り神の死角である俺の背後から飛び出し矛鈴を構える。

当然、崇り神もやられっぱなしではない。素早く体を翻しバランスをとりながら朝武さん目掛けて触手を伸ばす。

「させるかよッ！」

俺は叢雨丸を構えなおし思いっきり上に振り抜く。その切っ先は崇り神の触手を見事に捉え両断する。俺が触手を切ると信じていたのか、朝武さんはひるむことなく崇り神に向かって駆け抜ける。

「はあああー！」

朝武さんの構えた矛鈴は崇り神に深く突き刺さる。瞬間一際大きな鳴き声とともに崇り神は倒れ、泡のように消えていった。

「はあ……はあ……」

「ふう……お疲れ様、朝武さん。怪我はない？」

「はい。有地さんこそ、大丈夫でしたか？」

「うん、俺も平気」

俺が大げさにガッツポーズを見せると、朝武さんは緊張が解けたようにふふふと笑った。俺も彼女の笑顔を見て思わず笑みがこぼれる。

一息ついたところで叢雨丸が淡く光り、ムラサメちゃんが刀から姿を現した。

「見事な連携だったぞ、二人とも。さあ、早く欠片を回収して戻ろう。菜子たちが心配しておる」

「手を照らしましょうか？」

「うん。多分だけど、この辺に……あった」

今朝と同じように、視線がある一点に吸い寄せられる。そこに近寄っていくと淡く光る憑代の欠片を発見した。

「うむ、憑代の欠片で間違いない」

「よし。はああく疲れた。なんか、心なしか崇り神が前よりタフになつてる気がしたんだけど」

「確かに、菜子がいらないのを考慮しても、いつもの崇り神であればここまで時間はかからなかっただろうな」

「もしかして、欠片を集めるにつれて崇り神も力を増しているんでしょうか？」

「わからん。が、ありえない話でもないかもしれん。とにかく今は早く山を降りよう。話はそれからだ」

ムラサメちゃんが話し終わると何処からか、ぐうという気の抜けた音が聞こえてきた。まあ何処からっていうか、俺のお腹の音なんだけど……。

「どうやら腹の虫も限界を迎えているようだからな」

「うう、情けない」

「ふふ、それじゃあ帰りましょうか」



「芳乃も将臣君も、無事でよかった。」

帰りの遅い俺たちを心配して玄関の前で待っていてくれたようだ。出迎えてくれた安春さんは、俺たちの顔を見てホッと安堵の息を漏らした。

心配してくれたのは嬉しいのだが、俺も朝武さんも目の前の光景に

少しだけ困惑する。

「お、お父さん？その、なんでエプロンなんかつけてるの？」

「ああ、これかい？幸彦君のを借りてみたんだけど、どうかな？似合ってる？」

照れたように頬を染めてエプロン姿をみせる安春さん。似合っていないわけではないが、娘の朝武さんからしたら複雑な気持ちだろう。

これは似合っていると言ったほうがいいのか？居候の身としてはなんとも判断に迷うところである。

「似合ってる似合ってないじゃなくて、どうしてエプロンを着てるのか理由を聞いているの！」

朝武さんが至極真つ当に聞き返す。少し顔が赤いのは父親のエプロン姿が恥ずかしいからだろう。俺も料理するときなんかはエプロンするし別に気にはしないけど、確かに、安春さんがエプロンをつけているのは物珍しくはある。

「なんでって、それはもちろん——」

「芳乃様~~~~~っ!!!」

安春さんが返事をする前に家の奥から常陸さんが飛び出してきた。ものすごい勢いで朝武さんに抱きつくどペタペタと全身をくまなく、まるで存在を確かめているかのように触る。

「大丈夫でしたか!?お怪我はありませんか!?どこか痛むところは!？」

「ま、茉莉！私も有地さんも大丈夫だから」

「そうですか！よかった……よかったあ……」

「もう、茉莉ったら。心配しすぎよ」

心の底から安堵したように息を吐く常陸さん。そんな彼女を朝武さんは優しく撫でている。なんだかんだ言って、心配してくれる常陸さんに感謝しているのだろう。素直じゃないんだから。

「うんうん。本当によかった。茉莉君ってばずっとそわそわおろおろあたふたはわはわしててね。見かねた幸彦くんが——」

「はわわ安春様！しー！しーっ！」

顔を真っ赤に染めて必死に安春さんの二の句を防ぐ。

「見かねた幸彦はいったい何をしたのだろうなあ。吾輩気になるぞ」
「相変わらずそういうの好きだよね、ムラサメちゃん。俺も気にはなるけど……その前に」

ぐうう。と、空気を読めない気の抜けた音が響く。まあ言わずもがな、俺のお腹の音なんだが。生理現象だから仕方ない。

「えつと……何か食べるものないかな？」

「吾輩、ご主人の締まらないところ、嫌いではないぞ」

「有地さん、あのつ、わ、私もお腹が空いてるので気を落とさないでくださいー！」

「ワタシの為に自らを犠牲にするなんて……さすがは有地さん！」

「やめて！みんな生暖かい目で見ないで！」

「あははは。お腹が鳴るのは元気の印さ。軽くだけどつまめるものを用意したから。さあ、入って入って」

安春さんの言葉に朝武さんが目を丸くする。

「もしかして、お父さんが料理を？」

「菜子君のお手伝い程度だけだね」

「玉子焼きは安春様が作られたんですよ。冷めないうちに食べましょう♪さあ芳乃様」

常陸さんは朝武さんの手を握り、二人はそのまま居間へと向かっていった。

なんとというか……女の子二人が仲良く手をつないでるのを見ると、こう、ずっと見守っていてあげたくなくなるな。美少女同士ならならなささら……つとこんなこと考えてたら幸彦にまたどやされる。

「あれ？そういえば幸彦は？」

「言われてみれば姿を見かけないのう」

「ああ、幸彦君なら急用ができたからって家を出て行ったよ」

「急用ですか？」

「うん。夜食を作ってたら彼の式神が戸を叩いてね。幸彦君の式神は街に何体か放たれているんだけど、そのうちの一体が迷子を見つけたらしいよ」

こんな時間に迷子？とも思ったが、泊まりの観光客が迷子になるこ

とは少なくないらしい。今回もそうだろうと安春さんは言うが、なんとなく胸がざわつく。安春さんは嘘を言っていないだろうが、もし本当に何か緊急事態の時幸彦が本当のことを言うとも限らない。

「俺、ちよつと見てこようかな」

「やめておけ。祟り神との対峙で疲労が溜まっている今、ご主人が行ったところで足手まといになるだけだぞ。心配しなくても、本当に危なくなれば助けを求めよう。意気地なところはありますが、馬鹿ではないからな」

ムラサメちゃんに諭され思いとどまる。彼女の言う通り、何かと抱え込む幸彦だが、本当に危険になったら俺じゃなくても常陸さんには一報を入れるだろう。

祟り神との戦いの後で少し神経質になっていたのかもしれない。多少後ろ髪を引かれる思いはあるが、今は自分の体を休めることが俺の仕事だと考え直し居間へと向かうのだった。

式神の道案内に従いながら、少ない街灯の明かりが照らす夜道を歩く。気持ちのいい夜風を浴びながらも、俺の眉間には深い皺が寄っていた。

芳乃様と有地の帰りを待っていた俺は、鳥型の式神であるチュン助から迷子発見の合図を受け取った。穂織の街に放っている式神からはたまにこのような知らせが来る。この時間に迷子とは、どこぞの観光客が酔っ払って帰れなくなったのだろう。よくあることなので、子と安春様に芳乃様達を任せ、特に警戒することもなく一人でやってきたのだが……。

「これは、拙いな……」

夜の穂織は人通りが少ない。都会みたいに娯楽施設もなく特に夜外出する必要がないからだ。しかし、しかしだ。

「人の気配が微塵もしないなんて、ありえないはずなんだけどな」

背中にじわりと冷や汗が湧き出る。

チュン助の案内で迷子がいると思われる公園に近づくとともに人の気配が無くなっていく。それだけではない。人の気配が無くなるにつれて濃くなってきたものがある。穢れだ。

俺は一度立ち止まり辺りを見回す。

(俺の考えが正しいならこの辺りに……)

目当の物は思いの外早く見つかった。街道脇の木に張り付いていたそれは、俺のような陰陽師が呪いの時に利用する霊符だった。

人払いの呪い^{まじない}。こんな古い呪いを使いこなす人間なんて、一人しか思い浮かばない。

呪術使い。

顔もわからないそいつの姿が俺の頭に浮かび渡る。

突如俺たちの前に現れ意味深な言葉を残し消えていったヤツは、あれ以降姿を現すことはなかった。もちろん、だからって警戒を怠ったつもりはない。街全体に結界を張り、式神だって数を増やした。それなのにここまで大きな呪い^{まじない}をかけてくるなんて……。自分の不甲斐なさにギリつを歯を軋ませる。

苛立たしげに霊符を木から剥がすと、たちまち灰となって消えてしまった。

「急ごう、チュン助」

俺の言葉に応えるようにチュン助はスピードを上げる。全速力で公園まで駆け抜けると、ベンチの上でぐったりとしている女性を発見する。綺麗な金髪の女性。あれは——レナさんだ。

急いでレナさんの元へ駆け寄る。穢れが体を蝕んでいるのか、呼吸が浅い。腕の穢れを祓うために穂織の温泉の湯は持っているが、少量ではこの穢れを祓うのは厳しい。そう考えた俺は、チュン助に俺の部屋の霊符を取ってくるよう命令を出そうとするが——。

「にゃー！」

「猫丸!？」

いきなり俺のポケットから勝手に現界した猫丸がレナさんに飛びつく。そして次の瞬間には目を開けていられないほどの眩い光が辺りを包み込んだ。

「今のは、いったい……?？」

ゆっくりと目を開けると先ほどまでレナさんを囲うように満ちていた穢れが祓われていた。突然のことで頭が追いつかない。これほどまで強い力は今まで見たことがなかった。

「猫丸……君がやったのか?？」

「にゃー♪」

ドヤ顔で返事をする猫丸だったが、すぐに現界が解けて霊符に戻ってしまった。同時にごっそりと霊力を持って行かれる感覚が俺を襲う。この疲労感。猫丸が術の代償として俺から霊力を持っていった証拠だ。

猫丸は守りに特化した式神である。片割れである狛が攻撃に特化している分、それを補うように索敵や結界などのサポートを得意としている。消費霊力が少ないのも特徴でまさに痒いところに手が届く式神だ。街の警護に当たる式神の統括を任せているのもそれが理由である。

そんな猫丸でも回復や浄化の術は使えなかったはず。

しかし今のは……。俺は改めてレナさんの様子を調べる。穢れは残っておらず、先ほどまで苦しそうに浅かった息も普段通りに戻っている。

「いつの間に新しい力を身につけたんだ?？」

疑問を口に出すも返答なんて返ってくるわけもなく。結果現状打破につながったから考えるのは後にしよう。

「むにゃ……えへへお父さんもお母さんもおじいちゃんも。志那都荘を気に入ってもらえて嬉しいでありますよお。ムニャムニャ」

先ほどと打って変わって気持ちよさそうな顔で寝言をいうレナさんだが、樂觀視はできない。穢れは祓えたが呪いにかかっている

は限らない。

呪術とは元来人知れず体を蝕み、命を奪うこともある。腕の立つ呪術師ほど隠匿いんとくに長けているものだ。

わざとらしく大胆に仕掛けられた人払いの呪いまじない。隠す気すら感じられなかった穢れ。一見隠匿する気がないようにも見えるが、事実、奴につながる証拠は何一つ残っていない。間違いなく呪術使いは腕が立つ。

それなのにこんなにもわかりやすい状況を残したということは――

「俺たちを弄もてあそんで楽しんでる、ってことか。……ふざけやがって」

俺はポケットから一枚の護符を取り出す。まだ試作段階だが、駒川の秘術を応用した護符だ。レナさんの額に護符をかざすと彼女の体に取り込まれていった。これでもしレナさんに呪いがかかっていたとしても、呪いの発動を遅らせることぐらいはできるだろう。その間に完成品を作らなければ。

「芳乃様と茉莉の友人に手を出したこと、許すわけにはいかない。これ以上あの二人が悲しむことなんて、あつてはいけないんだ」

眠るレナさんを抱え上げる。

もしかしたらレナさんは呪術使いの顔を見たかもしれない。後で話を聞く必要があるが、今は彼女を志那都荘に送り届けよう。きっと玄十郎さんも猪谷さんも心配しているだろう。なんと説明したものが、俺は頭を悩ませながら志那都荘へと向かった。

「うん。わかった。安春様と芳乃様に相談してみる」

常陸さんが電話を終えて戻って来る。おそらく幸彦からだろう。毎日一緒に帰ってるし、いつ迎えに来るか話してたのかな？

「幸彦からはなんて？」

「それが、相当酔っ払ってる迷い人だったらしくて対応に追われてるみたいです。時間も時間ですし今日は芳乃様の家に泊めてもらえて」

「僕にもメールで連絡が来てたよ。うちは構わないから泊まっついていくといいよ。芳乃もそれでいいよね」

「もちろん。ふふ、久しぶりのお泊まりですね」

朝武さんが機嫌よく答える。

彼女がご機嫌なのは安春さんが作った玉子焼きのおかげだ。見た目こそ常陸さんの作った玉子焼きに負けるものの、出汁の風味が卵の甘さを引き立て、どこか懐かしささえ感じる味だった。

どちらかといえばしょっぱい玉子焼きが好きで俺でも美味しいと思っただけの玉子焼きを朝武さんはたいそう気に入ったようで、一口一口味わいながら食べていた。

「どうした菜子？どこか神妙な顔をしておるぞ。……ははん。さては幸彦が迎えに来ないと知って寂しいのだな」

「ち、違いますよ！全然そんなこと思ってませんから！」

「ならどうしてそのような顔をしておるのだ？うん？吾輩に申しさる。ほれほれ♪」

「本当に違いますからっ。ただ……いえ、きつと気のせいですね。それより話の続きをしましょう」

ムラサメちゃんの言葉に少しだけ取り乱した常陸さんだが、すぐに姿勢を正し、話を戻した。話とはもちろん憑代の欠片のことである。夜食を食べながらも簡単な反省会をしていたのだ。

「ワタシと安春様にはよくわかりませんが、憑代の力が強まったということは気配も感じやすくなってるんでしょうか？」

「ああ。以前は微かにしか感じられなかった欠片の気配も、今では距離が離れていてもわかるようになってきた」

「えっと、ムラサメ様はなんて？」

「確かに気配は強まっているって言ってます」

「そうか。だったら芳乃や将臣君も感じ方に変化があるかもしれない

ね」

「そういえば有地さん、今朝私の耳が生えるのと同じタイミングで誰かに呼ばれている気がすると言っていますませんでしたか？」

「うん。俺も気になって幸彦に相談してみたんだ。幸彦が言うには俺と憑代との間に何かしらの縁があつて、憑代が力を取り戻すことによつて祟り神の発生や欠片の場所を敏感に感じ取るようになったんじゃないかつて」

ただ、肝心の縁がなんなのかは全くわかっていない。幸彦自身、憑代の力が強まっていることについては断言したものの、俺が誰かに呼ばれた感覚については憶測の域を出ないと言っていたしな。

「でしたら、今ここで試してみるのはどうでしょうか？新しい欠片を手に入れたことですし、何かしら変化があるかもしれませんよ？」

常陸さんの提案に全員が賛成する。俺は憑代を手に取り意識を集中させる。毎日やっていることだが今日は少し集中を強める。

(声は……しないなあ。そもそも、元に戻りたがっているならもつとアピールがあつてもいい気がするんだけど。そしたら俺たちも全力で協力できるのに)

いくら待つても何も感じられない。

1分ほど経つた頃だろうか。諦めて緊張を解いたその時。一瞬眩い光が見えたかと思うと、不意に手の中の憑代が熱くなった。しかしその光も熱もすぐに失われて、元に戻ってしまう。

「どうだ？」主人

「なんか、一瞬だけ不思議な光が見えて憑代が熱くなったような……気がしないでもないような」

「なんとも煮え切らん答えだな」

不服そうなムラサメちゃんだが、本当に些細な感覚だったのだ。俺が握つてたから熱を持っただけかもしれないし、あれが憑代の反応だとは断言できない。

その後、朝武さんも同じようにやってみたが、特に変わったことは起きなかった。

「変化がないということは、順調に進んでるってことでもいいんじゃない

いかな？」

「そうですね。欠片を集めて怒りが鎮まっているのかもしれませんが」
俺としては何かしらの変化があったほうがいいのでも思っていたが、安春さんたちが言うような考え方も間違っていない。

もう遅いし続きは幸彦も含めて明日にしようという安春さんの提案で今日はお開きになった。

自分の部屋に戻り眠る準備に取り掛かる。寝巻きに着替えるなどして、あとは寝るだけの状態に。

その前にと、僕は仏壇の前に座り手をあわせる。
秋穂へ、今日の出来事を報告する為に。

今日も芳乃は無事に帰ってきてくれた。娘を守ってくれる将臣君やムラサメ様、全力でサポートしてくれる菜子君や幸彦君。彼らのおかげで芳乃は最近随分と元気になった。いや、芳乃だけじゃない。僕も同じだ。

今日なんか、芳乃が僕の料理を食べておいしいって言ってくれた。嬉しかったなあ。あの玉子焼きの作り方は秋穂に教えてもらったものだ。菜子君も幸彦君もちゃんと聞いたほうが芳乃は喜ぶって言うてくれたけど、なんだか恥ずかしくて言えなかった。

芳乃の美味しそうに頬張る顔を見れるだけで、僕は幸せだ。君に似て少し意地っ張りなところもあるけど、彼らなら、そんな芳乃も受け入れてくれる。

(本当は君と一緒に芳乃の成長を見守りたかった。なんて言ったらまた君を困らせてしまうね)

考えないようにはしているが、たまにふと頭をよぎる願い。子供達

が頑張っているんだから、大人の僕がすっかりしないと。将臣君たちのおかげでもうすぐ呪いが解けるかもしれないのだから。

(……少し喉が渴いたな)

寝る前に一杯お水をいただこうと今のほうまで向かう。すると障子の陰から中を覗く茱子君の姿を発見した。

「茱子君？何してるの？」

「あつ、安春様。今私は家政婦気分を味わっています」
「??」

茱子君がそつと手招きをするのでそつと近づき襖の隙間から中を覗く。

『あ、あのっ！有地さん！』

『どうしたの？』

『そ、その……友達同士でも、こうやっておでこを触って体温を測るの
でしようか？』

『え？……あつ！ご、ごめん』

『ち、違います。嫌とかそういうことではなくて、ただ……その。こんな風に熱を測ってもらうのも友達同士なら普通なのかなって、疑問に思っただけで……』

居間には芳乃と将臣君がいた。どうやら芳乃の熱を将臣君が測ってくれていたようだ。

「少しお顔が赤かったので心配で見に来たんですが、この中には入りづらくって」

「だからここにいたんだ。確かに、いい雰囲気だね」

父親として、娘が異性の子と仲良くしている光景は一般的には良く思わない人がほとんどなのかもしれない。でも、芳乃があんな風に誰かに心を許している姿は僕にとって嬉しいものだった。

ふと懐かしい記憶が蘇る。僕も昔、秋穂のおでこに手を当てて熱を測ったら、秋穂が顔を真っ赤にしながらあたふたしたことがあったなあ。普段はしつかり者だけど、結構乙女なところがあったのだ。

「そつとしておいてあげよう。芳乃も将臣君に任せておけば大丈夫だよ」

「……そうですね。では、ワタシは部屋に戻りますね」

「うん。今日もありがとう。おやすみなさい」

僕は茉莉子君を見送り自室へと戻る。途中の縁側で空を見上げると月が綺麗に輝いていた。

もう少しで満月かな。僕はそつと目を閉じてお月さまへ祈りを捧げる。芳乃たちがこのまま無事に大人になって幸せになりますようにと。

「ん、むう」

息苦しさを目を覚ます。金縛りだろうか体がうまく動かない。それに熱いほどの熱を感じる。もしかして風邪でも引いたのだろうか？昨日朝武さんも顔が赤かったけど、俺の方が先に風邪を引いてしまっうなんて。

ゆっくりと目を開ける。するとそこには――。

「すう……すう……」

「……………」

……どうやら夢を見ているようだ。じゃなければ目の前で朝武さんが俺の布団に入ってすやすや眠っているはずがない。なんか獣の耳も生えてたように見えたけど、夢は記憶の整理ともいうしな。きつと昨日の祟り神退治の記憶が夢として見せているだけだろう。うん。きつとそうだ。

俺はもう一度瞼を閉じて唇を噛んでみる。……痛い。よし。これで目が覚めただろう。改めて目を開けるとそこには――。

「んん……すう……すう……すう……」

「……………」

夢じゃない、だとう!?

え? ええ!?! なんぞでなんぞだなんぞと?? なんて朝武さんが俺の布団うひい! ちよっ朝武さん! 寝ぼけて抱きつかないで! 男の朝は色々とまずいものがある!!

声にならない叫びを叫ぶだけ叫んだ俺は一度深呼吸をして冷静になる。

(落ち着け有地将臣。まずは状況把握だ。俺は現在朝武さんに抱きつかれて身動きが取れない。うん。ワンアウト。下手に動けば朝武さんが起きてしまう。ツーアウト。このままだと起こしにくる誰かに見られつ可能性が大。スリーアウト。……詰みじゃん)

今こうしている間も、朝武さんの寝息が耳元にかかってくるし、いい匂いするし、なんか柔らかいし、とにかく色々まずい。下手したら幸彦に殺される!

「起きたようだな。おはよう、ご主人」

「ああ、おはようってムラサメちゃん?! い、いや違うんだってこれはその……俺にもよく状況がわからないというか!」

「落ち着けご主人。全部わかっておる。今皆を呼んでくるから少し待っておれ」

「わかってるって何を?! ちよ、みんなって誰のこと?! ねえムラサメちゃん!」

俺の問いかけにムラサメちゃんは少しにやけながら部屋を出て行く。

「んうう……どうしたんですか? 朝から大きな声を出し……」

と、耳元で叫んだのがいけなかったのか、朝武さんが目を覚ましてしまった。寝起きで焦点の合わない朝武さんと向かい合う。そしてぴったり視線が合った。朝武さんの顔がみるみる赤くなる。

「あ、ああああ有地さん?! どうして有地さんが私の部屋に?! まままさかよよよ夜這いですか!」

「誤解ダアアア!!」



「ううう。どうして私、有地さんの部屋に……。し、しかも同じ布団で、あんなに抱きついて」

「と、とりあえず誤解が解けて良かったよ」

「ははは、まあ落ち着きなつて。もうすぐ菜子君が幸彦君を連れてくると思うから」

「げっ！幸彦も来るんですか？」

幸彦がこのことを知ったら……想像しただけで冷や汗が出る。いや、今回は事故だし情状酌量の余地があるんじゃないか？とにかく平謝りするしかないか。

あの後なんとか朝武さんの誤解を解いた俺だが、何故朝武さんが俺の部屋に、しかも同じ布団で寝ていたのかまではわからなかった。朝武さん自身何も覚えていないらしく、目が覚めたら目の前に俺がいた状態だったらしい。

とにかく一回落ち着こうと居間に向かうと安春さんがお茶を用意して待っていた。

「来るというか、幸彦君は昨日の夜からずっと家の周りを見回つてくれてたんだよ」

「え？昨日の夜からですか？」

「うん。詳しい話は幸彦君たちが来てからのほうがいいだろうね。僕だけじゃあうまく説明できないだろうし」

そう言ってお茶をすする安春さん。その落ち着きように俺と朝武さんは思わず顔を見合わせる。

自分の娘が男（一応婚約者ではあるが）の部屋で一緒に寝ていたのだ。普通なら正気でいられないと思うんだけど……。安春さんはどうして朝武さんが俺の部屋にいたのか知っているのか？そういうえば、ムラサメちゃんも何か知っているような素振りだったよな。あの時はテンパってたから、からかつてるだけだと思っただけ、ムラサメ

ちゃんはわかってるってのはつきり俺に言っていたんだ。

「失礼します」

幸彦と常陸さんはすぐに居間へやってきた。ムラサメちゃんも一緒だ。

「二人とも、おはようございます」

「あは、今朝は大変でしたね」

普段通りに挨拶する常陸さんと幸彦だが、その表情には疲労が隠せずにいた。

「茉莉も幸彦もどうしたの？そんなに疲れた顔して」

「これはその……疲労というよりはお二人が無事に目を覚ましてくれたことに対する脱力感と言いますか……」

「その様子だと、やっぱり何かあったんだね」

俺の問いに、二人とも少し困った顔になる。

「何かあったと言えばあったんだが……。その前に確認させてくれ。芳乃様。昨夜のことで何か覚えていることはありますか？」

「え？ええ？私、何かやつちやつたの？」

「ああいえ、何か問題を犯したとか、そういうことじゃないんです。そうですね……。例えば変な夢を見たとか、いつもと違ったことがあったとか。些細なことでもいいのでお聞かせいただければと」

幸彦に言われ必死に思い出そうとする朝武さん。

昨日の夜といえば、朝武さんの顔、少し赤かったつけ。熱はなかったけど関係あるのかな？

「夢は見えてないですね。でも、昨日は胸がざわついて寝付けなかったような」

「なるほど。有地はどうだ？昨日の夜……いや、今現在体調に異変は？」

「ん？俺？」

俺にまで話が振られるとは思っておらず素っ頓狂な反応をしてみよう。幸彦は相変わらずまっすぐ俺を見据え頷く。この状況で俺にも質問するってことは、朝武さんが俺の部屋にいたことと少なからず関係があるってことだろう。

「特に異変は——」

そこで初めて自分に意識を向けてみる。朝からテンパリすぎて気づけなかったけど、眩暈とともに熱を出したとき特有の足元がふわふわする感覚がしていた。

「有地？」

ここで嘘をついても仕方がない。

俺は素直に今感じている違和感を伝える。

「なんか、ちよつと熱っぽいかも」

「……やはり、そういうことになるのかな」

「幸彦。芳乃様も有地さんも戸惑ってますよ。ちゃんと説明してあげないと」

自分の世界に入りかけた幸彦に常陸さんが説明を促す。彼女の言う通り、俺も朝武さんも話が見えてこなくて困惑していた。

俺らの様子に気づいた幸彦は申し訳なさそうに頭を掻き、懐から布に包まれた何かを取り出した。

「そうだね。まずはこれを見てくれ」

「これは？……ッ!?!」

幸彦が包みを開くと、中から憑代が出てきた。しかし、その様は俺らの知る憑代とはかけ離れたものだった。

幸彦が見せてくれた憑代は、まるで血が通っているかのように真っ赤に染まり、ドクンドクンと心臓が脈打つように点滅していたのだ。

幸彦の話はこうだ。

昨日の夜。異変に最初に気がついたのは、朝武さんと同じ部屋で寝ていた常陸さんだった。朝武さんは、夜中に突然立ち上がり、フラフラと俺の部屋まで向かったという。話しかけても反応はなく、慌てて幸彦に連絡をとった。

幸彦は深夜にもかかわらず急いで駆けつけてくれたようだ。そして状況確認のため俺の部屋に入ると真っ赤に染まった憑代を発見したらしい。

「芳乃様が無意識に有地の部屋に向かったのは、おそらくこの憑代が原因だと思われれます。芳乃様に生えた獣の耳や有地が今感じている体の違和感も、この憑代が引き起こしているものでしょう。念のため俺と茉莉で家の周りや穂織の街を見て回りましたが、いまのところ危険な気配はありませんでした」

なるほど。安春さんが言っていたように、幸彦も常陸さんも昨日の夜中からずっと街の警戒に当たっていてくれていたようだ。

「これって祟り神の仕業なの？」

「いや、吾輩と幸彦の考えでは違う。どちらかといえば憑代自身が発する信号のようなものではないかと考えておる」

「信号って、憑代が電波を飛ばしてるってこと？」

「信号っていうのはたとえだよ。簡単に説明すれば、憑代はバラバラになった他の欠片に対して呼びかけてるんだ。再び一つになるためにね。おそらく芳乃様はその信号を無意識に受信してしまったんじゃないかな。朝武にかけられた呪詛にはこの憑代が使われている。その繋がりには魂の領域まで深く結びついているんだ。体が憑代に乗っ取られてもおかしくはない」

つまり朝武さんは、俺の部屋にある憑代に引き寄せられて来たということになる。

「憑代に体に乗っ取られるって大丈夫なのか？漫画みたいに朝武さんが朝武さんじゃなくなっちゃうとか？」

「心配はいらん。四六時中乗っ取られるわけではないからな。あくまで芳乃の意識がない寝ている間、それも憑代の力が強まる夜中だけのことだ」

ムラサメちゃんがいうように、朝になって起きた朝武さんはいつもの朝武さんだった。でもいつまでもこんな日が続くのは大変だろう。今回は俺のところに来たからいいけど、下手したら夜中に山の中に入ってしまう可能性だってあるってことだ。

「なんとか対策を考えないとね。ずっと徹夜するわけにはいかないし」

「そのことなんだが……吾輩はむしろ、この信号を利用できるのでは

ないかと考えておる。うまくいけば呪いを解く近道になるかもしれない
「ん」

「本当っ!?!」「本当ですかっ!?!」

思わず前のめりになる俺と朝武さん。呪いを解くのは俺たちの悲願でもある。その近道になるというならば興味がわかないはずがない。

「あの一、ムラサメ様はなんて?」

「いまの状況はもしかしたら芳乃様の呪いを解く近道になるかもしれないとのことでした。ムラサメ様、本当なんですか?」

常陸さんがムラサメちゃんに問いかける。安春さんもみんなの視線が集まるムラサメちゃんの方をじつと見つめていた。

「うむ。今の芳乃は憑代の一つになりたいという想いを受信しておく。つまり憑代に乗っ取られた状態の芳乃であれば、無意識に欠片の元へと向かうわけだ。その後を追えば欠片をまとめて回収することも可能になる。少し危険だが、試す価値はあると吾輩は思う」

「俺は反対です」

幸彦が険しい顔でそう告げた。

「その案は赤く染まった憑代と芳乃様の様子を見て真っ先に思い浮かびました。ですがそれは、芳乃様に囚になれと言っているようなもの。芳乃様に仕える者として頷くわけにはいきません」

「芳乃を囚って、どういうことだい?」

ムラサメちゃんの声が聞こえない安春さんが困惑した様子で問いかける。父親として、娘を囚になんて物騒な話が出たら戸惑うのは当然だろう。

「ムラサメ様は、憑代に取り憑かれた芳乃様に、欠片への道案内をしてもらおうと仰られました。ですがそれは意識のない状態の芳乃様を山の中に入らせることになる。獣の耳が出ている以上、祟り神の襲撃だってあるかもしれない。いや、それ以上の危険だってあるかもしれないんです。ことはもつと慎重に考えるべきだ」

「だがこのままゆっくり欠片を集められるかもわからないのだぞ?憑代がさらに力を取り戻したらどうなるのか。吾輩にだってわからないの

だ。動けるうちに動かなければ、せつかくの好機を逃すことになるかもしれない」

「ワタシもムラサメ様の意見に賛成です」

「菜子……」

にらみ合うように議論をするムラサメちゃんと幸彦の間に常陸さんが割って入る。覚悟をきめたようなその姿を幸彦はどこか悲しそうに見つめ返す。

「芳乃様一人を行かせるわけではありません。有地さんもムラサメ様も、ワタシだつて一緒に山に入ります。ワタシたちが必ず芳乃様をお守りします。それとも幸彦は、ワタシたちがそんなに信用できない？」

「信用できるできないの問題じゃないんだつ!!」

目を血走らせ立ち上がる幸彦。幸彦がここまで声を荒げるなんて、初めてみる光景だった。俺だけじゃなく、朝武さんもムラサメちゃんも、常陸さんまでもが声を荒げる幸彦に驚いていた。

「穂織の山に残っている全ての欠片が祟り神になっている可能性だつてあるんだ。何十何百の祟り神に囲まれて無事で済むわけがない。最悪……死ぬかもしれない。そんな場所に君たちを送り出せつて? そんなことできるわけないだろつ!!」

俺は何も言えなかった。いや、この場にいる誰もが何も言えなかった。沈黙が場を支配する。

「……芳乃は、どう思うんだい?」

と、今まで話の流れに口を出さず見守っていた安春さんが問いかける。

「私?」

「うん。芳乃はどうしたいのかな?」

「私……私は……この呪いが解ける可能性があるなら、それに賭けたい」

顔を伏せながらも、その手がキュツと強く握りしめられる。

「幸彦の言う通り、危険なのはわかってる。私のせいで、菜子も、有地さんも、危険にさらすことも……。でも私はつ、私の手で呪いを解き

たい！ひどい我儘かもしれないけど、それが私の想いです！」

隣に座っている俺だからわかる。震えているんだ。強く拳を握り、覚悟のある目で訴えかける朝武さんが。

思わず俺は彼女の手を握る。

「俺が、朝武さんを守る。幸彦、行かせてくれ。朝武さんは俺が命に代えても守ってみせる！だから……」

幸彦の鋭い視線とぶつかり合う。でも、ここで逃げるわけにはいかない。ここで逃げるようじゃ、きつと朝武さんを守りきることなんてできやしないんだ。

「幸彦君、ありがとう。芳乃のことを心から心配してくれて。でも僕は、芳乃の意見を尊重したい。真つ当な親なら、娘を危険に晒すなんてしてないだろうし、僕自身、葛藤はある。でも初めてなんだ。芳乃が呪いに関して、自分の気持ちを打ち明けてくれたのは。今までは、それが運命なんだって、そんな顔してた芳乃が、自分から呪いを解きたいって言うってくれたんだ。僕は芳乃の意思を、芳乃を変えてくれた将臣君たちを信じたい。だから、この通りだ」

安春さんが幸彦に頭をさげる。

その姿を見て、幸彦は大きく息を吐きその場に座った。その様子はどこか自分を落ち着かせようとしているように見えた。

「安春様にそこまで言われたら、反論なんてできるわけじゃないじゃないですか……。有地」

「は、はい！」

「命に代えてもなんて言葉、二度と口にするな。帰ってくるなら全員一緒だ。いいね」

「それって……ムラサメちゃんの意見に賛成してくれるってこと？」

「不本意だが、そういうことだ。だけど二日……いや一日だけ待ってくれ」

幸彦はそう言うと言わぬ顔から一枚のお札を取り出し、赤く染まった憑代に翳かきした。すると、たちまち憑代から赤みが引き普段通りの憑代に戻った。

「幸彦、これって？」

「靈力を抑える護符だよ。簡易的なものだけど一日ぐらいなら憑代の信号を抑えることができる」

幸彦はそのまま居間から出て行くこうとする。

「幸彦？ いったいどこへ行くんです？」

「何も対策もせずに送り出すなんてできない。俺は俺なりに、俺が出来る最善の手を尽くすまでさ」

幸彦はそのまま家を出て行ってしまった。

「まったく、意地っ張りなところは相変わらずですね」

「その割に嬉しそうだが？」

「あ、あはあ。そうですね？ でも、久しぶりに幸彦が自分の気持ちを素直にはなしてくれたなあって思ってる」

またあの顔だ。常陸さんが愛おしむような表情をみせるのは決まって幸彦のことを話す時だ。今日はいつもより少し顔が赤いけど、そこに突っ込むのは野暮だろう。

常陸さんの話を聞き終えるとムラサメちゃんは俺たちに深々と頭をさげる。

「芳乃、茉莉、それにご主人。すまない。幸彦のいう通り、この作戦は危険が多い。幸彦が怒るのも当然だった」

「謝らないでください、ムラサメ様。私も、私がそうしたいって我儘を言ってしまったんですから同罪です」

朝武さんの言葉に俺も常陸さんも頷く。誰が悪いなんてことはない。ムラサメちゃんも幸彦も、俺たち全員のことが大切だからこそ、お互いに譲れないものを持っていただけなのだから。

「それから……お父さんも。ありがとう。」

「ううん。僕も僕の我儘を言っただけだよ。偉そうなことを言っても、僕には待つことしかできないから」

「そんなことない。お父さんが待っていてくれるだけで、私の力になるんだから」

「芳乃……」

目頭を押さえる安春さん。この二人は本当にいい親子だ。何時ぞやか幸彦が言っていたことを思い出す。この二人に仕えることがで

きて幸せだと。その通りだと思う。俺も穂織で朝武さんや安春さんみたいな素敵な人たちに会えてよかったと思う。

「あのく、感動的な場面で大変恐縮なんですが……。あはあ♪芳乃様と有地さんはいつまで手を握っているつもりですかあ？」

「……………ツハ!?!」

「うんうん。婚約関係も順調でお父さん嬉しいよ」

「吾輩もそろそろ気を使ってご主人の部屋に入らなければいけないのう」

一瞬で真っ赤になる顔。慌てて手を離れたが朝武さんの目を見れない。朝武さんとの関係が進むには、まだもう少し時間がかかりそうだ。

第二十七話 「それぞれの戦い」

——ああ、これは夢だ。

俺は妙に冷めきった頭で思考する。夢の中で思考するなんておかしな話だが、現状を言い表すのに適した言葉だ。

俺はよく夢を見る方だと自覚しているが、夢の中で「自分は今夢を見ている」と実感することは滅多にない。

しかし、目の前で膝を抱えて泣いている少年を見たとき、俺は思ったのだ。これは夢だと。

だってそうだろう？過去・の自分・を俯瞰ふかんで見下ろせるはずがない。

そう。あの少年は俺だ。菜子と芳乃様を見捨てて逃げ帰ってきた、ただただ弱虫で不甲斐ない、あの頃の俺。……まあ、今の俺が言えたことでもないけどな。

——おい、人間。貴様こんなところで何をしている——

何処かで聞いたことのある声に、俺は思わず振り返る。

——あの娘たちはお前の大切な存在なのであろう？

それなのにいつまでこんなところで蹲すまっているつもりだ——

その声はどうやら俺ではなく、そこにいる少年おれにかけられた言葉だった。

……思い出した。

俺はあの日、忘れもしないあの事件の日、この声を聞いた。

悔しさと後悔で押しつぶされて、いつそ消えてしまいたいと塞ぎ込んでいた俺は、確かにこの声を聞いたんだ。俺はこの後、声の主を探して森へ入り、結果的に菜子たちを助けることになった。

……いや、少し違うな。

あの時俺は、その声の主と思われる姿をこの目でしっかりと確認している。そいつの正体はたしか……。

そこまで考えたところで、目の前の景色がグニヤリと歪む。気付くと今度は診療所の中にいた。部屋はぐしゃぐしゃ。薬品棚のガラスは割れて薬品が床に転がっている。

「——あぐツ!？」

「茉莉!？」

目の前がはつきりしたところで鈍い音と共に茉莉が壁に叩きつけられ、俺が叫ぶ。

これは診療所に祟り神が発生した日の記憶か？また嫌な光景を思い出させてくれる。夢とわかっていながらも頭に血が上っていくのがわかった。

——何をぼさつとしている。貴様の大切な娘なのだろうか？

ならば恐れるな。力を使え。貴様の力で守ってみせろ。

飲み込まれずに受け入れろ。まずはそこからだ——

またもや聞こえてくる声。

そう。あの時も、俺は確かにこの声を聞いた。

あの時は怒りで頭がいっぱいで気が付かなかったが、10年前の事件で聞いた声と、この間の診療所で聞いた声は同一のもののように思えた。

だとすると俺は、知らず知らずのうちにこの声に二度も助けられていたことになる。

そして俺は、この声の主を既に知っている。

だが、だとするとますますわからなくなる。

俺の知っているそいつは、人一倍俺たちを恨んでいてもおかしくない。実際、俺が散々会話を求めたって拒絶されてばかりだ。

それなのに、なぜ?——

夢はそこで終わり、俺は自宅の作業机で目を覚ます。
どうやらいつの間にか眠ってしまったらしい。外は薄っすらと明る
くなっていた。

寝起きにしては妙に覚めた頭で俺は夢の内容を思い返す。

「君は一体、何を望んでいるんだ」

神職の朝は早い。

日の出より前に起床してから神社の清掃を行うのが、僕の日課だ。
綺麗にすれば気持ちが良いだけでなく、場を清めることにもつなが
る。特にこの穂織は穢れが集中しやすいようで、日々の清掃お清めはとても
大切なのだ。

それが僕のライフスタイルだったのだが、今日はいつもとより早く起
きて、日の出前には神社の清掃を終えていた。

今日はもう一つ、やっておきたいことがあったから。

清掃や祝詞を済ませて神社を出ると、幸彦さんと彼の式神である猫
丸の姿があった。

「おはよう、幸彦くん。待たせちゃったかな？」

「おはようございます、安春様。自分も今来たところですよ」

「忙しいのにこんな朝早くに呼び出してすまない。穂織の结界だけ
ど、念のため今一度確認しておきたくって。僕も一応は専門家だけ
ど、幸彦くんほど神力は使えないから」

今日の夜行われる大事な作戦を遂行するにあたって、穂織の街を

覆っている結界の起点を点検してほしいと、幸彦くんにはあらかじめお願いしていた。

祟り神の恐ろしさは、僕もこの身をもって体験している。もう何年も前の話だ。

秋穂がいなくなり、半ば自暴自棄になって自ら森へと入っていったことがある。

祟り神を一目見ただけでわかった。

これは僕がどうにかできる存在ではないと。

力のない僕はなすすべもなく大怪我を負った。あの時はいろんな人に迷惑をかけたし、芳乃も泣かせてしまった。

命を落とさなかったのが奇跡だと今でも思う。

忘れてはならない。対抗する術すべを持たない人間には、それほど危険な存在なのだ。

あんなものが街に入ってくればどうなるか。考えるだけで恐ろしい。

そんな自分にできる精一杯の行動がこれだ。

僕の我儘に付き合ってくれる幸彦くんに頭をさげる。

「お気になさらないでください。俺も確認したいと思ってましたし、何より神職の安春様がいれば心強いです」

「そう言ってくれると僕としてもありがたいよ。それじゃあ行こうか」

いつもは祭祀さいしのために使う車で街中を移動する。小さな街といっても街の端々にある結界の起点を巡ることになれば歩きでは時間が掛かりすぎる。芳乃たちに無駄な心配をさせないためにも、早めに終わらせて芳乃が起きる前には家に帰っておきたかった。

助手席に座る幸彦くんは何も語らない。ただ黙って膝の上に乗っている猫丸を優しく撫でている。

「幸彦くんはこの後どうするつもりだい？」

何とは無しに僕は幸彦くんへ語りかけた。

「この後ですか？」

僕の質問に幸彦くんは少し考え、普段と変わらず毅然と答える。

「いつも通り、俺にできることをできるだけやるだけです。あとは玄十郎さんや師匠たちに夜の見回りを強化してもらおうようお願いに行くぐらいですかね。念には念を入れて」

彼にとつての『できることをできるだけ』がどれほどのものか。幼い頃から彼を知っている身としては少し心配になった。

「見回りの件については僕が皆さんにお願いしにいくよ」

「い、いえー安春様にそのようなことをさせるわけにはっ」

「あはは、そうかしこまらないですよ。むしろ、それぐらい僕にやらせて欲しい。ダメかな?」

「……わかりました。それでは、街の見回りの件に関しては安春様にお任せします」

不本意だと表情に出ている幸彦くん。少し強引だったかな。

幸彦くんの仕事を譲ってもらったのは彼に対しての気遣いか、それともこれも僕の我儘か。どちらでもいい。これ以上彼に任せっぱなしというわけにはいかないという思いは本心だった。

昨日もずっと部屋に閉じこもっていたとみづはくんから聞いたし、子供達に全て任せてしまうなんてことはしたくない。

「作戦に賛成した僕が言うのもおこがましいけど、あまり無理はしないでくれよ。幸彦くんはもつと僕たち大人を頼っていいんだ」

「……ありがとうございます。でも、本当に無理はしていませんから。ちゃんと休憩も食事もとりましたし、睡眠も、熟睡はできませんでしたがちゃんと取りました」

幸彦くんは少し照れたような、それでいて悔しがるように言葉を続ける。

「これ以上、あいつを泣かせるわけにはいきませんから」

幸彦くんの言う『あいつ』が誰なのか。彼と少しでも過ごしたことがある人なら、それが誰のことを指し示すかは明白だった。

守りたい。でも悲しませたくない。

そんな感情の間で揺れる彼の気持ちだが、僕には痛いくらいわかってしまった。

作戦は日が落ちてからということになった。

それまでは各自自由行動になる。いつも通りの生活を送るもよし、作戦に向けての準備に使ってもよし。

ムラサメちゃんは今朝から姿が見えないし、常陸さんも朝食を作り終えてから用事があると行ってどこかに出かけてしまった。

そして幸彦も、昨日の朝から姿を見ていない。

朝武さんは舞の奉納をしていた。いつにも増して集中しているその姿からは、彼女の今回の作戦にかける想いが伝わってきた。呪いが解けるかもしれない。それは朝武さんにとって……いや、朝武家にとつて数百年にわたる悲願だ。俺なんかじゃ想像もできないぐらいの大きな想いが彼女の肩にのしかかっているんだ。

俺は、彼女の笑顔をちゃんと守れるだろうか。

漠然とした不安が湧く。

どうにも落ち着かなかった俺は、いつも祖父ちゃんに稽古をつけてもらっている公民館を訪れていた。この時間に公民館を使う人はいない。貸切だ。

俺は正座し目を閉じる。意識を呼吸だけに集中すると、だんだん頭がすつきりしてきた。

もしかしたら今回が崇り神との最後の戦いになるかもしれない。俺は今まで祖父ちゃんに教えてもらったことを思い返す。

体の動かし方や心構え。そして実戦を意識した稽古。

稽古中に祖父ちゃんが言っていた「生き物は何かをするときに何かしらの「起こり」がある」という助言も、最近になってようやくわかるようになってきた。少しは俺も成長してるんだろう。それでも祖

父ちゃんや幸彦には一本も取れてないんだけどね。

しかし、まさか俺がこんな努力するなんて、少し前には考えもしなかった。穂織に来てから、俺の周りは努力家ばかりで。そんなみんなに感化されたんだろう。

俺が瞑想に耽っていると公民館の入り口から声をかけられる。

「やっぱりここにいらしたんですね」

「朝武さん。どうしてここに？」

「姿が見えなかったので探してたんです。玄十郎さんに聞いたからおそらくここだろうって」

今朝舞の奉納をしていた時とは違い、私服姿の朝武さん。その頭にはまだ獣の耳がピョコンと生えていた。幸彦の護符が憑代の力を抑えているにもかかわらず消えないその耳は、祟り神が出現している証拠でもあった。おそらく、今日の作戦で戦闘は避けられないだろう。

朝武さんは遠慮がちではあるが俺の隣へと腰をかける。

「俺を探してたの？」

「はい。ちゃんと謝りたくって。私のせいで有地さんにはたくさんご迷惑をかけているのに、そんなあなたを、私はまた危険な目に合わせようとしている」

「ごめんなさい。と、彼女はまっすぐ俺を見ていった。そのためだけに俺を探し回っていたなんて、相変わらず真面目過ぎるというか。そこが朝武さんのいいところではあるんだけどね。」

「そのことなら気にしないでよ。俺は俺の意思で君を守るって決めたんだから」

「ですがそれでは有地さんに助けて貰えばなしになってしまいません」

「友達なんだから当然じゃない？」

「友達だからこそです！何かお返しできればいいんですが……」

「そんなに難しく考えなくてもいいのに」

「ここまでくると朝武さんが引かないのは、今までの経験でわかっている。何か適当にお返しを考えればいいのだが……。と、ちよつとした冗談を思いつく。」

「だったら、今度俺とデートしない？それで今までのことはチャラつてごとうでござう？」

「デートですか？」

朝武さんがキョトンとする。まあ当然だろう。突然こんなこと言われたら戸惑うに決まってる。後は『もう！からかわないでください！』という反応にごめんごめんと笑って見せればこの話はうやむやにできるはず。

「……………いいですよ」

「あはは！そうだよね！ごめんごめ……………え？」

「ですから、その……………デートしてもいいですよ。有地さんとなら……………顔を真っ赤にして俯く朝武さん。え？なにこの可愛い反応。いや待て。今、いいって言った!？」

「え？ええっ!？ほ、本当にいいの？」

「な、何度も確認しないでください。一応私たちは婚約者なんですから、デートぐらいしたって問題ありません」

「……………うおおおおおっしやああああつ!!！」

俺のやる気ゲージが限界を突破した。今なら祖父ちゃんの稽古を徹夜でこなせる自信がある。

「あ、でもいやらしいことは禁止ですよ」

「しないよ！いきなりそんな冷ややかな目線を送らないで！」

「本当ですか？ムラサメ様が言っていましたけど、有地さん、ムラサメ様の胸を触ったって」

「あ、あれは不慮の事故というかなんというか」

ムラサメちゃん！よりによつて朝武さんにはらすことなだろ！

俺は心の中で毒づいた。

「ふふ、冗談です。有地さんはそんなことしないって信じてますから」

「ひ、ひどいよ、朝武さん」

どうやらからかわれていたのは俺のほうだったようだ。それにしてもあの朝武さんが冗談なんて。それだけ心を開いてくれたのか。初対面の時を考えると目紛しい進歩だと思う。いや、これが彼女本来の姿なんだろう。

「デートの約束。絶対だからね」

「はい。楽しみにしてますね」

朝武さんが小指を前に出す。これは、いわゆる指切りというやつか？恐る恐る自分の小指を朝武さんの小指に絡ませる。

「どうしてでしょう。茉莉や幸彦とはよくしてたのに、恥ずかしいです」

照れたように笑う朝武さん。そんな彼女を見ていたら、漠然とした不安なんてなくなっていた。彼女の笑顔を俺は必ず守るんだと、改めて誓うのだった。

「まあ……大胆」

「ご主人もやる時はやるではないか」

「二人とも、出歯亀はよくないぞ」

「それなら幸彦だって同罪でしょ？」

「そうだそうだ！」

「俺は芳乃様の護衛として仕方なく見ているだけです」

「それならワタシも護衛だから大丈夫だね♪」

「吾輩もご主人の保護者みたいなものだ。安心せい」

「……いいかい二人とも。こういうのはもっと大人になってからだな……」

「失礼な！吾輩はもう立派なれでいーなのだ！」

「あは、つまり幸彦はもう大人の階段を上っていたんですねえ。一体誰とその階段を登ったんですか？」

「ちよ、茉莉？クナイは物騒だからしまおうな？」

聞き覚えのある声が三つ。武道館の入り口から聞こえてきた。

朝武さんは顔を赤くしながら慌てて声のする扉の方へ駆けていき、勢いよく扉を開く。

そこには聞き耳をたてる幸彦たちがいた。

「あ、あはあ……こんにちは、芳乃様……怒ってます？」

「~~~~もうっ!!今日という今日は許さないんだからっ!!!」

「まずい!逃げるぞっ」

「こらー!待ちなさい!」

幸彦たちなら俺らに気づかれないうちに盗み聞きするのなんて簡単だろうに。そうしなかったのは、朝武さんの緊張をほぐすためか。はたまた、仕える主人の意外な一面について気配を殺し忘れたか。……あの三人なら両方あり得るな。

元気に走り回る朝武さんたちを見ていたら、自分の肩の力が抜けていくのがわかった。



夜。とうとう作戦実行の時間が来る。

俺たちは朝武さんの部屋に集まり、そして――

「寝たか？」

「……まだです」

「寝ましたか？」

「……だからまだ」

「寝た？」

「……もう！なんなんですか!?!嫌がらせですか!?!こんなに大勢の人に見られながらすぐに寝れるわけないじゃないですか!!」

追い出されてしまった。



「作戦前に何をやっているんだ、君たちは……」

「いやあ、つい」

幸彦が呆れたようにため息をつく。

いや、悪気はなかったんだよ？俺も作戦前で緊張してたし。決して

朝武さんの寝顔を拝めるチャンスとか思ってたませんか」

「ご主人、声に出てるぞ」

「はあ。本当なら小一時間説教したいところだが、まあいい。芳乃様のことは茉莉と姉さんに任せて、俺たちは作戦概要のおさらいをしておくぞ。と言つても、ほとんど予想のつかない、運頼みの行動だけだな」

幸彦の纏う雰囲気が変わる。所謂仕事モードだ。自然と居間の中の空気が引き締まる。

今夜、朝武さんの体を一時的に憑代に明け渡す。そして憑代同士が惹かれ合う性質を利用して穂織の山に散らばっている憑代の欠片へと道案内させる。

文面だけ見れば簡単のように思われるが、当然、問題はある。

まず、今回の作戦にはタイムリミットがあるということ。

憑代に体を明け渡すのは決して安全とは言えないらしい。朝武さんの体のことを考えるなら最長でも1時間以内に欠片を見つける必要がある。それ以上時間をかけると魂が憑代に侵食されかねない。幸彦はそう言った。

そして、不確定要素が多すぎることも問題だ。

本来崇り神が出現することで現れる朝武さんのケモノの耳。それが昨日から出ずっぱりになっている。しかし憑代の力が予想以上に高く、ムラサメちゃんでも崇り神の気配を辿れないらしい。

つまり今、穂織の山の中にどれだけの崇り神が発生しているのかわからない状態なのだ。いつも以上に警戒しながら山を歩かなければならないだろう。

こちらが欠片に惹かれるのではなく、欠片がこちらに惹かれる可能性だつてある。その場合、多数の崇り神と戦うことになるかもしれない。

「今まで以上に危険な戦いになる。覚悟は出来てるな、有地」

「おう」

俺の返事に幸彦は満足気に、しかし真剣な顔で頷いた。

「万が一の為に姉さんはここで待機している。本堂では結界が弱まら

ないように安春様が祝詞のりとをあげている。街の警護も玄十郎さんや師匠達がやってくれている。もちろん俺も、最低限の障害は取り除いたつもりだ。だけどここから先、俺たちは待つことしかできない。脅すつもりはないが、不測の事態が起きる可能性も十分ある。そのことだけは忘れないでくれ。くれぐれも——」

「怪我だけはするな、だろ？」

「おお、ご主人もよくわかるようになってきたな」

俺たちの反応に幸彦は少し大きめに咳払いをする。常陸さん曰く、幸彦の照れ隠しの一種らしい。

「そこまでわかつているなら、俺から言うことはもうない。それに、どうやらそろそろのようだ」

幸彦がそう言うのと、朝武さんの部屋の方から慌てたように駆け寄る足音が聞こえて来る。そして勢いよく襖が開かれ常陸さんが顔を出した。

「みなさん！すぐにいらして下さいっ！」

「呼吸も正常、脈拍も問題はないね」

みづはさんが目を醒ました芳乃様の様子を診る。芳乃様は誰の言葉にも反応はせず、ただ焦点の合わない目を開いたまま微動だに動かない。

「二種の催眠状態に似ているかな。まさか本当に憑代に体を明け渡してしまうとは」

「朝武さんは大丈夫なんですか？」

いつもとは明らかに様子の違う芳乃様を見て、有地さんが心配そう

に問いかける。

「今のところはね。でもここからは幸彦の言う通り、何が起きるかわからない。申し訳ないけど、私にできることはここまでだね」

申し訳なきそうに俯くみづはさん。ワタシたちは落ち込む必要はないと声をかける。

「あとはワタシ達のお勤めです。みづはさんがいてくれるだけで心強いんですから」

「ありがとうございます。怪我はしてほしくないけど、何かあれば私も全力を尽くすよ。駒川の名にかけて」

「姉さんの言う通りだ。茉莉、有地、ムラサメ様。あとはよろしく願います」

と、そこで芳乃様がワタシ達のことは目に入らない様子のまま、ゆったりと動き始めた。

「後を追うぞ」

ムラサメ様の一言で、有地さんとムラサメ様はそのまま芳乃様を追いかけていった。ワタシも続こうと部屋を出そうとすると後ろから声がかけられる。

「茉莉」

「幸彦？どうしたの？」

「いや……気をつけてな」

今にも泣きそうなその姿は、昔と変わらぬ幼馴染の姿だった。

ワタシは努めていつも通りに返事をする。

「あは、心配してくれてありがとう。行ってきます」

「ああ、行ってらっしゃい」

ワタシは振り返らずにムラサメ様達を追いかけた。



いつもお勤めで夜の山にはよく入っている。でも、今日の穂織の山はいつもよりも不気味な暗闇に包まれていた。

芳乃様はその中を迷いのない足取りで進み続ける。

「どこまでいくんだろう」

「気を抜くでないぞ、どこに祟り神がいるかもわからん状態だ」

「わかってる」

ワタシ達は周囲を警戒しながら芳乃様を追いかける。

山の中腹あたりまで来た頃だろうか。少し開けた場所で芳乃様は立ち止まり憑代を掲げる。憑代はその赤い輝きをどんどん強め、ついにはその光が爆発した。

「……………ツ!?今のは?」

「憑代から一段と強い気配の波が広がったぞ」

「つまり、これから何かが起きるといいうわけですね」

緊張が走る。ワタシはクナイを構え、有地さんは叢雨丸にムラサメ様を宿らせる。同時に藪の中をガサガサと動き回る気配が近づく。

「俺が前が出る。常陸さんは朝武さんを」

「わかりました」

芳乃様を庇うように前が出る有地さん。再び叢雨丸を構えなおしたその時、奥から祟り神が姿を表す。

「せあつ!!」

油断ない動きで有地さんが先制攻撃を仕掛ける。この数週間できらに磨きのかかった有地さんの動きは、どこか幸彦の動きに似たものがあった。

祟り神から慌てたように繰り出される触手を冷静に去なす有地さん。すぐさま懐に入り込むと容赦ない一振りを祟り神に浴びせる。祟り神は霧のように霧散する。後には欠片だけが残っていた。

「これで終わりかな?」

『決めつけるのは早計だ。今のは憑代の信号に引き寄せられたものの一つだろう』

「芳乃様に変化は見られませんし、そう考えたほうがいいですね」

そこまで言ったとき、再び藪をかき分ける音とともに近づく黒い気

配。

『ご主人!』

「わかってる!」

藪からは数本の黒い触手が放たれる。気を引き締めていたおかげでその全てを払いのけることに成功するが、藪から出てきた祟り神の数に思わず息を飲む。

目の前には5体の祟り神がジリジリと迫ってきていた。

「これは……想定していた最悪の状況じゃないか?」

「あ、有地さん。残念ですが想定以上かもしれないよ」

「なっ!?!」

背後から迫る黒い気配。ワタシはその気配を見逃さなかった。5

……いや最低でも7体以上の気配が迫ってきている。

「じよ、冗談だつて言ってくれないかな?」

「ワタシ、冗談は好きですが、この状況でそんな悪趣味な冗談なんて言いませんよ」

『い、いかんぞ。気配がどんどん濃くなってきておるつ。ご主人!』

「このままじゃ囲まれますっ」

「「……………」」

選択肢はもう、一つしかなかった。

「逃げようっ!!」

ワタシ達が踵を返して走り出すのと同時に、多方面から触手が降り注いだ。先ほどまでワタシ達がいたところは土煙で見えなくなる。

ワタシは叢雨丸を有地さんから預かり、有地さんは芳乃様を抱えて脱兎のごとく走り去る。

「ムラサメ様、有地さん!こっちへ!」

ワタシは二人を先導してある場所まで走る。こんなときのために、彼は準備をしてくれたのだから。

「ふえ……あ、あれ?私さつきまでお布団で寝ていたはず……つて、

あ、あ、有地さん!?!なんで私有地さんに抱かれているんですか!?!ち、近いです。もう少し離れてください」

「朝武さん!今緊急事態だから!あと、そんなにしゃべっていると舌嚙

んじやうよ!」

どうやら目を覚ました芳乃様が慌てふためいている。こんな状況でなければ非常に微笑ましいのですが、そんな余裕はなかった。

「説明はあとで!今はこの状況はどうにかします!」

「この状況?……って何ですか!?!崇り神の波がすぐそこまで!」

「わかっておる!菓子、まだ着かないか?」

霊体に戻ったムラサメ様がワタシに問いかける。

「ムラサメ様っ。もうすぐ例のポイントです!合図と共に神力を!」

「承知した!」

あと数十メートル。あと数メートル。

そして背後から数多の触手が襲いかかる。

「今ですっ!」

ワタシの声に合わせムラサメ様が手を叩く。触手がワタシ達を捉える瞬間。光の柱が現れ追いかけていた数体の崇り神を囲む。

崇り神は苦しむような声をあげてその場から動かなくなる。

「い、今のは!?!」

「幸彦の仕掛けた罠だ。吾輩の神力に反応して術式を起動させ結界を発生させた。これで数分間は足止めできる」

「いつの間にそんなものを……って、昼間見かけなかったのはこれをしにかけてたから?」

「ご名答。幸彦がどうしてもと言って聞かなくてな。だがおかげで助かった」

有地さんはまだ信じられないといった顔で間の前の光を見ている。かくいうワタシもここまで大きな術を見るのは初めてだった。一体いつこんなものを覚えたのだろう。ここにはいない幼馴染に半ば呆れ、その倍感謝をしながらワタシは行動を促す。

「とりあえず、距離をとりましょう。ここにいる崇り神が全てとは限りません」



その後何回も崇り神の群れに遭遇しては、幸彦が作った罾を利用して逃げることに成功した。

「ぜえーはあー……ぜえーはあー……すうう、はああ」

「ご主人、大丈夫か？」

「はあ、はあ……な、なんとか。体力作りして、おいてよかつたよ」

「あ、有地さん、もう大丈夫ですから、その……そろそろ下ろしてもらえますか？」

「あ、ゴメン」

有地さんはゆっくりと芳乃様を下ろす。

いまだ戸惑う芳乃様にワタシはこれまでの状況を説明した。

「それで、あの数の崇り神が……」

「最悪のケースになってしまった。すまない。吾輩がこんな作戦を立てたばかりに」

「ムラサメ様のせいではありません。私たちだって賛成したんですから、私たちだって同罪です」

「そうですよ、ムラサメ様。むしろ今は、この状況をなんとかするのが先決です」

おそらく山の中の欠片全てが崇り神になってしまったであろう今、この窮地を逃れるにはどうすればいいのか。ワタシ達は頭をフル回転させ考える。

こうしている間も、崇り神はこちらに迫ってきているのだ。

「幸彦の罾は使えないかな？あれで崇り神を倒すのは——」

「難しいであろうな。確かに高度な術だが、崇り神を祓うほどの力はないと幸彦本人が言っておった。吾輩の神力が込められているから多少は弱体化できるだろうが、ここは穂織の山。悲しいことに穢れはすぐに回復するだろう」

「そんな……」

「でも、時間稼ぎには最適ですよね」

ワタシの発言にみなさんの顔がこちらに向く。

「崇り神の動きを封じているうちにできるだけ数を減らす。それしか方法はありません」

他に良案は思いつかなかった。持久戦になるが、幸彦が仕掛けてくれた罠はまだまだ残っている。有地さんたちはまだ悩んでいるようだが、どうやら敵は待つてくれないらしい。

気がつくとも目の前にはワタシ達を追ってきた崇り神の群れがいた。ここままで数十体にその数を増やしている。

すぐに襲い掛かることはなく、今までの罠を警戒しているようだった。

その時だった。

一体の崇り神が耳をつんざくような不快な高音を発する。同時に憑代が赤く妖艶に輝く。それを合図に周辺の崇り神が泥のように溶け出し、一つ、また一つと合わさっていく。

「え……？」

声をあげたのは誰だったか。おそらくその場にいる全員が目の中の崇り神の行動に目を見張る。

泥は一つになり、姿形を大きく変えた。

そこにいるのは、黒い、一体の大きな山犬だった。

「診療所で見たのと同じ?!いや、それにしてもかすぎるような」

「まさか、合体までできるとは……」

崇り神は動かない。こちらの出方を伺っているようだ。まるで生きて意思を持っているように。

「みなさん落ち着いてください。これはむしろチャンスです」

「チャンス?」

「1対多数より1対1の方がやりようはあります。それに、ワタシ達はある状態の崇り神の攻撃パターンもすでに知っている」

「確かに、今はみんな武器もある。あの時みたいに一方的にやられることはない?」

「そういうことです」

もちろん、だからと言って安心できる相手ではない。大きさも診療所の時より大きくなっていて、手数も増えている可能性もある。しかし、ここで心が折れてしまえば、勝てるものも勝てなくなってしまふ。

きつと幸彦ならこう言つてワタシ達を鼓舞するだろう。

でもここに幸彦はいない。なら、一番戦闘経験があるワタシが、みなさんを引つ張らないといけない。

ワタシ達が武器を構え直すと、崇り神はゆっくりと姿勢を落とし、狙いを定める。

「危ない！」

「下がって！」

「きゃっ」

芳乃様をかばいながら後ろに下がる。直後崇り神の尻尾が地面に叩きつけられ大きなクレーターを作った。確実に診療所で見た崇り神より威力が高い。

あれを真正面から受けたらひとたまりもない。

「ワタシが時間を稼ぎます。隙ができたなら、芳乃様は矛鈴で援護を。有地さんはそのうちに崇り神へ攻撃をお願いします」

「時間を稼ぐって……茉子！一体何をするつもり!?!」

ワタシが答えるより早く、崇り神が二度目の攻撃を仕掛けてくる。有地さんはその攻撃に気づき芳乃様を下がらせる。しかし、ワタシは引くわけにはいかない。冷静にクナイを構え、最小限の動きで尻尾の攻撃をいなす。

「芳乃様、尻尾が止まったら矛鈴を！」

勢い余つて叩きつけられる尻尾。

おかげでわずかに隙ができる。

その隙に崇り神へと距離を詰める。

「茉子っ！やめて！お願い!!」

「常陸さんっ！」

『茉子っ!』

芳乃様達の悲鳴にも似た声が聞こえる。だが、ここで止まるわけに

はいかない。

ふと、小さい頃の出来事を思い出す。

『すごいよ、茉莉子!!全然わからなかった!』

『お、大袈裟だよ。こんなの覚えたって全然役に立たないもん……』
『そんなことないよ!茉莉子が必死に修行して覚えたものなんですよ?』
『ならその努力は絶対に裏切らない。僕が保証する!それでも茉莉子のお父さんがひどいこと言ったら、僕が茉莉子のお父さんを怒ってやるんだから』

『……あ、あはあ。い、言ったね幸彦!破ったらまた女装して街中散歩してもらおうから♪』

まだ忍者として未熟だったワタシに幸彦が言ってくれた言葉。とても嬉しかったのを今でも覚えてる。だからなのか。ワタシはこの技だけは誰にも負けない自信がある。崇り神にだって、通用すると確信してる。

崇り神が体をひねり、再び尻尾をワタシめがけて振り払う。

瞬間、ドゴツつと鈍い音と共にワタシの体が叩きつけられる……ように見える。

ワタシが最も得意とする「変わり身の術」

無事に崇り神を騙してさらなる隙を作ること成功した。

遙か上空からクナイを振り下ろし崇り神の尻尾を突き刺し地面に固定する。

「芳乃様!今です!」

ワタシの声にハツとした芳乃様は、慌てて矛鈴を尻尾に突き立てる。

これで尻尾の攻撃は使えない。

「有地さん!」

「わかった!」

すでに崇り神へと駆けていた有地さん。彼の動きも見事なものだった。初めの頃とはまるで別人だ。しっかりと崇り神の動きを見

極めている。

「でつかくなつた分、動作の“起こり”が解りやすいんだよ！」

そう言つて崇り神の攻撃を避けていく有地さん。

いける！

誰もがそう思った。

だからこそ、近づいてくるもう一体の崇り神の存在に、ワタシ達は気がつけなかった。

「グルルルアアアア！」

鋭い爪が芳乃様を狙う。

気がついた時には、ワタシは芳乃様をかばうことで精一杯だった。ワタシと芳乃様は大きく吹き飛ばされる。

抑えていた尻尾が自由になり、有地さんも叩きつけられた。

形勢逆転。まさか巨大化した崇り神がもう一体いるなんて、誰が想像できるだろうか。

「ぐっ……ガハッ」

体が動かない。このままでは……。

ワタシは背後から襲つてきた崇り神に目を向けた。

そこには、普段よりも数倍どす黒い崇り神がいた。視界に入れただけで全身の毛が逆立つ感覚。いつもの崇り神が復讐や怒りの化身だとするならば、この崇り神はまさに悪意の塊だ。

何より、その崇り神は笑っていたのだ。口角を引き上げ不気味に、笑っていたのだ。

ゆつくりと尻尾を振り上げる崇り神。まるでこの状況を楽しんでいるように見えた。

無慈悲にも尻尾を振り下ろされ、そして……。

「させるかああああああつ!!」

突如として現れた幼馴染によって崇り神は殴り飛ばされたのだつた。

第二十八話 「決着」

時間は少しだけ遡る。

茉莉たちを見送った俺は、いつものように山の前で彼女達の帰りを待っていた。

「幸彦、家の中で待ったらどうだい？」

「いいんだ、姉さん。俺はここにいる」

「……そうか」

姉さんが心配して声をかけてくれたが、ここから動く気はなかった。そんな俺の気持ちを察してくれたのだろう。無言で上着だけ俺にかけて神社へと戻っていった。

正直な話、芳乃様たちを山へ行かせたくなかった。

できることはやったつもりだ。あらゆる対策を考えた。

だがやはり1日そこらでは出来ることに限界がある。

何より嫌な胸騒ぎが収まらないのだ。

きつと、今日は何かが起こる。それも悪いことが。そんな考えが頭から離れてくれないのだ。

だからこそ、まだ俺にはやらなければいけないことがある。少しでもこの不安を払拭するために。

芳乃様たちが山に入って10分ほどが経過したときだった。

憑代の気配が大きな波となって押し寄せるのを感じた。それからしばらくして、山のあちらこちらから、よくない気配も強まった。

想定していた最悪のパターンだ。思わず山へ駆け込みそうになるがなんとか踏みとどまる。奥歯を噛み締め、山を睨みつける。

奴らの気配が強くなっている。こんなにも強い邪念をもった祟り神が出てくるなんて。やはりあれだけの準備ではたりなかった。もつと対策を練るべきだった。後悔がどれだけ押し寄せても、それでも俺は山へは向かえない。なぜなら俺の作戦はここからが本番なの

だ。

きつとあいつは現れる。そう信じて待ち続ける。そして数分後、そいつはやはり現れた。

『いつまでそうしているつもりだ？』

脳内に直接響き渡るその声は、どこか苛立ちを含んでいた。気配のする方に少しだけ視線を送ると、待ち望んでいた姿が眼に入る。

白銀の毛に身を包んだ山犬。

伝承において崇り神の源となったと言われている犬神の生まれ変わりであり、現在は俺の式神として現界している狛が、感情の読み取れない眼でこちらを睨みつけていた。

『貴様はいつまで傍観者でいるつもりなのだ、人間』

「……別に、好きで傍観者になっっているわけじゃない」

『ならば何故、貴様はここにいる。何故、貴様を守りたいと願う小娘たちのもとに向かわない』

その問いに皮肉は感じなかった。真っ直ぐで純粹な疑問。それを投げ掛けられている。そう感じた。

俺は穂織の山を見つめながら背後の狛へ向けて答える。

「賭けをしていたんだ」

『賭け……だと？』

「ああ。今の俺じゃ山に入っても彼女たちの邪魔にしかならない。俺は臆病者だから、俺のせいで彼女たちが傷つくのが、たまらなく怖かったんだ」

『……』

狛は訝しげに俺を見る。

そんな視線に構わず俺は話を続ける。

「方法がないわけじゃない。ただ必要なピースが揃わなかった。そのピースは俺が話しかけてどうにかなるものじゃなかった。だから、そのピースが自分から出てくるのを待っていたんだ」

そう。待っていた。

確証はなかったが、そいつは姿を現すと信じていた。

そして、そいつはここに現れた。

俺は豹へ振り返る。同時に隠し持っていたナイフで自分の手のひらを切り裂いた。自分の手から血が地面に滴り落ちる。

瞬間、俺の仕掛けた術式が作動し、豹を中心に五芒星が地表に浮かび上がる。

『……ほう』

突然のことに僅かに驚いた様子を見せた豹だったが、すぐに口元に笑みを浮かべた。

『つまり、この私がここに姿を現すまでが貴様の作戦だったということか』

「ああ、お人好しの君なら俺たちのピンチに姿を現すと思った。君を信じて正解だったよ」

我ながら酷い作戦だ。

相手の好意を踏み躪り、利用する。

有地や芳乃様を知ったらきつと怒るだろう。茉莉も、きつと良くは思わないかな。みんな優しい奴らだから。

「本当ならこんなことしたくはなかった。俺たちのことを恨んでいるはずの君が、どうして俺たちを助けるような行動をとったのか。正直まだわからない。もっと話をして君と分かり合いたかったが、そんな悠長なことを言っていられる余裕はなかったからな」

茉莉や芳乃様を助けるためだ。

俺はそのためならなんだってする。

それがどんなに汚いことでも。誰かを貶める行為であったとしても。

「悪いが無理やりにも言うことを聞いてもらおうぞ」

『そのための術式か。だが、そうやすやすとやられると思っているのか?……!?!』

「動けないだろう?逃すわけにはいかないからな。君を召喚した12年前から俺も成長しているんだ」

これから行うのは式神との契約。だが、幼い頃に俺が行った儀式とは全く異なるものだ。あれは自分の霊力を分け与えることで力を貸してもらっただけだが、今回の儀式は魂レベルで相手を縛り付け、使役

目の前の光景を見て頭に血が上っていくのがわかった。茉莉も芳乃様も、有地までが地面に倒れている。

まさか、俺は間に合わなかったのか？

黒い感情で心が満たされていく感覚。以前にも似たことがあったなど冷めた頭で思考する。

『落ち着け小僧。感情に、力に飲まれるなど前にも教えただろう。それに、小娘らはまだ生きている』

狼の言葉でなんとか自分を保つ。こんなところで暴走なんてしてしろ。救えるものも救えなくなる。

深く深呼吸をして心を落ち着かせ状況を素早く確認する。

巨大化した崇り神が二体。憑代によって引き寄せられた崇り神が合体したのか？どうにかして二体を引き離し、連携を取らせないようにしなくてはならない。

そして地上に横たわる茉莉たちに目を向ける。

狼が言っていた通り、彼女たちはまだ生きていた。

最初に立ち上がったのは茉莉だった。そんな彼女に向けて、見たこともないようなどす黒い崇り神が、その尻尾を振りかぶる。

このまま走っていたら確実に間に合わない。

斯くなる上は……。

「狼っ。俺のことを尻尾で思いつき押し出してくれ。タイミングは俺が合わせる」

「……正気か？」

「いいから早くっ！いくぞー！」

狼はやれやれと勢いよく尻尾を振るう。尻尾の勢いに自分の脚力を合わせ、ミサイルのように崇り神へと飛んでいく。

「させるかああああああっ!!」

そのままの勢いで崇り神へと拳を振るう。自分でも驚くほど崇り神は吹き飛んで行った。

俺の両腕に巻かれている包帯。狼との契約で傷つけた手の応急処置でもあるのだが、安春様が清め、俺が神力を込めたその包帯は崇り

神の穢れにも有効のようだ。

「狛は有地の方の祟り神を頼んだ。絶対、芳乃様と芳乃様の大切な人に怪我をさせるなよ」

『指図するな！小僧』

文句を言いながらも、狛は有地の方にいたもう一体の祟り神へと飛びかかっていった。

「ゆき……ひこ？どうしてここに？あれは……狛なの？」

いきなり現れた俺に混乱しているのだろう。茉莉は目をパチパチさせながら俺と狛を交互に見ている。

茉莉が無事だったことにホッとして笑みがこぼれる。しかし、安心するのはまだ早い。

俺がこの場において狛を召喚している以上、奴らの力は強くなる可能性が高いのだ。短期決戦で決着をつけないといけない。

「説明はまた後で。ここは俺に任せて。それから——」

俺は茉莉に目を向ける。見送った時よりボロボロの姿。気がつけば無意識に、俺は彼女の頭を撫でていた。

「遅くなってごめん」

ここまで頑張って芳乃様を守ってくれた幼馴染に感謝と決意を込めて声をかけ、俺は俺が殴り飛ばした祟り神に向かって駆け出す。

力を使うことを恐れるな。俺のせいで相手が強くなるのなら、俺はその上をいくまで。茉莉や芳乃様を守る為に鍛えた俺の全てを以ってこの危機を乗り越える。

「有地さん！有地さん、しっかりしてください！」

「ご主人！目を開けるのだ！」

「ん……」

朝武さんとムラサメちゃんの声がする。起きなきやいけないのに、体のあちこちが痛んでうまく動けない。とりあえず目だけでも開けないと、朝武さんに心配かけちゃうな。

そう思い目を開くと朝武さんの顔が視界を埋め尽くしている。こんな近距離で女の子の顔を見たのは生まれて初めてかもしれない……って近い近い！

「うわああ！」

慌てて起き上がるが、そういえば身体中痛めていたのを忘れていた。

「痛ったたた」

「だ、大丈夫ですか!？」

「だ、大丈夫、大丈夫」

とりあえず笑ってごまかす。

こんなことで慌ててちや男として恥ずかしいだら俺。そもそもどうして俺は朝武さんに膝枕してもらってたんだ？

深呼吸して今の状況を必死に思い出す。たしか、崇り神の動きを止めて、俺がトドメを刺そうとしたら、もう一体別の崇り神が出てきて……。

「朝武さん！怪我はない？崇り神に吹き飛ばされてたけど……」

「はい。菜子がかばってくれたのでなんとか」

「人の心配より自分の心配をしろ、ご主人。至近距離である崇り神の攻撃を食らったんだぞ？」

「……どおりで身体中痛いわけだ」

「い、痛むんですか!？」

朝武さんがグイッと身を乗り出す。

だ、だから近いって朝武さん。

「えっと……動けないほど痛むわけじゃないから」

「本当ですね？戻ったら絶対みづはさんに診てもらってくださいね」

「わかってるって。それより、崇り神は？」

「……あれをしろ」

ムラサメちゃん指差す先には、俺たちを背に崇り神と戦う、大きな白い山犬の姿があった。

「あれって……」

「あれは幸彦の式神です」

俺たちを庇うように立っていた常陸さんが答える。その視線の先には、一人でもう一方の崇り神と戦っている幸彦の姿もあった。

「幸彦!? あいつなんでここに」

「吾輩たちを助けにきたようだ。救われたのは事実だが、無茶しおつて」

見ると幸彦はなんの武器も持たずに素手で戦っていた。その腕には包帯が巻かれているが、それだけである。今も尻尾に狙われながらも紙一重で避けて攻撃を食らわしている。

鬼気迫る表情で戦う幸彦。冷静に相手の攻撃を見極め、的確に守りと攻めを使い分けている。一歩間違えば大怪我では済まないかもしれないのに。そんなことを臆する様子はどこにもない。

あれが幸彦の本気。

改めて自分のライバルが遠い存在であるのかを実感した。

一進一退の攻防。いや、幸彦の方が若干押しているまでである。

でも、それもいつまで持つかはわからない。少しではあるが幸彦の息が上がり始めているのだ。

「有地さん、まだ動けますか?」

「もちろん。俺も幸彦の加勢に——」

「いえ、有地さんは芳乃様の護衛をお願いします」

常陸さんは幸彦から目を離さない。

「幸彦のところにはワタシが行きます。いえ、行かせてください」

「葉子……」

心配そうに声をかける朝武さんに常陸さんは優しく笑いかける。

「申し訳ありません、芳乃様。ワタシの我儘をお許しください」

「ううん。謝らないで。だけど約束して。絶対、絶対幸彦と一緒に——」

「戻つてきます。ワタシたちが芳乃様を置いてどこかに行くなんてありえせんよ」

慈愛に満ちた表情に思わず見とれてしまう。

その顔を見るだけで、常陸さんがどれほど朝武さんを大切に思っているのか理解できた。何年も一緒にいたからこそその信頼関係。たまに三人の関係が羨ましく思える。

その時だ。

まるで二人の会話を理解でもしていたのか。崇り神が行かせまいと黒い尻尾を常陸さん目掛けて伸ばす。

当たればひとたまりもない一撃だが、その攻撃は幸彦の式神である狛によって防がれる。

『人間の小娘よ。行くなら今だ』

「ありがとう。狛も芳乃様をお願いします」

『ふん。本来であれば朝武の者を守るなど虫唾が走る行為だが、悲しいことに小僧に命令されてしまったのでな。死なせない程度には守つてやるさ』

そんな短いやり取りをした後、常陸さんは幸彦の元へと駆けて行った。

『さて、ではこちらもそろそろ終わらせるとしよう』

「グルアアアアアアアアア」

狛が崇り神の尻尾を簡単に切り裂く。

悶える崇り神。耳を塞ぎたくなるような唸り声を上げる。

狛はそんなことに動揺することはない。崇り神の頭に容赦なく自分の尻尾を叩き込む。

『苦しいか？憎いか？貴様は今何を感じている』

「グルアアアアア！コロス！コロシテヤル！オレノフクシユウハマダオワラナイ！」

『俺の復讐？違うな。悪いがその感情はもともと私のものだ。貴様は私からこぼれ落ちた残りカスのような存在。だから、返してもらおうぞ』

狛は大きな口を開けその鋭い牙で崇り神の喉元に齧り付く。

悲痛な声を出しながら必死にもがく祟り神。しかし狛は離さない。捕食。まさに今、目の前で祟り神が喰われていた。

思わず俺は目を逸らし、朝武さんの目を自分の腕で覆う。

再び目を向けたその場にはやや不満顔の狛と大きな憑代の欠片だけが転がっていた。

『ふう……妙だな』

「な、何が妙なんだ？」

『……気安く話しかけるな。人間風情が。貴様が気にすることじゃない』

殺気の籠った視線。

本当にこれが幸彦の式神なのか？人懐っこい猫丸と大違いだ。いや、猫丸も特定の人になつかないんだっけ？

狛はそのまま不機嫌そうにその場に丸くなる。

「おい！幸彦を助けに行かないのかよ」

『小僧からの指示はこの祟り神を倒すことだけだ。後のことは知らん』

「な、そんなのって」

『勘違いしているようだがな、私は契約上仕方なく行動を共にしているだけだ。そして命令は遂行した。私の休憩を邪魔するなら、その朝武の娘を食いちぎってもいいんだぞ？』

狛の言葉に息を飲む。これはきつとハツタリじゃない。

俺は黙って叢雨丸を構えた。たとえ幸彦の式神だろうと、朝武さんに手を出させるわけにはいかない。

俺の様子を見て狛はチツと舌打ちする。

『貴様を見ていると気分が悪くなる。小僧も哀れなことだ。ではな、人間』

「あ、おい！」

そのまま狛は姿を消してしまった。

「なんなんだよあいつ」

「有地さん。今は幸彦たちのところへ行きましょう」

「吾輩も芳乃様の意見に賛成だ。まだ吾輩たちにもできることがある

かもしれん」

「……そうだね」

俺は落ちていた憑代の欠片を拾い上げる。その欠片の大きさにどこか違和感を覚えたが、今は幸彦たちを助けるのが先決だ。俺たちはまだ戦っているかもしれない幸彦たちの元へと向かったのだった。

大きな尻尾を鞭のように叩きつける崇り神。その攻撃をギリギリで去なしつつ、俺は崇り神との距離を詰めて、一撃、また一撃と、崇り神へと拳を叩き込む。

勢いをつけた尻尾の打撃は強力で、叩きつけられた地面はひび割れ、木々をも簡単に砕いてしまう。真正面から受ければ骨の一本や二本簡単に折れてしまうだろう。少しでも集中を欠けば命取りになる。それでも俺は近づくしかない。この戦いを長引かせれば、それだけ俺自身に不利になる。一撃でも多く、こいつに叩き込む。

『ガウツ！』

崇り神もやられっぱなしというわけではない。奴の懐に入り込むと、鋭い爪を持った前足で俺を切り刻もうとする。その動きは予想以上に早く避けることは難しい。

「っ!? 吹き飛ばっ！」

懐から取り出したのは破魔はまの札。

俺のご先祖様から代々伝わるその札には俺の霊力が込められていて、その名の通り、魔を打ち払う力を持つ。

破魔の札が崇り神に触れた瞬間、崇り神は後方へと弾かれた。

「はあ、はあ。くそっ、このままじゃまずいな」

普通の穢れであれば今の破魔の札で祓えていただろう。しかし、ことこの祟り神には微々たる効果のようだ。

吹き飛んだ先に目をやると祟り神はむくりと起き上がる。吹き飛ばされたことに苛立ちを覚えているのか殺気立っていた。

俺の拳や破魔の札では、やはり決定打に欠ける。打つ手がないわけではないが、その隙を作れる保証はない。

『グルアアアアアアア!!!』
「くっ！」

触手のように伸縮自在に尻尾を操る祟り神。

離れば尻尾による遠距離の攻撃。近づけばその鋭い爪を持つ前足での攻撃。まったく、厄介なことこの上ない。

だけど俺だって、伊達に12年もの間師匠たちに鍛えられていたのではない。血反吐を吐きながらも、いつかこの手で彼女たちを守るためにと、ひたすらに鍛えあげてきたんだ。

拳に靈力をこめて穢れを祓っていく。運がいいのかわからないが、俺が靈力を使っても、まだ祟り神の力が強まった感じはしない。この調子なら手数で押し切れる。

そう考えた矢先、祟り神が振るう尻尾が俺の背後、芳乃様たちがいる方へと放たれる。

この距離だ。当たるはずはない。

冷静に頭で判断するが、同時に芳乃様を狙った祟り神に対して強い苛立ちを覚える。当然、芳乃様たちがいる場所のはるか手前に尻尾が叩きつけられた。

一体何がしたいのか。怪訝な視線を祟り神崇り神に向けると、そいつは不気味に口角を引き上げた。

『オマエノアルジハ、ドンナコエデナイテクレルンダロウナ』

祟り神が話しかけてきたことに僅かに驚きはしたが、すぐに戦闘に集中する。

それにしても安い挑発だ。そんなことで怒りをあらわにする人間なんて……俺以外にいないだろう。

魚海のおやじさん直伝、火事場の馬鹿力。

強制的に脳のリミッターを一つ外し、筋肉の限界まで動かすことが可能になる。俺は猛スピードで崇り神の懐へと駆け寄り、ありつたけの力をこめた拳をその体へとめり込ませる。

殴り飛ばさないように崇り神の尻尾を踏みつけながら二発、三発と殴りつける。

こいつは言うてはいけないことを言った。俺の大切な人を傷つけてなお、彼女たちに危害を加えようというのか。許さない。許してなるものか。

怒りに思考を奪われた俺は崇り神の変化に気づくことができなかった。その変化に気づいたのは、俺のすぐ横に俺が踏みつけているはずの崇り神の尻尾が視界に入ってからだった。

尻尾が増えている!?

まさかこのタイミングで力の影響が出たというのか!?

まずいと思ったが、今からでは回避行動も破魔の札で距離を取るとも間に合わない。

「させませんっ!!」

突如として現れた幼馴染^{菜子}が俺と崇り神の間に入り尻尾を受け流す。しかしその小さな体では軌道を少しずらすことが限界だった。ハッと我に返った俺は僅かにできた隙に目の前の菜子を抱え込み、破魔の札で崇り神から距離を取ることに成功した。

「菜子！一体何を考えてるんだっ！」

「それはごっちのセリフ！もっと集中してよ！それより助けてあげたんだから先にありがとうじゃないんですか？」

「っ……」

正論すぎてぐうの音も出なかった。

「……すまない。助かったよ」

「あ・り・が・と・う でしょ」

「……ありがとうございます」

「うんー！どういたしまして」

満足そうに頷く菜子を見て俺の心も少し落ち着きを取り戻す。目の前の崇り神を見れば尻尾の数が増え、濃い穢れを発している。明らか

かに俺の力のせいで強化されていた。

「茉莉、君は芳乃様のところへ——」

「幸彦」

戻るんだ。その言葉が口から零れる寸前、茉莉は俺の瞳をじつと見つめながら俺の名前を呼んだ。

きっと俺の言おうとしていることを先読みしたのだろう。

茉莉はただまっすぐこちらを見つめる。悲しみでも怒りでもない、ただ純粹な感情を両目に秘めて、もう一度囁く。

「ワタシも戦う」

毅然と言つてのけた茉莉。その姿に少々見惚れてしまったが、直ぐに頭を振りその瞳を見つめ返す。

「相手はいつもの祟り神じゃない。それでもか？」

「あは、おバカさんですか？ワタシがなんのためにここにいいのか忘れないですよ。ワタシは芳乃様の護衛。主人の危機を取り除くのもワタシの役目なんだから。それに——」

茉莉はいたずらっぽく微笑む。

「芳乃様から、絶対に幸彦と一緒に帰ってきなさいって言われちゃいましたから」

「……ははは。なら仕方ないな。芳乃様の命令じゃ逆らえない。全く、無鉄砲な幼馴染がいると苦労するよ」

「あは、ワタシも、格好つけて無茶するのが癖になっている幼馴染には手を焼いています」

茉莉と並び立ち、祟り神と向きあう。

悔しいが、茉莉が隣にいただけで心強いと感じてしまう。祟り神の前に軽口を言い合う余裕なんてないはずなのに。

ゆっくりと起き上がる祟り神はまるで物語に出てくるゾンビのようだった。

「それで、作戦はあるの？」

「ひとつだけな。協力してくれるかい？」

「何を今更」

相棒の頼もしい返事に思わず笑みが零れる。山の中で茉莉と共闘

なんて、昔を思い出すな。

俺は茉子にだけ聞こえる小さな声で作戦を伝える。先ほどの祟り神を見ていると、どうやらこちらの話を理解しているように思えたからである。

「……というわけだ。できそうか？」

「なめないでよね。これでもワタシ、忍者なんだから。この前は室内で動き辛かったけど、山の中の常陸茉子は一味違うんですよ？」

「知ってるさ。頼りにしてるよ」

俺は懐から数枚の霊符を取り出す。俺の力で祟り神が強化されるなら、俺はそれ以上の力で穢れを祓うしかない。

「出し惜しみは無しだ。茉子、行くぞっ！」

一枚の札を祟り神めがけて放る。

普通の紙であればその場に舞うだけだが、俺の放った札は一本の矢の如く一直線に祟り神へと向かっていく。

祟り神は警戒したのか触手のような尻尾で俺の放った札を払い落とすが、瞬間、眩い光が炸裂し祟り神の動きが止まる。

ムラサメ様が神力を散らして祟り神の動きを止めたことから発想を得た、俺特製の霊符が役に立つとは。この隙に茉子が素早く行動を開始する。

俺では茉子の速さについていくことはできない。

茉子は忍者で俺は陰陽師だ。

だから俺は陰陽師らしく、茉子のサポートに回ることにする。

人間離れした速さで動き回る茉子へ目掛け祟り神が飛びかかる。だが茉子は動じない。ただ一瞬だけこちらに視線を送るとそのまま飛びかかる祟り神の方へと向きを変える。

彼女が何をしたいのか解った俺は茉子のサポートに適した霊符を取り出し、放つ。

晴明ヘイマンの描かれた霊符。

かの安倍晴明がルーツとも言われている星を象った紋章は五芒星と同じ形状をしている。この霊符は御守りにも使われることがあるように、何かを守護する力が強いのが特徴だ。

俺の放った霊符は祟り神の鼻先に当たると障壁を作り出す。

穢れは通さず、数秒動きも鈍くなる。当然、その隙を茉莉が見逃すはずもなく、祟り神の増えた尻尾の一本を切り落とす。

『ガルアアアアッ！』

「先ほど芳乃様を吹き飛ばしたお返しです！」

「ドヤ顔のところ申し訳ないが、思いつきで行動しないでくれ。心臓に悪い」

「幸彦ならワタシの気持ちも汲んでくれるって信じてたから」

「そう言われると、悪い気しないが……とりあえず作戦優先で頼むよ」

茉莉は「了解！」と返事をすると再び走り出す。

先ほどの攻撃で怒りをあらわにした祟り神は、尻尾を切られた復讐とばかりに茉莉へ狙いを定める。

だが、そんなこと俺が許すはずがない。

戦闘用に改良した式神を出そうとも考えたが、狛の召喚で少なからぬ量の霊力を持って行かれたので思いとどまる。

手数が足りないなら補うだけだ。

俺は人型の式神を数体召喚し、茉莉に気を取られている祟り神を取り囲む。

祟り神が俺に気を取られれば、茉莉がクナイを投げ、祟り神が茉莉に気を取られれば俺の拳が体にめり込む。そんな俺たちの攻撃は、徐々にではあるが祟り神を翻弄し始めた。

「幸彦！」

「わかった！」

祟り神に近づき俺の視野が狭くなれば、少し離れた位置にいる茉莉からの確かな指示が飛ぶ。

「させるかっ！茉莉っ」

「了解！」

茉莉へ攻撃しようものなら、手刀で祟り神の尻尾を叩き落とす。茉莉もその隙について臨機応変に対応してくれる。

何より、俺が心を落ち着けて冷静に行動ができるのは、抽象的な言葉を叫んだだけで瞬時に俺の考えを理解し動いてくれる茉莉のおかげ

げだろう。

「これで終わりです！」

そう叫びながら投げた茉子のクナイは祟り神の真横を通り抜け地面に突き刺さる。どこを狙っているのだと言わんばかりに気味の悪い笑顔を向ける祟り神。そしてお返しとばかりに大きな尻尾を茉子へ向けて放つ。

しかしその尻尾は茉子に届くことはなく空中で固定されたように動かなくなる。

「茉子の言葉が聞こえなかったかい？悪いがもう終わりだよ」

そう。茉子のおかげで準備は整った。

祟り神の殺気のこもった視線の先には、やつを取り囲むように四角く張られた光の柵。その光の柵の四隅には、茉子が投げたクナイが刺さっていた。

今の俺が使える一番の大仕掛けだ。ありったけの霊力を捻り出し俺は目の前で横5本縦4本からなる格子状の印を結ぶ。

同時に苦しそうに呻き暴れ出す祟り神。だがその光の柵から逃れることはできない。

「鬼門封じ。本来は結界の一種だが穢れを祓う力は相当高くてね。使い方によって色々なことができるんだよ。君みたいな穢れの塊には相当苦しいだろう」

茉子が投げたクナイ。それらには「青、白、赤、黄」の特殊な勾玉が括り付けられていた。その神具は四神を宿すと言われている。

といってもこれは俺の手作りだ。祓う力はとても強力だが、俺の力では一時的な効果しか得られない。さらには、それぞれ神力を込めるのに数年単位かかるため実用性はなかった。

それが今こうして役立つなんて。何かあったらいけないと作っておいてよかったと昔の俺を褒めてやりたい。

『ガアアアアア!!』

穢れが祓われ、どんどん小さくなっていく祟り神の様子を、俺と茉子は隣り合って眺めていた。

悲痛な叫びとともに、恨み、憎しみ、悲しみといった負の感情が溢

れ出ては浄化されていく崇り神。

その姿を悲痛な表情で眺める茉子は、一体何を思っているのだろうか。それは茉子にしかわからないものだろう。それだけの過去を常陸家は抱えていたのだから。

崇り神が普段通りの大きさになりあと数秒で消えかかる時だった。崇り神が最後の抵抗とばかりに鋭く尖った触手を俺たちに向かつて放ってきた。俺も茉子も気が緩んでしまっていて反応が遅れてしま

う。
俺ができた行動といえば、茉子の前に庇うように立ち、彼女の壁になることだった。

「ぐっ」

右肩に走る激痛。どうやら触手に貫かれたらしい。茉子に怪我がないことを素早く確認し、俺は残っていた破魔の札を消えかけている崇り神へと放る。

破魔の矢に触れた崇り神は、あっけなく霧散していった。

「幸彦(きんげん)ごめんなさい！ワタシが隙を作ったから……」

「大丈夫。少しかすった程度さ」

「そんなことないでしょ！いいから傷を見せてください！」

半ば強引に右肩を見せる羽目になったが、次の瞬間、俺も茉子も目の前の光景に目を見張る。

俺の右肩には、どこにも傷が存在していなかったのだ。

「幸彦、これって……」

「……だから言っただろ？少しかすった程度だっ」

「でもっ——」

「茉子っ！幸彦っ！」

「二人とも無事かー!？」

茉子が何かを言う前に、有地たちがこちらに駆けつけた。

どうやら狛も約束を果たしてくれたようだ。主人の無事にホッと胸をなでおろす。

「芳乃様！ご無事で何よりです」

「それはごっちのセリフ！茉子も幸彦もあんなに無茶をして。二人が

大けがでもしたら、私……わたし……」

芳乃様に抱きつかれた俺と茉莉は、泣き出しそうな芳乃様にあたふたしてしまう。それでも芳乃様の涙は暖かく、今俺は生きてここにいると実感させてくれた。同時に疲れと痛みがドツと襲ってくる。今日は色々無理をしたからな。

「うむ！何はともあれ大団円でよかったよかった。ところで肝心の欠片の回収も忘れるでないぞ。皆満身創痕なのだから、さっさと安春のところへ帰ろうではないか」

ムラサメ様の言う通り、早く山から降りた方がいいだろう。そして一刻も早く憑代を一つにして祀る準備に取り掛かるべきだ。

俺たちは軋む体に鞭打って立ち上がる。

「本当に、終わったんですよね？」

「ああ」

茉莉が俺の体を支えて心配そうにこちらを見ている。きっと先ほどのことを気にしているのだろう。

祟り神の細く鋭い触手は確かに俺の肩に刺さったはずだ。それほどの痛みだった。だが、俺の肩には傷跡すら残っていなかった。

だとしたら、あの痛みは一体何だったのか？

それに……。俺は祟り神の最後を思い返す。

俺が祟り神を祓う瞬間見せたやつの反応が心に引つかかっていた。

俺の破魔の札がやつに当たる瞬間。あの泥のような祟り神が笑っていたのだ。まるで、何かを楽しみにしているように……。

「……え？」

俺が思案を重ねていると、有地が素っ頓狂な声を上げた。

「ご主人、どうしたのだ？」

「いや、これ……」

有地が指差す先にあつたのは、俺と茉莉が倒した祟り神から出た憑代の欠片だった。小指の第一関節ほどもない小さな欠片。それは正しく今までで一番小さな欠片だった。

「こ、こんな小さな欠片だったんですか!？」

「……確認するが、有地。君たちの方の祟り神から出た憑代の欠片は

どのくらいの大きさだった？」

「手のひらサイズ。というか、ほぼ残り全部つてぐらいの大きさだったぞ」

そう言つてポケットから欠片を取り出す有地。なるほど確かに、その欠片は俺たちが集めた欠片と合わせればちょうど一つになる程の大きさだった。

当然だろう。多数の崇り神が合体して大きくなったのだから、その崇り神の核となる欠片も一つになっていなければおかしい。

だが目の前の欠片はどうだ。

たった一個の、しかもこんなに小さな欠片から、あれほど大きな崇り神が生まれるものなのか？

作戦を見事に成功させた俺たち。喜びも安心も感じていないわけではない。しかしながら、最後に胸に沸いた言い知れぬ不気味さは、しばらく拭うことはできなかった。

穂織の山奥。

暗闇のなかから幸彦たちを見つめる男が一人。

「ふむ……。初めて作ったにしては上出来だと思つたんだがな。やはりまだ調整が必要か。腕の一本や二本無くなる彼奴等の姿を楽しも

うと思っていたのだが……。つまらん」

男は光のない瞳で幸彦たちを無下ろしながら悪態をつく。

吐き捨てるような言葉を発した男は、しかし、次の瞬間には愉悦に顔を歪めていた。

「だが計画に支障はない。むしろ彼奴等の目をそらすことには成功した。焦らずじっくり料理をした方が、出来上がった時の高揚感は高くなる。ふふ、ふはは、ふはははは」

高らかに笑う男はそのまま身を翻し、穂織の山、その闇の中へと歩みを進める。

「やはり、いつの時代も邪魔をするのはお前なんだな。……駒川の者よ」

吐き捨てた言葉は誰に向かって発した言葉なのか。男に似合わず寂しさを含んだその言葉は、男とともに人知れず夜の山へと消えていった。

第2章

第二十九話 「始まり」



街を覆う炎の海。

まるで生きているかのように猛り狂う炎は、家を、田畑を、人の命までも軽々と呑み込んでしまう。

死を前にして、人というものはなんと無力なのだろう。

抗いようもない理不尽な死。そんなものを目の前にして、人々は嘆き、悲しみ、恨み、怒り、後悔し、絶望する。

そして負の感情は街全体を支配し、人ならざるものを呼び寄せる。

神々や魑魅魍魎がまだ人の営みの近くにあつたこの時代。

餓えや疫病、果ては戦で命を落とすことなど珍しくはなかった。

けれども、そんな時代にあつても、この光景を目にした者はここが地獄であると言うだろう。

その地獄を高めから見下ろす男がいた。

男の瞳には光ではなく怒りがやどり、般若の如き面持ちでありながらも、歪な笑みを浮かべている。

「ああ、素晴らしい！この力があれば、俺は何者にも負けはしない。父上にも、秀頼ひでよりにもだ！」

普段であれば緑豊かなこの穂織の地。

男はこの地で生まれ育った。

男はこの土地が嫌い好だった。

男はこの土地の人が嫌い好だった。

だからこそ、男はこの地を破壊した。

「信祝様！本家の軍が城内を突破したとの報告が！ここも危険です。直ちにお逃げ下さい！」

妖に急ごしらえで作らせた城。

その天守に飛び込んできた知らせに信祝と呼ばれた男は眉をひそめる。

「なに？妖どもはどうした!?彼奴等きやつらがいる限りいくら本家の兵だろうと敵うはずがない！」

「それが……叢雨丸という妖刀を振るう者が現れ、其の者を中心に他の兵士も妖に対抗する力を得たと思われます」

臣下の言葉に、信祝は瞬時に思考を巡らせる。

「たった一本の妖刀にそこまで力があるとも思えん。となれば、駒川の者達が動き出したか。しかし……叢雨丸とはな」

妖刀の名を怨めしく口にした男は、素早く決断を下した。もはや、この地に残っているは自分の野望は叶えられないと。

「撤退だ。本家の兵は妖どもに押しつける。彼奴等であれば変えはいくらでも用意できる。大伴おわたも、貴様は兵を集め先に北東へ向かえ。あそこには彼奴等の巢がある。そこで体制を立て直す。内藤ないとうは俺とともに来い。俺の行く手の邪魔をする奴は容赦なく切り捨てろ」

「はっ」

「御意」

大伴と呼ばれた家臣は急ぎ部屋を後にし、内藤と呼ばれた大男は主人の退路を作り上げる。

しかし、男の野望はここで潰えることになる。

男の目の前に現れた一人の女によつて。

「……なんのつもりだ。そこをどけ、お幸おゆき」

お幸と呼ばれた女は琥珀色の瞳を男に向ける。

凜と佇むその傍らには二匹の美しい白狐びやっこが控えていた。

女はただ一言、鈴のように響く声で言った。

「この先には行かせない」

「そこをどけと言っている!!」

「いやだ!!」

その女は威圧に負けることなく男を睨みつける。

「貴方はワタシが止める。もうこんな……馬鹿げたことを終わらせるの」

「馬鹿げたこと、だと……?」

女の発言に男の瞳は淀み、顔に影がさす。

「ハハ、ハハハハハ……そうか。お前もか。お前も父上たちと同じなんだな。なんで俺のことを認めてくれない?なぜ俺のことを見てくれない?なぜ?どうして?お前ならわかつてくれると思っていたのに……。お前ならっ……。なのに、どうしてだっ!!!」

男は力を欲した。

なぜなら男は非力だったから。

大切なものを守るには力が必要だと知ったから。

男は手柄を求めた。

なぜなら男は認めてもらいたかったから。

父に、弟に、目を向けてもらいたかったから。

そして何よりも、目の前の女に認めてもらいたかったのだ。

そして男は手に入れた。

己の魂と引き換えに。

男から湧き出る黒い感情。

そこにいるのは人であって人ではなかった。

例えるのであれば、そう。

男はまさに、鬼と化していた。

女は一度強く瞳を閉じて、覚悟を決めたように見開き男を見据える。

「駒川の者として、ワタシは貴方を……退治する」



さて、どうしてこうなったのだろうか？

外はようやく日の出を迎えたのか、薄っすらと明るくなっていた。朝が来たぞ、と言いたげな鳥たちの囀りが穂織の街に響き渡る。

そんな中、俺は彼女と二人きり。

本当にどうしてこうなったのか……。

早朝ということもあり、聞こえるのは鳥たちの声と、幼なじみで仕事仲間である茉莉の息遣いだけだった。

「ふふ、こうやって二人で一緒に寝るなんて、なんだか懐かしいね」

「え？あ、ああ。そうだな」

「あは、幸彦緊張してるんですかあ？もしかして、なにか変なこと考えてる？やーらしー」

部屋の電気は点いておらず直接顔をうかがうことはできないが、その声色から俺をからかってニヤニヤと笑っている彼女の表情が容易に想像できた。

「いや、緊張はしてないし変なこと考えてないけど……あとやらしくない」

「またまたあ。こんなに可愛い幼なじみが一緒に寝てあげるんだから、多感な年頃の幸彦には少々刺激が強いんじゃない？」

「一緒に寝るねえ。間違っではないけど少し語弊がないか？まあ、茉莉が可愛いのは認めるけど」

「ひゃいっー」

ビクンツと彼女の体が跳ね上がる。

「い、いきなり何を言い出すんですか！わ、ワタシが可愛いなんて、幸彦の趣味を疑います！」

「自分で言い出したんじゃないか！」

「そ、そうだけど……そんなに真面目に返答されると恥ずかしいというか」

前から思っていたが、彼女は褒められることに免疫を持っていない

らしい。

町内会の人たちに褒められた時は簡単にあしらっているくせに、俺が褒めるとすごく恥ずかしがるのだ。

しかも本人は本気でお世辞だと思っっている節がある。自己評価が低いのも考えものだな。

「なんだよそれ……。それに可愛いのは嘘じゃないし、君を可愛くないなんて言うやつがいたら、そいつの方が趣味悪いと思うぞ?」

「ま、また可愛いって言った……。そんなにワタシを辱めて楽しいんですか?」

「褒めてるはずなのにこの言われよう……」

「もう可愛い禁止!禁止したら禁止です!」

「あ、でも確かに最近可愛いより綺麗になったってほうがしつくりくるかも」

「きつ!?!きききききききつ……。もう!やめてって言うてるのに!幸彦のバカ!」

そう言っただけで彼女は布団に体を埋めてしまった。

もちろん。からかっているわけではない。

事実を言ったまでだ。

茉莉はもつと自分に自信を持つべきだ。今度限界まで褒めまくってやろう。

と、俺が計画を考えていると、彼女が布団から少しだけ顔を出す。

「うう、幸彦に傷物にされました」

「人聞きの悪いこと言うな。……。似たような会話前にもしなかったわけ?」

「そうだっけ?……そうだったかも」

なんてことはない、いつも通りの会話。しかしその端々に彼女の緊張が伝わって来る。

確かに、この状況で落ち着けるはずもない。

それは俺も同じだった。

だからと言って、慌てたって仕方がない。とにかく、ここは男の俺がしつかりしなければ。

俺は茉莉に優しく声をかける。

「少しは落ち着いたか？」

「うん……。あ、あは、ごめんね、幸彦。こうして冗談でも言っていないと落ち着かなくて。こういうこと、ワタシ、初めてだから」

「気持ちにはわかるさ。俺だって初めてなんだ」

いつかは経験するとは思っていたが、こんなに早く実現するとは。逸る気持ちを落ち着かせながら、不安そうな茉莉を落ち着かせるように声をかける。

「二週間絶対安静なんて。姉さんの態度からして、今回これ以上無理したらきつと一ヶ月は何もさせてくれないだろう。焦る気持ちもわかるけど、今は一回落ち着いて、体を休めることに専念しよう」

「うう……。わかつてはいるんだけど。芳乃様たち、大丈夫かな？」

俺たちは現状を思い出したため息をつく。

嗅ぎ慣れた薬品の匂いがする部屋。

その部屋の中には、患者さんのために用意されている二つのベッドが並んで置かれている。急患用にと置かれたそのベッドには、現在、俺と茉莉は横になっている。

本当、こんな大切な時に、どうして俺たちは診療所でベッドに寝かせられているんだか……。

もどかしい気持ちを抱えながらも、数日前の祟り神との戦いでのダメージは確実に俺たちの体を侵食していた。

早朝。

まだ日も昇りきっておらず、神社の神殿の中はどこかひんやりとし

た空気に包まれている。

その中央に鎮座している宝玉は、暗闇の中でもほのかに光を帯びているように見えた。

矛鈴がリンと鳴る。

神殿に響き渡るその鈴の音は私の心を落ち着かせてくれた。

数日前に行われた崇り神との戦い。

残りの欠片が全て崇り神になるという、想定していた最悪の展開を迎えながらも、なんとか退けることに成功した。

集めた憑代の欠片はどこも欠けることなく完全に一つになり、もとの宝玉の姿を取り戻していた。

それはつまり、数百年にも渡り続いてきた崇り神との戦いに終止符が打たれた証拠だった。

私はもう一度矛鈴を鳴らす。

軽く目を閉じ呼吸を整え、そしてゆっくりと開く。

全身に意識を張り巡らせ、私は舞いを開始した。

無我の境地とまではいかないが、舞いを踊る間は頭の中がスッキリする。自分の内へ内へと意識が沈み、私の世界が出来上がる。

なぜこんな早朝に舞いを始めたのか。

それは、気持ちの整理をしたかったから。

私はきつと、戸惑っているのだろう。

呪いの一つが解けたことは大変喜ばしいことだ。もちろん私だつて嬉しい気持ちはある。

それでも、私はお父さんたちのように心から喜ぶことができないでいる。

そんな自分に戸惑いを感じていた。

——リン

私はもう一度矛鈴を振り下ろす。

実感がわかないというのもあるかもしれない。

だって、私はあの頃からずっと戦ってきたのだから。

崇り神や呪い、そして自分自身の運命と……。

——リン

矛盾の音色が私の思考を深淵へと誘う。

有地さんは言ってくれた。

私のやりたい事をして、これからの生活に期待を持って欲しいと。

『今まで頑張ったね。お疲れ様、朝武さん』

その言葉は私の心にすつと入ってきて、思い出しただけで胸が温かくなる。

この気持ちに名前をつけるのであればきつと――

――ごめんね、芳乃――

――リン

強く振り下ろされた矛盾。

気がつけば舞いの最後のひと振りを終えていた。

堂々巡りだ。

心のモヤモヤは完全に晴れることはなく、今日はまた始まる。

せめて、今日を楽しめるように。

私は私のやりたい事をしよう。

「すまなかった」

もう日課になった祖父ちゃんとの特訓。

祖父ちゃんはこれまでのことについて頭を下げた。

叢雨丸を抜いたからといって、孫である俺に苦勞をかけてしまい、

怪我まで負わせてしまったと。

だけど、これは俺が決めたことだ。祖父が謝ることじゃない。

むしろ祖父は俺を鍛えてくれた。祖父に鍛えられなかったら命を落としていた可能性だつてある。感謝こそすれ、怒るなんてありえな

い。

そう伝えると祖父ちゃんは

「そうか……。そう言ってくれるか。謝罪を受け入れてもらうよりも、お前に感謝されるほうがワシとしても喜ばしい」

祖父ちゃんはありがとうと頭を下げた。

同年代なら兎も角、祖父ちゃんみたいな立派な人にお礼をされるのはなんとというか、むず痒かった。

その後、この街で暮らし続けることと、婚約について朝武さんと話し合った上でどうするかを決めることを告げる。

祖父ちゃんは静かに耳を傾け、口を開いた。

「わかった。お前と巫女姫様がそう決めたのなら、ワシは何も言わん。頑張れよ、将臣」

「うっすー！」

と、まあ、その後俺の発言で張り切りすぎちゃった祖父ちゃんにロボロになるまでしごかれてグロッキーになった有地将臣です。

え？自己紹介まで長すぎるって？

苦情は祖父ちゃんに言ってくれ。

ちなみにムラサメちゃんは笑いをこらえながら「ファイトだ、ご主人」と言い残してどこかへ行ってしまった。裏切り者め！

「そうだ伝え忘れていた。駒川くんと常陸さんだが、面会の許可が出たらしい」

「ぜえ、ぜえ……。ほ、ほんと!？」

「ああ。この後直接向かうならこれを持って行きなさい」

息を切らして倒れている俺。祖父ちゃんもさつきまでさすがにバテているようだったがすぐにいつも通りの祖父ちゃんに戻った。相変わらず化け物じみた体力だ。

祖父ちゃんは田心屋たごりやの紙袋を俺に渡して志那都荘へと帰って行った。

俺は少し休憩した後、体を起こしストレッチを始める。運動後のストレッチも忘れずするように幸彦から言いつけられてから、いつしか朝のルーティーンになっている。

あの崇り神との戦いから三日。怪我をしていた二人は検査のため診療所に運ばれこの二日間は面会謝絶になっていた。

面会謝絶なつた理由は大怪我をしたからというわけではなく、他人と居ると気を使いすぎる二人を完全に休ませるためらしい。

けれども三日も会わないとさすがに心配になる。

様子も気になるし、帰り際に祖父ちゃんが買ってくれた田心屋のどら焼きを渡しに寄ることにした。

駒川診療所はこの時間でも結構な人がいた。

崇り神がこの場所にいたことを考えるとなんだか不思議な感じがした。

みづはさんは俺を見かけるとすぐに幸彦たちの居場所を教えてくださいました。どうやら先に祖父ちゃんから連絡があつたそう。

お礼を言つて俺は階段を上がり2階へ向かう。

幸彦たちがいるであろう部屋のドアに手をかけようとしたその時だった。

部屋の中から男の子が出てきて危うくぶつかりそうになる。

「おっと。す、すいません」

「……いえ、ごちうこそ」

俺が謝ると、男の子も軽く会釈を返す。

こちら辺では見た事ない顔だった。

身長は俺と同じぐらい。男としてはやや長めの黒髪で、前髪が目にかかっている。おそらく同じ年ぐらいだろうか。

「七海、帰るぞ」

「あ、うん。幸彦さん、茉莉さん。お大事になさってください。ほらまゆみくんも挨拶……つてもういない!?待ってよ、お兄ちゃん!」

七海と呼ばれた小柄でレナさん並に綺麗な金髪の女の子が男の子を追いかける。男の子のことをお兄ちゃんと言っていたけど、正直兄妹には見えなかった……つと、この考えは失礼だな。

俺は気を取り直して病室へ入る。

「やあ、有地。一日ぶりだね」

「こんにちは、有地さん」

「うん。二人とも元気そうでよかったよ」

病室に並べられたベッドに腰掛ける二人はいつもと変わらぬ様子だった。

「はは、まあね。気持ち的には元気なんだが、やっぱり体はまだ本調子とは程遠いかな」

「ワタシは幸彦ほど重症ではなかったので、ほぼいつも通りなのですが……」

「一週間は絶対安静。それが姉さんからの命令だからね。破ると後が怖い」

幸彦が珍しく怯えていた。

俺からすればみづはさんが怒る姿なんて想像できないが……。

なんて考えていると、常陸さんがベッドから体を乗り出し興奮気味に話しかけてきた。

「有地さん！芳乃様はちゃんとご飯食べてますか？朝はちゃんと起きてますか？部屋のお掃除や洗濯もだいじょうぶでしょうか!？」

「だ、大丈夫だよ。交代制でご飯も作ってるし、レナさんもお手伝いに来てくれるからなんとかね」

正直な話、すごく大変ではある。が、それは本人には言わないと朝武さんと約束している。

ほんと、あの量の家事を一人でこなしていたなんて。もつと常陸さんを労わってあげたいと思うようになった。

「そうですか……よかったです」

俺の返答を聞いてホッとしたようにつぶやく。

そんな彼女を見て幸彦の表情も少し柔らかくなった気がした。

「だから言ったろ。少しは芳乃様たちのことを信じろって。これで今度から菜子も気兼ねなく休めるな」

「それとこれとは話が別です」

「頑なだなあ」

「幸彦だって、祟り神の一件が落ち着いたんだからしばらくはゆっくり休めるんじゃないんですか？」

「それとこれとは話が別だ」

うんうん。いつもの光景だ。それにしても、この二人のやり取りも慣れてきたなあ。なんて、感慨深く感じてしまう。

とてもいい雰囲気だ。

だからというわけではないが、何とは無しに問いかけた。

「常陸さんなら夜中こっそり抜け出して家事の手伝いに来れたんじゃない？」

「……今回に限り、それはできませんでした。ワタシも命は惜しいので……」

常陸さんが目を逸らしながら乾いた笑みを見せる。

常陸さんも珍しく怯えていた。

いい雰囲気はどこに行つた……。何てことをしてくれたんだ！数秒前の自分！

「そんなに怖いのか？みづはさん」

「……………」

「……………」

二人の空気が凍りついた。

あの幸彦と常陸さんがここまで怯えるということとはつまり……。

よし！考えないようにしよう！

「そ、そういえば、さつき来てた二人組って知り合い？」

俺は話題を変えることにした。

「ああ。前に話したことがあったと思うけど、魚海のおやじさんに紹介された運送業社でバイトしたことがあったんだ。あの二人はそこで一緒に働いてた仲間さ」

「ワタシは幸彦経由でお知り合いになりました。特に七海ちゃんとは同じ趣味を持つ者同士、仲良くさせてもらってます」

「へへ、どおりで穂織じゃ見たことない顔だと思つた」

たった一瞬だが、男の子の方はすごく印象に残っている。

うまく言葉に表せないが、なんとなく他人とは思えなかった。

「そういえば……………」

幸彦は俺の目を見て少し笑う。

「君と暁あきとるってどこか似ているような気がするな」
「そうなの？」

暁とはさっきの男の子のことだろう。
ぱつと見じやそんなに似ているとも思えなかったが。

「外見の話じやなくてさ。なんていうか、雰囲気？心の奥底にある一本の芯がぶれることなくあり続けるところとか。自然と人を惹きつけるところとか。話してみれば、きつといい友達になれるんじゃないかな」

唐突に褒められ思考が止まる。

「幸彦さん？褒め過ぎじやありません？」

「あは、有地さん、顔真つ赤ですよ？」

「へあつ！いやいやいやいや！だつてめつちや褒めてくれるじゃん！俺そんなにできた人間じやないぞ！」

「そうでしょうか？ワタシも幸彦と同じように感じますが」

「ええ……二人とも俺への評価高過ぎじやない？」

「それだけ頑張ってくれたじやないか。ああ、そうだ。まだお礼を言つてなかったな」

二人は俺をまっすぐ見据える。

「ありがとう有地。芳乃様を守ってくれて」

「ワタシからも。ありがとうございしました、有地さん」

同い年なのに俺とは比べ物にならないほどの努力を続けてきた二人。そんな二人に感謝されるのはなんだかとてもくすぐったい。

「……俺は本当に大したことはしてないよ。朝武さんが頑張つて俺はそれを少し手伝っただけだ」

同じことを朝武さんにも言つたっけ？

でも、間違いなくこれが俺の本心で事実だ。

「本当に、君はとても眩しいね」

「え？」

「なんでもないよ。とにかく君がしてくれたことは簡単なことじやない。だから俺たちの感謝も素直に受け取ってくれ」

「えつと……じゃあ照れ臭いけど、受け取っておく」

なんとも言えない雰囲気に成ってしまった。

俺はまたまた話題を変える。

「そ、そういえば！朝武にかけられた呪いって——」

「有地、君は穂織に残るのかい？」

あからさまに、だがごく自然な調子で幸彦は話題を変えた。

あまりにも自然すぎて頭が混乱したが、何とか答えを用意する。

「え!? あ、うん。残ることにしたよ。せっかくだし、卒業まではここにしようって」

「そうか。芳乃様との婚約はどうするつもりだい？」

「それも、朝武さんとゆっくり話し合っただけでいいこうって二人で決めた。安春さんやじいちゃんにも話はつけてある」

どのみちこの話はするつもりだったけど、幸彦の行動に疑問が残る。

呪いの話を避けるなんて、幸彦らしくない。

そうする理由が何かあるのか？

とにかくここは幸彦に話を合わせることにする。

「ちゃんと考えてもらっているようで嬉しいよ。年頃の男子を婚約の条件もなしに朝武家に置くわけにも行かなかったからね」

「応援しますね♪有地さん」

「えっと、二人はそれでいいの？俺が朝武さんの婚約のまままで」

俺の問いに二人はキョトンと目を合わせる。

「いいに決まってるだろ」

「いいに決まってるじゃないですか」

見事にハモった。

「え!? 本当に?」

「当たり前だ。俺も菜子もとっくの昔にそうなることを望んでたからな」

「だいたいですよ? 幸彦が婚約を認めない人間を芳乃様のそばに住まわせると思いますか?」

「……たしかに」

朝武さん専属のセ●ムがそんなことを許すわけがない。

盲点だった。

「君には芳乃様にふさわしい男になつてもらわないとな。俺の怪我が治ったら、玄十郎さんと一緒にビシバシ鍛えていくから覚悟しておけよ」

「げえ！まじかよ……」

「あは、頑張ってくださいね♪……と、そろそろ帰らないと学校に遅れてしまいますよ?」

「え?あ、本当だ!」

気がつけば時計の針が7:00を指そうとしていた。そもそもお見舞いのお菓子を渡すだけの予定だったのに、結構話してしまった。

「そうだ、これ。祖父ちゃんから田心屋たごりやのどら焼き預かってたんだ。よかつたら食べて」

「田心屋のどら焼きだとっ!」

「幸彦、よだれ出てる」

「おっと」

幸彦は相変わらず甘味に目がないらしい。

常陸さんに呆れ顔で見られている。

「ありがとう有地。恩にきるよ」

「今まで週3回は通ってたもんね。糖尿病になっちゃうよ?」

「疲れた体に糖は必要なんだ」

「はいはい。でも気をつけなきゃだめだからね」

喜んでもらえたようだ。

俺は常陸さんにどら焼きが入った袋を渡して部屋を出て行こうとする。

「有地」

ドアに手をかけた時、後ろから幸彦に呼び止められる。

その声色は、仕事モードのそれだった。

「また学校で話そう」

何を、とは聞かなかつた。

ここまでできて話すといったら、あとは言葉にしなくても理解できた。

唐突に話題を変えた呪いの話。

謎の呪術師の話。

朝武さんを付け狙う傀儡使いの話。

どの話も短時間で済ませられるものではない。

「ああ。そうしよう」

俺の回答に幸彦は真剣な表情で小さく頷いた。

有地が帰るのを見届けてから俺は布団にもたれかかる。

少し強引だったが、どうやら分かってくれたようだ。

「だんだん息が合ってきましたね」

「短くない間柄だからな。むしろ、ここで察してもらわないと困る」

彼にはまだまだ頑張ってもらおうつもりだ。ただでさえ厄介事はたくさんあるのだから。使える駒は多いほうがいい。

俺は手にした紙に書かれている内容を再度読み直す。

見慣れた乱暴に書きなぐるような書体。魚海さんからの手紙だ。

この手紙を持ってきてくれたのが暁と七海ちゃん。つまり特班も関わっているということだ。

菜子は布団から抜け出し、俺の隣から覗き込むように手紙の内容を確認する。

「今回はワタシも最初から協力するから」

「頼む。この件については俺一人でどうにかできるとは思っていない
よ」

その手紙にはこう書かれていた。

『一ヶ月間、三司あやせを護衛しろ』

突拍子もない一文。もはや手紙でもないな、これ。

そもそも三司あやせとは、あの三司あやせなのか？

彼女が穂織に来るのか、それとも俺たちが彼女の元へ行かなければならないのかすらわからない。

期限だつて、いったいいつから一ヶ月なんだ？

「詳細は榎本さんに確認するしかないか……」

「だね。でもどうして三司さんなんでしょう？」

「わからない。けど、入念に準備しておいたほうがよさそうだ。意味もなくこんな手紙をわざわざ特班まで使つて寄こすような人じゃないからね」

差し当たっては自分の体を治すことに専念するしかない。

俺は考えをまとめつつ、頂いたどら焼きにかぶりついた。